

大里郡川本町

# 如意遺跡Ⅳ

大里農地防災事業六堰頭首工建設工事事業関係  
埋蔵文化財発掘調査報告書

— Ⅲ —

<第2分冊>

2003

農林水産省 関東農政局  
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 目次

## <第1分冊>

口絵

発刊に寄せて

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	5
II 遺跡の立地と環境	7
III 遺跡の概要	11
IV E区の遺構と遺物	17
1. 住居跡	18
2. 掘立柱建物跡	162
3. 土坑	166
4. ビット	173
V F区の遺構と遺物	175
1. 住居跡	176
2. 掘立柱建物跡	298
3. 土坑	310

4. 溝跡	318
5. 性格不明遺構	319
6. ビット	322

## <第2分冊>

VI G区の遺構と遺物	323
1. 住居跡	324
2. 土坑	463
VII グリッド出土・表採遺物	474
1. 縄文時代の遺物	474
2. 古墳時代以降の遺物	478
VIII まとめ	487

写真図版

付図

## 挿 図 目 次

第1図	調査区と調査年度	3	第36図	第272号住居跡出土遺物	48
第2図	埼玉県 の 地 形	7	第37図	第273号住居跡	49
第3図	周辺 の 遺 跡	8	第38図	第273号住居跡出土遺物 (1)	50
第4図	調査区周辺 の 地 形	12	第39図	第273号住居跡出土遺物 (2)	51
第5図	如意遺跡全測図	15	第40図	第274号住居跡	53
第6図	如意遺跡E・F・G区全測図	16	第41図	第274号住居跡出土遺物	53
第7図	E区全測図	17	第42図	第275号住居跡	54
第8図	第257号住居跡出土遺物	18	第43図	第275号住居跡出土遺物	54
第9図	第257号住居跡	18	第44図	第276・552号住居跡	55
第10図	第258・259号住居跡	20	第45図	第276号住居跡出土遺物	56
第11図	第258号住居跡出土遺物	21	第46図	第552号住居跡出土遺物	56
第12図	第260号住居跡出土遺物	22	第47図	第277号住居跡	57
第13図	第260・261号住居跡	23	第48図	第277号住居跡出土遺物	58
第14図	第262号住居跡	24	第49図	第278号住居跡	58
第15図	第262号住居跡出土遺物	25	第50図	第278号住居跡出土遺物	59
第16図	第263号住居跡	26	第51図	第279号住居跡	60
第17図	第263号住居跡出土遺物	27	第52図	第279号住居跡出土遺物	61
第18図	第264号住居跡	29	第53図	第389・399号住居跡	62
第19図	第264号住居跡出土遺物	30	第54図	第389号住居跡出土遺物	62
第20図	第265・266号住居跡	32	第55図	第399号住居跡出土遺物	63
第21図	第265号住居跡出土遺物	33	第56図	第390号住居跡出土遺物	63
第22図	第266号住居跡出土遺物	33	第57図	第390・391号住居跡	64
第23図	第267号住居跡出土遺物	35	第58図	第391号住居跡出土遺物	65
第24図	第267号住居跡	36	第59図	第392号住居跡	66
第25図	第268号住居跡	37	第60図	第392号住居跡出土遺物	66
第26図	第268号住居跡出土遺物	38	第61図	第396号住居跡	67
第27図	第269号住居跡出土遺物	38	第62図	第396号住居跡出土遺物	68
第28図	第269号住居跡	39	第63図	第401号住居跡	69
第29図	第270号住居跡	40	第64図	第402号住居跡	70
第30図	第270号住居跡出土遺物	41	第65図	第475・476号住居跡	71
第31図	第271号住居跡	42	第66図	第475号住居跡出土遺物	71
第32図	第271号住居跡出土遺物	43	第67図	第476号住居跡出土遺物	72
第33図	第271・272号住居跡出土遺物 (1)	44	第68図	第477号住居跡出土遺物	73
第34図	第271・272号住居跡出土遺物 (2)	45	第69図	第477号住居跡	74
第35図	第272号住居跡	47	第70図	第478号住居跡	75

第71图	第478号住居跡出土遺物	75	第108图	第507号住居跡出土遺物	113
第72图	第480号住居跡	76	第109图	第508号住居跡	116
第73图	第480号住居跡出土遺物	77	第110图	第508号住居跡出土遺物 (1)	117
第74图	第481号住居跡	79	第111图	第508号住居跡出土遺物 (2)	118
第75图	第481号住居跡出土遺物 (1)	80	第112图	第510号住居跡	119
第76图	第481号住居跡出土遺物 (2)	81	第113图	第510号住居跡出土遺物	120
第77图	第483号住居跡	83	第114图	第511号住居跡	122
第78图	第484·491号住居跡	84	第115图	第511号住居跡出土遺物	123
第79图	第484·491号住居跡出土遺物	84	第116图	第513号住居跡出土遺物	124
第80图	第486号住居跡出土遺物	85	第117图	第513号住居跡	124
第81图	第486·489号住居跡	86	第118图	第514·515·516号住居跡 (1)	126
第82图	第489号住居跡出土遺物 (1)	87	第119图	第514·515·516号住居跡 (2)	127
第83图	第489号住居跡出土遺物 (2)	88	第120图	第514号住居跡出土遺物	127
第84图	第490号住居跡出土遺物	90	第121图	第496·514·516号住居跡出土遺物	128
第85图	第487·490号住居跡	91	第122图	第514·515号住居跡出土遺物	129
第86图	第492号住居跡	92	第123图	第514·515·516号住居跡出土遺物	130
第87图	第492号住居跡出土遺物	92	第124图	第515号住居跡出土遺物	132
第88图	第493号住居跡	94	第125图	第516号住居跡出土遺物	132
第89图	第493号住居跡出土遺物	95	第126图	第517号住居跡	133
第90图	第496号住居跡	96	第127图	第517号住居跡出土遺物	134
第91图	第496号住居跡出土遺物	97	第128图	第518号住居跡	135
第92图	第498·500号住居跡	100	第129图	第518号住居跡出土遺物	136
第93图	第498号住居跡出土遺物	101	第130图	第519号住居跡	137
第94图	第500号住居跡出土遺物	102	第131图	第519号住居跡出土遺物	138
第95图	第499号住居跡	103	第132图	第519·520号住居跡出土遺物	139
第96图	第499号住居跡出土遺物	104	第133图	第520号住居跡	140
第97图	第501·503·504号住居跡	105	第134图	第520号住居跡出土遺物	140
第98图	第501号住居跡出土遺物	106	第135图	第524号住居跡	141
第99图	第503号住居跡出土遺物	106	第136图	第524号住居跡出土遺物	142
第100图	第502·509·512号住居跡	107	第137图	第525号住居跡	143
第101图	第502号住居跡出土遺物 (1)	108	第138图	第525号住居跡出土遺物	144
第102图	第502号住居跡出土遺物 (2)	109	第139图	第526号住居跡 (1)	144
第103图	第509号住居跡出土遺物	110	第140图	第526号住居跡 (2)	145
第104图	第512号住居跡出土遺物	110	第141图	第526号住居跡出土遺物	146
第105图	第506号住居跡出土遺物	111	第142图	第527号住居跡 (1)	146
第106图	第506·507号住居跡	112	第143图	第527号住居跡 (2)	147
第107图	第506·507号住居跡出土遺物	113	第144图	第527号住居跡出土遺物	148

第145図	第528号住居跡出土遺物	149	第182図	第283号住居跡出土遺物	182
第146図	第528号住居跡	150	第183図	第415号住居跡出土遺物	183
第147図	第529号住居跡	151	第184図	第415・422号住居跡	184
第148図	第529号住居跡出土遺物	151	第185図	第417号住居跡出土遺物	185
第149図	第530・531号住居跡(1)	152	第186図	第417号住居跡	185
第150図	第530・531号住居跡(2)	153	第187図	第418号住居跡	186
第151図	第530号住居跡出土遺物	154	第188図	第418号住居跡出土遺物(1)	188
第152図	第530・531号住居跡出土遺物	155	第189図	第418号住居跡出土遺物(2)	189
第153図	第531号住居跡出土遺物	156	第190図	第419号住居跡出土遺物	189
第154図	第533・534・532号住居跡	157	第191図	第419号住居跡	190
第155図	第532号住居跡出土遺物	157	第192図	第421号住居跡出土遺物	190
第156図	第533号住居跡出土遺物	158	第193図	第421号住居跡	191
第157図	第540号住居跡出土遺物	158	第194図	第423号住居跡	192
第158図	第540・544号住居跡	159	第195図	第423号住居跡出土遺物	193
第159図	第546号住居跡	160	第196図	第424号住居跡	194
第160図	第546号住居跡出土遺物	161	第197図	第425号住居跡出土遺物	194
第161図	第548号住居跡	161	第198図	第424号住居跡出土遺物	195
第162図	第548号住居跡出土遺物	162	第199図	第425号住居跡	196
第163図	第17号堀立柱建物跡出土遺物	162	第200図	第426号住居跡出土遺物	196
第164図	第22号堀立柱建物跡出土遺物	162	第201図	第426号住居跡	197
第165図	第17号堀立柱建物跡	163	第202図	第427・439号住居跡	198
第166図	第22号堀立柱建物跡(1)	164	第203図	第427号住居跡出土遺物	199
第167図	第22号堀立柱建物跡(2)	165	第204図	第439号住居跡出土遺物	200
第168図	第146~156・158号土坑	167	第205図	第428号住居跡	201
第169図	第159~171号土坑	169	第206図	第428号住居跡出土遺物	201
第170図	第172~177・261号土坑	171	第207図	第430号住居跡	202
第171図	土坑出土遺物	172	第208図	第430号住居跡出土遺物	203
第172図	グリッドピット	173	第209図	第431号住居跡出土遺物	203
第173図	グリッドピット出土遺物	174	第210図	第431号住居跡	204
第174図	F区全掘図	175	第211図	第432号住居跡	205
第175図	第180号住居跡	176	第212図	第432号住居跡出土遺物	206
第176図	第180号住居跡出土遺物	176	第213図	第433号住居跡出土遺物	206
第177図	第181号住居跡	177	第214図	第433号住居跡	207
第178図	第181号住居跡出土遺物	178	第215図	第434号住居跡出土遺物	208
第179図	第182号住居跡	179	第216図	第434号住居跡	208
第180図	第182号住居跡出土遺物	180	第217図	第435号住居跡	209
第181図	第283号住居跡	181	第218図	第435号住居跡出土遺物	209

第219图	第436号住居跡出土遺物	210	第256图	第455号住居跡出土遺物	243
第220图	第436号住居跡	211	第257图	第456号住居跡	244
第221图	第437号住居跡出土遺物	212	第258图	第456号住居跡出土遺物	245
第222图	第437号住居跡	213	第259图	第457号住居跡	246
第223图	第438号住居跡	215	第260图	第457号住居跡出土遺物	247
第224图	第438号住居跡出土遺物	216	第261图	第458号住居跡出土遺物	247
第225图	第440号住居跡	217	第262图	第458号住居跡	247
第226图	第440号住居跡出土遺物	217	第263图	第459号住居跡	248
第227图	第441号住居跡	219	第264图	第459号住居跡出土遺物	249
第228图	第441号住居跡出土遺物	219	第265图	第460・537号住居跡	250
第229图	第442・443号住居跡	220	第266图	第460号住居跡出土遺物	251
第230图	第443号住居跡出土遺物	220	第267图	第461号住居跡	252
第231图	第444号住居跡出土遺物	221	第268图	第461号住居跡出土遺物	253
第232图	第444号住居跡	222	第269图	第462号住居跡	254
第233图	第445号住居跡	223	第270图	第462号住居跡出土遺物	255
第234图	第445号住居跡出土遺物	224	第271图	第463号住居跡出土遺物	256
第235图	第447号住居跡出土遺物 (1)	225	第272图	第463号住居跡	256
第236图	第447号住居跡 (1)	226	第273图	第464号住居跡	257
第237图	第447号住居跡 (2)	227	第274图	第464号住居跡出土遺物	258
第238图	第447号住居跡出土遺物 (2)	227	第275图	第465号住居跡	259
第239图	第448号住居跡	229	第276图	第465号住居跡出土遺物	260
第240图	第448号住居跡出土遺物 (1)	230	第277图	第466号住居跡	261
第241图	第448号住居跡出土遺物 (2)	231	第278图	第466号住居跡出土遺物	261
第242图	第449号住居跡	232	第279图	第467号住居跡	262
第243图	第449号住居跡出土遺物	233	第280图	第467号住居跡出土遺物	263
第244图	第450号住居跡出土遺物	233	第281图	第468号住居跡出土遺物	263
第245图	第450号住居跡	234	第282图	第468号住居跡	263
第246图	第451号住居跡	235	第283图	第469号住居跡	264
第247图	第451号住居跡出土遺物	235	第284图	第469号住居跡出土遺物	265
第248图	第452号住居跡 (1)	236	第285图	第470号住居跡	266
第249图	第452号住居跡 (2)	237	第286图	第470号住居跡出土遺物	267
第250图	第452号住居跡出土遺物	238	第287图	第471号住居跡	268
第251图	第453号住居跡	240	第288图	第471号住居跡出土遺物	269
第252图	第453号住居跡出土遺物	241	第289图	第472号住居跡	270
第253图	第454号住居跡	242	第290图	第473号住居跡	271
第254图	第454号住居跡出土遺物	242	第291图	第473号住居跡出土遺物	271
第255图	第455号住居跡	243	第292图	第474号住居跡	272

第293図	第479号住居跡	273	第330図	第560号住居跡出土遺物	297
第294図	第479号住居跡出土遺物	273	第331図	第13号堀立柱建物跡	299
第295図	第482号住居跡	274	第332図	第14号堀立柱建物跡	300
第296図	第482号住居跡出土遺物	275	第333図	第14号堀立柱建物跡出土遺物	300
第297図	第485号住居跡出土遺物	275	第334図	第15号堀立柱建物跡出土遺物	301
第298図	第485号住居跡	276	第335図	第15号堀立柱建物跡	301
第299図	第488号住居跡	277	第336図	第16号堀立柱建物跡出土遺物	302
第300図	第488号住居跡出土遺物	277	第337図	第16号堀立柱建物跡	302
第301図	第494号住居跡	278	第338図	第18号堀立柱建物跡出土遺物	303
第302図	第494号住居跡出土遺物	278	第339図	第18号堀立柱建物跡	304
第303図	第495号住居跡	279	第340図	第19号堀立柱建物跡出土遺物	305
第304図	第495号住居跡出土遺物	279	第341図	第19号堀立柱建物跡	306
第305図	第497号住居跡	280	第342図	第20号堀立柱建物跡	307
第306図	第505号住居跡	281	第343図	第20号堀立柱建物跡出土遺物	308
第307図	第505号住居跡出土遺物	281	第344図	第21号堀立柱建物跡	308
第308図	第535号住居跡出土遺物	282	第345図	第23号堀立柱建物跡	309
第309図	第535号住居跡	282	第346図	第23号堀立柱建物跡出土遺物	310
第310図	第536号住居跡	283	第347図	第88～95・248号土坑	312
第311図	第536号住居跡出土遺物	283	第348図	第249～255・258～260号土坑	314
第312図	第538号住居跡	284	第349図	土坑出土遺物(1)	315
第313図	第538号住居跡出土遺物	284	第350図	土坑出土遺物(2)	316
第314図	第539号住居跡出土遺物	285	第351図	土坑出土遺物(3)	317
第315図	第539号住居跡	286	第352図	第2号溝跡	319
第316図	第553号住居跡	287	第353図	第14号性格不明遺構	319
第317図	第553号住居跡出土遺物	288	第354図	第15号性格不明遺構	320
第318図	第554号住居跡出土遺物	289	第355図	第16号性格不明遺構	320
第319図	第554号住居跡	289	第356図	第17号性格不明遺構	321
第320図	第555号住居跡	290	第357図	性格不明遺構出土遺物	321
第321図	第556号住居跡	291	第358図	グリッドピット	322
第322図	第556号住居跡出土遺物	291	第359図	グリッドピット出土遺物	322
第323図	第557号住居跡	292	第360図	G区全測図	323
第324図	第557号住居跡出土遺物	293	第361図	第280号住居跡	324
第325図	第558号住居跡	294	第362図	第280号住居跡出土遺物	325
第326図	第558号住居跡出土遺物	295	第363図	第281号住居跡	326
第327図	第559号住居跡出土遺物	295	第364図	第281号住居跡出土遺物	327
第328図	第559号住居跡	296	第365図	第284号住居跡	328
第329図	第560号住居跡	297	第366図	第284号住居跡出土遺物	328

第367图	第285号住居跡出土遺物	329	第404图	第303号住居跡出土遺物	360
第368图	第285号住居跡	329	第405图	第303号住居跡	361
第369图	第286号住居跡	330	第406图	第304号住居跡	362
第370图	第286号住居跡出土遺物	331	第407图	第304号住居跡出土遺物	363
第371图	第287号住居跡	332	第408图	第305号住居跡	364
第372图	第287号住居跡出土遺物	333	第409图	第305号住居跡出土遺物	365
第373图	第288号住居跡	334	第410图	第306号住居跡	366
第374图	第288号住居跡出土遺物 (1)	335	第411图	第306号住居跡出土遺物	367
第375图	第288号住居跡出土遺物 (2)	336	第412图	第307号住居跡	369
第376图	第289号住居跡	337	第413图	第307号住居跡出土遺物	369
第377图	第289号住居跡出土遺物	338	第414图	第308号住居跡	370
第378图	第290号住居跡	339	第415图	第309号住居跡	371
第379图	第290号住居跡出土遺物	340	第416图	第309号住居跡出土遺物	372
第380图	第291号住居跡出土遺物	340	第417图	第309·318号住居跡出土遺物	373
第381图	第291号住居跡	341	第418图	第310号住居跡出土遺物	373
第382图	第292号住居跡	342	第419图	第310号住居跡	374
第383图	第292号住居跡出土遺物	343	第420图	第311号住居跡出土遺物	375
第384图	第293号住居跡出土遺物	343	第421图	第311号住居跡	375
第385图	第293号住居跡	344	第422图	第312号住居跡出土遺物	376
第386图	第294号住居跡	345	第423图	第312号住居跡	376
第387图	第294号住居跡出土遺物	346	第424图	第314号住居跡出土遺物	377
第388图	第295号住居跡出土遺物	346	第425图	第314·420号住居跡	378
第389图	第295号住居跡	347	第426图	第315号住居跡	379
第390图	第296号住居跡	348	第427图	第315号住居跡出土遺物	380
第391图	第296号住居跡出土遺物	349	第428图	第316号住居跡出土遺物	380
第392图	第297号住居跡	350	第429图	第316号住居跡	381
第393图	第297号住居跡出土遺物 (1)	351	第430图	第317号住居跡	382
第394图	第297号住居跡出土遺物 (2)	352	第431图	第317号住居跡出土遺物	382
第395图	第298号住居跡出土遺物	353	第432图	第318号住居跡	383
第396图	第298号住居跡	354	第433图	第318号住居跡出土遺物	383
第397图	第299号住居跡	355	第434图	第319·321号住居跡	384
第398图	第299号住居跡出土遺物	355	第435图	第319号住居跡出土遺物 (1)	385
第399图	第300号住居跡	356	第436图	第319号住居跡出土遺物 (2)	386
第400图	第300号住居跡出土遺物	357	第437图	第320号住居跡出土遺物	388
第401图	第301号住居跡	358	第438图	第320号住居跡	389
第402图	第302号住居跡	358	第439图	第322号住居跡	390
第403图	第302号住居跡出土遺物	359	第440图	第322号住居跡出土遺物	391



第441图	第323号住居跡 (1)	392	第478图	第344号住居跡	422
第442图	第323号住居跡 (2)	393	第479图	第344号住居跡出土遺物	423
第443图	第323号住居跡出土遺物 (1)	394	第480图	第345号住居跡	424
第444图	第323号住居跡出土遺物 (2)	395	第481图	第346号住居跡	425
第445图	第324号住居跡出土遺物	397	第482图	第346号住居跡出土遺物	426
第446图	第324号住居跡	398	第483图	第347号住居跡	427
第447图	第325号住居跡出土遺物	398	第484图	第347号住居跡出土遺物	428
第448图	第325号住居跡	399	第485图	第348号住居跡	429
第449图	第327号住居跡	401	第486图	第348号住居跡出土遺物	430
第450图	第328・330号住居跡	402	第487图	第349号住居跡	431
第451图	第328号住居跡出土遺物	403	第488图	第349号住居跡出土遺物	431
第452图	第330号住居跡出土遺物	404	第489图	第350号住居跡	432
第453图	第329号住居跡	405	第490图	第350号住居跡出土遺物	432
第454图	第329号住居跡出土遺物	405	第491图	第351号住居跡	433
第455图	第331号住居跡	406	第492图	第351号住居跡出土遺物	434
第456图	第331号住居跡出土遺物	406	第493图	第352号住居跡出土遺物	434
第457图	第332号住居跡	407	第494图	第352号住居跡	435
第458图	第332号住居跡出土遺物	408	第495图	第353号住居跡 (1)	436
第459图	第333号住居跡	409	第496图	第353号住居跡 (2)	437
第460图	第333号住居跡出土遺物	410	第497图	第353号住居跡出土遺物	438
第461图	第334号住居跡	410	第498图	第354号住居跡	439
第462图	第335号住居跡出土遺物	411	第499图	第354号住居跡出土遺物	440
第463图	第335号住居跡	411	第500图	第355号住居跡 (1)	440
第464图	第336号住居跡	412	第501图	第355号住居跡 (2)	441
第465图	第336号住居跡出土遺物	412	第502图	第355号住居跡出土遺物	442
第466图	第337号住居跡	413	第503图	第356号住居跡出土遺物	443
第467图	第337号住居跡出土遺物	414	第504图	第356号住居跡	443
第468图	第338号住居跡	415	第505图	第357号住居跡	444
第469图	第338号住居跡出土遺物	416	第506图	第357号住居跡出土遺物	445
第470图	第339号住居跡出土遺物	416	第507图	第358号住居跡出土遺物	446
第471图	第339号住居跡	417	第508图	第358号住居跡	446
第472图	第340号住居跡	418	第509图	第359号住居跡	447
第473图	第340号住居跡出土遺物	419	第510图	第359号住居跡出土遺物	447
第474图	第341号住居跡	419	第511图	第360号住居跡	448
第475图	第342号住居跡	420	第512图	第360号住居跡出土遺物	448
第476图	第343号住居跡	421	第513图	第406号住居跡	449
第477图	第343号住居跡出土遺物	421	第514图	第407号住居跡出土遺物	449

第515図	第407号住居跡	450	第544図	グリッド出土遺物 (3)	481
第516図	第408号住居跡出土遺物	450	第545図	表採出土遺物 (1)	484
第517図	第408号住居跡	451	第546図	表採出土遺物 (2)	485
第518図	第409号住居跡	452	第547図	第Ⅰ期の土器	489
第519図	第409号住居跡出土遺物	453	第548図	第Ⅱ期の土器	490
第520図	第410号住居跡	454	第549図	第Ⅲ期の土器	491
第521図	第411号住居跡	454	第550図	第Ⅳ期の土器	493
第522図	第411号住居跡出土遺物	455	第551図	第Ⅴ期の土器	495
第523図	第412号住居跡 (1)	456	第552図	第Ⅵ期の土器	496
第524図	第412号住居跡出土遺物	457	第553図	第Ⅶ期の土器	497
第525図	第412号住居跡 (2)	457	第554図	第Ⅷ期の土器	499
第526図	第413号住居跡	458	第555図	第Ⅸ期の土器	501
第527図	第414号住居跡出土遺物	459	第556図	第Ⅹ・Ⅺ期の土器	502
第528図	第414号住居跡 (1)	459	第557図	第Ⅻ期の土器	504
第529図	第414号住居跡 (2)	460	第558図	第ⅩⅢ期の土器	506
第530図	第416号住居跡	461	第559図	第ⅩⅣ期の土器	507
第531図	第429号住居跡	462	第560図	第ⅩⅤ・ⅩⅥ期の土器	509
第532図	第429号住居跡出土遺物	463	第561図	桜沢竊跡・台耕地遺跡遺跡出土土器	512
第533図	第178～181・183～190号土坑	464	第562図	集落の区分	513
第534図	第191～201号土坑	466	第563図	第Ⅰ・Ⅱ期の集落	515
第535図	第202～210号土坑	468	第564図	第Ⅲ・Ⅳ期の集落	516
第536図	第245～247・256～257号土坑	470	第565図	第Ⅴ・Ⅵ期の集落	517
第537図	土坑出土遺物 (1)	471	第566図	第Ⅶ・Ⅷ期の集落	519
第538図	土坑出土遺物 (2)	472	第567図	第Ⅸ・Ⅹ期の集落	520
第539図	縄文時代の遺物 (1)	475	第568図	第ⅩⅠ・ⅩⅡ期の集落	521
第540図	縄文時代の遺物 (2)	476	第569図	第ⅩⅢ・ⅩⅣ期の集落	523
第541図	縄文時代の遺物 (3)	477	第570図	第ⅩⅤ・ⅩⅥ期の集落	524
第542図	グリッド出土遺物 (1)	479	第571図	土錘分類図	527
第543図	グリッド出土遺物 (2)	480	第572図	第440号住居跡出土土錘	531

# 図版目次

- 図版1 E・F・G区  
E区南部
- 図版2 G区航空写真  
G区東部
- 図版3 181号住居跡・第92号土坑  
第181号住居跡カマド周辺遺物出土状況
- 図版4 第258・259号住居跡  
第258号住居跡カマド
- 図版5 第262・263号住居跡  
第262号住居跡カマド
- 図版6 第264号住居跡  
第264号住居跡カマド
- 図版7 第265号住居跡  
第265号住居跡カマド
- 図版8 第266号住居跡  
第266号住居跡カマド
- 図版9 第267号住居跡  
第267号住居跡カマド
- 図版10 第268号住居跡  
第268号住居跡カマド
- 図版11 第269号住居跡  
第271号住居跡
- 図版12 第271号住居跡カマド  
第274号住居跡
- 図版13 第275号住居跡  
第275号住居跡カマド
- 図版14 第278号住居跡遺物出土状況  
第278号住居跡カマド
- 図版15 第278号住居跡貯蔵穴  
第280号住居跡
- 図版16 第280号住居跡カマド  
第281号住居跡
- 図版17 第281号住居跡カマド  
第283号住居跡
- 図版18 第283号住居跡遺物出土状況
- 第284号住居跡
- 図版19 第284号住居跡カマド  
第286号住居跡
- 図版20 第286号住居跡カマド  
第286号住居跡貯蔵穴
- 図版21 第287号住居跡  
第287号住居跡カマド
- 図版22 第287号住居跡遺物出土状況  
第287号住居跡遺物出土状況
- 図版23 第288号住居跡カマド  
第289号住居跡
- 図版24 第290号住居跡  
第290号住居跡カマド
- 図版25 第291号住居跡  
第292号住居跡
- 図版26 第294号住居跡  
第297号住居跡
- 図版27 第297号住居跡遺物出土状況  
第297号住居跡カマド
- 図版28 第297号住居跡カマド遺物出土状況  
第300号住居跡
- 図版29 第300号住居跡カマド  
第302号住居跡
- 図版30 第302号住居跡カマド  
第303号住居跡
- 図版31 第303号住居跡カマド  
第304号住居跡
- 図版32 第305号住居跡  
第305号住居跡カマド
- 図版33 第305号住居跡貯蔵穴  
第306号住居跡
- 図版34 第307号住居跡  
第307号住居跡カマド
- 図版35 第307号住居跡内1号土坑  
第307号住居跡内2号土坑

- 図版36 第308号住居跡  
第308号住居跡カマド
- 図版37 第309号住居跡  
第309号住居跡カマド
- 図版38 第310号住居跡  
第310号住居跡カマド
- 図版39 第310号住居跡遺物出土状況  
第311号住居跡
- 図版40 第312号住居跡  
第315号住居跡
- 図版41 第315号住居跡カマド周辺遺物出土状況  
第316号住居跡
- 図版42 第316号住居跡カマド  
第322号住居跡
- 図版43 第322号住居跡カマド  
第323号住居跡
- 図版44 第323号住居跡カマド  
第323号住居跡貯蔵穴
- 図版45 第323号住居跡遺物出土状況  
第328号住居跡
- 図版46 第328号住居跡カマド  
第328号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
- 図版47 第328号住居跡遺物出土状況  
第332号住居跡
- 図版48 第332号住居跡カマド遺物出土状況  
第332号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
- 図版49 第332号住居跡遺物出土状況  
第333号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
- 図版50 第336号住居跡  
第336号住居跡カマド
- 図版51 第337・338号住居跡  
第337号住居跡カマド
- 図版52 第338号住居跡  
第338号住居跡カマド
- 図版53 第339号住居跡  
第340号住居跡
- 図版54 第343号住居跡  
第343号住居跡カマド
- 図版55 第344号住居跡  
第344号住居跡カマド
- 図版56 第345号住居跡  
第346号住居跡
- 図版57 第346号住居跡カマド  
第348・410号住居跡
- 図版58 第348号住居跡カマド  
第349号住居跡
- 図版59 第349号住居跡カマド  
第350号住居跡
- 図版60 第350号住居跡カマド  
第351号住居跡
- 図版61 第352号住居跡  
第352号住居跡カマド
- 図版62 第353号住居跡  
第353号住居跡カマド
- 図版63 第353号住居跡貯蔵穴  
第353号住居跡遺物出土状況
- 図版64 第354号住居跡  
第354号住居跡カマド遺物出土状況
- 図版65 第354号住居跡貯蔵穴遺物出土状況  
第355号住居跡
- 図版66 第355号住居跡カマド  
第357号住居跡
- 図版67 第359号住居跡カマド  
第360号住居跡
- 図版68 第360号住居跡カマド  
第391号住居跡カマド
- 図版69 第411号住居跡  
第411号住居跡カマド
- 図版70 第412号住居跡  
第415・422号住居跡
- 図版71 第415号住居跡カマド  
第417号住居跡
- 図版72 第418号住居跡  
第418号住居跡カマド

- 図版73 第419号住居跡  
第423・424号住居跡
- 図版74 第424号住居跡遺物出土状況  
第425号住居跡
- 図版75 第426号住居跡  
第428号住居跡
- 図版76 第430号住居跡  
第430号住居跡カマド
- 図版77 第431号住居跡  
第432号住居跡
- 図版78 第433号住居跡  
第434号住居跡
- 図版79 第435号住居跡  
第436号住居跡
- 図版80 第438号住居跡  
第444号住居跡
- 図版81 第444号住居跡遺物出土状況  
第445号住居跡
- 図版82 第447号住居跡  
第447号住居跡カマド
- 図版83 第447号住居跡遺物出土状況  
第448号住居跡
- 図版84 第448号住居跡カマド遺物出土状況  
第449号住居跡
- 図版85 第449号住居跡カマド  
第450号住居跡
- 図版86 第451号住居跡  
第452号住居跡
- 図版87 第453号住居跡  
第454号住居跡
- 図版88 第455号住居跡  
第455号住居跡カマド
- 図版89 第456号住居跡  
第459号住居跡
- 図版90 第459号住居跡遺物出土状況  
第460号住居跡
- 図版91 第464号住居跡
- 第466・467号住居跡
- 図版92 第466号住居跡カマド  
第469号住居跡
- 図版93 第469号住居跡カマドA・カマドB  
第471号住居跡
- 図版94 第473号住居跡カマド  
第474号住居跡
- 図版95 第475号住居跡  
第476号住居跡
- 図版96 第478号住居跡  
第478号住居跡カマド
- 図版97 第479号住居跡  
第480号住居跡
- 図版98 第482号住居跡  
第483号住居跡
- 図版99 第484・491号住居跡  
第485号住居跡
- 図版100 第487・490号住居跡  
第488号住居跡
- 図版101 第489号住居跡  
第490号住居跡カマド
- 図版102 第492号住居跡  
第493号住居跡
- 図版103 第493号住居跡カマド  
第496号住居跡
- 図版104 第498・500号住居跡  
第498号住居跡カマド
- 図版105 第498号住居跡遺物出土状況  
第501・503・504号住居跡
- 図版106 第502・509・512号住居跡  
第502号住居跡カマド
- 図版107 第505号住居跡カマド  
第506・507号住居跡
- 図版108 第506・507号住居跡カマド  
第508号住居跡
- 図版109 第508号住居跡カマド  
第514号住居跡

- 図版110 第514号住居跡カマド A  
第515・516号住居跡
- 図版111 第515号住居跡カマド遺物出土状況  
第516号住居跡カマド
- 図版112 第518号住居跡  
第519号住居跡
- 図版113 第519号住居跡カマド  
第524号住居跡
- 図版114 第524号住居跡カマド  
第525号住居跡
- 図版115 第527号住居跡  
第527号住居跡カマド A 遺物出土状況
- 図版116 第528号住居跡  
第530号住居跡
- 図版117 第531号住居跡カマド遺物出土状況  
第536号住居跡
- 図版118 第556号住居跡  
第557号住居跡遺物出土状況
- 図版119 第18～23号掘立柱建物跡  
第13号掘立柱建物跡
- 図版120 第14号掘立柱建物跡  
第15号掘立柱建物跡
- 図版121 第16号掘立柱建物跡  
第17号掘立柱建物跡
- 図版122 第18号掘立柱建物跡  
第19号掘立柱建物跡
- 図版123 第20号掘立柱建物跡  
第21号掘立柱建物跡
- 図版124 第90号土坑  
第93号土坑
- 図版125 第179号土坑  
第180号土坑
- 図版126 第186号土坑  
第246号土坑
- 図版127 第258号土坑  
第260号土坑
- 図版128 第257号住居跡出土遺物
- 第260号住居跡出土遺物
- 第262号住居跡出土遺物
- 第263号住居跡出土遺物
- 第264号住居跡出土遺物
- 第266号住居跡出土遺物
- 第267号住居跡出土遺物
- 図版129 第270号住居跡出土遺物  
第273号住居跡出土遺物  
第275号住居跡出土遺物  
第277号住居跡出土遺物  
第278号住居跡出土遺物
- 図版130 第391号住居跡出土遺物  
第392号住居跡出土遺物  
第399号住居跡出土遺物  
第476号住居跡出土遺物  
第477号住居跡出土遺物  
第480号住居跡出土遺物  
第481号住居跡出土遺物
- 図版131 第481号住居跡出土遺物  
第484号住居跡出土遺物  
第489号住居跡出土遺物
- 図版132 第489号住居跡出土遺物  
第490号住居跡出土遺物  
第492号住居跡出土遺物
- 図版133 第496号住居跡出土遺物  
第498号住居跡出土遺物  
第499号住居跡出土遺物
- 図版134 第499号住居跡出土遺物  
第500号住居跡出土遺物  
第502号住居跡出土遺物  
第508号住居跡出土遺物
- 図版135 第508号住居跡出土遺物  
第510号住居跡出土遺物  
第511号住居跡出土遺物
- 図版136 第511号住居跡出土遺物  
第513号住居跡出土遺物  
第514号住居跡出土遺物

- 第514·515号住居跡出土遺物
- 第514·516号住居跡出土遺物
- 図版137 第514·516号住居跡出土遺物
- 第514·517号住居跡出土遺物
- 第517号住居跡出土遺物
- 第518号住居跡出土遺物
- 第519号住居跡出土遺物
- 第524号住居跡出土遺物
- 図版138 第525号住居跡出土遺物
- 第526号住居跡出土遺物
- 第527号住居跡出土遺物
- 第530·531号住居跡出土遺物
- 第531号住居跡出土遺物
- 第546号住居跡出土遺物
- 第548号住居跡出土遺物
- 図版139 第548号住居跡出土遺物
- 第181号住居跡出土遺物
- 第283号住居跡出土遺物
- 第415号住居跡出土遺物
- 第418号住居跡出土遺物
- 第423号住居跡出土遺物
- 図版140 第423号住居跡出土遺物
- 第424号住居跡出土遺物
- 第427号住居跡出土遺物
- 第428号住居跡出土遺物
- 第430号住居跡出土遺物
- 第432号住居跡出土遺物
- 図版141 第432号住居跡出土遺物
- 第434号住居跡出土遺物
- 第436号住居跡出土遺物
- 第438号住居跡出土遺物
- 第439号住居跡出土遺物
- 図版142 第440号住居跡出土遺物
- 第444号住居跡出土遺物
- 第448号住居跡出土遺物
- 第449号住居跡出土遺物
- 第451号住居跡出土遺物
- 第453号住居跡出土遺物
- 図版143 第453号住居跡出土遺物
- 第456号住居跡出土遺物
- 第457号住居跡出土遺物
- 第459号住居跡出土遺物
- 第461号住居跡出土遺物
- 第462号住居跡出土遺物
- 第469号住居跡出土遺物
- 第482号住居跡出土遺物
- 第488号住居跡出土遺物
- 図版144 第488号住居跡出土遺物
- 第535号住居跡出土遺物
- 第536号住居跡出土遺物
- 第538号住居跡出土遺物
- 第539号住居跡出土遺物
- 第553号住居跡出土遺物
- 第556号住居跡出土遺物
- 図版145 第557号住居跡出土遺物
- 第92号土坑出土遺物
- 第254号土坑出土遺物
- 第258号土坑出土遺物
- 第284号住居跡出土遺物
- 図版146 第284号住居跡出土遺物
- 第286号住居跡出土遺物
- 第288号住居跡出土遺物
- 第294号住居跡出土遺物
- 第297号住居跡出土遺物
- 図版147 第297号住居跡出土遺物
- 第302号住居跡出土遺物
- 第303号住居跡出土遺物
- 第305号住居跡出土遺物
- 図版148 第307号住居跡内2号土坑出土遺物
- 第309号住居跡出土遺物
- 第310号住居跡出土遺物
- 第311号住居跡出土遺物
- 第314号住居跡出土遺物
- 第315号住居跡出土遺物

- 図版149 第315号住居跡出土遺物  
第316号住居跡出土遺物  
第319号住居跡出土遺物  
第322号住居跡出土遺物  
第323号住居跡出土遺物
- 図版150 第323号住居跡出土遺物  
第325号住居跡出土遺物  
第328号住居跡出土遺物  
第331号住居跡出土遺物  
第332号住居跡出土遺物
- 図版151 第332号住居跡出土遺物  
第338号住居跡出土遺物  
第339号住居跡出土遺物  
第343号住居跡出土遺物
- 図版152 第346号住居跡出土遺物  
第347号住居跡出土遺物  
第348号住居跡出土遺物  
第349号住居跡出土遺物  
第350号住居跡出土遺物  
第352号住居跡出土遺物  
第353号住居跡出土遺物
- 図版153 第354号住居跡出土遺物  
第355号住居跡出土遺物  
第360号住居跡出土遺物
- 図版154 第411号住居跡出土遺物  
第414号住居跡出土遺物  
第429号住居跡出土遺物  
第180号土坑出土遺物  
第186号土坑出土遺物  
第209号土坑出土遺物
- 図版155 第246号土坑出土遺物  
H-24グリッドP2出土遺物  
H-29グリッド出土遺物  
I-29グリッド出土遺物  
L-19グリッド出土遺物
- 図版156 第263号住居跡出土遺物  
第264号住居跡出土遺物
- 第265号住居跡出土遺物  
第273号住居跡出土遺物
- 図版157 第275号住居跡出土遺物  
第277号住居跡出土遺物  
第278号住居跡出土遺物  
第392号住居跡出土遺物
- 図版158 第476号住居跡出土遺物  
第478号住居跡出土遺物  
第480号住居跡出土遺物  
第493号住居跡出土遺物
- 図版159 第493号住居跡出土遺物  
第496・514・516号住居跡出土遺物  
第498号住居跡出土遺物  
第508号住居跡出土遺物  
第511号住居跡出土遺物
- 図版160 第511号住居跡出土遺物  
第515号住居跡出土遺物
- 図版161 第517号住居跡出土遺物  
第525号住居跡出土遺物  
第527号住居跡出土遺物  
第531号住居跡出土遺物
- 図版162 第531号住居跡出土遺物  
第181号住居跡出土遺物  
第182号住居跡出土遺物  
第418号住居跡出土遺物
- 図版163 第447号住居跡出土遺物  
第448号住居跡出土遺物  
第453号住居跡出土遺物  
第459号住居跡出土遺物
- 図版164 第469号住居跡出土遺物  
第553号住居跡出土遺物  
第291号住居跡出土遺物  
第294号住居跡出土遺物  
第296号住居跡出土遺物
- 図版165 第307号住居跡出土遺物  
第309号住居跡出土遺物  
第314号住居跡出土遺物



- 第315号住居跡出土遺物  
第323号住居跡出土遺物  
図版166 第323号住居跡出土遺物  
第328号住居跡出土遺物  
第332号住居跡出土遺物  
図版167 第333号住居跡出土遺物  
第353号住居跡出土遺物  
第409号住居跡出土遺物  
第93号土坑出土遺物  
図版168 第260号住居跡出土遺物  
第263号住居跡出土遺物  
第273号住居跡出土遺物  
図版169 第273号住居跡出土遺物  
第278号住居跡出土遺物  
図版170 第278号住居跡出土遺物  
第498号住居跡出土遺物  
第511号住居跡出土遺物  
第527号住居跡出土遺物  
図版171 第527号住居跡出土遺物  
第531号住居跡出土遺物  
第283号住居跡出土遺物  
第423号住居跡出土遺物  
図版172 第424号住居跡出土遺物  
第441号住居跡出土遺物  
第447号住居跡出土遺物  
図版173 第447号住居跡出土遺物  
第460号住居跡出土遺物  
第553号住居跡出土遺物  
図版174 第557号住居跡出土遺物  
第558号住居跡出土遺物  
第560号住居跡出土遺物  
図版175 第90号土坑出土遺物  
第294号住居跡出土遺物  
第295号住居跡出土遺物  
第297号住居跡出土遺物  
図版176 第306号住居跡出土遺物  
第307号住居跡出土遺物
- 第310号住居跡出土遺物  
第312号住居跡出土遺物  
図版177 第328号住居跡出土遺物  
第332号住居跡出土遺物  
図版178 第332号住居跡出土遺物  
第333号住居跡出土遺物  
第354号住居跡出土遺物  
表探出土遺物  
図版179 第514・515・516号住居跡出土遺物(内面)  
第480号住居跡出土遺物(内面)  
第514・515・516号住居跡出土遺物(外面)  
第480号住居跡出土遺物(外面)  
第489号住居跡出土遺物(外面)  
第519・520号住居跡出土遺物(外面)  
図版180 第354号住居跡出土遺物  
G-30グリッド出土遺物  
第315号住居跡出土遺物  
第440号住居跡出土遺物  
第480号住居跡出土遺物  
第506・507号住居跡出土遺物  
図版181 第481号住居跡出土遺物  
第418号住居跡出土遺物  
図版182 第319号住居跡出土遺物  
第323号住居跡出土遺物  
図版183 灰釉陶器  
第271号住居跡出土遺物  
第452号住居跡出土遺物  
第509号住居跡出土遺物  
第464号住居跡出土遺物  
図版184 第530・531号住居跡出土遺物  
第297号住居跡出土遺物  
第344号住居跡出土遺物  
第185号住居跡出土遺物  
第297号住居跡出土遺物  
L-19グリッド出土遺物  
土製小玉  
図版185 石製品類

石製模造品

図版186 鉄製品 (1)

鉄製品 (2)

図版187 鉄製品 (3)

砥石

図版188 石器 (1)

石器 (2)

# 遺構別目次

## 凡例

I…「如意／如意南」第241集

II…「如意遺跡」第264集

III…「如意Ⅲ／川端」第276集

IV…「如意遺跡Ⅳ」第285集（本書）

例：II-12=264集12P，III-16=276集16P

## 竪穴住居跡（S J）

第1号住居跡	II-12
第2号住居跡	II-12
第3号住居跡	II-15
第4号住居跡	II-17
第5号住居跡	II-17
第6号住居跡	II-20
第7号住居跡	II-20
第8号住居跡	II-20
第9号住居跡	II-25
第10号住居跡	II-27
第11号住居跡	II-27
第12号住居跡	II-30
第13号住居跡	II-30
第14号住居跡	II-30
第15号住居跡	II-30
第16号住居跡	II-35
第17号住居跡	II-35
第18号住居跡	II-39
第19号住居跡	II-43
第20号住居跡	II-43
第21号住居跡	II-45
第22号住居跡	II-47
第23号住居跡	II-47
第24号住居跡	II-50
第25号住居跡	II-50
第26号住居跡	II-54
第27号住居跡	II-54
第28号住居跡	II-54

第29号住居跡	II-57
第30号住居跡	II-57
第31号住居跡	II-62
第32号住居跡	II-63
第33号住居跡	II-63
第34号住居跡	II-63
第35号住居跡	II-69
第36号住居跡	II-70
第37号住居跡	II-69
第38号住居跡	II-70
第39号住居跡	II-70
第40号住居跡	II-70
第41号住居跡	II-75
第42号住居跡	II-75
第43号住居跡	II-79
第44号住居跡	II-79
第45号住居跡	II-79
第46号住居跡	II-83
第47号住居跡	II-83
第48号住居跡	II-85
第49号住居跡	II-85
第50号住居跡	II-85
第51号住居跡	II-88
第52号住居跡	II-88
第53号住居跡	II-89
第54号住居跡	II-90
第55号住居跡	II-92
第56号住居跡	II-92
第57号住居跡	II-92
第58号住居跡	II-92
第59号住居跡	II-96
第60号住居跡	II-98
第61号住居跡	II-100
第62号住居跡	II-100
第63号住居跡（第10号性格不明遺構Aに変更）	

第64号住居跡	Ⅱ-100
第65号住居跡	Ⅱ-104
第66号住居跡	Ⅱ-107
第67号住居跡	Ⅱ-107
第68号住居跡	Ⅱ-107
第69号住居跡	Ⅱ-110
第70号住居跡	Ⅱ-116
第71号住居跡	Ⅱ-116
第72号住居跡	Ⅱ-119
第73号住居跡	Ⅱ-121
第74号住居跡	Ⅱ-123
第75号住居跡	Ⅱ-123
第76号住居跡	Ⅱ-123
第77号住居跡	Ⅱ-123
第78号住居跡	Ⅱ-129
第79号住居跡	Ⅱ-132
第80号住居跡	Ⅱ-137
第81号住居跡	Ⅱ-142
第82号住居跡	Ⅱ-142
第83号住居跡	Ⅱ-144
第84号住居跡	Ⅱ-146
第85号住居跡	Ⅱ-146
第86号住居跡	Ⅱ-149
第87号住居跡	Ⅱ-150
第88号住居跡	Ⅱ-150
第89号住居跡	Ⅱ-153
第90号住居跡	Ⅱ-153
第91号住居跡	Ⅱ-157
第92号住居跡	Ⅱ-161
第93号住居跡	Ⅱ-162
第94号住居跡	Ⅱ-162
第95号住居跡	Ⅱ-162
第96号住居跡	Ⅱ-167
第97号住居跡	Ⅱ-169
第98号住居跡	Ⅱ-169
第99号住居跡	Ⅱ-171
第100号住居跡	Ⅱ-173

第101号住居跡	Ⅱ-175
第102号住居跡	Ⅱ-175
第103号住居跡	Ⅱ-175
第104号住居跡	Ⅱ-177
第105号住居跡	Ⅲ-16
第106号住居跡	Ⅲ-16
第107号住居跡	Ⅲ-18
第108号住居跡	Ⅲ-18
第109号住居跡	Ⅲ-20
第110号住居跡	Ⅲ-22
第111号住居跡	Ⅱ-177
第112号住居跡	Ⅱ-183
第113号住居跡	Ⅱ-183
第114号住居跡	Ⅱ-184
第115号住居跡	Ⅱ-189
第116号住居跡	Ⅱ-189
第117号住居跡	Ⅱ-190
第118号住居跡	Ⅱ-192 Ⅲ-16
第119号住居跡	Ⅲ-24
第120号住居跡	Ⅲ-25
第121号住居跡	Ⅲ-26
第122号住居跡	Ⅲ-27
第123号住居跡	Ⅲ-31
第124号住居跡	Ⅲ-33
第125号住居跡	Ⅱ-194
第126号住居跡	Ⅲ-33
第127号住居跡	Ⅱ-194
第128号住居跡	Ⅱ-196
第129号住居跡	Ⅱ-198
第130号住居跡	Ⅲ-37
第131号住居跡	Ⅲ-40
第132号住居跡	Ⅱ-201 Ⅲ-16
第133号住居跡	Ⅱ-201
第134号住居跡	Ⅲ-37
第135号住居跡	Ⅲ-40
第136号住居跡	Ⅱ-192 Ⅲ-16
第137号住居跡	Ⅰ-16

第138号住居跡	I-18	第175号住居跡	III-71
第139号住居跡	I-20	第176号住居跡	III-73
第140号住居跡	I-20	第177号住居跡	III-74
第141号住居跡	I-24	第178号住居跡	III-75
第142号住居跡	I-25	第179号住居跡	III-78
第143号住居跡	I-29	第180号住居跡	IV-176
第144号住居跡	I-31	第181号住居跡	IV-176
第145号住居跡	I-32	第182号住居跡	IV-178
第146号住居跡	I-35	第183号住居跡	III-78
第147号住居跡	I-35	第184号住居跡	III-80
第148号住居跡	I-39	第185号住居跡	III-83
第149号住居跡	I-43	第186号住居跡	III-83
第150号住居跡	I-45	第187号住居跡	III-87
第151号住居跡	I-48	第188号住居跡	III-87
第152号住居跡	I-49	第189号住居跡	III-89
第153号住居跡	I-46	第190号住居跡	III-90
第154号住居跡	III-40	第191号住居跡	III-92
第155号住居跡	III-40	第192号住居跡	III-92
第156号住居跡	III-44	第193号住居跡	III-92
第157号住居跡	III-44	第194号住居跡	III-93
第158号住居跡	III-46	第195号住居跡	III-96
第159号住居跡	III-47	第196号住居跡	III-96
第160号住居跡	III-47	第197号住居跡	III-97
第161号住居跡	III-50	第198号住居跡	III-98
第162号住居跡	III-18	第199号住居跡	III-98
第163号住居跡	III-50	第200号住居跡	III-99
第164号住居跡	III-50	第201号住居跡	III-103
第165号住居跡	III-55	第202号住居跡	III-103
第166号住居跡	III-57	第203号住居跡	III-103
第167号住居跡	III-57	第204号住居跡	III-105
第168号住居跡	III-57	第205号住居跡	III-106
第169号住居跡	III-62	第206号住居跡	III-109
第170号住居跡	III-64	第207号住居跡	III-110
第171号住居跡	III-64	第208号住居跡	III-112
第172号住居跡	III-66	第209号住居跡	III-112
第173号住居跡	III-66	第210号住居跡	III-113
第174号住居跡	III-69	第211号住居跡	III-113

第212号住居跡	Ⅲ—117	第249号住居跡	Ⅲ—213
第213号住居跡	Ⅲ—117	第250号住居跡	Ⅲ—215
第214号住居跡	Ⅲ—120	第251号住居跡	Ⅲ—215
第215号住居跡	Ⅲ—121	第252号住居跡	Ⅲ—218
第216号住居跡	Ⅲ—121	第253号住居跡	Ⅲ—219
第217号住居跡	Ⅲ—121	第254号住居跡	Ⅲ—220
第218号住居跡	Ⅲ—125	第255号住居跡	Ⅲ—220
第219号住居跡	Ⅲ—127	第256号住居跡	Ⅲ—223
第220号住居跡	Ⅲ—128	第257号住居跡	Ⅳ—18
第221号住居跡	Ⅲ—128	第258号住居跡	Ⅳ—19
第222号住居跡	Ⅲ—131	第259号住居跡	Ⅳ—22
第223号住居跡	Ⅲ—133	第260号住居跡	Ⅳ—22
第224号住居跡	Ⅲ—133	第261号住居跡	Ⅳ—24
第225号住居跡	Ⅲ—135	第262号住居跡	Ⅳ—24
第226号住居跡	Ⅲ—128	第263号住居跡	Ⅳ—25
第227号住居跡	Ⅲ—174	第264号住居跡	Ⅳ—28
第228号住居跡	Ⅲ—140	第265号住居跡	Ⅳ—31
第229号住居跡	Ⅲ—175	第266号住居跡	Ⅳ—31
第230号住居跡	Ⅲ—175	第267号住居跡	Ⅳ—35
第231号住居跡	Ⅲ—175	第268号住居跡	Ⅳ—37
第232号住居跡	Ⅲ—179	第269号住居跡	Ⅳ—38
第233号住居跡	Ⅲ—179	第270号住居跡	Ⅳ—40
第234号住居跡	Ⅲ—181	第271号住居跡	Ⅳ—42
第235号住居跡	Ⅲ—181	第272号住居跡	Ⅳ—46
第236号住居跡	Ⅲ—181	第273号住居跡	Ⅳ—49
第237号住居跡	Ⅲ—181	第274号住居跡	Ⅳ—52
第238号住居跡	Ⅲ—194	第275号住居跡	Ⅳ—53
第239号住居跡	Ⅲ—196	第276号住居跡	Ⅳ—55
第240号住居跡	Ⅲ—196	第277号住居跡	Ⅳ—57
第241号住居跡	Ⅲ—199	第278号住居跡	Ⅳ—58
第242号住居跡	Ⅲ—200	第279号住居跡	Ⅳ—60
第243号住居跡	Ⅲ—203	第280号住居跡	Ⅳ—324
第244号住居跡	Ⅲ—204	第281号住居跡	Ⅳ—325
第245号住居跡	Ⅲ—207	第282号住居跡 (第418号住居跡と同一)	
第246号住居跡	Ⅲ—208	第283号住居跡	Ⅳ—181
第247号住居跡	Ⅲ—210	第284号住居跡	Ⅳ—327
第248号住居跡	Ⅲ—213	第285号住居跡	Ⅳ—329

第286号住居跡	IV-330	第323号住居跡	IV-391
第287号住居跡	IV-331	第324号住居跡	IV-397
第288号住居跡	IV-334	第325号住居跡	IV-398
第289号住居跡	IV-337	第326号住居跡 (欠番)	
第290号住居跡	IV-338	第327号住居跡	IV-400
第291号住居跡	IV-340	第328号住居跡	IV-401
第292号住居跡	IV-342	第329号住居跡	IV-405
第293号住居跡	IV-343	第330号住居跡	IV-404
第294号住居跡	IV-345	第331号住居跡	IV-405
第295号住居跡	IV-346	第332号住居跡	IV-407
第296号住居跡	IV-347	第333号住居跡	IV-409
第297号住居跡	IV-349	第334号住居跡	IV-411
第298号住居跡	IV-353	第335号住居跡	IV-411
第299号住居跡	IV-354	第336号住居跡	IV-412
第300号住居跡	IV-356	第337号住居跡	IV-413
第301号住居跡	IV-357	第338号住居跡	IV-414
第302号住居跡	IV-358	第339号住居跡	IV-416
第303号住居跡	IV-360	第340号住居跡	IV-418
第304号住居跡	IV-362	第341号住居跡	IV-419
第305号住居跡	IV-363	第342号住居跡	IV-420
第306号住居跡	IV-367	第343号住居跡	IV-420
第307号住居跡	IV-368	第344号住居跡	IV-422
第308号住居跡	IV-370	第345号住居跡	IV-423
第309号住居跡	IV-371	第346号住居跡	IV-424
第310号住居跡	IV-373	第347号住居跡	IV-427
第311号住居跡	IV-375	第348号住居跡	IV-428
第312号住居跡	IV-376	第349号住居跡	IV-431
第313号住居跡 (第408号住居跡と同一)		第350号住居跡	IV-432
第314号住居跡	IV-377	第351号住居跡	IV-433
第315号住居跡	IV-377	第352号住居跡	IV-434
第316号住居跡	IV-380	第353号住居跡	IV-435
第317号住居跡	IV-382	第354号住居跡	IV-439
第318号住居跡	IV-383	第355号住居跡	IV-440
第319号住居跡	IV-384	第356号住居跡	IV-443
第320号住居跡	IV-388	第357号住居跡	IV-444
第321号住居跡	IV-386	第358号住居跡	IV-445
第322号住居跡	IV-388	第359号住居跡	IV-447

第360号住居跡	Ⅳ-448
第361号住居跡	Ⅲ-225
第362号住居跡	Ⅲ-230
第363号住居跡	Ⅲ-231
第364号住居跡	Ⅲ-231
第365号住居跡	Ⅲ-234
第366号住居跡	Ⅲ-140
第367号住居跡	Ⅲ-235
第368号住居跡	Ⅲ-232
第369号住居跡	Ⅲ-238
第370号住居跡	Ⅲ-240
第371号住居跡	Ⅲ-243
第372号住居跡	Ⅲ-246
第373号住居跡	Ⅲ-248
第374号住居跡	Ⅲ-252
第375号住居跡	Ⅲ-257
第376号住居跡	Ⅲ-260
第377号住居跡	Ⅲ-260
第378号住居跡	Ⅲ-262
第379号住居跡	Ⅲ-262
第380号住居跡	Ⅲ-264
第381号住居跡	Ⅲ-265
第382号住居跡	Ⅲ-265
第383号住居跡	Ⅲ-268
第384号住居跡	Ⅲ-270
第385号住居跡	Ⅲ-271
第386号住居跡	Ⅲ-273
第387号住居跡	Ⅲ-272
第388号住居跡	Ⅲ-262
第389号住居跡	Ⅳ-61
第390号住居跡	Ⅳ-63
第391号住居跡	Ⅳ-64
第392号住居跡	Ⅳ-65
第393号住居跡	Ⅲ-249
第394号住居跡	Ⅲ-276
第395号住居跡	Ⅲ-278
第396号住居跡	Ⅳ-67

第397号住居跡	Ⅲ-279
第398号住居跡	Ⅲ-280
第399号住居跡	Ⅳ-61
第400号住居跡 (第386号住居跡と同一)	
第401号住居跡	Ⅳ-68
第402号住居跡	Ⅳ-69
第403号住居跡	Ⅲ-281
第404号住居跡	Ⅲ-62
第405号住居跡	Ⅲ-281
第406号住居跡	Ⅳ-449
第407号住居跡	Ⅳ-449
第408号住居跡	Ⅳ-450
第409号住居跡	Ⅳ-452
第410号住居跡	Ⅳ-453
第411号住居跡	Ⅳ-453
第412号住居跡	Ⅳ-455
第413号住居跡	Ⅳ-458
第414号住居跡	Ⅳ-459
第415号住居跡	Ⅳ-183
第416号住居跡	Ⅳ-461
第417号住居跡	Ⅳ-185
第418号住居跡	Ⅳ-187
第419号住居跡	Ⅳ-189
第420号住居跡	Ⅳ-377
第421号住居跡	Ⅳ-190
第422号住居跡	Ⅳ-183
第423号住居跡	Ⅳ-191
第424号住居跡	Ⅳ-193
第425号住居跡	Ⅳ-194
第426号住居跡	Ⅳ-196
第427号住居跡	Ⅳ-197
第428号住居跡	Ⅳ-200
第429号住居跡	Ⅳ-462
第430号住居跡	Ⅳ-202
第431号住居跡	Ⅳ-203
第432号住居跡	Ⅳ-204
第433号住居跡	Ⅳ-206



第434号住居跡……………	IV-208	第471号住居跡……………	IV-267
第435号住居跡……………	IV-209	第472号住居跡……………	IV-270
第436号住居跡……………	IV-210	第473号住居跡……………	IV-270
第437号住居跡……………	IV-212	第474号住居跡……………	IV-272
第438号住居跡……………	IV-214	第475号住居跡……………	IV-70
第439号住居跡……………	IV-198	第476号住居跡……………	IV-72
第440号住居跡……………	IV-217	第477号住居跡……………	IV-73
第441号住居跡……………	IV-218	第478号住居跡……………	IV-74
第442号住居跡……………	IV-219	第479号住居跡……………	IV-272
第443号住居跡……………	IV-220	第480号住居跡……………	IV-76
第444号住居跡……………	IV-221	第481号住居跡……………	IV-79
第445号住居跡……………	IV-223	第482号住居跡……………	IV-275
第446号住居跡 (欠番)		第483号住居跡……………	IV-82
第447号住居跡……………	IV-224	第484号住居跡……………	IV-83
第448号住居跡……………	IV-228	第485号住居跡……………	IV-275
第449号住居跡……………	IV-232	第486号住居跡……………	IV-85
第450号住居跡……………	IV-233	第487号住居跡……………	IV-90
第451号住居跡……………	IV-235	第488号住居跡……………	IV-276
第452号住居跡……………	IV-236	第489号住居跡……………	IV-85
第453号住居跡……………	IV-239	第490号住居跡……………	IV-90
第454号住居跡……………	IV-241	第491号住居跡……………	IV-83
第455号住居跡……………	IV-242	第492号住居跡……………	IV-91
第456号住居跡……………	IV-244	第493号住居跡……………	IV-93
第457号住居跡……………	IV-246	第494号住居跡……………	IV-278
第458号住居跡……………	IV-247	第495号住居跡……………	IV-279
第459号住居跡……………	IV-248	第496号住居跡……………	IV-96
第460号住居跡……………	IV-250	第497号住居跡……………	IV-280
第461号住居跡……………	IV-251	第498号住居跡……………	IV-99
第462号住居跡……………	IV-253	第499号住居跡……………	IV-103
第463号住居跡……………	IV-256	第500号住居跡……………	IV-99
第464号住居跡……………	IV-257	第501号住居跡……………	IV-104
第465号住居跡……………	IV-258	第502号住居跡……………	IV-107
第466号住居跡……………	IV-260	第503号住居跡……………	IV-105
第467号住居跡……………	IV-263	第504号住居跡……………	IV-106
第468号住居跡……………	IV-263	第505号住居跡……………	IV-280
第469号住居跡……………	IV-264	第506号住居跡……………	IV-111
第470号住居跡……………	IV-267	第507号住居跡……………	IV-113

第508号住居跡	IV-115
第509号住居跡	IV-110
第510号住居跡	IV-119
第511号住居跡	IV-121
第512号住居跡	IV-110
第513号住居跡	IV-124
第514号住居跡	IV-125
第515号住居跡	IV-128
第516号住居跡	IV-128
第517号住居跡	IV-133
第518号住居跡	IV-136
第519号住居跡	IV-137
第520号住居跡	IV-139
第521号住居跡 (欠番)	
第522号住居跡 (第389号住居跡と同一)	
第523号住居跡 (欠番)	
第524号住居跡	IV-140
第525号住居跡	IV-142
第526号住居跡	IV-144
第527号住居跡	IV-146
第528号住居跡	IV-149
第529号住居跡	IV-150
第530号住居跡	IV-153
第531号住居跡	IV-156
第532号住居跡	IV-157
第533号住居跡	IV-157
第534号住居跡	IV-158
第535号住居跡	IV-282
第536号住居跡	IV-283
第537号住居跡	IV-250
第538号住居跡	IV-284
第539号住居跡	IV-285
第540号住居跡	IV-158
第541号住居跡	III-283
第542号住居跡 (欠番)	
第543号住居跡 (第559号住居跡と同一)	
第544号住居跡	IV-160

第545号住居跡	III-252
第546号住居跡	IV-161
第547号住居跡	III-284
第548号住居跡	IV-161
第549号住居跡	III-286
第550号住居跡	III-289
第551号住居跡	III-290
第552号住居跡	IV-56
第553号住居跡	IV-288
第554号住居跡	IV-289
第555号住居跡	IV-290
第556号住居跡	IV-290
第557号住居跡	IV-292
第558号住居跡	IV-294
第559号住居跡	IV-295
第560号住居跡	IV-297
<b>掘立柱建物跡 (S B)</b>	
第1号掘立柱建物跡	III-141
第2号掘立柱建物跡	III-141
第3号掘立柱建物跡	III-141
第4号掘立柱建物跡	III-141
第5号掘立柱建物跡	III-291
第6号掘立柱建物跡	III-291
第7号掘立柱建物跡	III-293
第8号掘立柱建物跡	III-294
第9号掘立柱建物跡	III-297
第10号掘立柱建物跡	III-297
第11号掘立柱建物跡	III-297
第12号掘立柱建物跡	III-141
第13号掘立柱建物跡	IV-298
第14号掘立柱建物跡	IV-298
第15号掘立柱建物跡	IV-301
第16号掘立柱建物跡	IV-302
第17号掘立柱建物跡	IV-162
第18号掘立柱建物跡	IV-303
第19号掘立柱建物跡	IV-305
第20号掘立柱建物跡	IV-305

第21号孤立柱建物跡 .....	IV-308	第11号土坑 .....	II-206
第22号孤立柱建物跡 .....	IV-162	第12号土坑 .....	II-206
第23号孤立柱建物跡 .....	IV-310	第13号土坑 .....	II-206
<b>性格不明遺構 (S X)</b>		第14号土坑 .....	II-206
第1号性格不明遺構 .....	II-218	第14号土坑 (A) .....	II-209
第2号性格不明遺構 .....	II-218	第15号土坑 .....	II-209
第3号性格不明遺構 .....	II-218	第16号土坑 .....	II-210
第4号性格不明遺構 .....	II-218	第17号土坑 .....	II-210
第5号性格不明遺構 .....	II-218	第18号土坑 .....	II-210
第6号性格不明遺構 .....	II-223	第19号土坑 .....	II-210
第7号性格不明遺構 .....	II-223	第20号土坑 .....	II-210
第8号性格不明遺構 .....	II-224	第21号土坑 .....	II-210
第9号性格不明遺構 .....	II-224	第22号土坑 .....	II-210
第10号性格不明遺構 .....	II-224	第23号土坑 .....	II-210
第10号性格不明遺構 (A) .....	II-227	第24号土坑 .....	II-210
第11号性格不明遺構 (欠番)		第25号土坑 .....	II-210
第12号性格不明遺構 .....	III-165	第26号土坑 .....	II-210
第13号性格不明遺構 .....	III-165	第27号土坑 .....	II-210
第14号性格不明遺構 .....	IV-319	第28号土坑 .....	II-210
第15号性格不明遺構 .....	IV-320	第29号土坑 (欠番)	
第16号性格不明遺構 .....	IV-320	第30号土坑 .....	II-213
第17号性格不明遺構 .....	IV-320	第31号土坑 .....	II-213
第18号性格不明遺構 .....	III-168	第32号土坑 .....	II-213
第19号性格不明遺構 .....	III-168	第33号土坑 .....	II-213
第20号性格不明遺構 .....	III-169	第34号土坑 .....	II-213
第21号性格不明遺構 .....	III-318	第35号土坑 .....	II-213
<b>土坑 (SK)</b>		第36号土坑 .....	II-213
第1号土坑 .....	II-203	第37号土坑 .....	II-213
第2号土坑 .....	II-203	第38号土坑 .....	II-215
第3号土坑 .....	II-203	第39号土坑 .....	II-215
第4号土坑 .....	II-203	第40号土坑 .....	II-215
第5号土坑 .....	II-203	第41号土坑 .....	II-215
第6号土坑 .....	II-203	第42号土坑 .....	II-215
第7号土坑 .....	II-203	第43号土坑 .....	II-215
第8号土坑 .....	II-203	第44号土坑 .....	II-215
第9号土坑 .....	II-206	第45号土坑 (欠番)	
第10号土坑 .....	II-206	第46号土坑 .....	II-215

第47号土坑	I-49
第48号土坑	I-49
第49号土坑	I-49
第50号土坑	I-49
第51号土坑	I-51
第52号土坑	I-51
第53号土坑	I-51
第54号土坑	I-51
第55号土坑	I-52
第56号土坑	I-52
第57号土坑	I-52
第58号土坑	I-55
第59号土坑	I-55
第60号土坑	I-55
第61号土坑	I-55
第62号土坑	I-55
第63号土坑	I-55
第64号土坑	I-55
第65号土坑	I-55
第66号土坑	I-55
第67号土坑	I-57
第68号土坑	I-57
第69号土坑	I-58
第70号土坑	I-58
第71号土坑	I-58
第72号土坑	III-149
第73号土坑	III-149
第74号土坑	III-149
第75号土坑	III-149
第76号土坑	III-149
第77号土坑	III-149
第78号土坑 (欠番)	
第79号土坑	III-149
第80号土坑	III-149
第81号土坑	III-149
第82号土坑	III-149
第83号土坑	III-152

第84号土坑	III-152
第85号土坑	III-152
第86号土坑	III-152
第87号土坑	III-152
第88号土坑	IV-310
第89号土坑	IV-310
第90号土坑	IV-311
第91号土坑	IV-311
第92号土坑	IV-311
第93号土坑	IV-311
第94号土坑	IV-311
第95号土坑	IV-311
第96号土坑	III-152
第97号土坑	III-152
第98号土坑	III-152
第99号土坑	III-152
第100号土坑	III-155
第101号土坑	III-155
第102号土坑	III-155
第103号土坑	III-155
第104号土坑	III-155
第105号土坑	III-155
第106号土坑	III-160
第107号土坑	III-160
第108号土坑	III-162
第109号土坑	III-162
第110号土坑	III-162
第111号土坑	III-162
第112号土坑	III-162
第113号土坑	III-162
第114号土坑	III-300
第115号土坑	III-300
第116号土坑	III-300
第117号土坑	III-300
第118号土坑	III-300
第119号土坑	III-300
第120号土坑	III-300

第121号土坑·····	Ⅲ-300	第158号土坑·····	Ⅳ-168
第122号土坑·····	Ⅲ-300	第159号土坑·····	Ⅳ-168
第123号土坑·····	Ⅲ-300	第160号土坑·····	Ⅳ-168
第124号土坑·····	Ⅲ-303	第161号土坑·····	Ⅳ-168
第125号土坑·····	Ⅲ-303	第162号土坑·····	Ⅳ-168
第126号土坑·····	Ⅲ-303	第163号土坑·····	Ⅳ-168
第127号土坑·····	Ⅲ-303	第164号土坑·····	Ⅳ-168
第128号土坑·····	Ⅲ-303	第165号土坑·····	Ⅳ-168
第129号土坑·····	Ⅲ-303	第166号土坑·····	Ⅳ-170
第130号土坑·····	Ⅲ-303	第167号土坑·····	Ⅳ-170
第131号土坑·····	Ⅲ-303	第168号土坑·····	Ⅳ-170
第132号土坑·····	Ⅲ-303	第169号土坑·····	Ⅳ-170
第133号土坑·····	Ⅲ-303	第170号土坑·····	Ⅳ-170
第134号土坑·····	Ⅲ-303	第171号土坑·····	Ⅳ-170
第135号土坑·····	Ⅲ-304	第172号土坑·····	Ⅳ-170
第136号土坑·····	Ⅲ-304	第173号土坑·····	Ⅳ-170
第137号土坑·····	Ⅲ-304	第174号土坑·····	Ⅳ-170
第138号土坑·····	Ⅲ-304	第175号土坑·····	Ⅳ-170
第139号土坑·····	Ⅲ-304	第176号土坑·····	Ⅳ-171
第140号土坑·····	Ⅲ-304	第177号土坑·····	Ⅳ-171
第141号土坑·····	Ⅲ-304	第178号土坑·····	Ⅳ-463
第142号土坑·····	Ⅲ-304	第179号土坑·····	Ⅳ-463
第143号土坑·····	Ⅲ-304	第180号土坑·····	Ⅳ-463
第144号土坑(欠番)		第181号土坑·····	Ⅳ-463
第145号土坑·····	Ⅲ-304	第182号土坑(第288号住居跡貯藏穴に変更)	
第146号土坑·····	Ⅳ-166	第183号土坑·····	Ⅳ-465
第147号土坑·····	Ⅳ-166	第184号土坑·····	Ⅳ-465
第148号土坑·····	Ⅳ-166	第185号土坑·····	Ⅳ-465
第149号土坑·····	Ⅳ-166	第186号土坑·····	Ⅳ-465
第150号土坑·····	Ⅳ-166	第187号土坑·····	Ⅳ-465
第151号土坑·····	Ⅳ-166	第188号土坑·····	Ⅳ-465
第152号土坑·····	Ⅳ-166	第189号土坑·····	Ⅳ-465
第153号土坑·····	Ⅳ-166	第190号土坑·····	Ⅳ-465
第154号土坑·····	Ⅳ-166	第191号土坑·····	Ⅳ-465
第155号土坑·····	Ⅳ-168	第192号土坑·····	Ⅳ-465
第156号土坑·····	Ⅳ-168	第193号土坑·····	Ⅳ-467
第157号土坑(第262号住居跡貯藏穴に変更)		第194号土坑·····	Ⅳ-467

第195号土坑	IV-467
第196号土坑	IV-467
第197号土坑	IV-467
第198号土坑	IV-467
第199号土坑	IV-467
第200号土坑	IV-467
第201号土坑	IV-467
第202号土坑	IV-467
第203号土坑	IV-467
第204号土坑	IV-469
第205号土坑	IV-469
第206号土坑	IV-469
第207号土坑	IV-469
第208号土坑	IV-469
第209号土坑	IV-469
第210号土坑	IV-469
第211号土坑 (欠番)	
第212号土坑	III-307
第213号土坑	III-307
第214号土坑	III-307
第215号土坑	III-307
第216号土坑	III-307
第217号土坑	III-307
第218号土坑	III-164
第219号土坑	III-307
第220号土坑	III-307
第221号土坑	III-307
第222号土坑	III-309
第223号土坑	III-309
第224号土坑	III-309
第225号土坑	III-309
第226号土坑	III-309
第227号土坑	III-309
第228号土坑	III-309
第229号土坑	III-309
第230号土坑	III-309
第231号土坑	III-310

第232号土坑	III-310
第233号土坑	III-310
第234号土坑	III-310
第235号土坑	III-310
第236号土坑	III-310
第237号土坑	III-310
第238号土坑	III-310
第239号土坑	III-310
第240号土坑	III-310
第241号土坑	III-310
第242号土坑	III-312
第243号土坑	III-312
第244号土坑	III-312
第245号土坑	IV-469
第246号土坑	IV-469
第247号土坑	IV-470
第248号土坑	IV-311
第249号土坑	IV-311
第250号土坑	IV-311
第251号土坑	IV-313
第252号土坑	IV-313
第253号土坑	IV-313
第254号土坑	IV-313
第255号土坑	IV-313
第256号土坑	IV-470
第257号土坑	IV-470
第258号土坑	IV-313
第259号土坑	IV-313
第260号土坑	IV-313
第261号土坑	IV-172
第262号土坑	III-312
第263号土坑	III-309
<b>溝跡 (S D)</b>	
第1号溝跡	I-58
第2号溝跡	IV-318
第3号溝跡	III-164

## 炉跡

第1号鍛冶が跡	Ⅱ-230
第1号精錬炉跡	Ⅱ-231
第2号が跡	Ⅲ-318
第3号が跡	Ⅲ-318

## 墓坑

第1号墓坑	Ⅲ-318
近世墓坑	Ⅲ-318

## 窯跡

第1号窯跡	Ⅱ-228
-------	-------

## ビット

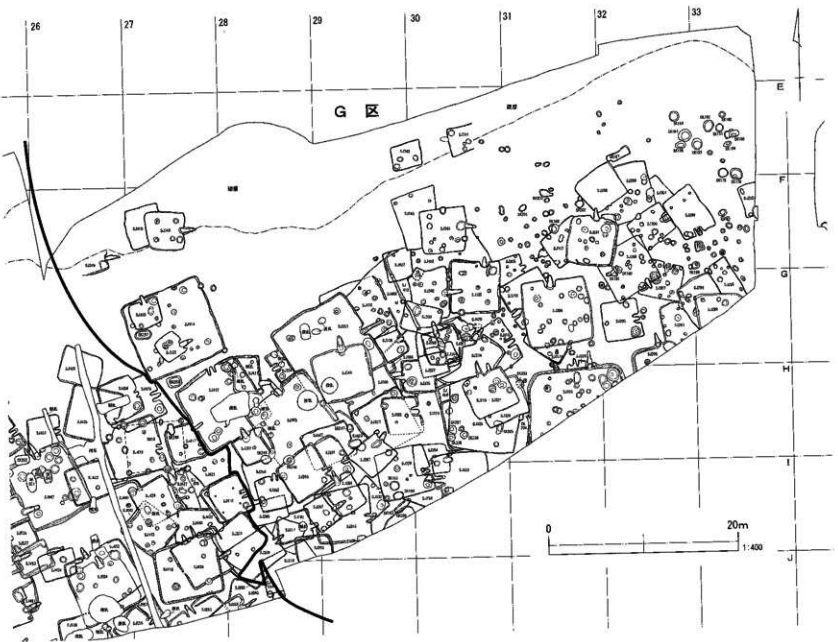
P-3G, P1	Ⅱ-231
Q-2G, P1	Ⅱ-231
Q-4G, P4	Ⅱ-231
O-6G, P1	Ⅱ-231
O-6G, P2	Ⅱ-231
K-10G, P3	Ⅱ-231
L-11G, P1	Ⅱ-232
L-11G, P2	Ⅱ-234
L-11G, P3	Ⅱ-234
M-9G, P2	Ⅱ-234
M-10G, P1	Ⅱ-234
M-10G, P2	Ⅱ-234

M-10G, P14	Ⅱ-234
M-12G, P1	Ⅱ-234
J-15G, P1	Ⅲ-169
I-16G, P6	Ⅲ-169
I-16G, P10	Ⅲ-169
I-19G, P3	Ⅲ-169
H-19G, P1	Ⅲ-169
M-18G, P4	Ⅲ-321
P-17G, P1	Ⅲ-321
Q-17G, P3	Ⅲ-321
Q-19G, P9	Ⅲ-321
J-20, P2	Ⅳ-173
J-22, P2	Ⅳ-173
H-24, P2	Ⅳ-322

## その他

グリッド・表採遺物	I-59
	Ⅱ-236
	Ⅲ-171
	Ⅲ-323
	Ⅳ-478
縄文時代の遺物	Ⅲ-323
	Ⅳ-474

# VI G区の遺構と遺物



第390図 G区全測図



# 1. 住居跡

## 第280号住居跡 (第361・362図)

I-28グリッドに位置する。第281・283・302・317号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.11m、短軸2.59m、深さは0.12~0.19mである。主軸方位はN-15°-Wを指す。

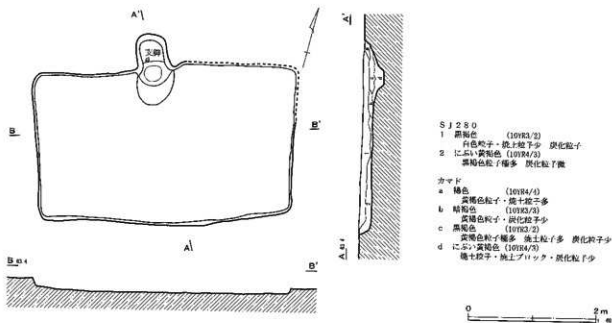
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁中央よりやや西に設置される。燃焼

部は10cm程掘り込み、緩やかに立ち上がって煙道部へ続く。川原石の上部を平に割った支脚が立位で出土した。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期から平安時代にかけての土師器・須恵器片が混在していた。土師器は坏・甕の破片が多く、須恵器は、高台付椀の破片が多かった。

図示可能な遺物は、土師器坏4・甕2・甌1・壺1、須恵器坏2・高台付椀1、砥石1、鉄鍬1、土鍾4点であった。



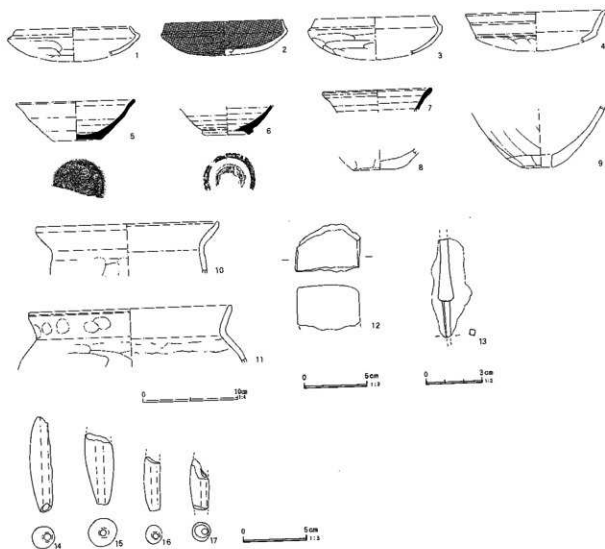
第361図 第280号住居跡

## 第280号住居跡出土遺物観察表 (第362図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	3.0		ABDE	良好	橙	10	B区	内外面染色処理 木野産 底部回転糸切 炭化硝子多 木野産 底部回転糸切後高台貼付 木野産 外面磨削痕明確 覆七 底部から茎部の部材
2	土師坏	(12.3)	3.5		ABDG	良好	にぶい赤褐色	25	B区	
3	土師坏	(12.5)	4.0		ABEG	普通	にぶい橙	30	B区	
4	土師坏	(14.8)	3.3		ABDEJ	良好	靑	5	B区	
5	須恵坏	12.4	4.1	5.3	ABJ	不良	にぶい黄橙	45	A区	
6	須恵高台椀		3.0	(4.5)	ABJ	普通	灰	35	B区	
7	須恵坏	(11.4)	2.4		AB	普通	黄灰	10	B区	
8	土師甕		2.1	6.0	BCEJ	普通	橙	70	B区	
9	土師甕		6.2	2.8	BCE	良好	にぶい橙	50	B区	
10	土師甕	(19.2)	5.4		ABEGL		橙	10	B区	
11	土師甕	(21.4)	6.1		AEGJ	良好	にぶい橙	25	A区	
12	砥石	長さ3.70cm 幅5.30cm 厚さ90.17g							B区	
13	鉄鍬	現存長さ25.00cm 幅0.35cm 厚さ0.32cm 重さ15.67g							B区	

図化した遺物には、古墳時代後期の遺物が多かったが、本住居跡は、平安時代の遺物を出土した第

281号住居跡を壊しており、平安時代に属していたものと思われる。



第362図 第280号住居跡出土遺物

第280号住居跡出土土鐘観察表 (第362図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
14	7.50	1.75	0.60	18.40	B a II	A	橙	100	A区
16	(4.30)	1.50	0.50	6.92	B a IV	A	にぶい赤褐	70	A区
15	(5.60)	2.20	0.50	23.70	C a II	A	にぶい黄橙	70	B区
17	(4.00)	1.50	0.50	7.69	—	A	橙	—	B区

第281号住居跡 (第363・364図)

I-28グリッドに位置する。第280号住居跡に切られ、第292・297・309・316・317・318号住居跡を切る。カマド前面を視乱に壊されていた。平面形は東西に

長い長方形で、長軸3.60m、短軸3.09m、深さは0.9～0.11mである。主軸方位はN-82°-Eを指す。床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ちあがる。カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼

部の掘り込みはなく、僅かに下がりながら煙道部となる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝はほぼ全周し、幅12~20cm、深さ4~7cmである。

遺物は、平安時代を中心とした土師器・須恵器片が出土した。古墳時代後期の土師器の混入も多かった。また、灰釉陶器が2点出土したが、うち一点は図化できなかった。

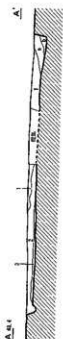
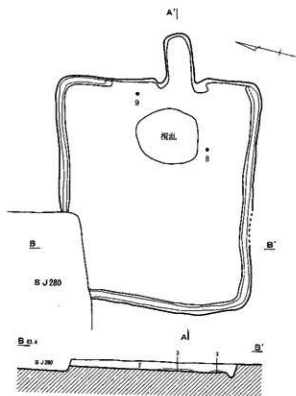
図示可能な遺物は、須恵器高台付椀2・皿1・甕2、灰釉椀1、土師器壺1、刀子1・鉄製紡錘車1点が

出土した。

4は、灰釉椀の口縁部片である。東濃産と考えられる。胎土は緻密で、割れ口はプラスチックの切断面に似る。

8の刀子は、切先と茎の一部と茎尻を欠く。茎部には木質物が残存していた。

9の紡錘車は軸棒の両端部を欠損していた。軸棒の断面の形状は正方形であった。



S J 2 8 1

- 1 ぶい黄褐色 (10TR4/3)  
炭化粒子多 凝土粒子少
- 2 暗褐色 (10TR3/3)  
炭化粒子・黄褐色粒子多 凝土粒子少
- 3 褐色 (10TR4/4)  
炭化粒子少

カマノ

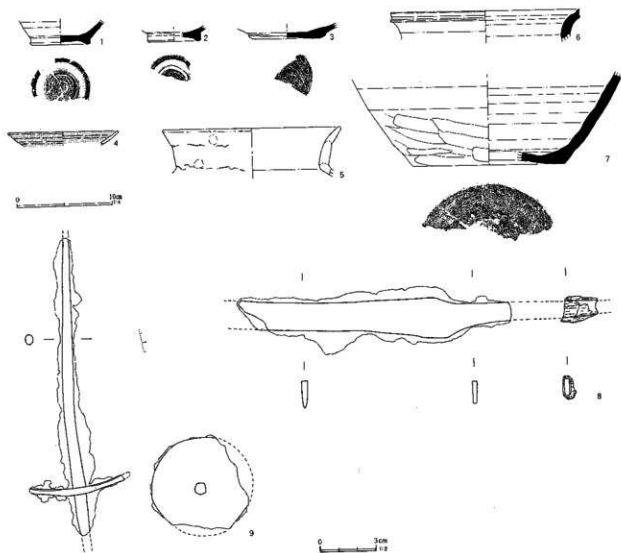
- a 暗褐色 (10TR3/3)  
凝土粒子・焼土ブロック多 炭化粒子少
- b 暗褐色 (10TR3/2)  
凝土粒子・炭化粒子多



第363図 第281号住居跡

第281号住居跡出土遺物観察表 (第364図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵高台椀		2.5	5.8	A B E G J	不良	橙	40	A区	未野産
2	須恵高台椀		1.6	(5.3)	A B D J	不良	灰	30	A区	未野産
3	須恵皿		1.5	(7.0)	A B H	普通	灰	25	A区	未野産 底部回転木切
4	灰釉高台皿	(11.5)	2.5		A B	良好	灰白	10	A区	撥投産 K-90 施釉 ハケヌリ
5	土師壺	(18.6)	5.3		A B D E	良好	橙	20	床	輪積痕明瞭
6	須恵甕	(19.8)	3.4		A B H	良好	灰	15	A区	未野産
7	須恵甕		9.5	(16.0)	A B C H	良好	灰白	25	A区	未野産
8	鉄製紡錘車	長径5.15cm 厚さ0.35cm						軸部現存長15.56cm 重さ48.72g	床	軸棒両端部・輪部二箇所欠損
9	刀子	現存長16.20cm 背幅0.30cm 刃幅1.40cm						重さ74.20g	床	切先・茎の一部・茎尻欠損 茎部木質物残存



第364図 第281号住居跡出土遺物

第284号住居跡 (第365-366図)

I-29グリッドに位置する。第296・297・316・331号住居跡と重複し、その何れより新しい。平面形は正方形に近く、東西3.77m、南北3.71m、深さは0.15~0.20mである。主軸方位はN-33°-Wを指す。

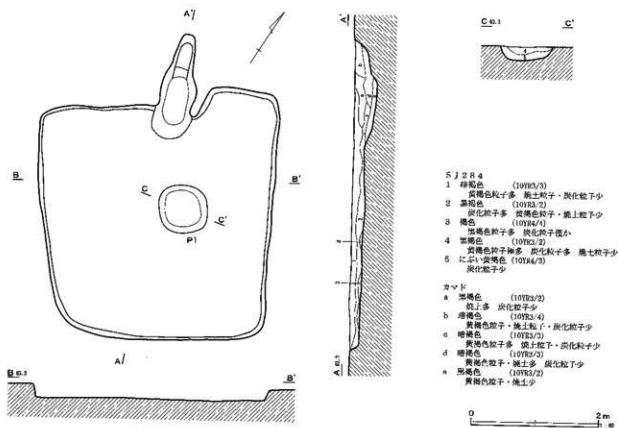
床面は緩やかに立ち上がり、壁は開き気味に立ちあがる。カマド右の壁は北に張り出していた。

カマドは北壁中央よりやや東に設置される。燃焼部は20cm程掘り込み、段を持って煙道部へ続く。壁が張り出す影響か、右袖のみ検出された。貯蔵穴、

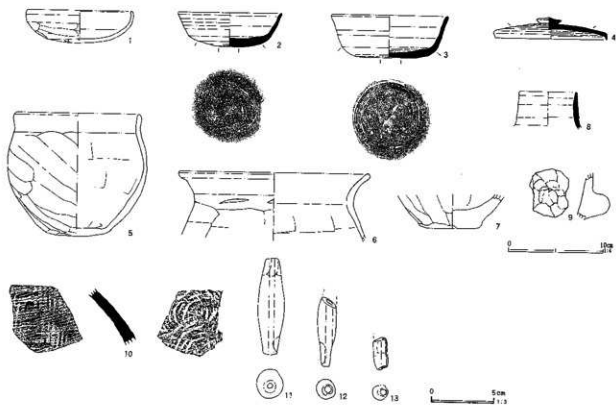
壁溝は検出されなかった。ピットは1本検出され、深さは22cmである。

遺物は、覆土から奈良時代の土師器・須恵器が出土した。土師器は、特に甕の胴部片が、須恵器は環の破片が出土したが殆ど接合しなかった。図示できなかった遺物の中には、湖西産と思われる環が含まれていた。

図示可能な遺物は、土師器環1・甕2・小型甕1・甕の把手1、須恵器環2・蓋1・壺1・甕1、土鏝3点であった。



第365图 第284号住居跡



第366图 第284号住居跡出土遺物

第284号住居跡出土遺物観察表 (第366図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	11.0	3.4		B G J	良好	赭	75	A区	
2	須恵環	11.0	3.6	6.8	ABH	普通	にぶい・橙	80	B区	末野産 ヘラ切後底部朝辺回転ヘラケズリ
3	須恵環	12.2	4.5	8.2	ABEH	良好	灰白	75	A区	末野産 ヘラ切後底部 体部下端回転ヘラケズリ
4	須恵蓋	11.8	2.3		ABH J	不良	にぶい・橙	60	B区	末野産 天井部回転ヘラケズリ
5	土師小型壺 (20.0)	13.0	13.0	6.4	ABD J	良好	にぶい・橙	45	B区	
6	土師甕		7.2		ABCE	良好	赭	20	B区	
7	土師甕		3.6	6.8	ABD	良好	橙	75	B区	
8	須恵釜	(6.0)	3.9		H J L	普通	灰白	25	B区	群馬産
9	土師甕		4.9		AB J	良好	にぶい・黄橙		B区	取手のみ
10	須恵釜				ABCH	良好	灰		A区	末野産 外面平行叩き 内面同心円当具痕

第284号住居跡出土土錘観察表 (第366図)

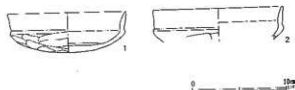
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
11	7.60	2.30	0.40	31.45	B II	A	にぶい・橙	100	B区
12	(5.50)	1.50	0.50	9.07	C a III	A	灰黄褐	80	A区
13	(2.60)	1.20	0.40	2.77	—	A	にぶい・橙	—	

第285号住居跡 (第367・368図)

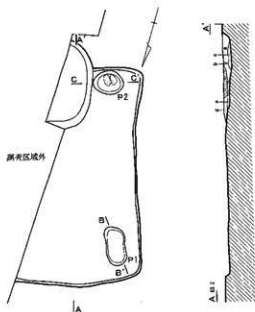
F-33グリッドに位置する。東半は調査区域外にある。検出された規模は、南北3.42m、東西1.98m、深さは0.11~0.14mである。主軸方位は西壁でN-166°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは南壁に設置されるが、西半のみ検出された。10cm掘り込み、浅い土坑状であるが、断面に



第367図 第285号住居跡出土遺物



第368図 第285号住居跡

- S J 2 8 5
- 1 黄褐色 (10195/6)
  - 2 にぶい・黄褐色 (10195/4)
  - 3 緑褐色 (10193/3)
  - 4 褐色 (10194/4)
  - 5 褐色 (10194/4)
  - 6 黄褐色 (10193/4)
  - 7 褐色 (10194/6)
- 炭化粒子  
シルト質
- カマド
- a 褐色 (10194/4) 焼土多
  - b にぶい・黄褐色 (10195/4) 焼土多
  - c にぶい・黄褐色 (10195/4)
  - d 褐色 (10194/4)
  - e 黄褐色 (10195/6)



明瞭な焼土層が観察された。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは2本検出され、深さは共に15cmである。P2はカマド右に検出され、位置的に貯蔵穴の可能性もある。川原石が2個並んで出土した。

遺物は、古墳時代後期の土師器環・甕の破片が出土したが、小片で摩滅が著しく、接合しなかった。図示可能な遺物は、土師器環2点であった。

第285号住居跡出土遺物観察表 (第367図)

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(12.5)	4.2		ABEJ	普通	にぶい黄橙	25	覆土	
2	土師環	(13.7)	3.5		ABDE	普通	黄橙	10	覆土	

第286号住居跡 (第369・370図)

F-32.33グリッドに位置する。第300・301号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。平面形は南北に長い長方形で、長軸5.04m、短軸3.81m、深さは0.11~0.15mである。主軸方位はN-151°-Eを指す。

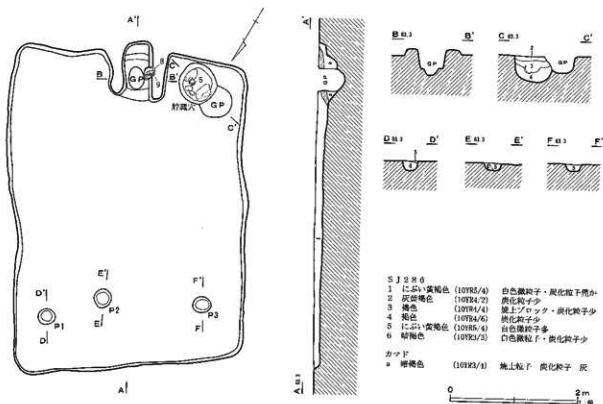
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは南壁ほぼ中央に設置される。燃焼部中央をグリッドピットに壊されていた。燃焼部は15cm程掘り込むようで、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴

はカマド右に設けられ、西側はグリッドピットに壊されていた。径64cmの円形で、深さは37cmである。土器と共にやや大型の川原石が出土した。壁溝は検出されなかった。ピットは北壁寄りに3本検出され、P1~P3の深さは15cm、10cm、9cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器環・甕の破片がカマド・貯蔵穴およびその周辺の覆土から多く出土した。何れも小破片で摩滅が著しく、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環6・甕2、須恵器高

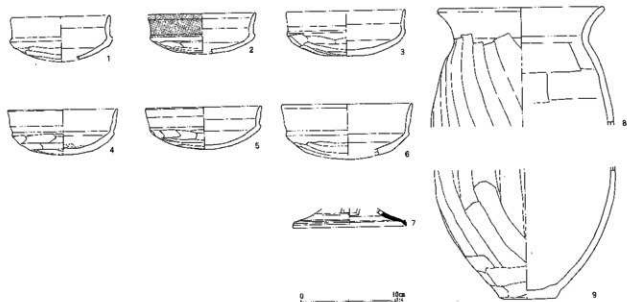


第369図 第286号住居跡

環1点であった。

5の環は貯蔵穴から、8・9の甕はカマドから出

土した。8・9は同一個体であるが、接合しなかつた。



第370図 第286号住居跡出土遺物

第286号住居跡出土遺物観察表 (第370図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	使用	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(10.4)	4.6		ABE	普通	橙	20	D区	内面輝付着
2	土師環	11.4	4.2		ABE	普通	橙	50	D区	外面赤彩
3	土師環	12.5	4.8		ABE	普通	橙	55	A区	
4	土師環	(11.6)	4.7		BE	良好	黄橙	25	B区	
5	土師環	12.2	4.4		ABDE	良好	橙	75	+6.1cm	
6	土師環	(13.8)	5.4		ABE	不良	橙	35	カマド	
7	須恵高環	2.0	(12.0)		BJ	良好	灰白	15	D区	産地不明 透かしあり 外面自然釉
8	土師甕	(17.3)	12.6		ABCEFL	不良	にぶい橙	35	床	
9	土師甕	13.8	(6.0)		ABCEFL	不良	にぶい黄橙	30	床	

第287号住居跡 (第371-372図)

H・I-29グリッドに位置する。第347号住居跡に切れ、第327-328-331-429号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。平面形は正方形に近く、南北3.72m、東西3.64mで、深さは0.10~0.18mである。主軸方位はN-49°-Eを指す。

床面の中央付近は硬く硬化した部分が発見され、周辺より僅かに高くなっていた。壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁の北西コーナー寄りに設置される。住居跡の主軸より西に傾いていた。燃焼部の掘り込

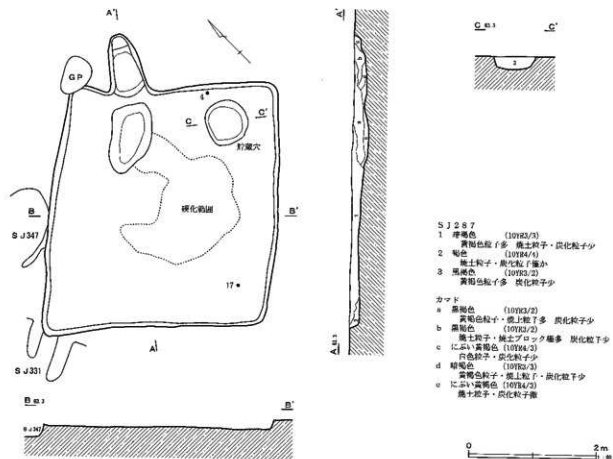
みは僅かで、段を持って煙道部へ続く。燃焼部の手前に深さ10cm程掘り込みが発見され、土層観察からカマドに付属すると考えられる。貯蔵穴は北東コーナー近くに設けられ、70×68cmの楕円形で、深さは21cmである。壁溝は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期から奈良時代前半にかけての土師器・須恵器が多量に出土した。本住居跡は、多くの住居跡と重複しており、他の住居跡からの混入と思われるものも多かった。

図示可能な遺物は、土師器環3・甕2・壺1、須恵器蓋1・甕2・甕頸部片2・胴部片4、刀子1・耳環1、



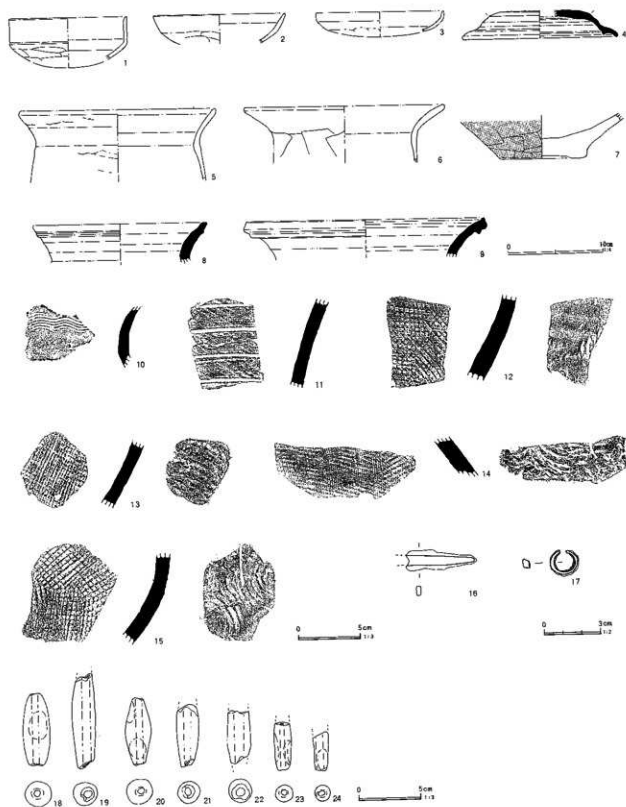
土鍾7点であった。



第371図 第287号住居跡

第287号住居跡出土遺物観察表 (第372図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(12.3)	4.5		ABE	普通	橙	25	覆土	
2	土師環	(13.8)	3.1		ABE	良好	橙	25	覆土	
3	土師環	(13.4)	2.1		ABE	良好	橙	15	B区	
4	須恵甕	(16.2)	2.9		BGH	良好	灰	35	+5.6cm	末野産 天井部回転ヘラケズリ
5	土師甕	20.5	7.5		ABDEG	良好	橙	15	B区	外面磨滅
6	土師甕	(21.0)	6.0		ABEG	良好	橙	20	B区	
7	土師甕		4.6	8.5	B	良好	にぶい黄橙	80	覆土	外面赤彩
8	須恵甕	(18.4)	4.3		ABHJ	普通	灰	10	A区・床	末野産
9	須恵甕	(25.0)	4.1		ABCH	普通	にぶい橙	5	覆土	末野産
10	須恵甕				ABDH	不良	にぶい黄橙		B区	末野産 磨滅き波状文
11	須恵甕				ABH	良好	にぶい橙		A区	末野産 叩き後洗練
12	須恵甕				ABGH	普通	にぶい橙		床	末野産 外面磨子目叩き 内面同心円当具痕
13	須恵甕				ABH	良好	灰		床	末野産 外面磨子目叩き 内面同心円当具痕
14	須恵甕				ABH	良好	灰白		B区	末野産 外面磨子目叩き 内面同心円当具痕
15	須恵甕				ABGH	普通	にぶい橙		床	末野産 外面磨子目叩き 内面同心円当具痕
16	刀子	現存長3.70cm	背幅0.23cm	刃幅0.50cm		重さ3.48g			覆土	身部から基部にかけての部材
17	耳環	直径1.55cm	厚さ0.45cm	幅0.40cm		重さ1.61g			+8.8cm	銅芯銀(?)張りで、内側に鍍銀が残存する



第372图 第287号住居跡出土遺物

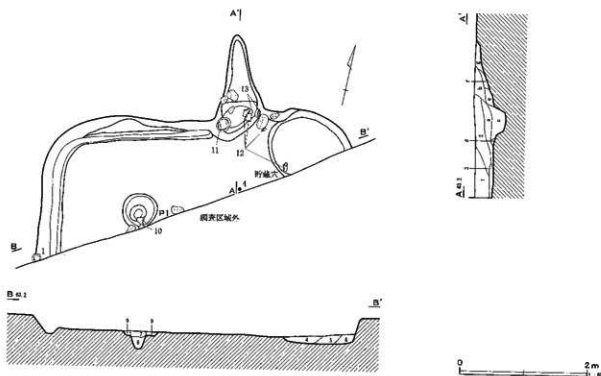
第287号住居跡出土土鐘観察表 (第372図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
18	5.60	2.05	0.50	22.95	B a IV	A	灰褐	100	B区
19	(7.40)	1.90	0.60	22.27	—	A	にぶい橙	—	B区
20	5.20	2.00	0.50	16.88	C a V	A	にぶい赤褐	100	B区
21	(4.90)	1.75	0.60	13.24	B a III	A	にぶい黄橙	70	床下
22	(4.10)	1.80	0.70	13.17	—	A	にぶい黄橙	—	B区
23	(3.70)	1.40	0.40	6.83	B a V	A	灰白	70	B区
24	(3.00)	1.30	0.55	3.55	B a	A	灰白	—	カマド

第288号住居跡 (第373-374-375図)

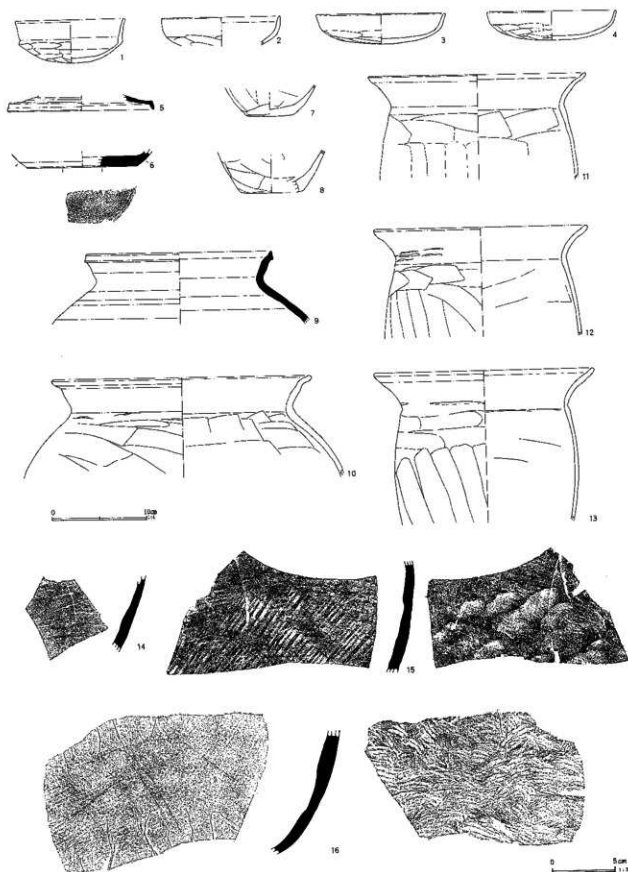
G・H-32グリッドに位置する。第293号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。南大半は調査区域外にある。検出された規模は、東西4.88m、南北1.90m、深さは0.28~0.31mである。主軸方位はN-13°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ちあがる。カマドは北壁中央より東寄りに設置される。袖の補強に右袖は川原石を、左袖は土師器甕(11)を倒位で利用していたが、調査時に袖構築土の確認ができず各々が露出してしまった。燃焼部は20cm程掘り込み、大きな段で煙道部となる。貯蔵穴はカマド右



- |           |                  |         |
|-----------|------------------|---------|
| S J 2 8 8 |                  |         |
| 1         | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 炭化粒子多   |
| 2         | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 黄褐色シルト混 |
| 3         | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 黄褐色土含む  |
| 4         | 黄褐色 (10YR2/2)    | 炭化粒子混   |
| 5         | 黄褐色 (10YR2/2)    | 黄褐色シルト多 |
| 6         | 黄褐色 (10YR2/3)    | 炭化粒子混   |
| 7         | 黄褐色 (10YR3/4)    |         |
| 8         | 褐色 (10YR4/4)     | 炭化粒子    |
| 9         | 褐色 (10YR4/4)     |         |
- 
- |     |                  |                |
|-----|------------------|----------------|
| カマド |                  |                |
| a   | 黄褐色 (10YR3/4)    | 炭化粒子混          |
| b   | にぶい黄褐色 (10YR3/2) | 炭化粒子混、灰黄褐色シルト多 |
| c   | 黄褐色 (10YR3/4)    | 黄土混            |
| d   | 褐色 (10YR1/4)     | 砂質             |
| e   | 黄褐色 (10YR3/4)    | 炭化粒子 焼上粒子      |
| f   | 褐色 (10YR4/4)     |                |
| g   | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 焼上混            |

第373図 第288号住居跡



第374図 第288号住居跡出土遺物 (1)

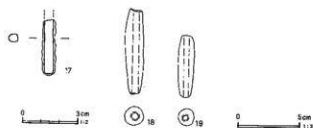
の北東コーナーに接して設けられるが、南半は調査区域外である。径120cm程度の円形に近いと考えられる。深さは10cmである。壁溝は北壁から西壁にかけて検出され、幅14~36cm、深さ5~11cmである。ピットは1本検出され、深さは24cmである。柱穴と考えられる。

遺物は、古墳時代後期~奈良時代の土師器・須恵器が多量に出土した。土師器は、破片数も多く接合

率も良かったが、須恵器は小片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環4・甕5・壺1、須恵器椀1・蓋1・甕胴部片2・長頸瓶1、棒状鉄製品1、土錘2点であった。

このうち、1の環は、他の遺物とは時期差があり、他住居跡の遺物が混入したものと考えられる。



第375図 第288号住居跡出土遺物(2)

第288号住居跡出土遺物観察表 (第374・375図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	11.5	4.5		ABE	良好	橙	100	+17.7cm	
2	土師環	(12.5)	3.0		ABJ	良好	橙	25	A区	
3	土師環	13.6	3.1		ABC	良好	明褐	55	A区	
4	土師環	13.5	3.1		ABCJ	良好	にぶい橙	60	+14.9cm	
5	須恵蓋	(15.4)	1.6		ACI	良好	にぶい黄橙	10	A区	雨比企産
6	須恵瓶		1.6	(11.6)	AB I	良好	灰	20	A区	雨比企産 図録未切後図記-体部下端ヘラケズリ
7	土師甕		3.2	5.1	ABE	良好	灰オリーブ	60	A区	
8	土師甕		4.4	6.6	ABD	普通	橙	65	貯蔵穴	
9	須恵甕	19.5	7.8		ABC	不良	浅黄橙	15	貯蔵穴	未野産
10	土師甕	(27.0)	10.7		ABEGJ	良好	橙	40	+9.7cm	
11	土師甕	22.7	11.2		ABFG	良好	橙	85	-7.5cm	
12	土師甕	22.3	11.6		ABE	良好	明赤褐	65	+7cm	
13	土師甕	(23.0)	16.0		ABE	良好	橙	35	カマド	
14	須恵片甕				ABC FH	良好	黄灰	20	A区	未野産 外面ヘラ記号か?
15	須恵甕				B FH	良好	暗青灰	15	A区	未野産 外面平行甲き 内面無文の当具痕
16	須恵甕				ABCH	良好	灰		A区	未野産 外面平行甲き 内面同心円当具痕
17	棒状鉄製品	現存長2.90cm	幅0.50cm	厚さ0.40cm	重さ2.56g				覆土	

第288号住居跡出土土錘観察表 (第375図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
18	6.70	1.50	0.50	13.01	B a III	A	にぶい黄橙	100	
19	4.80	1.25	0.40	7.43	B a V	A	灰黄褐	100	

### 第289号住居跡 (第376・377図)

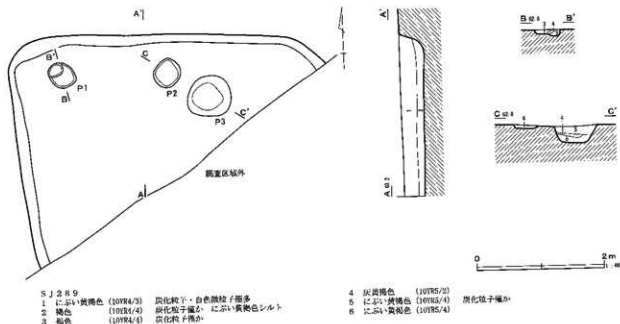
G-33グリッドに位置する。第293・294・295号住居跡と重複し、その何れよりも新しい。南半は調査区域外にある。検出された規模は、東西5.06m、南北3.42m、深さは0.35~0.39mである。主軸方位は北壁でN-90°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマド、貯蔵穴等施設は検出されなかった。ピットは北壁寄りで3本検出され、P1~P3の深さは12cm、6cm、26cmである。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が多く出土したが、摩滅が著しく、小破片が多かったため、殆ど接合しなかった。図示した遺物も残存率は悪い。

図示可能な遺物は、土師器環2・甕3、壺1、須恵器環2、土錘14点であった。



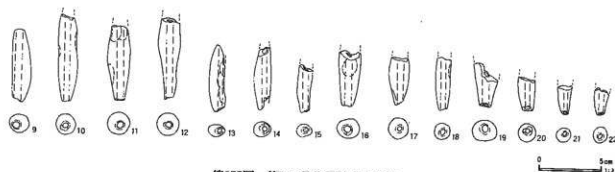
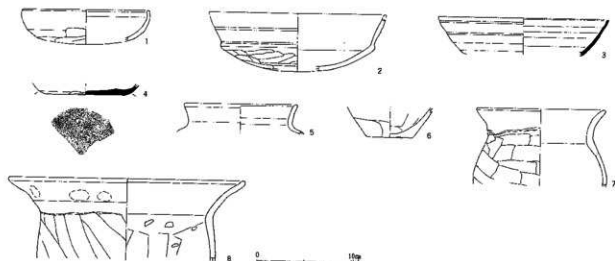
第376図 第289号住居跡

### 第289号住居跡出土遺物観察表 (第377図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(13.2)	3.3		A B D G	普通	橙	10	A区	
2	土師環		5.7		A B E	不良	にぶい黄橙	15	A区	
3	須恵環	(18.0)	3.9		A C	良好	灰	5	A区	木野産
4	須恵環		1.2	4.3	A C H L	良好	灰白	20	A区	木野産 底部手持ちヘラケズリ
5	土師小壺	(11.8)	3.1		A B D E	普通	明褐	20	A区	
6	土師甕		3.3	4.8	A B E J	普通	橙	50	A区	
7	土師小甕	(13.5)	8.1		A B D J	普通	橙	20	A区	
8	土師甕	(25.0)	8.6		A B E G	普通	橙	20	A区	

### 第289号住居跡出土土錘観察表 (第377図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
9	5.60	1.50	0.50	10.48	B a IV	A	にぶい黄橙	100	A区
10	(6.80)	1.60	0.40	16.34	B a II	A	灰黄褐	80	A区
11	(5.90)	1.80	0.50	15.79	C a III	A	にぶい橙	90	A区
12	(6.40)	1.80	1.00	16.25	C a II	A	褐灰	80	A区



第377図 第289号住居跡出土遺物

第289号住居跡出土土器観察表 (第377図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
13	5.20	1.30	0.35	5.59	B a V	A	にぶい橙	90	B区
14	(4.90)	1.40	0.40	6.82	B a V	A	灰黄褐	70	A区
15	(3.70)	1.25	0.40	3.31	B a V	A	にぶい黄橙	70	A区
16	(4.30)	1.80	0.55	10.73	B a III	A	にぶい黄橙	60	A区
17	(3.70)	1.60	0.40	8.16	C a V	A	にぶい黄橙	70	B区
18	(4.10)	1.30	0.40	4.78	B a IV	A	黒褐	70	A区
19	(3.40)	1.90	0.60	7.40	—	A	褐灰	—	A区
20	(2.70)	1.50	0.40	4.17	—	A	にぶい黄褐	—	B区
21	(2.20)	1.10	0.30	2.21	—	C	にぶい黄褐	—	A区
22	(2.10)	1.30	0.40	2.41	—	A	褐灰	—	A区

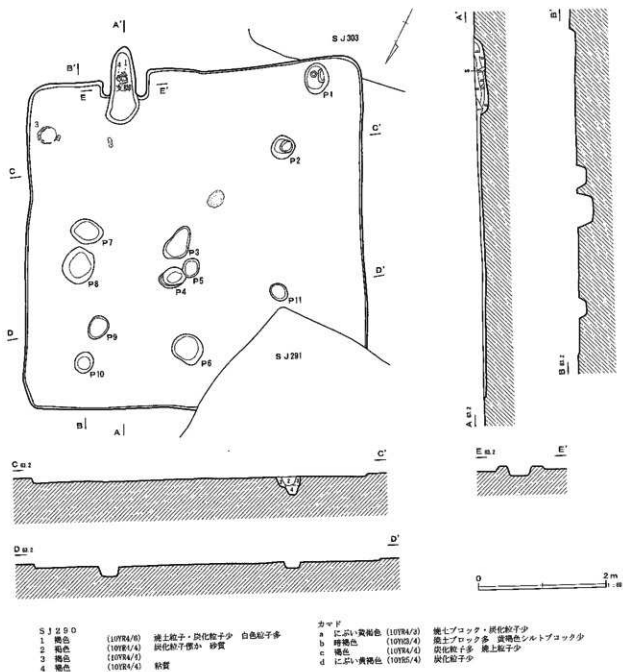
第290号住居跡 (第378・379図)

F・G-32グリッドに位置する。第291号住居跡に切られ、第300・303・307号住居跡・第180・181号土坑を切る。平面形は正方形で、東西5.36m、南北5.35mで、深さは0.04~0.08mと浅い。主軸方位はN-152°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは南壁中央より東寄りに設置される。燃焼部は10cm程掘り込み、そのまま煙道部となる。川原石利用の支脚が立位で検出した。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは11本検出され、P1~P11の深さは19cm、28cm、15cm、21cm、14cm、44cm、14cm、22cm、26cm、13cm、10cmである。カマド前面から編物石が、中央付近で扁平な自然石が出土した。遺物は、古墳時代後期の土師器片がやや多く出土

したが、小片が多く、殆ど接合しなかった。であった。  
 図示可能な遺物は、土師器坏1・甕3、土鍾1点

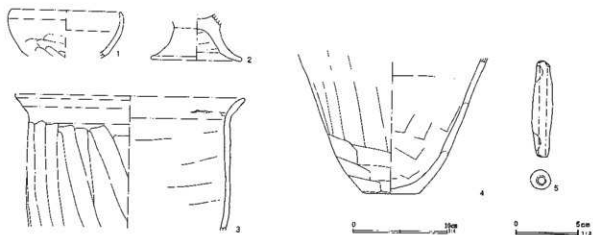


第378図 第290号住居跡

第290号住居跡出土遺物観察表 (第379図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師器坏	11.5	5.0		A B J	不良	灰黄褐	60	カマド	煤付着
2	土師白村甕		4.9	9.6	A B E	普通	浅黄橙	50	C区	
3	土師甕	24.4	14.0		A B E	良好	橙	70	-5.6cm	
4	土師甕		14.5	6.0	A B E	普通	明褐	60	カマド	





第379図 第290号住居跡出土遺物

第290号住居跡出土土器観察表 (第379図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	7.50	1.60	0.55	14.61	B a II	A	にぶい黄	100	

第291号住居跡 (第380・381図)

F-31・32グリッドに位置する。第290・298・299・300・312号住居跡と重複し、その何れよりも新しい。平面形は正方形で、南北5.35m、東西5.12m、深さは0.15~0.25mである。主軸方位はN-9°-Eを指す。

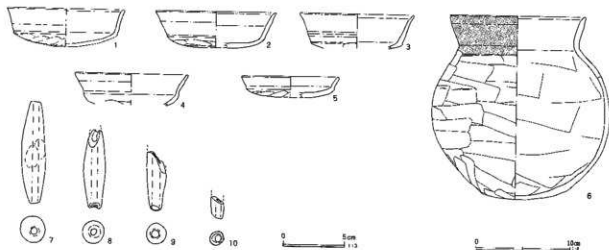
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。カマド右は高さが12cm程の棚状になっていた。

カマドは北壁ほぼ中央に設置される。燃焼部は10

cm程掘り込み、緩やかに立ち上がりながら煙道部となる。貯蔵穴はカマド右に設けられ、径102cmの円形で、深さは47cmである。壁溝は東壁から南壁にかけて検出され、幅10~25cm、深さ2~10cmである。ピットは9本検出され、P1~P9の深さは8cm、40cm、37cm、9cm、5cm、12cm、47cm、27cm、18cmである。カマド右で編物石が8個出土した。

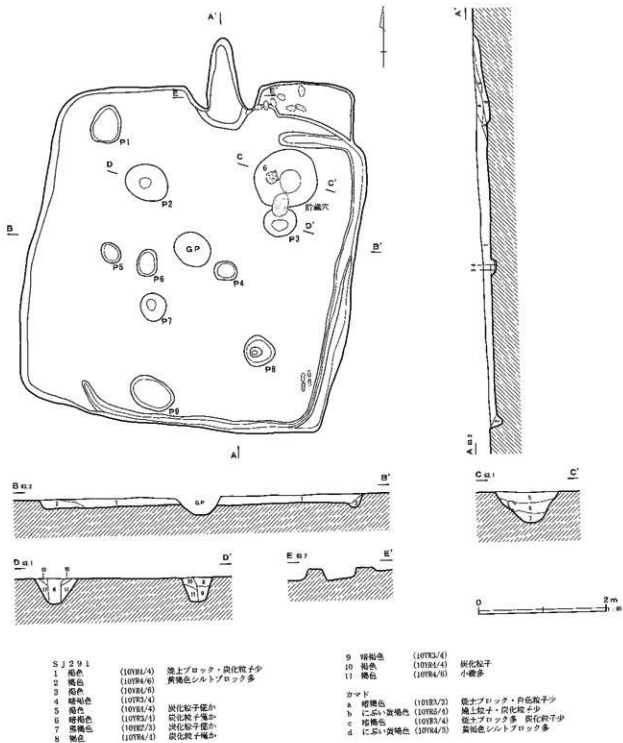
遺物は、古墳時代後期の土師器の小片が多量に出土したが、摩滅が著しく、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環5・変1、土錘4点



第380図 第291号住居跡出土遺物

であった。



第381図 第291号住居跡

第291号住居跡出土遺物観察表 (第380図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(12.4)	4.0		ABE	不良	灰黄	20	B区	素地土白い 内面黒付着
2	土師環	12.7	3.8		ABDE	良好	明赤褐	50	A区	内面磨滅
3	土師環	(12.0)	3.6		ABE	不良	淡黄	20	B区	素地土白い
4	土師環	(12.0)	3.3		AB	普通	浅黄橙	25	覆土	
5	土師環	(10.2)	2.2		ABE	不良	にぶい橙	45	C区	素地土白い
6	土師小型甕	14.3	19.4	9.0	ABL	良好	明黄褐	95	貯藏穴	外面赤彩

第291号住居跡出土土錘観察表 (第380図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
7	8.10	1.95	0.50	23.45	C a II	A	にぶい橙	100	
8	(6.20)	1.70	0.50	15.96	B a II	A	浅黄	80	
9	(4.60)	1.60	0.60	8.48	B a III	A	にぶい橙	65	
10	(1.75)	1.10	0.45	1.59	—	A	浅黄	—	

第292号住居跡 (第382-383図)

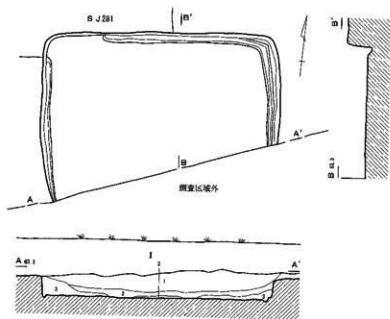
I-28・29、J-28グリッドに位置する。第281号住居跡に切れ、第316・317・318号住居跡を切る。南半は調査区域外にある。検出された規模は、東西3.30m、南北2.61m、深さは0.25~0.32mである。主軸方位は北壁でN-85°-Eを指す。

床面は小さな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。カマド、貯藏穴は検出されなかった。壁溝は北東

コーナーで途切れるが他では全周し、幅6~20cm、深さ4~5cmである。

遺物は、土師器・須恵器の小片が多く出土した。特に土師器甕類は、破片点数は多かったが、磨滅が著しく、小片が多かったため、図化できたものはなかった。

図示可能な遺物は、土師器環2・暗文環1、須恵器蓋1、土錘6点が出土した。



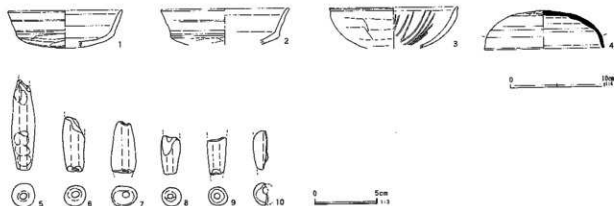
I 土師土

S J 2 9 2

- 1 暗褐色 (101K2/3)  
黄褐色粒子多 炭化粒下少 壁土粒下層小
- 2 暗褐色 (101K2/3)  
炭化粒下層多 焼七粒子多
- 3 暗褐色 (101K2/4)  
黄褐色粒子多 炭化粒子・壁土粒下少

0 2m

第382図 第292号住居跡



第383図 第292号住居跡出土遺物

第292号住居跡出土遺物観察表 (第383図)

番号	器種	L径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(12.2)	3.9		ABD	不良	にぶい黄橙	25	覆土	
2	土師杯	(13.6)	3.8		ABE	良好	橙	10	覆土	内面群耗
3	土師咄文	(13.6)	4.3		ABDE	良好	橙	20	覆土	内面放射暗文
4	須恵蓋	(12.5)	4.1		ABC	良好	青灰	25	覆土	木野産 天井部手持ち十回転ヘラケズリ

第292号住居跡出土土錫観察表 (第383図)

番号	長さ	径	孔径	噴き(μ)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	(7.10)	1.90	0.50	20.70	BaII	C	にぶい黄橙	90	
6	(4.30)	1.70	0.60	11.95	BaVI	A	灰黄褐	95	
7	4.10	2.00	0.55	11.13	BaVI	A	褐灰	100	
8	(3.00)	1.50	0.40	5.79	BaVI	A	にぶい橙	90	
9	(2.90)	1.50	0.50	6.34	—	C	にぶい黄橙	—	
10	(3.10)	(1.80)	0.50	4.25	—	C	灰黄褐	—	

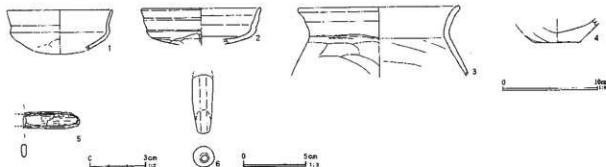
第293号住居跡 (第285-384図)

J-32-33グリッドに位置する。第288-289-294号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。南側は調査区域外にある。検出した規模は、南北4.40m、東西3.71mで、深さは0.26~0.29mである。主軸方位は

西壁でN-8°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。ピットは8本検出され、P1~P8の深さは26cm、10cm、9cm、



第384図 第293号住居跡出土遺物

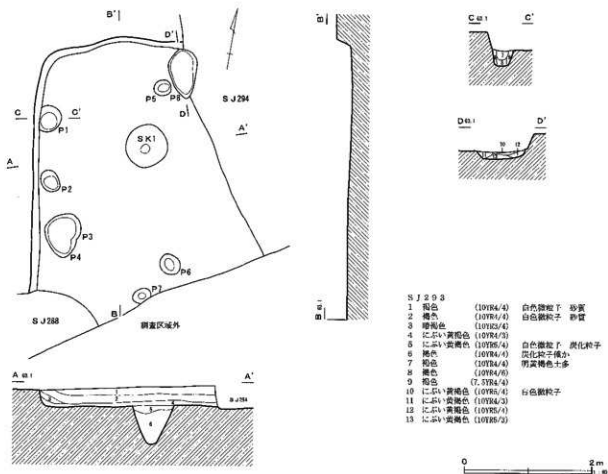
10cm、7cm、12cm、18cm、9cmである。

遺物は、土師器・須恵器の破片が多く出土した。特に土師器環・甕類の破片が多かったが、小片が多く、摩滅も著しく、殆ど図化できなかった。

図示可能な遺物は、土師器環2・甕2、刀子1、

土錘1点であった。

5は、刀子の茎部分と思われる鉄片である。角、あるいは骨製と思われる有機物の柄が僅かに残存していた。



第385図 第293号住居跡

第293号住居跡出土遺物観察表 (第384図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(11.2)	4.3		AB	良好	黄褐色	15	覆土	内外面磨耗
2	土師環	(13.6)	3.8		ABDE	良好	明赤褐色	20	覆土	
3	土師甕	(17.0)	7.4		ABEJ	良好	黄	10	覆土	
4	土師甕		2.5	4.8	BJL	普通	にぶい黄褐色	65	覆土	
5	刀子	現存長2.93cm		背幅0.25cm	刃幅0.67cm	重さ2.44g			覆土	

第293号住居跡出土土錘観察表 (第384図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	(4.60)	1.60	0.50	11.99	C a II	A	にぶい黄	60	

第294号住居跡 (第386・387図)

G-32・33グリッドに位置する。第289号住居跡に切られ、第293・295・307号住居跡を切る。南端は調査区域外にある。平面形は南北に長い長方形と考えられる。検出された規模は、南北4.79m、東西4.25m、深さは0.28~0.32mである。主軸方位は西壁でN-28°-Wを指す。

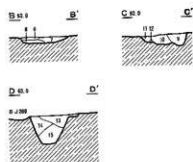
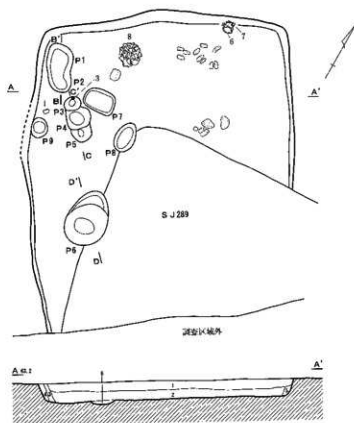
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。ピットは

9本検出され、P1~P9の深さは11cm、10cm、20cm、13cm、9cm、50cm、4cm、10cm、9cmである。北壁近くで銅物石が10個、そこから1m程南で川原石が5個まとまって出土した。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が多量に出土した。小破片が多く、摩滅も著しかったため、図示できた個体以外は殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器杯5・甕3・瓶1、土錘1点であった。



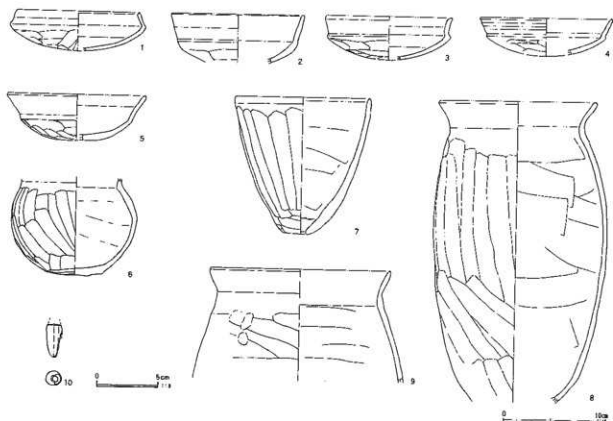
- S J 294
- 1 褐色 (10TR4/4) 白色胎子多・砂質
  - 2 にぶい黄褐色 (10TR5/4)
  - 3 にぶい黄褐色 (10TR5/4) 赤黄褐色シルト
  - 4 にぶい黄褐色 (10TR4/3) 炭化胎子多
  - 5 にぶい黄褐色 (10TR5/4) 埴土残片
  - 6 褐色 (10TR4/4) 炭化胎子僅少
  - 7 にぶい黄褐色 (10TR5/4)
  - 8 褐色 (10TR4/6)
  - 9 にぶい黄褐色 (10TR5/4) 炭化胎子僅少
  - 10 褐色 (10TR4/4) 炭化胎子僅少・白色胎子
  - 11 にぶい黄褐色 (10TR5/4)
  - 12 褐色 (10TR4/6)
  - 13 褐色 (10TR4/4) 砂質・しまり性
  - 14 褐色 (10TR4/4) 炭化胎子僅少
  - 15 にぶい黄褐色 (10TR5/3) シルト

0 2m

第386図 第294号住居跡

第294号住居跡出土遺物観察表 (第387図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師杯	(13.0)	4.2		ABE	良好	にぶい褐	45	+12.8cm	
2	土師杯	(14.0)	5.1		ABE	良好	明赤褐	15	覆土	
3	土師杯	13.3	4.5		AE	良好	黄橙	90	+19.3cm	
4	土師杯	(14.0)	3.8		ABE	良好	赤褐	10	B区	
5	土師杯	(14.7)	4.7		ABE	良好	橙	40	P6	内面磨耗している
6	土師小型甕		10.4	6.2	AB	良好	淡黄	80	+3.1cm	
7	土師小型甕	14.2	14.4		ABCD	良好	明黄褐	100	+6.5cm	
8	土師甕	16.4	31.7		ABCE L	良好	橙	80	床	
9	土師甕	(19.0)	11.8		ABL	良好	橙	20	P4	



第387図 第294号住居跡出土遺物

第294号住居跡出土土錘観察表 (第387図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
10	(2.60)	1.20	0.35	2.91	—	A	にびい橙	35	

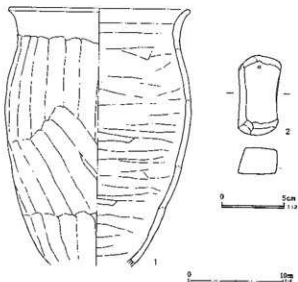
第295号住居跡 (第388・389図)

F・G-33グリッドに位置する。第289・294号住居跡と重複し、本住居跡が古い。南端は調査区域外にある。検出された規模は、南北4.76m、東西2.49mで、深さは0.13～0.17mである。主軸方位はN-28°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

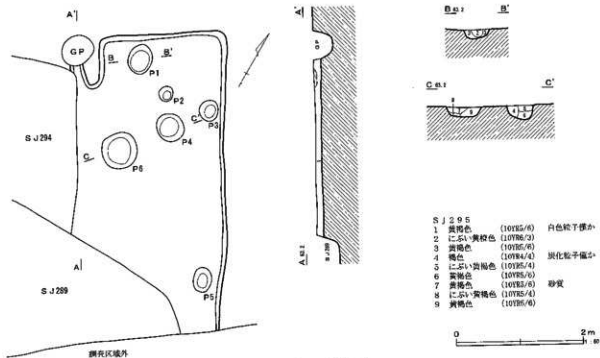
カマドは北壁に設置される。煙道部先端はグリッドピットに壊されていた。燃焼部の掘り込みはなく、そのまま煙道部となるようである。土層断面に明瞭な焼土が観察された。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは6本検出され、P1～P6の深さは12cm、9cm、18cm、26cm、15cm、20cmである。

遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器片が少量



第388図 第295号住居跡出土遺物

出土した。図示可能な遺物は、土師器甕1、砥石1点であった。



第389図 第295号住居跡

第295号住居跡出土遺物観察表 (第388図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師甕	19.0	27.2		A B E J	良好	にぶい黄褐色	75	覆土	外面煤付着
2	砥石	縦6.30cm	横3.30cm	重さ74.40g			灰白		覆土	

第296号住居跡 (第390・391図)

H・I-28・29グリッドに位置する。第284・347号住居跡・第246号土坑に切られ、第302・331・355・356・429号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。平面形は東西にやや長い長方形で、長軸4.78m、短軸4.37m、深さは0.32~0.37mである。主軸方位はN-58°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部の掘り込みはなく、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴はカマド右に設けられ、径60cmの円形で、深さは16cmである。壁溝は貯蔵穴周辺以外で検出され、

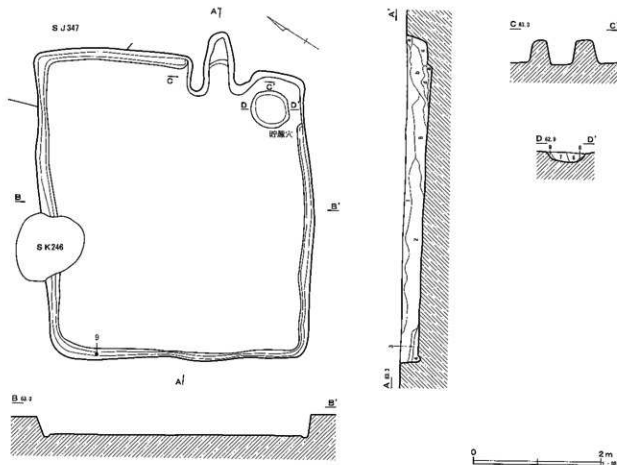
幅10~25cm、深さ1~6cmである。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が多く出土した。重複が激しいため、時期差のある遺物が混在していた。

図示可能な遺物は、土師器環3・甕3・瓶2、石製模造品1、刀子1、土錘2点であった。

8の甕はいわゆるロクロ甕で、5の環とともに、他の遺物とは時期が異なる。ロクロ成型で、くの字に短く屈曲する口縁部を有する。胴部下位を欠損していたが、肩部から下位は、縦方向のヘラケズリが施されていた。覆土上面からの出土であったため、时期的に新しい遺物が混入していたものと思われる。





S J 347

- 1 暗褐色 (10TR3/3) 黄褐色粘土多 焼土粒子・炭化粒子少
- 2 にぶい黄褐色 (10TR4/3) 焼土粒多・炭化粒子少
- 3 茶褐色 (10TR3/2) 焼土ブロック(φ2~3cm)・炭化粒子多
- 4 黄褐色 (10TR3/2) 焼土粒多・炭化粒子少
- 5 暗褐色 (10TR2/4) 焼土粒子・黄褐色粘土多 炭化粒子少
- 6 にぶい黄褐色 (10TR5/4) 焼土塊多
- 7 褐色 (10TR4/4)

S にぶい黄褐色 (10TR6/3)

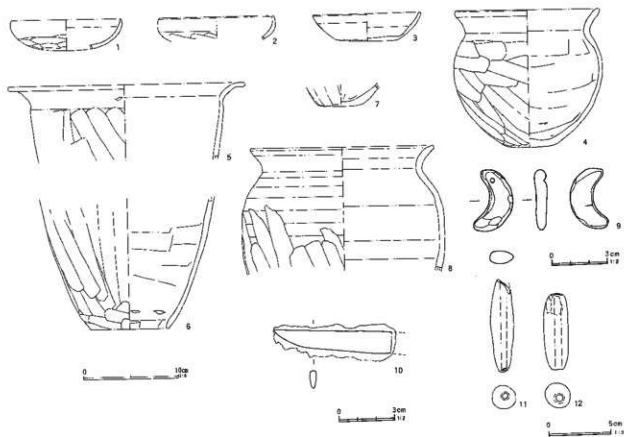
カマド

- a 褐色 (10TR4/4) 黄褐色粘土多 炭化粒子少 焼土粒子多
- b にぶい黄褐色 (10TR4/3) 焼土粒子・炭化粒子少
- c 暗褐色 (10TR3/4) 焼土粒多・焼土ブロック多
- d 赤褐色 (10TR4/6) 焼土塊 黄褐色粘土多
- e 茶褐色 (10TR3/2) 炭化粒子・炭化粘土多 焼土粒少

第390図 第296号住居跡

第296号住居跡出土遺物観察表 (第391図)

番号	器種	口径	器高	口径	胎上	焼成	色澤	残存	出土位置	備考
1	土師環	(11.6)	3.1		ABEK	良好	明赤褐	25	覆土	外面磨耗
2	土師環	(12.0)	2.5		ABDE	良好	明赤褐	10	覆土	
3	土師環	11.4	2.9	6.7	ABEG	良好	橙	55	A区	
4	土師小型壺	(15.0)	14.5		ABEG	良好	にぶい橙	45	カマド	
5	土師甌	(25.4)	8.1		ABDEJ	良好	橙	10	覆土	
6	土師甌		13.9	8.0	ABDEGL	良好	赤褐	45	覆土	
7	土師甌		2.3	5.0	ABEJ	良好	明赤褐	30	覆土	
8	土師甌	(19.3)	13.3		ABCFL	良好	浅黄	40	覆土	
9	石製模造品	縦3.20cm	横1.20cm	厚さ0.70cm			重さ5.27g	100	床	
10	刀子	現存長6.30cm	背幅0.35cm	刀幅0.90cm			重さ17.67g		覆土	清石製 勾玉 身部片 茎欠損



第391図 第296号住居跡出土遺物

第296号住居跡出土土錘観察表 (第391図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
11	7.30	1.90	0.40	21.00	B a III	A	にぶい橙	95	
12	6.00	1.95	0.55	22.70	B b IV	A	橙	100	

### 第297号住居跡 (第392・393・394図)

I-28・29グリッドに位置する。第281・284号住居跡に切れ、第316・331号住居跡を切る。平面形は正方形に近く、南北3.35m、東西3.05m、深さは0.39~0.45mである。主軸方位はN-58°-Eを指す。

床面はやや起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは東壁中央やや南に設置される。燃烧部はビット状に10cm程掘り込み、段を持って緩やかに立ち上がる煙道部へ続く。煙道部先端近くに深さ6cmの小ビットが検出された。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ビットは4本検出され、P1~P4の深さは8cm、14cm、8cm、11cmである。P1の上面からは土器と共に大型の石が出土した。またP1

は、位置的に貯蔵穴の可能性も考えられる。

遺物は、土師器・須恵器の破片が多量に出土した。特に土師器甕が多く、次いで環類が多かった。

図示可能な遺物は、土師器環7・碗1・高環1・甕7・台付甕2・甌1、須恵器環4・蓋2・横瓶1・甕片3、土製紡錘車1・石製紡錘車1、白玉1、鉄製品3、土錘19点であった。

1・20・24・25はP1から、2・5・6・15・16・18・19・22はカマドから出土した。

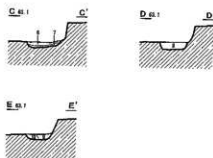
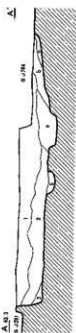
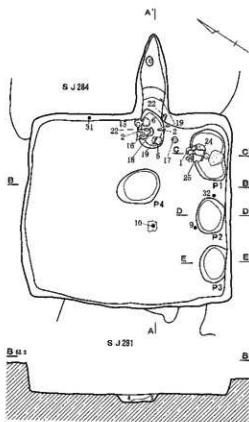
9の須恵器環は、末野産と思われる。平底の底部に直線的に外傾する口縁部を有する。口縁端部は、内外面とも沈線状に窪む。

25は底部を欠損していた。全体の器形の特徴から

甕としたが、伴出する他の甕は、胴部上半部は斜めまたは横方向のヘラケズリ、下半部は斜めまたは縦方向のヘラケズリを施しているのに対し、25は口縁直下から下部まで縦方向のヘラケズリが施されてお

り、また胴下部は横方向にヘラケズリされていた。甕であった可能性も否定できない。

33は、短刀の茎部と考えられる。柄の木質部が部分的に残存していた。



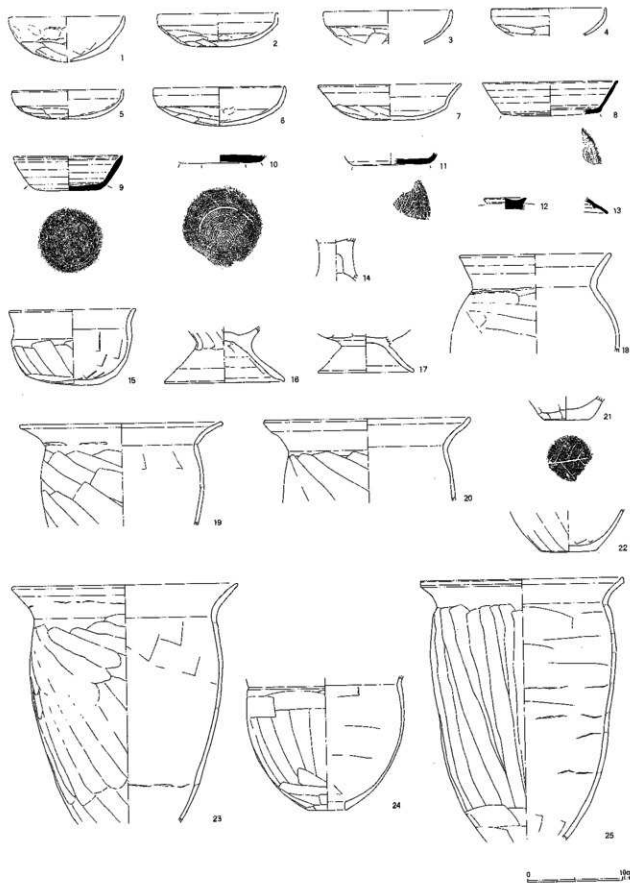
- S J 297
- 1 におい黄褐色 (10YR4/7) 焼土粒子・炭化粒子・白色粒子少
  - 2 暗褐色 (10YR5/4) 黄褐色土多 焼土粒子・炭化粒子少
  - 3 暗褐色 (10YR5/4) 2層に亘るが黄褐色ゾーンの多
  - 4 におい黄褐色 (10YR4/3)
  - 5 褐色 (10YR4/4) におい黄褐色シルト
  - 6 暗褐色 (10YR4/2) 焼土僅か
  - 7 黄褐色 (10YR5/6)
  - 8 褐色 (10YR4/4)
  - 9 暗褐色 (10YR3/4) 焼土 炭化粒子
  - 10 暗褐色 (10YR3/4) しまり強い
- カマド
- a 黄褐色 (10YR3/2) 黄褐色粒子多 焼土・炭化粒子少
  - b 灰褐色 (10YR4/2) 黄褐色土多 焼土やや多 炭化粒子少
  - c におい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒子多

0 2m

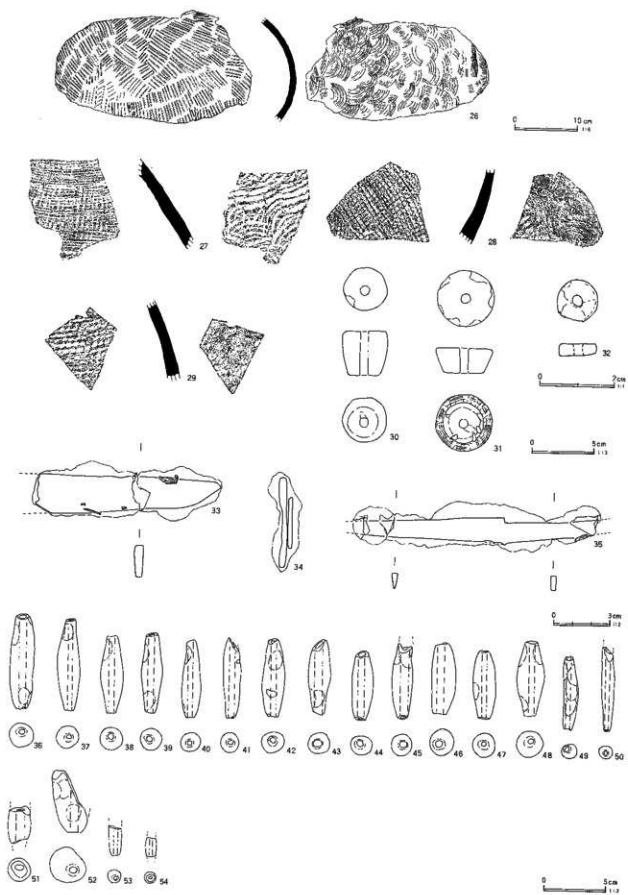
第392図 第297号住居跡

第297号住居跡出土遺物観察表 (第393図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	12.0	4.7		ABJ	良好	明赤褐	95	+11.3cm	内外面僅付着
2	土師環	12.5	3.5		ABDG	良好	におい褐	75	+18.2cm	
3	土師環	(13.3)	3.5		ABDEG	良好	におい褐	35	B区	
4	土師環	12.0	2.9		BDG	普通	橙	50	A区	
5	土師環	11.6	3.1		ABDEG	良好	明褐	90	+16cm	
6	土師環	13.8	4.1		ABDG	良好	におい橙	100	+12.5cm	
7	土師環	15.0	3.7		AB	普通	におい褐	85	B区	泥み著しい
8	須恵環	(14.2)	3.4	(10.2)	BCI	良好	灰	15	A区	南比企産 底部回転ヘラケズリ
9	須恵環	11.4	3.6	7.0	ABHJL	普通	灰白	100	+6.3cm	木野産 底部全面・体部下端回転ヘラケズリ
10	須恵環	0.8	8.4		BCI	良好	灰	85	+11.2cm	南比企産 底部回転糸切後周辺ヘラケズリ
11	須恵環	1.2	(8.0)		ABC	普通	黄灰	15	B区	木野産 底部回転糸切後周辺ヘラケズリ
12	須恵蓋	1.2			ABDH	不良	におい橙	80	B区	木野産 つまみ直径4.5cm
13	須恵蓋	1.5			ABH	良好	黄灰		B区	木野産
14	土師高环	4.4			BCE	良好	橙	70	B区	
15	土師機	13.2	8.0		ABEG	良好	におい黄褐	100	床	



第393图 第297号住居跡出土遺物 (1)



第394图 第297号住居跡出土遺物 (2)

第297号住居跡出土遺物観察表 (第393-394頁)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
16	土師台付甕	12.5	5.9		ABG	良好	明赤褐	95	床	
17	土師台付甕		4.1	10.0	ABEJ	普通	明赤褐	60	+4.8cm	
18	土師小甕	15.8	10.4		ABDJ	良好	橙	75	カマド	
19	土師甕	(21.2)	10.8		ABDE	良好	明赤褐	35	+16.2cm	
20	土師甕	(21.5)	8.9		ABEG	良好	明赤褐	30	P I	
21	土師甕		2.5	4.7	ABE	良好	橙	75	B区	底部木華煎
22	土師甕		4.3	5.8	ABD	良好	褐	45	+10.9cm	
23	土師甕	(23.8)	25.0		ABDE	普通	橙	35	A区	外面磨耗
24	土師甕		14.0		ABDEG	良好	明赤褐	25	+13cm	
25	土師甕	(21.3)	27.4		ABEG	普通	にぶい橙	50	+8.6cm	輪痕痕明瞭
26	須恵焼瓶				ABH	良好	灰	A区	木野産	外面平行甲き 内面同心円当り痕
27	須恵甕				ABH	良好	灰	A区	木野産	
28	須恵甕				ABH	良好	黄灰	B区	木野産	
29	須恵甕				BCH	普通	にぶい橙	A区	木野産	
30	土製練棒	長径3.50cm	短径3.50cm		ABC	良好	にぶい黄橙	95	A区	厚さ3.50cm 孔径0.75cm 重さ49.92g
31	石製練棒	長径4.45cm	短径3.2cm	厚さ2.0cm			孔径0.65cm 重さ62.31g	+10cm		滑石製
32	白土	直径1.05cm	厚さ0.30cm	孔径0.25cm			重さ0.75g	90	+30.7cm	浪石製 欠損有り
33	短刀	現存長9.85cm	幅1.70cm	厚さ0.48cm			重さ57.27g			覆土 基部朽木が残存
34	棒状鉄製品	現存長4.70cm	重さ14.22g							覆土
35	刀子	現存長12.40cm	背幅2.50	刃幅0.90cm			重さ50.95g			覆土 基部に木質物が残存

第297号住居跡出土土錫観察表 (第394頁)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
36	7.40	1.90	0.40	27.96	Ba III	A	灰黄褐	100	A区
37	7.20	1.80	0.40	18.59	Ba III	A	にぶい黄橙	100	B区
38	6.00	1.80	0.50	16.56	Ca IV	A	にぶい黄橙	100	B区
39	6.20	1.70	0.50	14.09	Ca IV	A	にぶい橙	100	B区
40	6.00	1.60	0.40	11.71	Ba IV	A	灰黄褐	100	B区
41	6.30	1.55	0.45	12.46	Ba IV	A	にぶい赤褐	90	A区
42	6.10	1.80	0.40	12.80	Ba IV	A	橙	100	B区
43	5.90	1.70	0.70	13.36	Ba IV	A	明赤褐	90	B区
44	5.40	1.70	0.50	12.12	Ba V	A	にぶい橙	100	A区
45	(5.90)	1.70	0.55	12.91	Ba III	A	にぶい黄橙	85	B区
46	5.60	2.10	0.50	22.28	Ba IV	A	灰黄褐	100	B区
47	5.30	1.80	0.40	17.31	Bb V	A	にぶい黄橙	100	B区
48	5.90	2.15	0.40	22.31	Cb IV	A	灰黄褐	100	B区
49	5.70	1.20	0.40	6.84	Aa IV	A	にぶい橙	100	B区
50	(6.50)	1.10	0.30	5.89	Aa III	A	にぶい黄橙	90	A区
51	(2.90)	1.80	0.70	8.76	—	A	灰黄褐	—	A区
52	(4.80)	2.80	0.60	24.50	—	A	にぶい橙	—	B区
53	(2.40)	1.00	0.30	2.34	—	A	にぶい赤褐	—	B区
54	(1.50)	0.90	0.30	0.81	—	A	橙	—	A区

第298号住居跡 (第395-396頁)

E・F-31・32グリッドに位置する。第291号住居跡に切られ、第299号住居跡を切る。西壁の一部はグリッドピットに壊されていた。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.38m、短軸4.03m、深さは0.11~0.19mである。主軸方位はN-55°-Eを指す。

床面は起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

南壁の一部が半円状に飛び出していた。カマド、貯



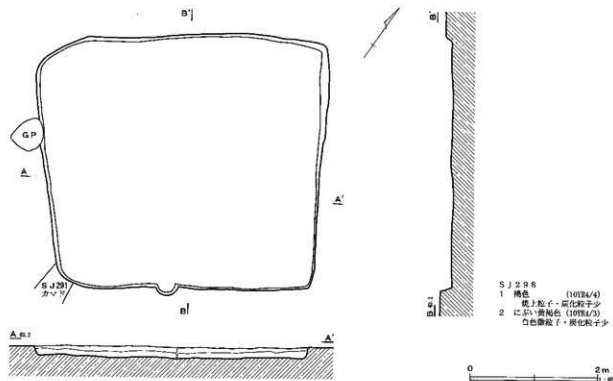
第395図 第298号住居跡出土遺物

蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は、覆土から土師器片がやや多く出土した。甕の破片が多く、坏類の破片は殆ど出土しなかった。

摩滅が著しく接合はしなかった。

図示可能な遺物は、土師器甕底部片1点のみであった。



第396図 第298号住居跡

第298号住居跡出土遺物観察表 (第395図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎子	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師甕		4.2	6.4	A B D E	良好	赤褐色	65	B区	

第299号住居跡 (第397・398図)

E・F-32グリッドに位置する。第291・298・300号住居跡に切られ、第301号住居跡を切る。西壁は検出されなかった。検出された規模は、東西6.24m、南北6.04mで、深さは0.08~0.19mである。主軸方位はN-15°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

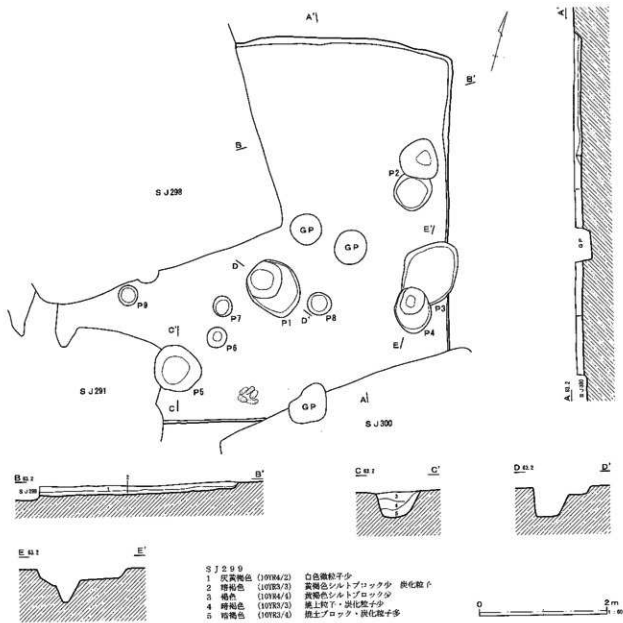
カマド、貯蔵穴は検出されなかった。ピットは9

本検出され、P1~P9の深さは45cm、26cm、17cm、51cm、42cm、36cm、19cm、13cm、10cmである。南壁近くで網物石が5個まとまって出土した。

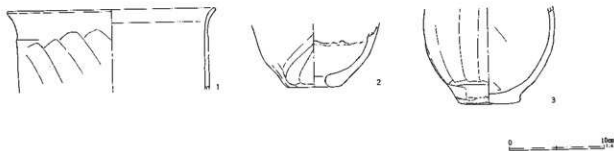
遺物は、古墳時代後期の土師器片が多量に出土した。坏・甕類の破片が多かったが、小片で摩滅が著しく、接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器甕1・瓶2点であった。

1は、胴部上半部の破片であったが、器形の特徴から甕と判断した。



第397図 第299号住居跡



第398図 第299号住居跡出土遺物



第299号住居跡出土遺物観察表 (第398図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師瓶	(22.0)	8.7		A B L	普通	灰褐色	20	P1	
2	土師瓶		6.7	(5.6)	B E	良好	橙	35	B区	
3	土師小壺		10.2	(6.4)	B D L	良好	明赤褐色	35	B区	

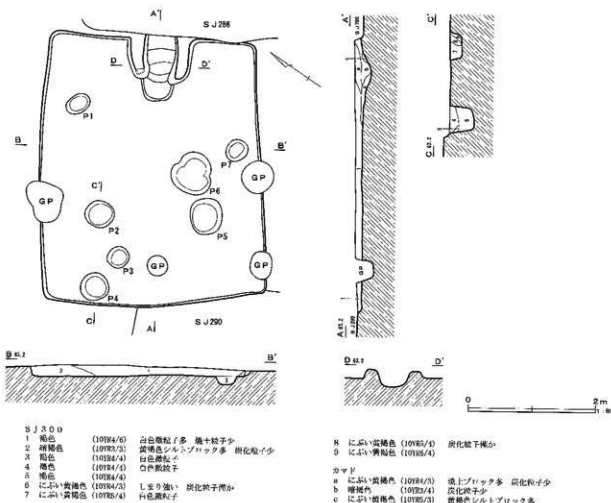
第300号住居跡 (第399・400図)

F-32グリッドに位置する。第286・290・291号住居跡に切られ、第299・301号住居跡を切る。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.24m、短軸3.51m、深さは0.09~0.16mである。主軸方位はN-57°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央に設置される。燃焼部は10cm程掘り込み、緩やかな段を持って煙道部へ続く。左袖先端で川原石が倒れて出た。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは7本検出され、P1~P7の深さは12cm、19cm、13cm、36cm、9cm、20cm、14cmである。

遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器片が多数出土した。環・甕の破片が多かったが、殆ど接合

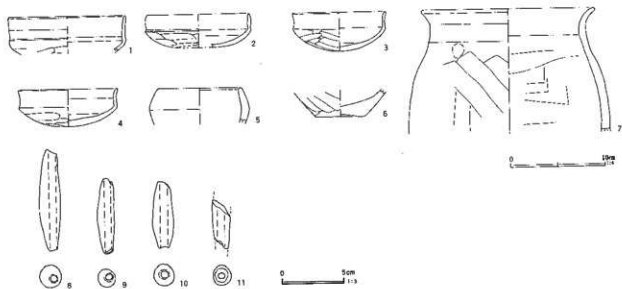


第399図 第300号住居跡

しなかった。

4点であった。

図示可能な遺物は、土師器環4・碗1・甕2、土鍾



第400図 第300号住居跡出土遺物

第300号住居跡出土遺物観察表 (第400図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(12.4)	3.9		ABE	良好	橙	15	覆土	
2	土師環	(10.8)	3.5		ABF	不良	浅黄橙	20	覆土	
3	土師環	(9.8)	4.1		ABE	普通	明黄褐	35	カマド	
4	土師環	(10.4)	3.9		ACE	良好	橙	55	カマド	
5	土師碗	(8.5)	3.9		ABD	普通	赤褐	25	覆土	
6	土師甕		2.8	5.4	ABCJ	普通	浅黄橙	60	カマド	
7	土師甕	(19.2)	13.1		BCDL	良好	赤	20	A区	

第300号住居跡出土土鍾観察表 (第400図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
8	7.90	1.70	0.50	18.24	B a II	A	褐灰	100	
9	5.90	1.40	0.55	9.39	B a IV	A	灰白	100	
10	5.20	1.70	0.60	12.39	B a V	A	にぶい橙	100	
11	(3.80)	1.60	0.60	6.91	-	A	橙	-	

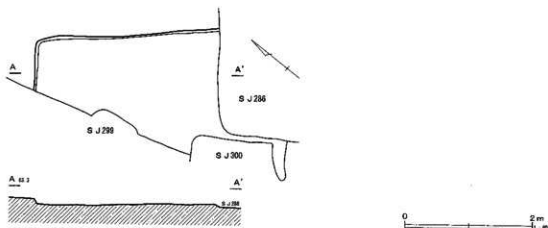
第301号住居跡 (第401図)

F-32グリッドに位置する。第286・299・300号住居跡と重複し、その何れよりも古い。北壁2.92m、西壁0.80mを検出したのみで、深さは0.07~0.12mである。主軸方位は北壁でN-40°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマド、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土した。胎土が器種の判別が困難なほどの小片で、図示可能な遺物はなかった。

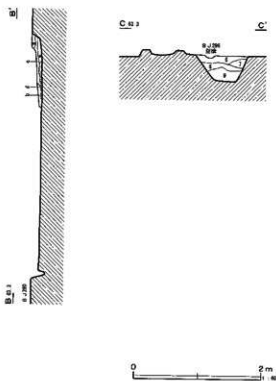
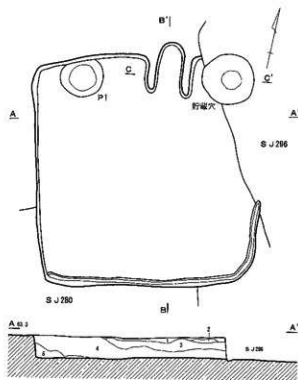


第401図 第301号住居跡

第302号住居跡 (第402・403図)

I-28グリッドに位置する。第280・296号住居跡に切られ、第356号住居跡を切る。用地の関係で2

回に分けて調査された。平面形は正方形で、南北3.66m、東西3.59m、深さは0.32~0.36mである。主軸方位はN-13°-Wを指す。



- S J 302
- 1 赤褐色 (10YR3/2) 焼上粒下・焼土ブロック・炭化粒子少
  - 2 黒褐色 (10YR2/2) 焼土粒子・炭化粒子少
  - 3 黒褐色 (10YR2/2) 焼上粒下・焼土ブロック多 炭化粒子少
  - 4 暗褐色 (10YR2/4) 炭褐色粒子多 焼上粒下・炭化粒子少
  - 5 に近い黄褐色 (10YR4/4) 焼上粒下・炭化粒子少
  - 6 に近い黄褐色 (10YR4/4) 暗褐色粒子多 焼上粒下・炭化粒子少
  - 7 黒褐色 (10YR2/2) 黄褐色粒子少 炭化粒子僅か
  - 8 に近い黄褐色 (10YR4/3) 暗褐色粒子多 炭化粒子・焼上粒下少

- 9 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色粒子・焼土粒子少 炭化粒子僅か
- カマド
- a 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色粒子多 赤褐色粒子・焼土粒子少
  - b 暗褐色 (10YR3/3) 炭褐色粒子多 焼土粒子・炭化粒子少
  - c 赤褐色 (10YR2/2) 焼土粒子・黄褐色粒子多 炭化粒子少
  - d 暗褐色 (10YR2/2) 炭粒子多 炭化粒子・黄褐色粒子少
  - e 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐色粒子多 炭化粒子少

第402図 第302号住居跡

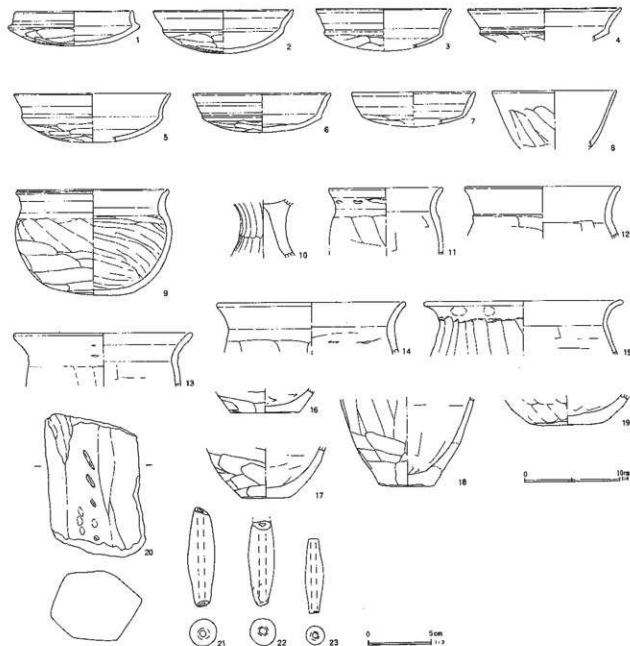
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁に設置される。燃焼部の掘り込みはなく、そのまま煙道部となる。土層断面に明瞭な焼土層が観察された。貯蔵穴はカマド右の第296号住居跡床面で検出し、径80cmの円形で、深さは42cmである。壁溝は南壁から東壁で検出され、幅10～15cm、深さ2～7cmである。ピットは北壁に接して1本検出され、深さは10cmである。

遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器・甕を中心にやや多く出土した。小片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器 7・椀 1・鉢 1・高坏 1・甕 9、砥石 1、土鏝 3 点であった。

1は須恵器 坏身模倣坏である。浅身で、口縁部は短く立ち上がる。口縁部と底部の境界稜は丸みをもつが明瞭である。底部のヘラケズリは稜直下からは始まらず、僅かに無調整部分を有する。



第403図 第302号住居跡出土遺物

2～5は口縁部が大きく外傾する坏である。口径は14～16cm代で、口縁は外傾しながらも端部で内側

に強くつまみ上げ、沈線状に窪むものもある。  
3・5・15は貯蔵穴から、他は覆土からの出土した。

第302号住居跡出土遺物観察表 (第403図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	挽成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.3	4.6		A B D E J	不良	橙	55	覆土	
2	土師坏	(14.7)	4.5		A B E	良好	橙	35	覆土	
3	土師坏	(14.2)	4.1		A B	良好	橙	20	貯蔵穴	
4	土師坏	(16.2)	3.4		B E	良好	橙	25	覆土	
5	土師坏	(16.5)	5.0		A B E	良好	橙	25	貯蔵穴	
6	土師坏	14.5	4.1		A B C E J L	良好	橙	40	覆土	
7	土師坏	(13.0)	3.4		A B J	良好	明赤褐	15	覆土	
8	土師碗	(13.0)	6.1		A B J	良好	橙	10	覆土	
9	土師鉢	15.9	11.1		A B E	良好	橙	55	覆土	外面煤付着 内面ナデ痕明瞭
10	土師高坏		6.1		A B J	良好	にぶい黄橙	80	覆土	
11	土師小型甕	(11.7)	7.1		A B E J	良好	橙	25	覆土	
12	土師小型甕	(16.2)	5.5		A B L	普通	にぶい黄橙	25	覆土	
13	土師甕	(18.6)	5.6		B E J L	普通	橙	15	覆土	輪痕痕明瞭
14	土師甕	(19.6)	5.5		A B E J	良好	にぶい橙	10	覆土	輪痕痕明瞭
15	土師甕	(20.6)	5.7		A B E J L	良好	橙	20	貯蔵穴	外面煤付着
16	土師甕		2.5	(7.0)	A B E J	普通	橙	40	覆土	
17	土師甕		5.4	(5.2)	A B E L	普通	浅黄橙	20	覆土	
18	土師甕		9.4	5.7	A B C L	普通	にぶい黄橙	45	覆土	
19	土師甕		2.6	(7.5)	B E J	良好	にぶい黄橙	35	覆土	外面煤着
20	基石	残存長11.30cm		幅7.30cm	重さ687.21g				覆土	砂岩

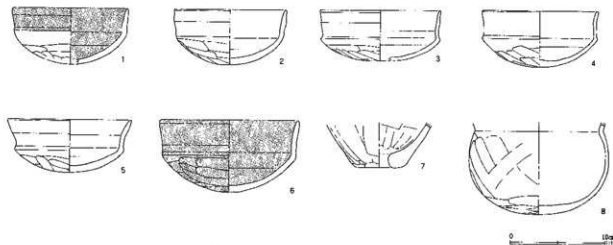
第302号住居跡出土土錘観察表 (第403図)

番号	長さ	径	孔径	重量(g)	分類	胎上	色調	残存	備考
21	7.80	2.10	0.50	28.94	C a II	A	にぶい黄橙	100	
23	5.70	1.95	0.40	10.55	C b IV	C	黒褐	100	
22	(6.70)	2.05	0.60	26.36	C a II	A	にぶい黄橙	80	

第303号住居跡 (第404・405図)

J-32グリッドに位置する。第290号住居跡に切

られるが、同時に調査したため北壁の一部は検出できなかった。平面形は正方形に近く、南北4.23m、



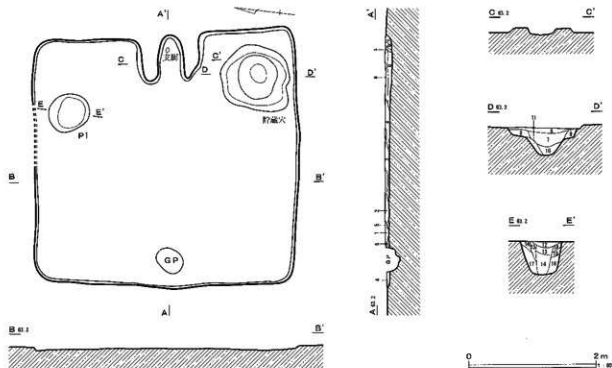
第404図 第303号住居跡出土遺物

東西4.01mで、深さは0.01~0.09mと浅い。主軸方位はN-84°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁ほぼ中央に設置される。燃焼部の掘

り込みはなく、急激に立ち上がる。川原石利用の支脚が立位で出土した。貯蔵穴はカマド右に設けられ、118×104cmの歪んだ円形で、深さは44cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは北壁際で1本検出され、深さは52cmである。



- S J 303
- 1 褐色 (10YR4/4) 地上・黒褐色土多
  - 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黒褐色土多
  - 3 褐色 (10YR4/4)
  - 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
  - 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
  - 6 褐色 (10YR4/4) 砂質 白色細砂散
  - 7 褐色 (10YR4/4) 炭化灰下層か
  - 8 褐色 (10YR4/4) 白色微粒子 灰層か
  - 9 褐色 (10YR4/4) シルト質
  - 10 褐色 (10YR4/4) 灰炭
  - 11 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
  - 12 褐色 (10YR4/4) にぶい黄褐色シルト

- 13 褐色 (10YR2/4) にぶい黄褐色シルト層か
- 14 褐色 (10YR3/4) 炭化灰下層か
- 15 褐色 (10YR4/4) にぶい黄褐色シルト多
- 16 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
- 17 褐色 (10YR2/4) 炭化灰下層・にぶい黄褐色シルト層か
- 18 褐色 (10YR3/4)
- 19 褐色 (10YR4/4)

- カマド
- a 褐色 (10YR4/4) 焼土層多
  - b にぶい黄褐色 (10YR4/3)
  - c 褐色 (10YR4/4)

第405図 第303号住居跡

第303号住居跡出土遺物観察表 (第404図)

番号	器種	口径	器高	底径	筋上	状態	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	12.2	5.9		ABDE	良好	明赤褐	90	貯蔵穴	内外面赤彩
2	土師環	11.8	5.8		ABDE	良好	明赤褐	70	B区	
3	土師環	12.7	5.3		ABEG	普通	明褐	45	貯蔵穴	煤付着
4	土師環	12.2	5.9		BE	普通	明赤褐	50	貯蔵穴	煤付着
5	土師環	13.0	5.6		ABDE	良好	明赤褐	60	貯蔵穴	
6	土師環	14.5	7.6		BEJ	良好	明赤褐	50	貯蔵穴	内外面赤彩
7	土師瓶		4.8	5.0	ABDE	良好	明赤褐	50	貯蔵穴	
8	土師小型釜		9.8		AEG	良好	明赤褐	50	貯蔵穴	

遺物は、覆土および貯蔵穴から、古墳時代後期の土師器片がやや多く出土したが、覆土中の遺物は小片が多く殆ど接合しなかった。図示した遺物の殆どが貯蔵穴から出土した。

図示可能な遺物は、土師器環6・甕1・小型甕1点であった。

#### 第304号住居跡 (第406・407図)

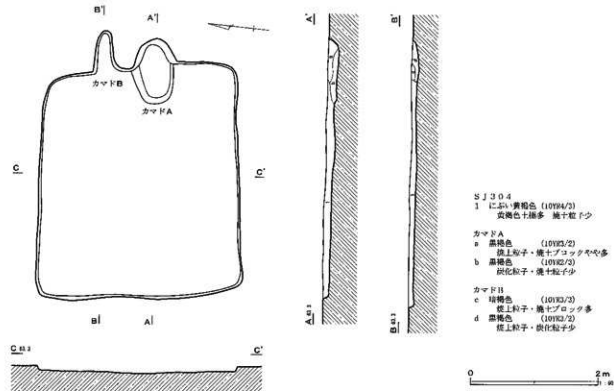
H・I-30グリッドに位置する。第322・334号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。平面形は東西に長い長方形で、長軸3.59m、短軸3.22m、深さは0.08~0.15mである。主軸方位はN-86°-Eを指す。

床面はやや起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは2基検出された。カマドAは東壁ほぼ中央に設置される。燃焼部は10cm弱掘り込み、急激に立ち上がる。カマドBはカマドAの北に位置し、覆土は埋められており、カマドAより先行すると考えられる。貯蔵穴、壁溝等は検出されなかった。

遺物は、平安時代の土師器・環の小片が少量出土した。摩滅が著しく、接合はしなかった。

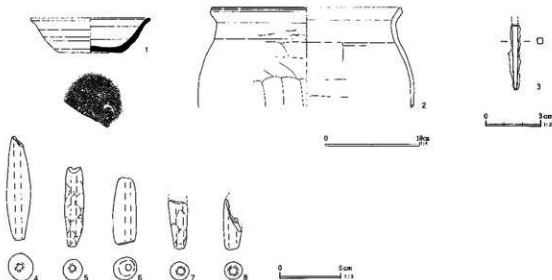
図示可能な遺物は、須恵器環1、土師器甕1、棒状鉄製品1、土鍾5点であった。



第406図 第304号住居跡

第304号住居跡出土遺物観察表 (第407図)

番号	器種	口径	器高	口径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵環	(12.5)	3.6	(6.5)	A B H L	良好	灰白	40	B区	末野産 底部回転切
2	土師甕	(20.0)	10.6		B E	良好	浅黄橙	10	B区	
3	棒状鉄製品	現存長3.35cm	軸0.35cm	厚さ0.30cm			重さ2.13g		覆土	



第407図 第304号住居跡出土遺物

第304号住居跡出土土鍾観察表 (第407図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	8.20	2.00	0.50	24.05	C b II	C	灰黄褐	100	A区
5	6.40	1.55	0.40	14.14	B a IV	A	浅黄橙	100	C区
6	5.30	1.80	0.45	15.07	B a V	A	にぶい黄橙	90	B区
7	(3.90)	1.50	0.60	5.81	B a III	A	にぶい黄橙	55	A区
8	(4.10)	1.45	0.60	5.05	—	A	にぶい赤褐	35	A区

### 第305号住居跡 (第408・409図)

F・G-30グリッドに位置する。第340号住居跡に切れ、第308・310・408・413・420号住居跡を切る。西壁と南壁の一部はグリッドビットで壊されていた。平面形は正方形で、南北5.52m、東西5.38m、深さは0.18~0.23mである。主軸方位はN-3°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁中央より東寄りに設置される。燃焼部は10cm程掘り込み、緩やかに立ち上がりながら煙道部となる。貯蔵穴はカマド右に設けられ、100×80cmの歪んだ楕円形で、深さは31cmである。カマド

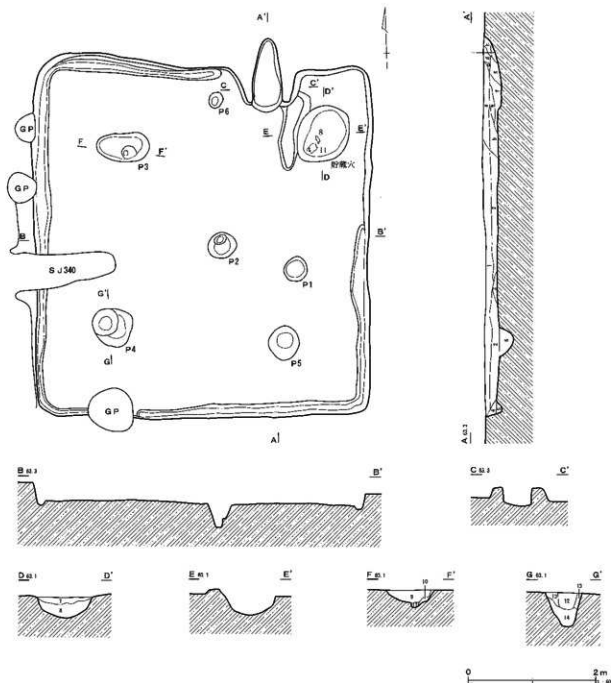
との間に高さ6cmの土手状の高まりが検出された。壁溝は北東コーナー周辺以外で検出され、幅10~32cm、深さ6~11cmである。ビットは6本検出され、P1~P6の深さは11cm、36cm、28cm、53cm、32cm、6cmである。

遺物は、土師器環・甕の破片が多く出土したが、小片が多く、図示した個体以外は接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環7・甕3・壺1、土鍾11点であった。

土師器環類は、4・7以外は有段口縁環である。口縁部は外傾しながら立ち上がるが、口縁部の段は殆ど形骸化し、沈線状になる。口径も12cm以下と小型である。





S J 305

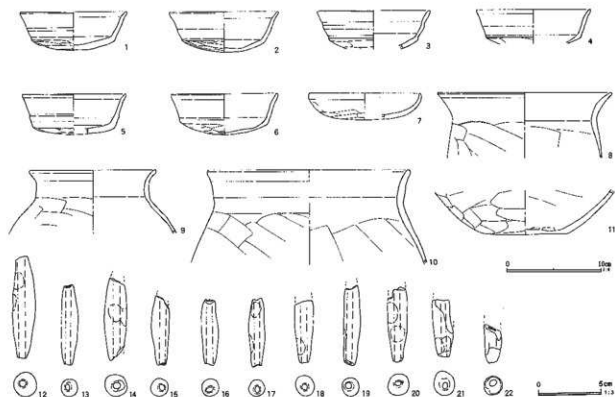
- |    |                  |                       |
|----|------------------|-----------------------|
| 1  | にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 白色微粒が多 炭化粒子・灰土層か      |
| 2  | 褐色 (10YR4/4)     | 炭化粒子・灰土層か             |
| 3  | 暗褐色 (10YR3/4)    |                       |
| 4  | 暗褐色 (10YR3/3)    | 炭化粒子・にぶい黄褐色シルト層か      |
| 5  | 暗褐色 (10YR3/3)    |                       |
| 6  | 暗褐色 (10YR3/4)    | 灰土粒子・炭化粒子少            |
| 7  | 暗褐色 (10YR3/4)    | 焼土ブロック・炭化粒子多 黄褐色ブロック少 |
| 8  | 褐色 (10YR4/6)     | 白色微粒子多 炭化粒子少          |
| 9  | 暗褐色 (10YR3/2)    | 炭化粒子多 黄色ブロック          |
| 10 | 灰黄褐色 (10YR4/2)   | 粘性や中層 炭化粒子少           |
| 11 | 褐色 (10YR4/4)     | 粘性高 炭化粒子少             |
| 12 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 炭化粒子多 黄色ブロック          |

- |    |                  |             |
|----|------------------|-------------|
| 13 | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 粘性高 黄色ブロック  |
| 14 | にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 粘土主体層 炭化粒子少 |

カマド

- |   |                  |           |        |
|---|------------------|-----------|--------|
| a | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 炭化粒子・灰土層か | 白色微粒子多 |
| b | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | にぶい黄褐色シルト |        |
| c | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 灰黄褐色シルト   |        |
| d | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 埋土多       |        |
| e | にぶい黄褐色 (10YR4/3) |           |        |
| f | 暗褐色 (10YR3/4)    | 灰・灰土層多    |        |
| g | 褐色 (10YR4/4)     | 炭化粒子層か    |        |
| h | にぶい黄褐色 (10YR5/4) |           |        |
| i | 褐色 (10YR4/6)     | 砂質        |        |

第408図 第305号住居跡



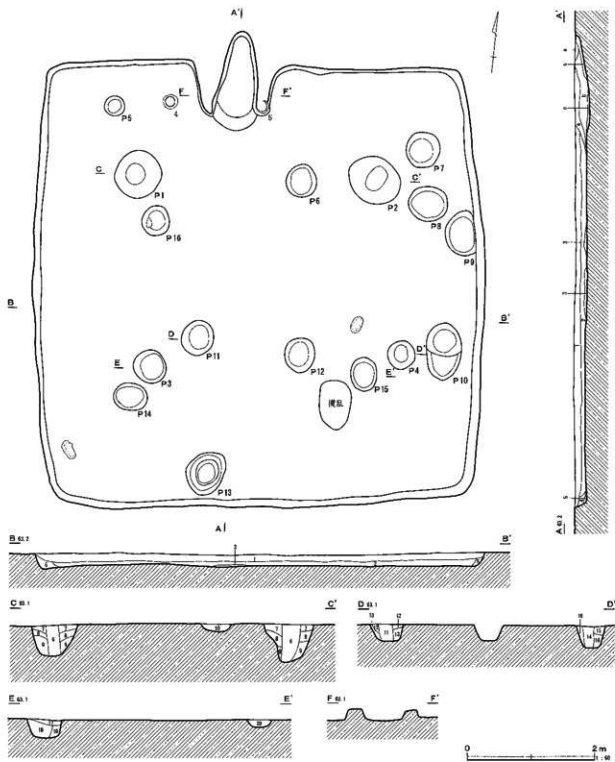
第409図 第305号住居跡出土遺物

第305号住居跡出土遺物観察表 (第409図)

番号	器種	口径	高さ	口径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	11.2	4.0		ABDE	良好	橙	60	貯蔵穴	内面煤付着 外面煤付着
2	土師環	11.5	4.3		ABDE	普通	にぶい橙	80	A区	
3	土師環	(12.0)	4.1		ABDE	良好	褐	40	覆土	
4	土師環	(12.0)	3.6		ABE	普通	にぶい黄橙	20	A区	
5	土師環	(10.8)	4.2		ABE	普通	橙	40	カマド右脇	
6	土師環	11.3	4.3		ABEG	良好	にぶい橙	85	B区	
7	土師環	(11.7)	2.6		ABDC	良好	にぶい褐	25	カマド	
8	土師甕	(18.4)	6.9		ABCD	良好	橙	25	+6cm	
9	土師甕	(13.3)	6.7		ABD	良好	にぶい黄橙	25	覆土	
10	土師甕	(21.4)	10.0		ABDEJ	良好	にぶい黄橙	20	覆土	
11	土師甕	4.7	9.0		ACEJL	不良	暗褐	45	+12cm	

第305号住居跡出土土師観察表 (第409図)

番号	長さ	径	孔径	口径(±)	分類	胎上	色調	残存	備考
12	8.00	1.90	0.50	23.18	B a II	A	にぶい黄橙	100	B区
13	6.30	1.40	0.50	9.67	B a IV	A	褐灰	100	B区
14	(6.50)	1.80	0.60	17.08	B a III	A	にぶい黄橙	70	B区
15	(5.40)	1.40	0.40	8.72	B a V	A	灰黄褐	90	A区
16	(5.20)	1.30	0.55	7.79	B a IV	A	褐灰	80	B区
17	5.40	1.30	0.50	6.79	B a V	C	褐灰	100	
18	(4.90)	1.60	0.50	10.67	B a III	A	褐灰	70	B区
19	(6.20)	1.40	0.50	10.43	B a III	C	にぶい黄橙	90	
20	(5.90)	1.70	0.50	14.82	C a III	C	浅黄橙	80	
21	(4.50)	2.00	0.50	11.34	C b III	C	にぶい黄橙	60	A区
22	(3.00)	1.50	0.60	5.14	B a	C	にぶい黄橙	—	



S 1306

- |                    |             |                     |          |                  |         |
|--------------------|-------------|---------------------|----------|------------------|---------|
| 1 褐色 (10YR4/4)     | 白色炭粉子多      | 9 褐色 (10YR4/4)      | 小礫片か     | 17 褐色 (10YR4/4)  | 白色炭粉子   |
| 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 炭化灰・土層か     | 10 褐色 (10YR4/4)     |          | 18 褐色 (10YR4/4)  | 炭化粉子層か  |
| 3 にぶい黄褐色 (10YR4/4) | 砂質          | 11 暗褐色 (10YR2/3)    |          | 19 暗褐色 (10YR2/4) |         |
| 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | にぶい黄褐色シルト層か | 12 褐色 (10YR4/6)     | 白色炭粉子    | 20 褐色 (10YR4/4)  |         |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 炭化灰子層か      | 13 暗褐色 (10YR2/3)    | 炭化灰子層か   |                  |         |
| 6 褐色 (10YR4/4)     |             | 14 黄褐色 (10YR3/2)    | 炭化灰子・土層か | カマド              |         |
| 7 にぶい黄褐色 (10YR4/4) | 炭化灰子 白色炭粉子  | 15 褐色 (10YR4/4)     | 炭化灰子層か   | a 褐色 (10YR4/4)   | 白色炭粉子   |
| 8 褐色 (10YR4/4)     | 黄褐色シルト      | 16 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 白色炭粉子    | b 暗褐色 (10YR2/4)  | 灰土多 灰層か |
|                    |             |                     |          | c 暗褐色 (10YR4/4)  | 灰土多 灰層か |

第410図 第306号住居跡

第306号住居跡（第410-411図）

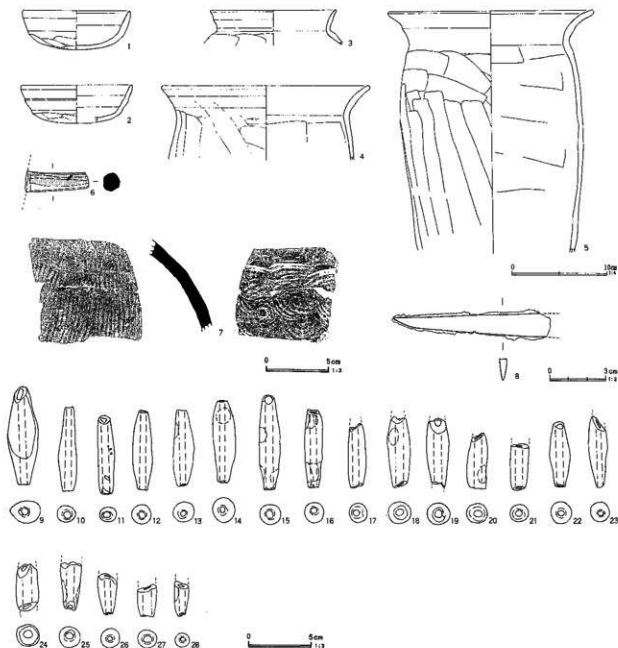
G-31グリッドに位置する。第310-311号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。平面形は正方形に近く、東西7.24m、南北7.03m、深さは0.12~0.19mである。主軸方位はN-7°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは北壁中央よりやや西に設置される。燃焼部の掘り込みは10cm以下で、緩やかに立ち上がりな

がら煙道部となる。右袖の補強に土師器甕が使用されていた。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは16本と多数検出され、P1~P16の深さは46cm、54cm、29cm、25cm、15cm、12cm、27cm、15cm、14cm、24cm、27cm、25cm、28cm、39cm、8cm、9cmである。P1・P2・P4・P11には柱痕が見られたが位置的に重む。

遺物は、覆上から土師器・須恵器の破片が多く出土した。小破片が多く、磨耗が著しいため、殆ど接



第411図 第306号住居跡出土遺物

合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環2・柄1・甕2、須恵器甕片1・把手1、刀子1、土鍾20点であった。

6は須恵器の器種不明品の把手と考えられる。上半部には自然軸が認められた。丁寧にヘラケズリさ

れ、断面は多角形となっていた。胎土は緻密で、大粒の混入粒子は認められなかったが、黒色粒子（噴出し状）をやや多く含む。

脚部の可能性もあったが、軸のかかり方が横倒しのほうが自然であり、把手と判断した。

#### 第306号住居跡出土遺物観察表（第411図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(11.2)	4.1		BE	普通	浅黄橙	30	覆土	白っぽい焼成
2	土師環	(11.6)	3.9		BE	良好	橙	20	C区	
3	土師環	(13.3)	3.7		ABE	普通	明赤褐	15	D区	
4	土師甕	21.7	7.8		ABEGJ	良好	橙	80	+7.1cm	
5	土師甕	21.4	25.4		ABDJ	良好	にぶい黄橙	60	-10cm	
6	須恵把手	長さ6.80cm			AF	良好	灰白	100	覆土	産地不明
7	須恵甕				ABH	良好	灰		P12	木野産 外面平行叩き 内面同心円当具痕
8	刀子	現存長8.20cm		背幅0.40cm	刃幅1.10cm	重さ12.38g			覆土	身部片 某側欠損

#### 第306号住居跡出土土鍾観察表（第411図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
9	7.60	2.40	0.50	22.39	Ba II	A	にぶい橙	80	C区
10	6.60	1.40	0.60	8.64	Ba III	A	にぶい橙	100	C区
11	6.15	1.30	0.50	7.45	Ba IV	A	褐灰	90	C区
12	6.20	1.55	0.55	10.88	Ba IV	A	浅黄橙	100	A区
13	5.90	1.70	0.40	10.45	Ba IV	A	にぶい黄橙	100	C区
14	6.40	1.95	0.50	19.75	Ba IV	A	黒褐	100	
15	7.40	1.65	0.60	14.81	Ba III	A	にぶい橙	100	B区
16	6.10	1.60	0.50	13.12	Ba IV	A	浅黄橙	100	D区
17	(5.00)	1.50	0.50	10.09	Ba IV	A	にぶい黄橙	80	C区
18	(5.60)	1.80	0.60	15.04	Ba IV	A	にぶい黄橙	90	B区
19	(5.40)	1.80	0.60	13.00	—	A	浅黄橙	—	B区
20	4.40	1.60	0.65	8.49	Ba V	A	浅黄橙	90	C区
21	(3.70)	1.50	0.50	6.41	Ba	A	浅黄橙	—	C区
22	5.10	1.70	0.50	11.18	Ca V	A	橙	100	D区
23	(5.60)	1.50	0.40	10.42	Ba IV	A	橙	90	C区
24	(3.70)	1.80	0.70	9.49	—	A	黒褐	—	A区
25	(3.80)	1.70	0.60	7.56	—	A	灰黄褐	—	D区
26	(3.20)	1.50	0.40	5.61	—	A	にぶい褐	—	C区
27	(2.50)	1.50	0.70	3.85	—	A	にぶい黄橙	—	B区
28	(2.80)	1.10	0.35	2.43	—	A	にぶい黄橙	—	

#### 第307号住居跡（第412・413図）

F・G-32グリッドに位置する。第290・294号住居跡と重複し、木住居跡が古い。平面形は僅かに東西に長い長方形で、長軸は4.3m前後で、短軸は3.94mである。深さは0.06～0.11mである。主軸方位はN-13°-Eを指す。

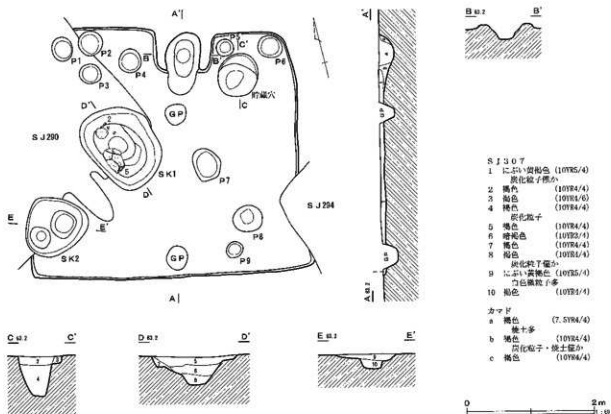
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁に設置される。燃烧部は20cm近く掘り込み、急激に立ち上がる。貯蔵穴はカマド右に設けられ、62×72cmの楕円形で、深さは60cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは9本検出され、P1～P9の深さは31cm、16cm、19cm、11cm、28cm、22cm、22cm、34cm、10cmである。床下土坑と考えられる土坑が2基、何れも第290号住居跡との境に検出された。

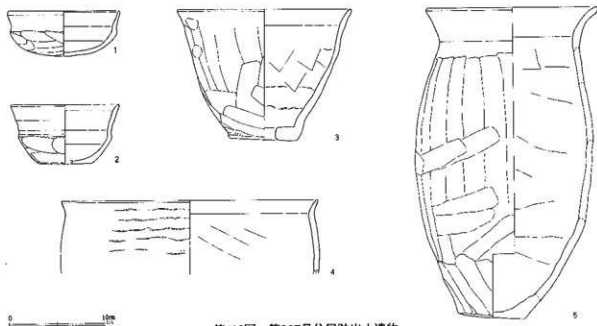
遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器・甕の破片がやや多く出土した。何れも小破片で、摩滅が著しく、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器杯2・甕2・甕1点であつた。

1は覆土、2・5は住居内のSK1から出土した。



第412図 第307号住居跡



第413図 第307号住居跡出土遺物

3はP5から、4はカマドから出土した。

1・2の坯の口径は11cm代と小型で、2点とも口縁部が外側に開く。

3の甌は鉢形で、平底の底部の中央部分に円孔が穿たれる。

5の甌は、胴部中位に最大径を有する。基本的に縦方向のヘラケズリが施されるが、器形の変換する胴部下位と胴部中位の粘土接合部分は、横方向にヘラケズリされていた。

第307号住居跡出土遺物観察表 (第413図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	11.6	4.7		ABE	良好	明黄褐色	60	覆土	
2	土師環	11.2	6.2	5.6	BEJ	不良	にぶい橙	70	貯蔵穴	
3	土師甌	18.1	13.7	7.0	ABE	良好	黄褐色	85	P5	外面煤付着
4	土師甌 (26.6)	7.7			BEJ	良好	橙	10	カマド	輪痕痕明瞭
5	土師甌	17.7	32.2	7.0	ABDJL	普通	にぶい橙	85	貯蔵穴	底部ズレ著しい

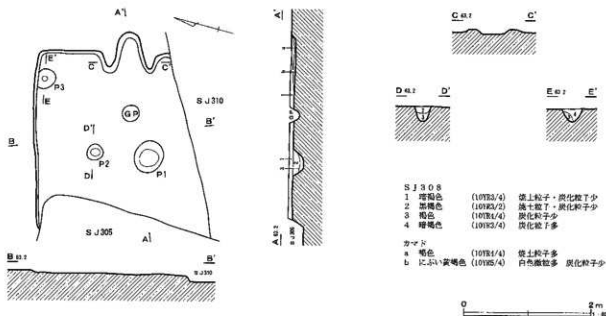
第308号住居跡 (第414図)

F・G-30-31グリッドに位置する。第305・310号住居跡と重複し、本住居跡が古い。検出された規模は、東西2.83m、南北2.60mで、深さは0.01~0.05mと浅い。主軸方位はN-73°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁の状態は不明瞭である。

カマドは東壁に設置される。焼成部の掘り込みはなく、そのまま煙道部となる。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは3本検出され、P1~P3の深さは17cm、22cm、19cmである。

遺物は、覆土から土師器の小片が少量出土した。何れも器種の判別が困難な小片で、図示可能な遺物はなかった。



第414図 第308号住居跡

### 第309号住居跡 (第415・416・417図)

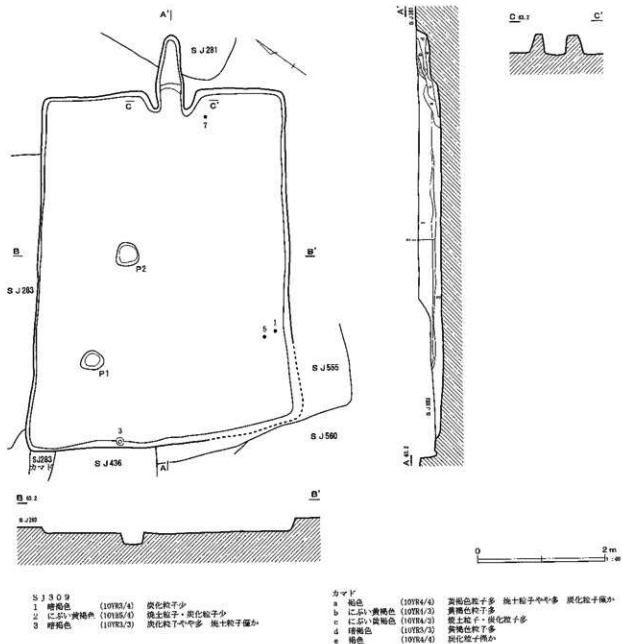
I-27・28グリッドに位置する。第281・283・436・554・555・560号住居跡に切られ、第317・318号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。平面形は東西に長い長方形で、長軸5.62m、短軸4.06m、深さは0.28~0.37mである。主軸方位はN-57°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち

あがる。

カマドは東壁ほぼ中央に設置される。燃焼部の掘り込みはなく、段を持って煙道部となる。土層断面に明瞭な焼土が確認された。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは16cm、14cmである。

遺物は、時期差のある遺物が混在して出土した。土師器・甕類を中心に小破片が多く出土した。



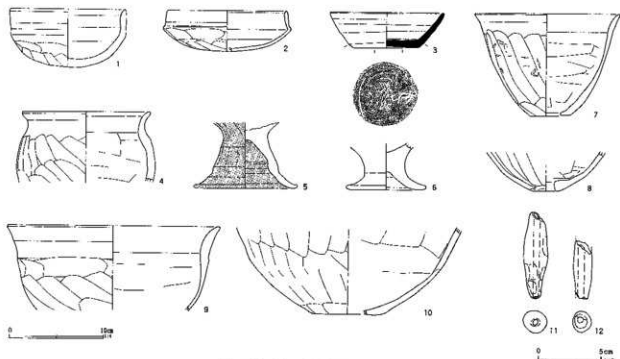
第415図 第309号住居跡



図示可能な遺物は、土師器環2・高環2・甕2・鉢1・瓶2、須恵器環1、土師鉢2点であった。

本住居跡は、8軒の住居跡が重複する中でも、住居跡の新旧関係から古い段階に属すると思われる、1・7の上器が本住居跡に伴っていた可能性がある。

また、重複の境界付近にある遺物を、調査時に第309・318号住居跡出土遺物（第417図）として取り上げたが、出土遺物は、重複する他の住居跡の遺物であった可能性もある。



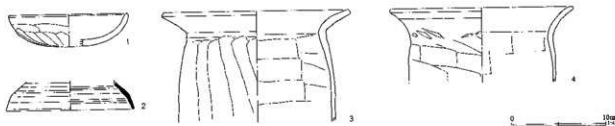
第416図 第309号住居跡出土遺物

第309号住居跡出土遺物観察表（第416図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	12.2	6.2		BE J	良好	にぶい橙	75	+7.6cm	
2	土師環	12.6	4.3		ABE	良好	橙	95	A区	
3	須恵環	12.0	3.8	7.1	ABH	良好	鈍灰	95	+27.1cm	木野産 同坑未切後層迎-体部下端同転ヘラケズリ
4	土師小甕	(13.5)	7.5		ABE	良好	橙	30	A区	
5	土師高環		7.0	5.3	ABDEG	良好	浅黄橙	75	+2cm	内外面赤彩
6	土師高環		4.9	8.0	ABDEG	良好	橙	75	B区	煤付着
7	土師瓶	15.2	10.9		ABE J	良好	にぶい橙	70	+15cm	
8	土師瓶		4.2	(2.8)	ABE	良好	橙	30	B区	
9	土師鉢	22.2	8.9		BE	良好	橙	45	B区	煤付着
10	土師甕		9.0	(7.0)	ABH J L	普通	にぶい黄褐	30	覆上	内面黒色処理 S J 283-309と換合

第309号住居跡出土土師鉢観察表（第416図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
11	6.80	1.90	0.45	17.58	Ca III	A	橙	100	A区
12	4.55	1.70	0.50	9.00	B a V	A	明赤褐	85	A区



第417図 第309・318号住居跡出土遺物

第309・318号住居跡出土遺物観察表 (第417図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土鉢坏	(12.6)	3.4		ABDE	良好	黄橙	30	覆土	産地不明
2	須恵釜	(13.5)	3.0		B F	良好	灰白	10	覆土	
3	土師甕	(19.5)	11.8		ABCD	良好	明赤褐	30	覆土	
4	土師甕	(19.2)	7.9		ABEG	良好	黄橙	30	覆土	

第310号住居跡 (第418・419図)

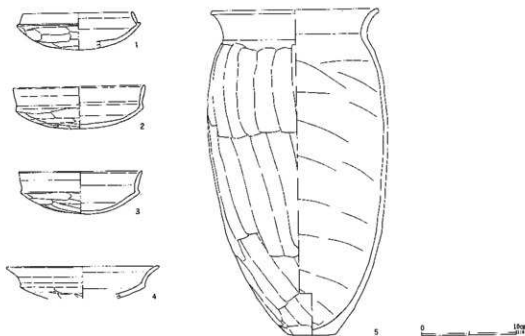
F-31、G-30・31グリッドに位置する。第305・306号住居跡に切られ、第308号住居跡を切る。平面形は正方形に近く、南北5.18m、東西5.01m、深さは0.15~0.16mである。主軸方位はN-119°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは西壁中央より南寄りに設置される。燃焼

部は10cm程掘り込み、急激に立ち上がる。川原石利用の支脚が立位で出土した。貯蔵穴はカマド右に設けられ、76×62cmの楕円形で、深さは53cmである。壁溝はカマド右の西壁で検出され、幅16~18cm、深さ0~4cmである。ピットは3本検出され、P1~P3の深さは11cm、13cm、10cmである。カマド左で2個、東壁際で7個の縄物石が出土した。

遺物は、土師器の破片が多く出土したが、甕の破

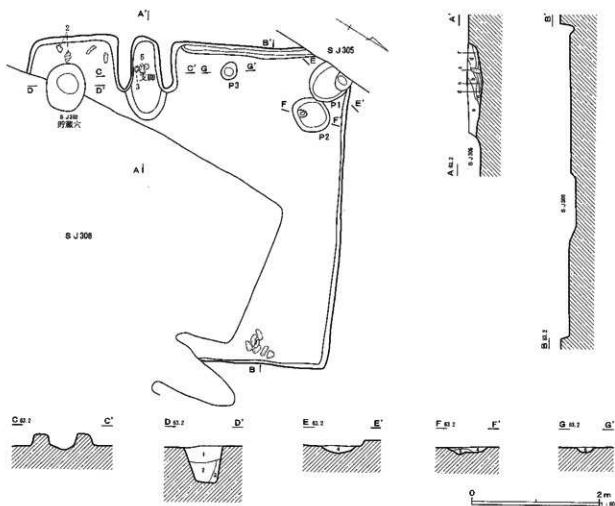


第418図 第310号住居跡出土遺物

片が極めて多かった。しかし、何れも小破片で、摩滅が著しく殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環4・甕1点であった。

1・4は覆土から、2は貯蔵穴およびその北側床面から出土したものが接合した。3・5はカマドから出土した。



S J 310

- |   |     |           |              |
|---|-----|-----------|--------------|
| 1 | 暗褐色 | (10YR2/4) | 焼上ブロック・炭化粒子少 |
| 2 | 暗褐色 | (10YR2/4) | 炭化粒子少        |
| 3 | 褐色  | (10YR4/4) | 炭化粒子少        |
| 4 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 炭化粒子・白色粒子多   |
| 5 | 褐色  | (10YR4/4) | 炭化粒子少        |
| 6 | 暗褐色 | (10YR2/4) | 炭化粒子少        |

カマド

- |   |        |           |                       |
|---|--------|-----------|-----------------------|
| a | 灰黄色    | (10YR4/2) | 炭化粒子少                 |
| b | にがい黄褐色 | (10YR4/2) | 焼上ブロック多 炭化粒子少 (大井南席土) |
| c | 褐色     | (10YR4/3) | 炭土粒子少                 |
| d | 褐色     | (10YR4/4) | 炭化粒子少                 |
| e | 暗褐色    | (10YR3/3) | 焼上ブロック多 (北床面)         |
| f | 暗褐色    | (10YR3/4) | 炭化粒子多                 |
| g | にがい黄褐色 | (10YR5/3) | 炭化粒子少                 |

第419図 第310号住居跡

第310号住居跡出土遺物観察表 (第418図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(11.6)	3.8		ABDE	普通	橙	25	B区	内外面煤付着
2	土師環	13.8	4.4		ABEG	良好	橙	70	+4.6cm	
3	土師環	13.0	4.5		ABEG	良好	橙	95	カマド	
4	土師環	(16.0)	3.4		ABE	良好	明褐	15	B区	外面煤付着
5	土師甕	17.6	34.4	5.0	ACEI	良好	橙	60	カマド	外面煤付着

### 第311号住居跡 (第420-421図)

G-31グリッドに位置する。北半を第306号住居跡に切られていた。検出された規模は、東西4.71mで、南北は2.42mである。深さは0.19~0.22mである。主軸方位は東壁でN-33°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

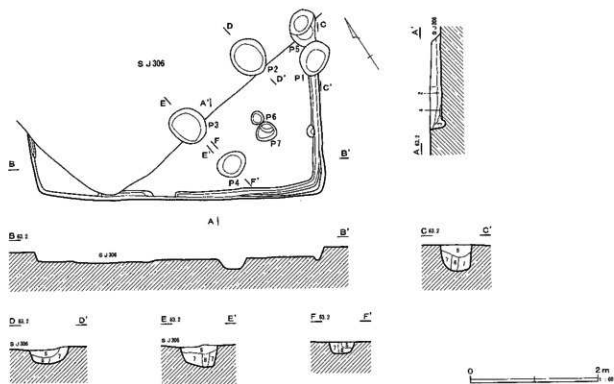
カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は断続的に検出され、幅12~16cm、深さ4~8cmである。ピットは7本検出され、P1~P7の深さは23cm、23cm、29cm、17cm、20cm、18cm、12cmである。

遺物は、土師器壺・杯の小片が少量出土したが、図示可能な遺物は、土師器杯1点であった。

1の杯は、口径が10cm代と小型で、口縁部と底部の境界の稜は不明瞭で、丸みを持っていた。内外面とも黒色処理が施されていた。



第420図 第311号住居跡出土遺物



S J 311

- 1 雑色 (107R4/4) 炭化粒多・面上粒下少
- 2 褐色 (107R4/4) 炭化粒多
- 3 暗褐色 (107R3/3) 炭化粒多・炭化粒下多
- 4 にがい黄褐色 (107R5/4) 白色障粒下少

- 5 にがい黄褐色 (107R4/2) 黄褐色シルトブロック・炭化粒下少
- 6 暗褐色 (107R3/3) 黄褐色シルトブロック少
- 7 褐色 (107R4/4) 黄褐色シルトブロック多 炭化粒下少
- 8 雑灰色 (107R1/1) 黄褐色シルトブロック少

第421図 第311号住居跡

### 第311号住居跡出土遺物観察表 (第420図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師杯	10.8	3.8		A B D E	普通	黒褐色	85	P2	内外面黒色処理

### 第312号住居跡 (第422・423図)

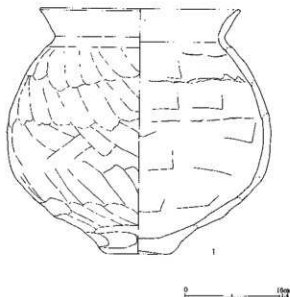
F-31グリッドに位置する。第291号住居跡・第186号土坑に切られ、第187号土坑を切る。西壁の一部は第187号土坑と同時に調査したため検出できなかった。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.60m、短軸3.70m、深さは0.11~0.15mである。主軸方位はN-57°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ちあがる。

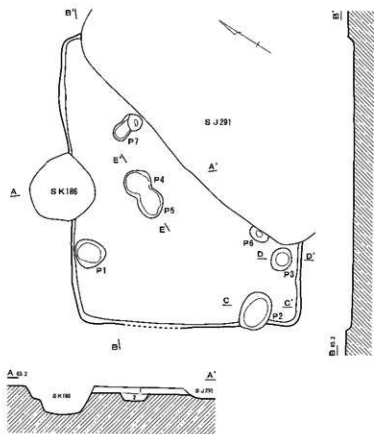
カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。ピットは7本検出され、P1~P7の深さは16cm、18cm、20cm、10cm、15cm、16cm、14cm、である。

遺物は、土師器壺・甕の破片が少量出土したが、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器壺1点のみであった。



第422図 第312号住居跡出土遺物



第423図 第312号住居跡

- S J 3 1 2
- 1 濃い黄褐色 (10195/6) 砂質
  - 2 暗褐色 (10192/2) 炭化灰下・焼土粒子少
  - 3 褐色 (10194/4) 炭化粒子少
  - 4 緑褐色 (10193/3) 焼土粒下・炭化粒子少



### 第312号住居跡出土遺物観察表 (第422図)

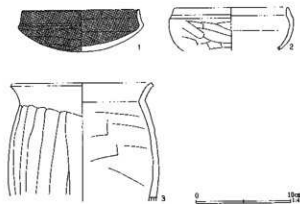
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師壺	21.0	25.9	7.0	A B C E J	普通	橙	50	覆上	内外面磨耗著しい 輪襷痕明瞭

### 第314号住居跡 (第424・425図)

G・H-30グリッドに位置する。第319-321・325・344-351・413号住居跡に切られ、第315-406-420号住居跡を切る。西壁は検出されず、他の壁も一部を検出できたのみである。検出された規模は、南北が6.72mで、東西は6.63mである。深さは0.12~0.22mである。主軸方位はN-36°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁に設置される。燃焼部はやや広めに10cm程掘り込まれ、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴はカマド左に設けられ、76×64cmの隅丸長方形で、



第424図 第314号住居跡出土遺物

第314号住居跡出土遺物観察表 (第424図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	12.4	4.4		ABDE	良好	橙	80	貯蔵穴	内外面黒色処理
2	土師環	(12.0)	4.6		ABDE	良好	黄橙	15	カマド	
3	土師甕	15.2	12.5		ABEGL	良好	橙	90	+14.5cm	

### 第315号住居跡 (第426-427図)

G-30・31、H-30グリッドに位置する。第314・319号住居跡と重複し、本住居跡が古い。用地の関係で2回に分けて調査された。検出された規模は、南北5.09m、東西3.15mで、深さは0.07~0.10mである。主軸方位はN-59°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部の掘り込みはなく、急激に立ち上がる。川原石利

深さは48cmである。壁溝は断続的に検出され、幅22~28cm、深さ2~7cmである。ピットは3本検出され、P1~P3の深さは13cm、15cm、12cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器片がやや多く出土したが、小破片で、摩滅が著しく、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環2・甕1点であった。

### 第420号住居跡 (第425図)

J-30グリッドに位置する。周辺の全ての住居跡に切られ、カマドの一部と貯蔵穴を検出したのみである。主軸方位はN-93°-Eを指す。

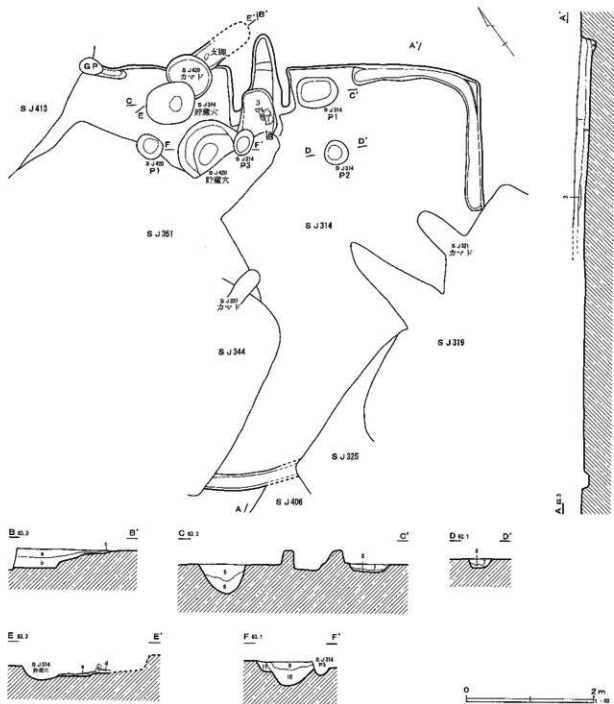
カマドは西壁に設置されていたと考えられる。川原石利用の支脚が立位で出土し、覆土と合わせてカマドと判断した。煙道部は検出できなかった。貯蔵穴は第314号住居跡の床面に検出され、カマドとの位置関係から本住居跡の貯蔵穴とした。検出されたのは98×70cmで、深さは40cmである。ピットは1本検出され、深さは37cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器甕胴部の破片が少量出土したが、図示可能な遺物はなかった。

用の支脚が立位で出土した。貯蔵穴はカマド右に設けられ、112×98cmの楕円形で、深さは63cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは8本検出され、P1~P8の深さは30cm、33cm、35cm、10cm、11cm、19cm、8cm、29cmである。

遺物は、カマドおよび貯蔵穴周辺の覆土から、古墳時代後期の土師器環・甕片を中心に多量に出土した。何れも小破片で殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環8・小型環1・小型甕



S J 314

- |   |                  |                  |
|---|------------------|------------------|
| 1 | 暗褐色 (10192/3)    | 焼土粒子・堆山少         |
| 2 | 褐色 (10194/4)     | 焼土ブロック多          |
| 3 | 暗褐色 (10192/4)    | 焼土粒下・炭化粒下少       |
| 4 | にぶい黄褐色 (10194/3) | 炭化粒子多 焼土粒子少      |
| 5 | にぶい黄褐色 (10194/3) | 炭化粒下多 焼土・堆山ブロック少 |
| 6 | にぶい黄褐色 (10194/3) | 炭化粒子・焼土ブロック・粘土多  |
| 7 | にぶい黄褐色 (10194/4) | 焼土ブロック・灰・炭化粒子少   |
| 8 | 褐色 (10194/4)     | 炭化粒子少            |

S J 314 カマド

- |   |                  |              |
|---|------------------|--------------|
| a | にぶい黄褐色 (10194/3) | 焼土ブロック・炭化粒下少 |
|---|------------------|--------------|

- |   |                  |               |
|---|------------------|---------------|
| b | 褐色 (10194/4)     | 焼土ブロック多 炭化粒子少 |
| c | にぶい黄褐色 (10194/3) | 白色炭化粒子多 炭化粒子少 |

S J 420

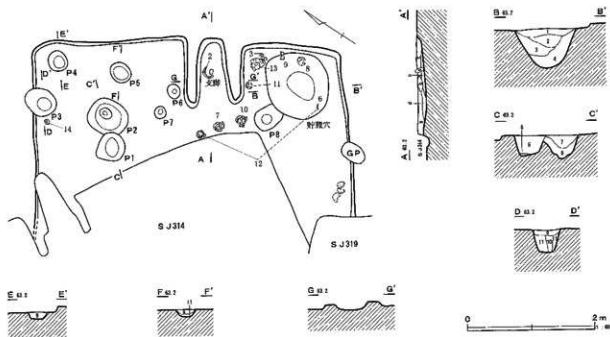
- |    |              |                   |
|----|--------------|-------------------|
| 9  | 褐色 (10194/4) | 炭化粒子多 堆山ブロック少     |
| 10 | 褐色 (10194/4) | 炭化粒子多 堆山ブロック1層より多 |
| 11 | 褐色 (10194/6) | 堆山土主体 炭化粒下少       |

S J 420 カマド

- |   |               |         |
|---|---------------|---------|
| d | 褐色 (10194/4)  | 粘土 炭化粒子 |
| e | 褐色 (7.5794/3) | 堆山ブロック  |

第425図 第314・420号住居跡

2・甕2・瓶1・壺1点であった。



S J 315

- 1 褐色 (10YR4/4) 焼土粒子・炭化粒子少  
 2 褐色 (10YR4/6) 赤土粒下・炭化粒子・黄褐色シルトブロック少  
 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土ブロック多  
 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 赤土ブロック・炭化粒子多  
 5 暗褐色 (10YR3/7) 焼土ブロック・炭化粒子多  
 6 褐色 (10YR4/4) 黄褐色シルトブロック多  
 7 黄褐色 (10YR5/2) 炭化粒子少  
 8 暗褐色 (10YR2/4) 黄褐色シルトブロック・炭化粒子少  
 9 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子 黄褐色シルトブロック

- 10 暗褐色 (10YR2/3) 黄褐色シルトブロック少  
 11 暗褐色 (10YR2/3) 黄褐色シルトブロック多

カマド

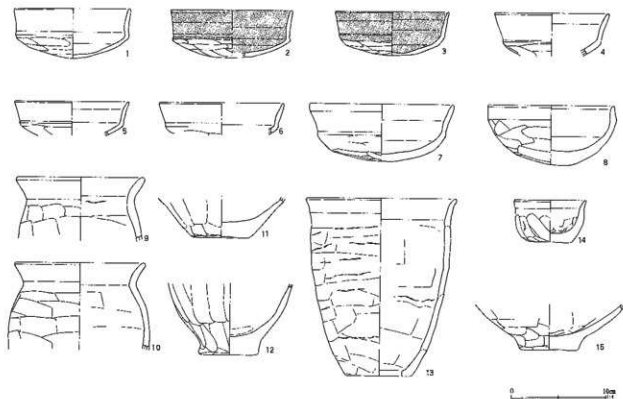
- a にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土ブロック・炭化粒子少  
 b 暗褐色 (10YR2/4) 焼土ブロック多  
 c 暗褐色 (10YR3/3) 焼土ブロック・炭化粒子少  
 d 暗褐色 (10YR2/2) 焼土ブロック・炭化粒子多  
 e 黄褐色 (10YR4/2) 炭化粒子少

第426図 第315号住居跡

第315号住居跡出土遺物観察表 (第427図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(12.1)	5.3		BEJ	良好	にぶい橙	30	B区	
2	土師環	(13.0)	5.0		ABDE	良好	明赤褐	50	カマド	内外面赤彩 外面黒斑あり
3	土師環	12.0	4.6		ABE I	良好	明赤褐	70	+2.5cm	内外面赤彩
4	土師環	(12.0)	4.5		BE	不良	明黄褐	30	B区	
5	土師環	(12.0)	3.6		ABE	良好	にぶい橙	20	A区	
6	土師環	(13.0)	3.3		BCEJ	良好	明黄褐	25	+4.6cm	
7	土師環	15.2	6.0		ABCDE	良好	明赤褐	75	床	
8	土師環	13.4	6.3		ABDE	良好	明赤褐	95	貯蔵穴	外面磨耗する 内面煤付着
9	土師小型甕	(13.4)	6.7		BDE	良好	橙	25	貯蔵穴	内外面磨耗する
10	土師小型甕	13.6	9.2		BEG	良好	橙	60	床	
11	土師甕	4.3	6.0	6.0	ABEJ	良好	橙	60	+5.8cm	
12	土師甕	7.5	6.0		ABJ	良好	明赤褐	85	+4.6cm	
13	土師甕	(15.7)	18.7	(6.8)	ABE	良好	明赤褐	45	+2.4cm	輪轆痕明確
14	小型甕	7.5	4.5		ABDE	良好	明赤褐	95	床	
15	土師甕	4.9	(6.0)		BE	不良	明黄褐	35	A区	





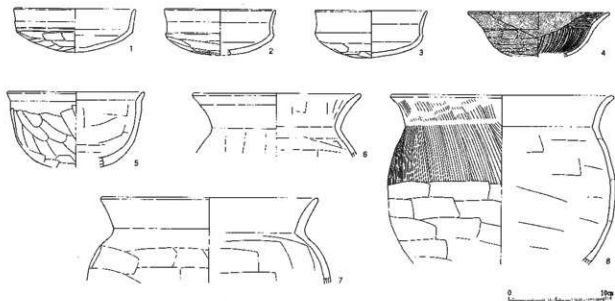
第427図 第315号住居跡出土遺物

第316号住居跡 (第417・428・429図)

I-28・29グリッドに位置する。第284・292・297号住居跡に切られ、第332号住居跡を切る。南東コーナーは調査区域外にある。平面形はやや歪んだ正方形

形で、東西5.77m、南北5.72m、深さは0.23~0.29mである。主軸方位はN-83°-Eを指す。

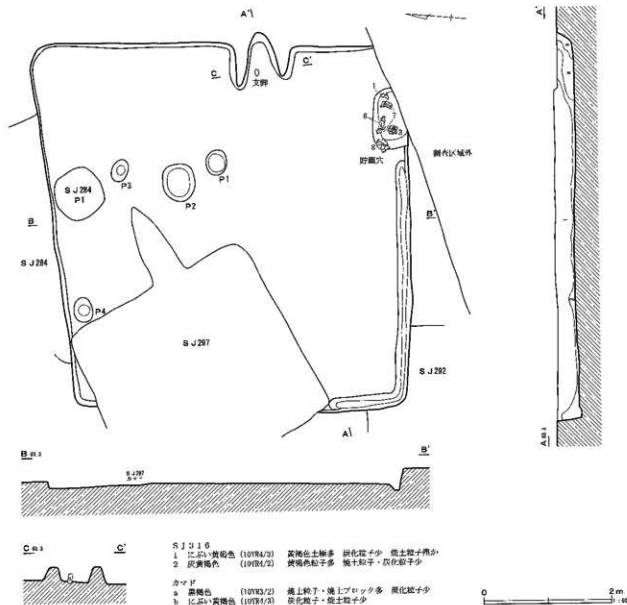
床面は中央付近が僅かに高くなり、壁は垂直に立ちあがる。



第428図 第316号住居跡出土遺物

カマドは東壁に設置される。燃焼部の掘り込みはなく、急激に立ち上がる。川原石利用の支脚が立位で出土した。貯蔵穴は南壁に接して設けられ、96×

55cmの隅丸長方形で、深さは8cmである。壁溝は南壁から西壁にかけて検出され、幅22~26cm、深さ6~7cmである。ピットは4本検出され、P1~P4



第429図 第316号住居跡

第316号住居跡出土遺物観察表 (第428図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	視成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師杯	(12.8)	4.6		BEJ	良好	浅黄橙	30	貯蔵穴	
2	土師杯	(11.7)	4.8		ABEJ	良好	黄橙	15	B区	外面煤付着
3	土師杯	11.7	5.0		ABDJ	良好	橙	75	貯蔵穴	内面磨耗著しい 外面煤付着
4	土師高杯	(15.0)	4.7		ABE	良好	浅黄橙	15	A区	内外面赤彩 内面ヘラミガキ後放射暗文
5	土師碗	(14.5)	7.9		ABEJ	良好	にぶい橙	25	カマド	
6	土師甕	17.7	6.7		ABEG	良好	浅黄橙	60	貯蔵穴	
7	土師壺	23.0	9.0		BE	良好	浅黄橙	55	貯蔵穴	
8	土師甕	(23.4)	17.8		ABEGL	良好	橙	30	覆土	外面ハケ目

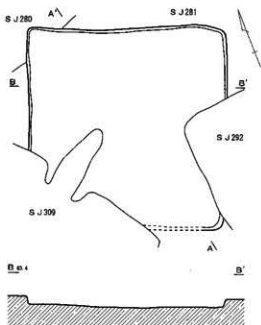
の深さは28cm、15cm、28cm、17cmである。

遺物は、覆土・貯蔵穴から古墳時代後期の土師器片が出土した。覆土中の遺物は極めて少なく、小片が多かった。図化した遺物の殆どは貯蔵穴からの出土である。

図示可能な遺物は、土師器環3・高坏1・椀1・甕2・壺1点であった。

### 第317号住居跡 (第430-431図)

I-28グリッドに位置する。第280・281・292・309



第430図 第317号住居跡

号住居跡に切れ、第318号住居跡を切る。平面形は正方形で、東西3.18m、南北は3.2m前後と考えられる。深さは0.15~0.21mである。主軸方位は北壁でN-70°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。カマドは、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は、古墳時代の土師器片が出土したが、小片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器高坏1・甕2点であった。

- S J 317
- 1 褐色色 (10YR3/3)  
黄褐色砂子多 黄土砂子・炭化粒下少
  - 2 褐色色 (10YR3/4)  
黄褐色砂子極多 黄土砂子少 炭化粒子極少

0 2m



第431図 第317号住居跡出土遺物

0 10cm

### 第317号住居跡出土遺物観察表 (第431図)

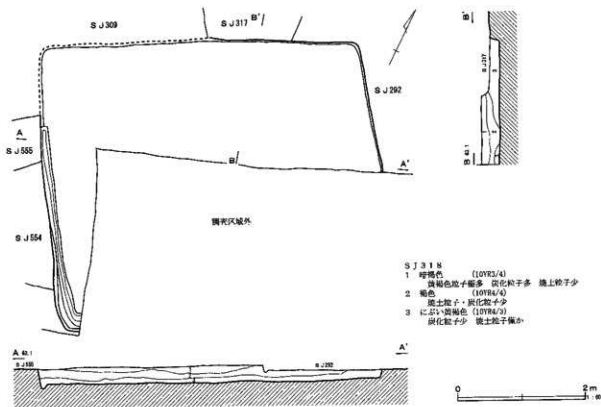
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師高坏		8.0		A B E	良好	にぶい赤褐	40	覆土	内外面赤彩
2	土師椀		3.7		A B E G	普通	明赤褐	40	覆土	内面磨耗著しい
3	土師甕	(18.0)	6.7		A B E L	良好	明赤褐	20	覆土	

第318号住居跡 (第432・433図)

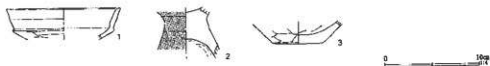
I・J-28グリッドに位置する。第281・292・309・317・554号住居跡と重複し、その何れよりも古い。南側は調査区域外にある。平面形は東西に長い長方形で、長軸5.33m、短軸4.50m、深さは0.22~0.28mである。主軸方位は北壁でN-64°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は西壁で検出され、幅10~16cm、深さ4~5cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が微量出土した。図示可能な遺物は、土師器片1・高坏1・甕1点あった。



第432図 第318号住居跡



第433図 第318号住居跡出土遺物

第318号住居跡出土遺物観察表 (第433図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師高坏	(12.0)	3.3		ABEG	普通	灰褐色	20	覆土	外面煤付着
2	土師高坏		5.4		ABEJ	良好	褐色	70	覆土	外面赤彩
3	土師甕		2.4	5.5	ABEG	普通	濃い黄褐色	80	覆土	外面煤付着

第319号住居跡 (第434・435・436図)

G-30、H-30・31グリッドに位置する。第314・315・320・321・325号住居跡と重複し、その何れよりも新しい。平面形は東西に僅かに長い長方形で、長軸4.78m、短軸4.42m、深さは0.39~0.46mである。主軸方位はN-24°-Wを指す。

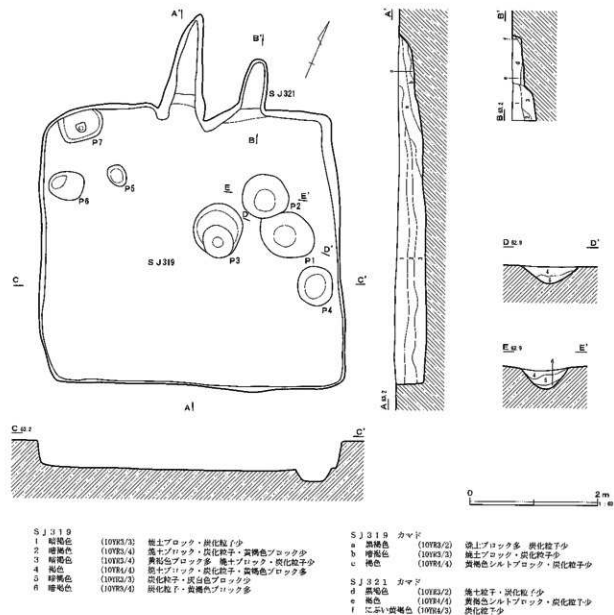
床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは北壁中央よりやや西に設置される。燃焼

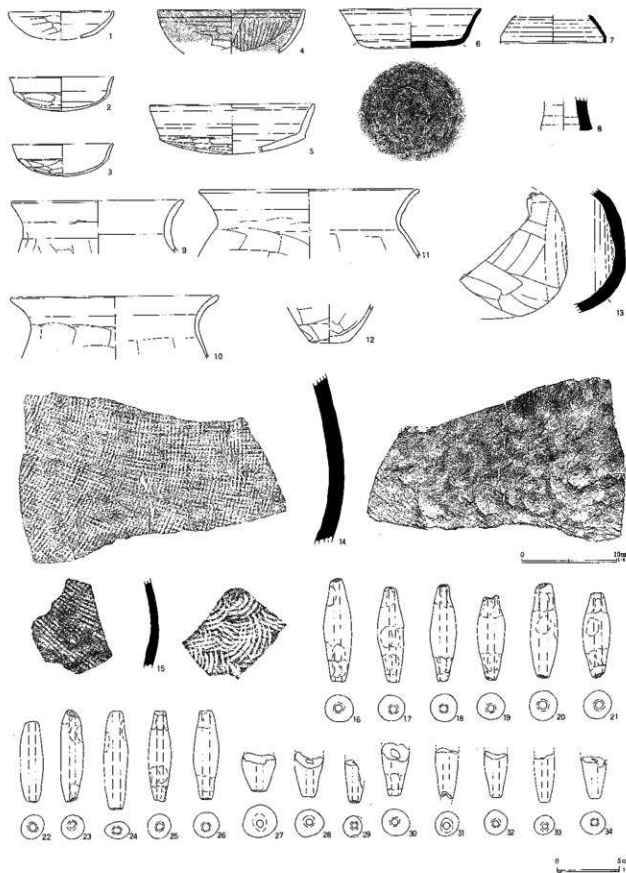
部の掘り込みはなく、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは7本検出され、P1~P7の深さは30cm、32cm、27cm、19cm、15cm、35cm、18cmである。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が多量に出土した。小片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏4・暗文坏1・甕3・壺1、須恵器坏1・蓋1・長頸瓶1・横瓶1・甕片2、七鍾63点であった。



第434図 第319・321号住居跡



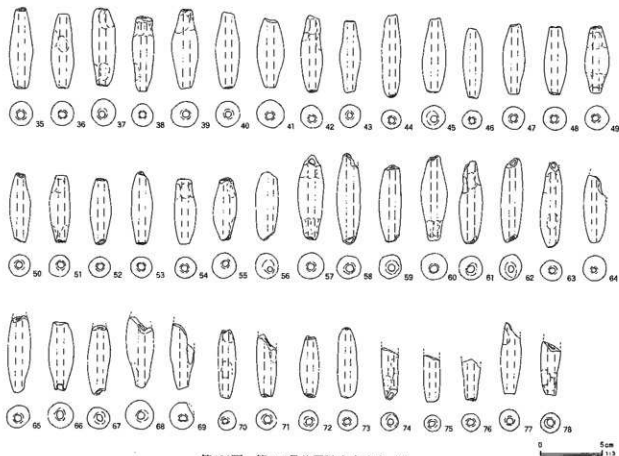
第435图 第319号住居跡出土遺物(1)

第321号住居跡 (第434図)

G-30グリッドに位置する。第319号住居跡に切られ、第314・315号住居跡を切る。カマド煙道部を検出したのみである。検出した規模は、長さ0.77m、幅0.41m、深さ0.18mである。主軸方位はN-17°-

Wを指す。カマドは住居東壁に設置されていたと考えられる。第319号住居跡の旧いカマドの可能性も考えられるが、調査時には判断できなかった。

遺物は、カマドから少量の土師器片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。



第436図 第319号住居跡出土遺物 (2)

第319号住居跡出土遺物観察表 (第435図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(11.0)	2.8		ABDE	良好	にぶい橙	30	B区	
2	土師環	11.0	3.6		AE	良好	橙	95	P1	
3	土師環	(10.7)	3.4		AB	普通	橙	30	P1	
4	土師陶文環	(15.4)	4.6		ABDE	良好	赤褐	15	B区	内外面赤彩 内面放射暗文
5	土師環	17.2	5.0		ABEG	良好	赤	40	B区・P2・P3	
6	須恵環	14.8	4.1	11.0	ABEG	不良	橙	65	カマド右脇	未野産 底部全面同転ヘラケズリ
7	須恵蓋	(11.0)	2.9		A	良好	青灰	15	A区	産地不明
8	須恵長頸瓶		3.5		ABEH	不良	灰オリーブ	80	B区	未野産
9	土師甕	18.0	5.6		ABE	良好	赤	50	カマド右脇	内面磨耗する 輪痕痕
10	土師甕	21.8	6.6		BE	良好	橙	55	カマド右脇	内外面磨耗する
11	土師甕	22.8	7.3		ABEG	良好	浅黄橙	40	B区	
12	土師甕		4.0	4.3	ABE	良好	にぶい赤褐	55	B区	
13	須恵横瓶		12.8		ABCH	良好	灰		B区	未野産
14	須恵甕				ABEH	不良	赤褐		B区	未野産 外面接骨子目叩き 内面同心円当具痕
15	須恵甕				BG	普通	にぶい黄橙		B区	未野産 外面平叩き 内面同心円当具痕

第319号住居跡出土土鐘觀察表 (第435・436図)

番号	長さ	径	孔径	重量(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
16	8.10	2.25	0.55	24.55	C a II	C	灰白	100	B区
17	7.45	2.10	0.55	22.12	C a III	C	灰白	96	B区
18	7.50	2.20	0.60	23.24	C a II	C	灰白	100	B区
19	6.60	2.15	0.55	20.02	B a III	C	にぶい黄橙	100	C区
20	7.35	2.30	0.65	25.59	C a III	C	褐灰	100	B区
21	6.65	2.25	0.60	21.15	C a III	C	浅黄橙	100	C区
22	6.35	1.95	0.60	16.99	B a III	A	橙	100	
23	7.25	1.85	0.55	20.27	B a III	A	にぶい黄橙	100	A区
24	7.65	1.95	0.60	16.03	B a II	C	灰黄褐	100	B区
25	7.10	1.90	0.55	16.65	B a III	C	浅黄橙	100	B区
26	7.00	2.00	0.60	19.31	C a III	C	灰白	100	B区
27	(3.05)	2.75	0.60	16.36	—	A	橙	—	A区
28	(3.55)	2.20	0.50	9.84	—	A	にぶい黄橙	—	カマド脇
29	(3.35)	1.70	0.50	4.79	—	A	灰白	—	B区
30	(4.15)	2.20	0.50	10.93	—	C	灰白	45	B区
31	(4.00)	2.00	0.55	10.96	—	A	浅黄橙	40	B区
32	(3.60)	1.95	0.50	8.64	—	A	橙	35	B区
33	(3.80)	1.60	0.45	7.34	B a III	B	にぶい黄橙	50	B区
34	(3.30)	1.95	0.50	7.18	—	A	にぶい橙	30	B区
35	6.40	1.90	0.60	16.58	C a IV	B	褐灰	100	B区
36	5.85	1.90	0.60	16.06	C a IV	A	浅黄橙	100	B区
37	6.15	2.10	0.50	18.93	C a V	C	灰白	100	B区
38	5.85	1.80	0.50	15.05	C a IV	B	にぶい黄橙	100	B区
39	6.25	2.20	0.55	18.05	C a IV	C	にぶい黄橙	100	B区
40	6.05	2.05	0.50	18.77	C a IV	B	灰黄褐	100	B区
41	5.45	2.20	0.55	16.87	C a V	C	灰白	100	B区
42	6.10	1.85	0.50	13.58	C a V	C	灰白	100	B区
43	5.70	1.80	0.45	12.26	C a IV	C	浅黄橙	100	A区
44	6.50	1.60	0.50	11.77	B a III	C	にぶい黄橙	100	B区 P1
45	5.85	1.90	0.55	16.94	C b V	A	黄橙	100	A区
46	5.55	1.60	0.45	9.55	B a IV	A	褐灰	100	A区
47	5.50	1.80	0.50	14.09	C a IV	A	浅黄橙	100	B区
48	5.40	1.90	0.50	13.90	C a V	A	灰黄褐	100	B区
49	5.30	1.90	0.50	14.39	C a V	B	にぶい黄橙	100	B区
50	5.40	1.70	0.50	11.98	C a V	A	浅黄橙	100	B区
51	5.30	1.70	0.60	11.81	C a V	A	にぶい黄橙	100	B区
52	5.20	1.70	0.50	10.94	C a V	A	にぶい黄橙	100	B区
53	5.70	1.70	0.60	12.23	B a IV	A	にぶい黄橙	100	B区
54	5.15	1.70	0.50	12.48	C a V	A	浅黄橙	100	B区
55	4.90	2.00	0.55	13.77	C a V	A	にぶい橙	100	B区
56	5.40	2.00	0.45	16.89	B a V	A	橙	100	B区
57	6.65	2.05	0.55	17.46	C a III	B	灰白	100	B区
58	7.10	1.90	0.60	16.47	B a III	A	暗褐	95	B区
59	(6.00)	1.90	0.55	16.60	B a IV	A	黄橙	96	
60	6.65	2.10	0.55	17.77	C a III	C	灰白	100	
61	6.50	1.85	0.60	15.52	C a III	B	灰黄褐	100	B区
62	6.60	2.00	0.50	18.16	B a III	A	にぶい黄橙	100	
63	6.70	1.80	0.50	14.04	B a III	C	褐灰	95	A区
64	5.30	2.00	0.40	15.18	C a III	A	灰黄褐	70	B区
65	(6.00)	1.90	0.55	15.18	C a III	A	黄橙	90	
66	5.40	2.00	0.65	14.60	C a V	C	にぶい黄橙	100	B区
67	(5.45)	1.80	0.60	13.61	B a IV	C	褐灰	90	B区
68	(5.60)	2.30	0.60	17.29	C a III	C	灰白	70	B区
69	(5.15)	2.15	0.60	10.89	C a III	C	褐灰	50	B区
70	5.40	1.50	0.45	9.29	B a V	A	浅黄橙	100	B区
71	(4.90)	1.65	0.60	9.08	B a III	A	橙	60	B区



第319号住居跡出土土錘観察表 (第436図)

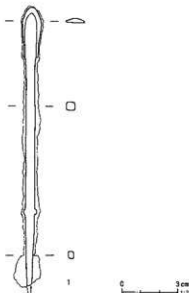
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
72	4.80	1.60	0.60	8.50	B a V	A	にぶい黄橙	100	B区
73	5.50	1.60	0.50	12.45	B a IV	A	にぶい褐	95	B区
74	(4.10)	1.45	0.50	6.18	A a II	A	灰白	55	B区
75	(3.70)	1.30	0.50	5.80	—	C	にぶい黄橙	—	B区
76	(3.30)	1.50	0.55	4.21	—	A	にぶい黄橙	—	B区
77	5.60	1.70	0.50	12.54	B a IV	A	灰白	90	B区
78	(4.30)	1.60	0.60	6.43	B a III	A	浅黄橙	60	B区

第320号住居跡 (第437・438図)

H-30・31グリッドに位置する。第319・323号住居跡・第203号土坑に切られ、第325号住居跡・第204・205号土坑を切る。平面形は東西に僅かに長い長方形と考えられる。規模は、長軸4.89m、短軸4.30m、深さ0.36~0.44mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。カマド、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器環・甕の小片が出土したが、図示可能な遺物は、鉄鏝1点のみであった。



第437図 第320号住居跡出土遺物

第320号住居跡出土遺物観察表 (第437図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	鉄鏝	現存長14.75cm	幅1.05cm	厚さ0.45cm	灰さ21.09g				覆土	有茎柳葉式

第322号住居跡 (第439・440図)

H・1-30グリッドに位置する。第304号住居跡に切られ、第325・328・333・334号住居跡を切る。南側は調査区域外にある。平面形は東西に長い長方形で、長軸5.74m、短軸4.40m、深さは0.23~0.30mである。主軸方位はN-90°-Wを指す。

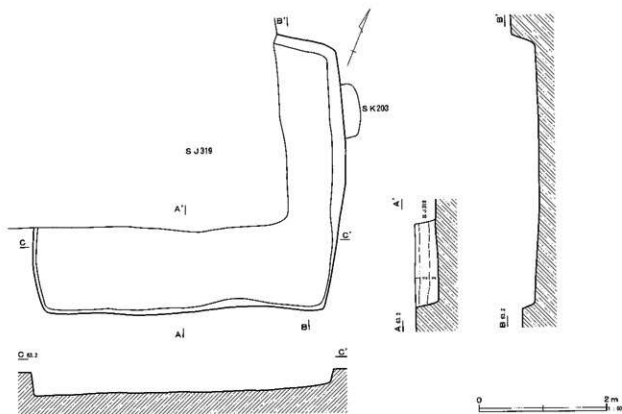
床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。カマド右側の壁はやや西に張り出す。

カマドは西壁中央より南寄りに設置される。焼焼部の掘り込みはなく、段を持って煙道部へ続く。土層断面に明瞭な焼土層が観察された。貯蔵穴はカマ

ド左に設けられ、100×72cmの隅丸長方形で、深さは26cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは北西コーナーに1本検出され、深さは12cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が多く出土した。また、平安時代の遺物が一部で混入していたが、本住居跡の北西部の覆土上層は、平安時代の第304号住居跡によって壊されており、その遺物が混入したものと考えられる。

図示可能な遺物は、土師器環2・高環1・甕3、須忠器高台椀1、土錘15点であった。



S J 3 2 0

1 黒褐色

(107K/2)

黄褐色シルトブロック・炭化粒子少

2 暗褐色

(107K/2)

黄褐色シルトブロック・炭化粒子少

3 にぶい黄褐色

(107K/2)

黄褐色シルトブロック多

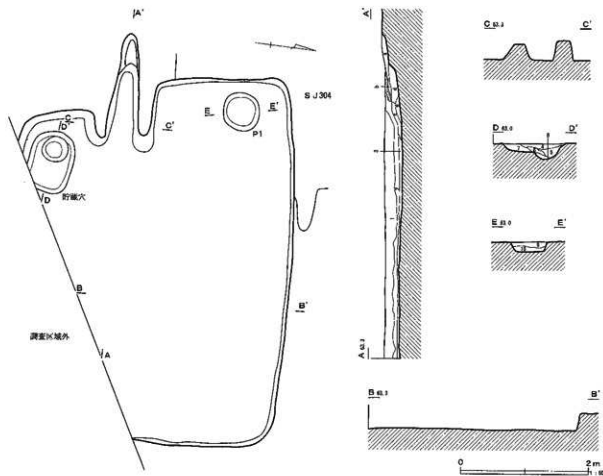
第438図 第320号住居跡

第322号住居跡出土遺物観察表 (第440図)

番号	器種	LH径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	上脚環	9.5	3.9		AB I	良好	橙	95	B区	
2	土師環	(11.6)	4.6		AB DE	良好	にぶい赤褐	20	A・床	内外面黒色処理
3	須恵高台碗	(6.5)	3.6		AB D	普通	灰	40	B区	木野産
4	上脚高環		6.3		AB DE	良好	にぶい褐	80	B区	
5	土師甕	16.0	6.7		AB DE	普通	にぶい橙	55	B区	
6	上脚甕	(21.4)	12.5		AB DE G J	良好	明褐	30	B区	内面やや磨耗
7	土師甕		2.8	9.0	B DE J	不良	明黄橙	40	B区	

第322号住居跡出土土錐観察表 (第440図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
8	8.30	2.20	0.60	32.34	C a II	A	にぶい褐	95	B区
9	9.35	2.00	0.50	27.55	B a I	A	橙	100	A区
10	6.85	1.80	0.70	12.77	B a III	A	にぶい黄橙	95	A区
11	(7.60)	1.80	0.50	15.49	B a II	A	にぶい黄橙	95	B区
12	7.05	1.65	0.60	12.82	A a III	A	赤褐	95	B区
13	6.10	1.70	0.50	13.78	B a IV	A	浅黄橙	95	A区
14	6.05	1.95	0.60	16.51	B a IV	A	橙	100	B区
15	5.65	1.90	0.30	12.19	C a IV	A	明赤褐	100	B区



S J 3 2 2

- 1 褐色 (10YR4/4) 黄褐色土層多 炭化粒子・白色粒子少  
 2 暗褐色 (10YR2/4) 黄褐色粒子多 炭化粒子・焼土少  
 3 褐色 (10YR4/4) 黄褐色粒丁多 炭化粒子少 焼土粒子僅か  
 4 褐色 (10YR4/4) 黄褐色ブロック・炭化粒子少  
 5 褐色 (10YR4/6) 炭化粒子少  
 6 にぶい黄褐色 (10YR4/7) 焼土粒子多 炭化粒子少  
 7 黄褐色 (10YR5/6) 黄褐色ブロック多  
 8 暗褐色 (10YR2/4) 炭化粒子少

- 9 暗褐色 (10YR2/3) 炭化粒丁・焼土粒子少 黄褐色ブロック多  
 10 黄褐色 (10YR5/6) 炭化粒子少

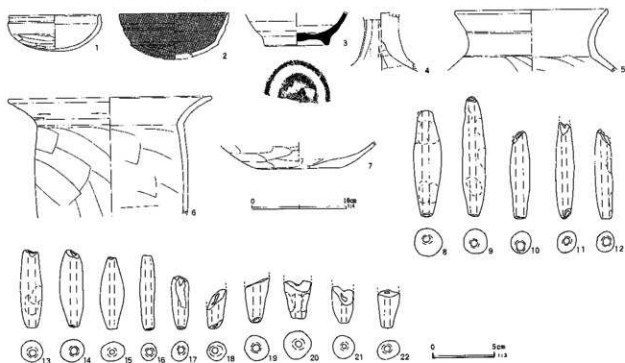
カマド

- a 暗褐色 (10YR2/4) 黄褐色粒子多 炭化粒丁・焼土粒子少  
 b 暗褐色 (10YR2/4) S層に似るが焼土粒子やや多  
 c 暗褐色 (10YR2/3) 黄褐色粒子・炭化粒子・炭化粒子少  
 d 褐色 (10YR4/6) 焼土ブロック・炭化粒子やや多  
 e 褐色 (10YR4/4) 炭化粒丁僅か

第439図 第322号住居跡

第322号住居跡出土土錘観察表 (第440図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
16	5.90	1.40	0.50	7.94	A a IV	A	橙	100	B区
17	4.20	1.60	0.50	7.69	B a V	A	灰黄褐	95	床下
18	(3.10)	1.55	0.50	4.52	—	A	橙	—	B区
19	(3.50)	2.10	0.55	8.68	—	A	灰黄褐	40	床下
20	(2.90)	2.25	0.55	10.05	—	C	にぶい黄橙	—	B区
21	(2.90)	1.80	0.35	7.49	—	A	にぶい黄橙	—	B区
22	(3.05)	1.80	0.50	5.41	—	A	橙	—	B区



第440図 第322号住居跡出土遺物

#### 第323号住居跡 (第441~444図)

G・H-31・32グリッドに位置する。第320・324号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。南側は調査区域外にある。住居跡全体が検出されていないが、今回の発掘調査で検出された住居跡中で最大規模になると思われる。規模は、東西が10.40mで、南北は6.64m検出された。深さは0.28~0.32mである。主軸方位はN-4°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは北壁中央より東寄りに設置される。燃焼部の掘り込みはなく、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴は北東コーナーに設けられ、150×130cmの不整楕円形で、深さは77cmである。壁溝は検出された壁全てで検出され、幅22~44cm、深さ8~11cmである。ピットは26本と多数検出された。P1~P26の深さは44cm、31cm、42cm、20cm、20cm、24cm、25cm、20cm、37cm、26cm、27cm、28cm、16cm、18cm、18cm、30cm、23cm、23cm、16cm、13cm、22cm、28cm、10cm、

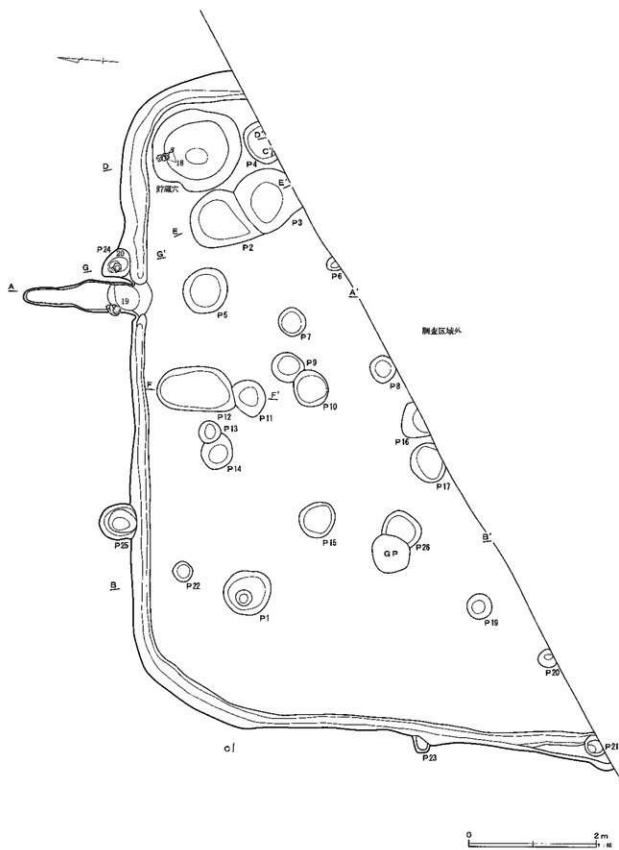
24cm、11cm、20cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器・須恵器片が多数に出土した。殆どが小片で、特に土師器はやや摩滅しており、接合率は悪かった。

図示可能な遺物は、土師器坏13・碗1・甕3・小型甕1、須恵器高坏1・小型壺1、滑石製白玉2・滑石製管玉1、鉄製品として小札1・不明鉄製品1、土錘61点であった。

土師器坏には時期差があると思われるが、坏の中には、口径が11cm前後の有段口縁坏(3~5・8)があり、口縁部の段が形骸化し、沈線状になるなど、相対的に新しい様相のものが多く、これらの坏類が、15の須恵器高坏、16の須恵器壺、18の土師器甕とともに、本住居跡に伴う遺物であった可能性がある。

15の須恵器高坏は、口縁部の一部と脚部部の大半を欠損していた。口径は10.6cmと小型である。坏底部はやや丸く、口縁部はやや外傾しながら立ち上がる。口縁部と底部の境界の稜は突出せず、沈線状になっていた。内面口縁部直下も、工具もしくは指

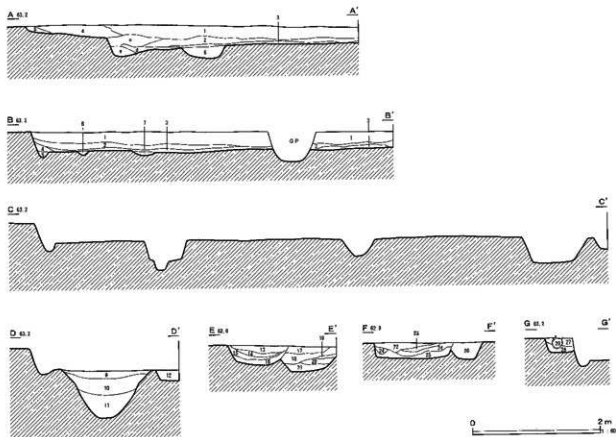


第441图 第323号住居跡 (1)

(爪) ナデにより沈線状となっていた。脚部は、2個所に2段の透孔が穿たれていた。胎土は緻密で、混入粒子には大粒の砂粒を含まないが、黒色粒子(吹き出し状)を多く含んでいた。また、内面には自然釉が認められた。

16は須恵器壺である。丸底で、やや外傾しながら

も直線的に立ち上がる口縁部を有する。全体的に轆轤目は顕著で、胴部下部以下は回転ヘラケズリされる。胴部と肩部の接合部は特に強くナデられ、境界部分は沈線状となっていた。胎土には大粒の砂粒・小礫を僅かに含む。また、極めて細かい白色粒子を多く含んでいた。



S J 3 2 3

- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子・焼上粒下少
- 2 褐色 (10YR4/6) 炭土粒子・炭化粒子
- 3 赤黄褐色 (10YR4/2) 黄褐色シルトブロック多 炭化粒子少
- 4 褐色 (10YR4/6) 炭化粒子・白色微粒子少
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色シルトブロック多
- 6 黄褐色 (10YR5/6) 炭化粒子少
- 7 暗褐色 (10YR5/3) 炭化粒子・焼上粒下少 (主柱穴)
- 8 暗褐色 (10YR4/4) 炭化粒子少
- 9 褐色 (10YR4/6) 炭化粒子・焼上粒下少
- 10 暗褐色 (10YR4/4) 炭化粒子・焼上粒下・黄褐色ブロック少
- 11 暗褐色 (10YR4/3) 黄褐色ブロック少
- 12 暗褐色 (10YR4/3) 炭化粒子・焼上粒子多
- 13 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子少
- 14 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子多
- 15 褐色 (10YR4/6) 炭土粒子少
- 16 暗褐色 (10YR4/3) 黄褐色シルトブロック多
- 17 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子少
- 18 褐色 (10YR4/6) 炭化粒子・焼上粒下多

- 19 黄褐色 (10YR5/6) 黄褐色シルトブロック多
- 20 暗褐色 (10YR5/3) 炭化粒子少
- 21 暗褐色 (10YR4/4) 黄褐色シルトブロック多
- 22 褐色 (10YR4/4) 焼上粒子・炭化粒子少
- 23 暗褐色 (10YR4/3) 焼上ブロック多
- 24 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 黄褐色シルトブロック多
- 25 暗褐色 (10YR4/6) 黄褐色シルトブロック多
- 26 褐色 (10YR4/6) 焼上粒子少
- 27 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子少
- 28 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 炭化粒子少
- 29 暗褐色 (10YR4/4) 炭化粒子少

カマド

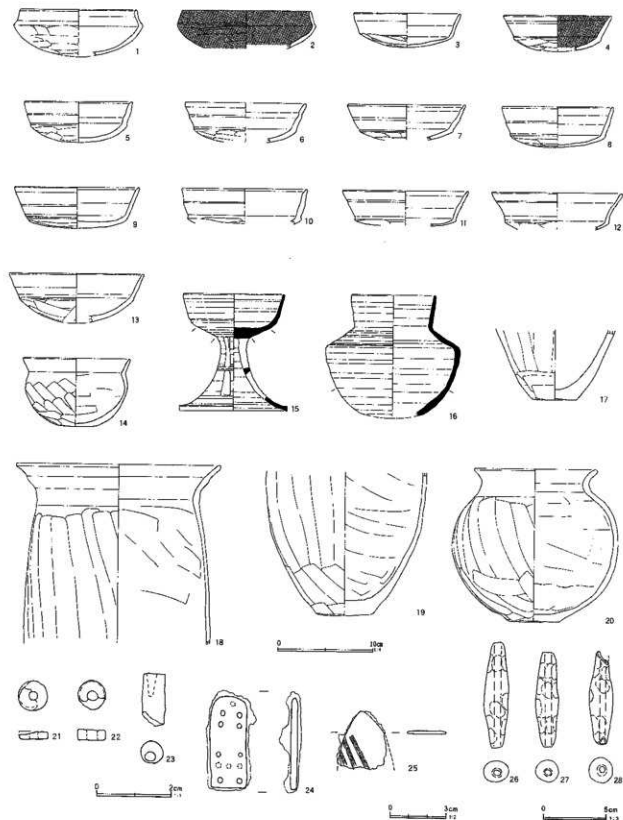
- a 褐色 (10YR4/4) 焼上ブロック多 炭化粒子少
- b 褐色 (10YR4/4) 黄褐色シルトブロック・炭化粒子少
- c 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色シルトブロック・炭化粒子多
- d 暗褐色 (10YR3/3) 焼上ブロック・炭化粒子少
- e 暗褐色 (10YR3/4) 炭化粒子多

第442図 第323号住居跡 (2)

23は、滑石製の管玉である。一端を欠損していた。  
端部的一方から孔を穿っているが、貫通していない

ため、未製品と考えられる。

24は、小札と考えられる。一端が丸みをもつ長方

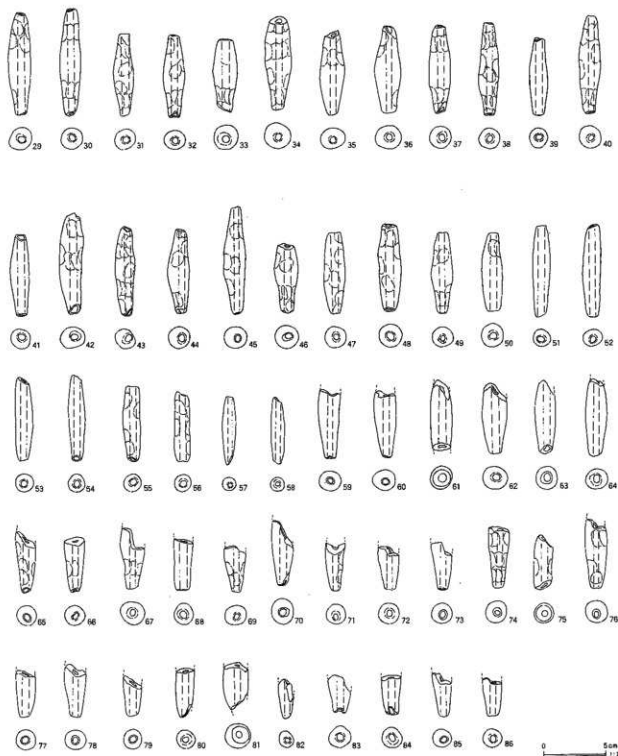


第443図 第323号住居跡出土遺物(1)

形で、8つの円孔が確認できた。

物が付着していた。

25は不明鉄製品である。薄い鉄片であるが、木質



第444図 第323号住居跡出土遺物(2)



第323号住居跡出土遺物観察表 (第443回)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(12.1)	4.8		ABE	良好	橙	25	P23	
2	土師環	(13.4)	4.0		BDE	良好	黄灰	25	B区	
3	土師環	11.2	3.5		AB	良好	橙	55	AK	
4	土師環	11.2	3.6		BDE	良好	にぶい黄橙	40	P2-P3	内面黑色処理
5	土師環	11.2	4.4		ABDE	良好	褐灰	55	A区	
6	土師環	(12.6)	4.1		ABE	良好	にぶい橙	25	D区	内面磨耗する
7	土師環	(12.3)	3.7		ABE	良好	明黄褐	25	覆土	
8	土師環	11.6	4.2		ABDE	良好	にぶい黄橙	100	覆土	
9	土師環	13.1	4.1		ABDE	良好	橙	75	A区	
10	土師環	13.0	3.7		ABE	良好	橙	60	A区	
11	土師環	(13.0)	3.7		ABE	良好	橙	25	A区	
12	土師環	13.6	3.8		ABEG	良好	にぶい黄橙	80	床	内面保付着
13	土師環	14.0	5.1		ABDE	良好	橙	50	A区	内面保付着
14	土師碗	11.2	6.9	4.2	BCJL	良好	橙	95	覆土	
15	須恵高坏	10.6	12.2		BF	良好	灰白	50	B区	新西産 脚部透かしあり 内面自然焼付着
16	須恵壺	8.7	12.7		AB	良好	オリーブ灰	55	B区・D区	産地不明
17	土師甕		7.4	4.6	BDEJL	良好	橙	30	C区	
18	土師甕	21.5	18.8		ABDE	良好	橙	70	貯蔵穴	
19	土師甕		15.0	6.0	BCDL	良好	にぶい黄橙	55	+6.5cm	
20	土師小型甕	12.7	16.0	5.4	ABEJL	良好	橙	95	覆土	外面保付着
21	口玉	直径0.80cm	厚さ(0.20)cm	孔径0.20cm			重さ0.19g		覆土	滑石製 欠損有り
22	口玉	直径0.75cm	厚さ(0.30)cm	孔径0.30cm			重さ0.27g		覆土	滑石製 欠損有り
23	管土	残存長1.35cm	直径0.60cm	孔径0.30cm			重さ0.86g		覆土	滑石製 欠損していない
24	小孔	現存長4.80cm	幅1.95cm	厚さ0.30cm			重さ14.78g		D区	
25	不明磁器品	現存長3.10cm	幅2.10cm	厚さ0.15cm			重さ5.86g		覆土	刃物の刃先か? 木製物が付着

第323号住居跡出土土師器観察表 (第443-444回)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
26	8.20	1.90	0.50	20.13	Ba II	A	浅黄橙	100	A区
27	7.40	1.75	0.50	17.94	Ba III	C	にぶい黄橙	100	A区
28	7.30	2.00	0.45	21.64	Ca III	C	にぶい黄橙	95	C区
29	7.95	1.90	0.60	19.55	Ca II	C	浅黄橙	100	A区
30	8.30	1.60	0.55	17.55	Ba II	A	橙	100	D区
31	6.40	1.75	0.55	10.67	Ca IV	A	浅黄橙	100	B区
32	6.45	1.65	0.50	11.08	Ca IV	C	浅黄橙	100	P1
33	5.70	2.00	0.55	17.41	Ca IV	B	にぶい黄褐	100	A区
34	7.25	2.05	0.55	24.80	Ca III	C	橙	100	B区
35	6.60	2.00	0.50	15.70	Ca III	A	黄橙	100	
36	6.75	2.10	0.50	20.69	Ca III	A	にぶい黄橙	100	B区
37	6.85	1.70	0.55	16.18	Ca III	A	にぶい黄橙	100	A区
38	7.20	1.65	0.55	15.67	Ca III	A	にぶい橙	100	A区ベルト
39	6.00	1.55	0.55	9.32	Ba IV	B	にぶい黄橙	100	C区
40	7.60	1.90	0.50	17.62	Ba II	A	浅黄橙	100	A区
41	6.35	1.60	0.60	11.26	Ca IV	C	橙	100	A区
42	7.85	1.90	0.55	21.91	Ba II	A	にぶい黄橙	90	B区
43	7.00	1.60	0.60	12.44	Ba III	A	浅黄橙	100	A区
44	6.55	1.70	0.55	13.46	Ca III	C	浅黄橙	100	A区
45	8.35	1.75	0.50	18.33	Ca II	C	浅黄橙	100	A区
46	5.40	1.85	0.60	13.56	Cb V	C	にぶい黄橙	100	A区
47	6.30	1.65	0.50	17.03	Ba IV	B	にぶい黄橙	100	A区
48	6.85	1.80	0.65	17.95	Ba III	C	にぶい黄橙	100	B区
49	6.30	1.65	0.45	11.60	Ca IV	C	浅黄橙	95	A区
50	6.10	1.85	0.60	15.09	Ca IV	A	橙	100	B区
51	7.10	1.40	0.55	11.21	Aa III	C	浅黄橙	100	A区

第323号住居跡出土土器観察表 (第444図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
52	7.20	1.50	0.55	11.91	A a III	B	にぶい黄橙	100	B区
53	6.50	1.35	0.45	11.53	B a III	C	にぶい黄橙	100	B区
54	6.70	1.40	0.55	9.02	B a III	A	浅黄橙	100	B区
55	5.85	1.40	0.55	9.51	A a IV	C	灰灰	100	B区
56	5.45	1.40	0.55	7.98	A a V	C	にぶい黄橙	100	D区
57	5.30	1.05	0.35	4.32	A a V	A	浅黄橙	100	A区
58	5.20	1.10	0.35	5.09	A a V	A	にぶい黄橙	100	D区
59 (5.40)	1.70	0.45	11.81	C a III	C	浅黄橙	70	A区	
60 (5.20)	1.80	0.50	10.65	C a III	C	浅黄橙	70	A区	
61 (5.50)	1.80	0.65	12.40	—	A	灰黄褐	65	P7	
62	5.45	2.00	0.60	15.61	B a V	A	にぶい黄橙	85	A区
63	5.70	1.80	0.65	13.12	B a IV	A	にぶい黄橙	90	C区
64 (6.05)	1.70	0.60	13.71	B a III	A	浅黄橙	90	P1	
65 (4.80)	1.60	0.50	7.86	C a III	C	浅黄橙	50	B区	
66 (4.30)	1.55	0.50	7.63	C a III	A	浅黄橙	50	A区	
67 (4.70)	2.00	0.50	10.96	C a III	A	浅黄橙	50	A区	
68 (4.05)	1.65	0.60	8.56	—	A	灰黄褐	45	D区	
69 (3.60)	1.75	0.50	6.37	—	C	浅黄橙	35	A区	
70 (5.05)	2.00	0.55	10.86	C a III	B	黒褐	55	C区	
71 (3.75)	1.55	0.50	5.57	C a III	—	浅黄橙	40	A区	
72 (3.35)	1.65	0.50	7.23	C a IV	A	浅黄橙	45	B区	
73 (3.70)	1.60	0.55	6.86	C a III	C	浅黄橙	40	A区	
74 (4.80)	1.75	0.40	10.90	C a II	C	浅黄橙	50	A区	
75 4.30	1.55	0.50	7.85	A a V	B	浅黄橙	100	C区	
76 (5.40)	1.75	0.45	13.74	C a III	A	浅黄橙	70	A区	
77 (3.65)	1.55	0.55	7.67	B a IV	C	浅黄橙	50	B区	
78 (4.10)	1.65	0.50	7.04	C a IV	B	灰黄褐	55	B区	
79 (3.20)	1.50	0.60	4.70	—	B	浅黄橙	35	B区	
80 (3.80)	1.50	0.50	6.48	B a III	B	灰黄褐	55	C区	
81 (3.65)	1.95	0.50	11.68	—	A	橙	—	B区	
82 (3.05)	1.30	0.40	3.32	—	B	黒褐	20	カマド	
83 (2.90)	1.75	0.60	4.43	—	A	灰白	20	B区	
84 (3.00)	1.60	0.60	5.61	—	C	浅黄橙	35	A区	
85 (3.35)	1.50	0.50	5.07	—	C	浅黄橙	40	A区	
86 (2.95)	1.50	0.55	4.66	—	C	浅黄橙	30	B区	

## 第324号住居跡 (第445・446図)

G・H-31グリッドに位置する。南半を第323号住居跡に切られていた。検出された規模は、東西2.00m、南北0.79mで、深さは0.12~0.20mである。主軸方位はN-9°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。覆土の観察は出来なかった。

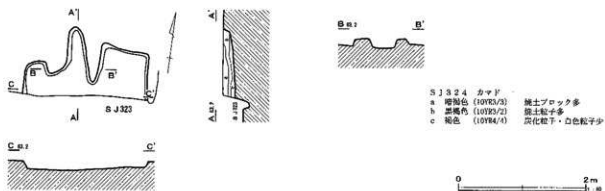
カマドは北壁中央より西に設置される。燃焼部の掘り込みはなく、そのまま煙道部となる。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土した。何れも小片で、図示可能な遺物は、土師器片1点であった。



0 10cm

第445図 第324号住居跡出土遺物



第446図 第324号住居跡

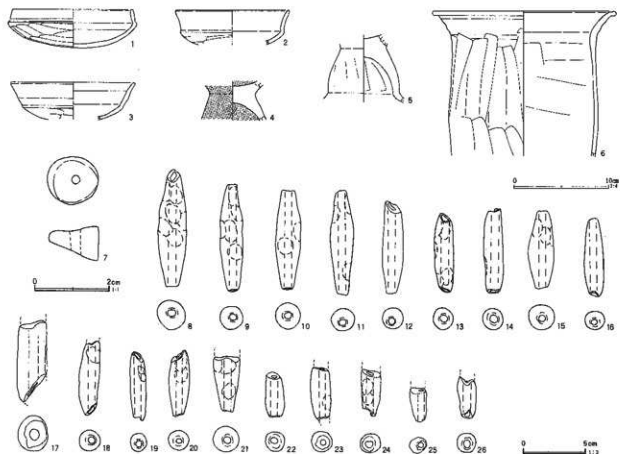
第324号住居跡出土遺物観察表 (第445図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色调	残存	出土位置	備考
1	土師環	(12.0)	3.8		ABDE	良好	橙	20	覆七	

第325号住居跡 (第447・448図)

H-30-31グリッドに位置する。第319-320-322号住居跡に切られ、第314-329-406号住居跡・第205-

207号土坑を切る。平面形は正方形に近いと考えられるが、北壁が飛び出す傾向が見られる。規模は、南北7.84m、東西7.47m、深さは0.23~0.38mである。



第447図 第325号住居跡出土遺物

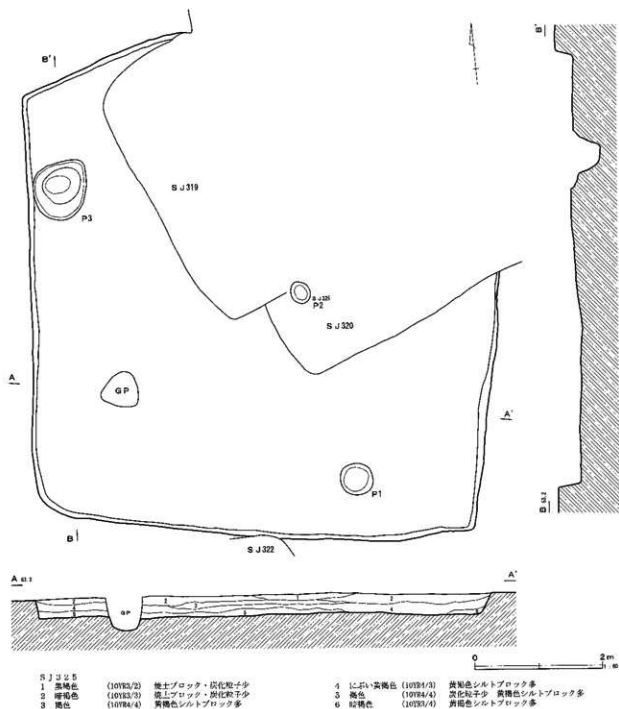
主軸方位は西壁でN-5°-Eを指す。

床面は起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。ピットは3本検出され、P1～P3の深さは21cm、30cm、42cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器が多く出土したが、小片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環3・高環2・甕1、滑石製白玉1、土鍾19点であった。



第448図 第325号住居跡

第325号住居跡出土遺物観察表 (第447図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	上師杯	12.6	4.1		A B E	良好	明赤褐	70	C区	外面煤付着
2	土師杯	(12.0)	3.6		A B E	良好	明赤褐	20	覆土	
3	上師杯	(13.0)	3.9		A B D	不良	灰黄褐	20	A区	
4	土師高杯		4.1		A B E	良好	橙	60	B区	内外面赤彩
5	上師高杯		7.1		A B E J	良好	明赤褐	40	覆土	
6	土師甕	19.2	15.2		A B J	良好	赤褐	60	A区	内外面煤付着 滑石製 欠根有り
7	白瓦	直径1.35cm	厚さ(0.90)cm						A区	

第325号住居跡出土土鏝観察表 (第447図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎上	色調	残存	備考
8	9.20	2.30	0.70	34.49	B a I	A	にぶい黄橙	90	B区
9	8.40	1.90	0.60	22.19	B a II	A	褐灰	100	C区
10	7.80	2.00	0.60	26.41	B a II	A	橙	95	A区
11	8.30	1.80	0.60	18.69	B a II	A	橙	100	B区
12	7.20	1.70	0.55	18.25	B a III	A	にぶい橙	90	A区
13	6.20	1.70	0.60	13.09	B a IV	A	にぶい黄橙	90	A区
14	6.60	1.70	0.60	14.43	B a III	A	にぶい黄橙	100	B区
15	6.10	2.10	0.50	18.49	B a IV	A	灰白	100	A区
16	5.20	1.60	0.50	12.14	B a V	A	にぶい黄橙	100	A区
17	(6.40)	2.80	0.90	37.26	—	A	淡黄橙	—	A区
18	5.90	1.70	0.60	12.52	B a IV	A	灰黄褐	80	B区
19	5.30	1.40	0.50	8.19	B a V	A	褐灰	100	A区
20	5.20	1.60	0.50	11.30	B a V	A	褐灰	80	A区
21	(4.30)	2.10	0.60	14.93	C a II	A	灰黄褐	50	A区
22	3.50	1.50	0.50	6.97	B a VI	A	橙	100	A区
23	(4.20)	1.60	0.50	10.33	—	A	にぶい橙	—	A区
24	(3.60)	1.60	0.60	7.19	B a	A	灰黄褐	—	—
25	(2.70)	1.35	0.40	3.62	B a	A	褐灰	—	A区
26	(3.20)	1.50	0.70	6.33	B a	A	橙	—	—

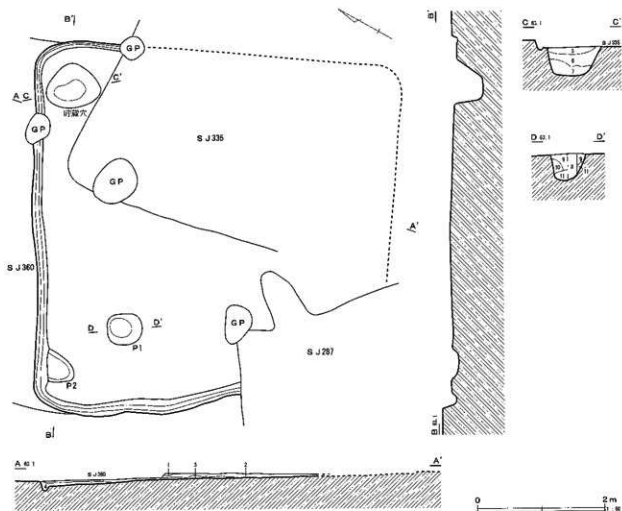
## 第327号住居跡 (第449図)

H-29-30グリッドに位置する。第287-360号住居跡に切れ、第335-359-429号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。また、周辺の住居跡と同時に調査したため、南壁と西壁の一部は検出できなかった。平面形は正方形と考えられ、東西が5.80m、南北も5.8m前後と思われる。深さは0.08~0.14mである。主軸方位は北壁でN-59°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は明き気味に立ちあがる。

カマドは検出されなかった。貯蔵穴は北東コーナーに設けられ、84×76cmの不整楕円形で、深さは45cmである。壁溝は検出された壁で全周し、幅10~24cm、深さ7~10cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは44cm、9cmである。

遺物は、土師器甕の胴部片がやや多く出土したが、図示可能な遺物はなかった。



- S J 3 2 7
- |                    |                  |
|--------------------|------------------|
| 1 褐色 (10YR4/4)     | 粘質粘土ブロック多        |
| 2 褐色 (10YR1/6)     | 粘質粘土ブロック主体 しまり強  |
| 3 赤褐色 (10YR3/4)    | 灰白色粘質土 地山ブロック残か  |
| 4 褐色 (10YR4/4)     | 地山多量 灰土層残存弱      |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂質粘土ブロック・白色スコリア多 |

- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 6 褐色 (10YR4/4)     | 粘質粘土ブロック・壁上ブロック少    |
| 7 にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 灰白色粘土ブロック主体 粘性強     |
| 8 赤褐色 (10YR3/2)    | しまり しまり強い           |
| 9 黄褐色 (10YR3/3)    | 灰白色粘土ブロック・粘土層多・灰化層多 |
| 10 赤褐色 (10YR3/2)   | 1層か粘土・粘土・灰化層多       |
| 11 灰黄褐色 (10YR4/2)  | 赤褐色粘質粘土ブロック主体 壁上編か  |

第449図 第327号住居跡

### 第328号住居跡 (第450-451図)

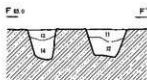
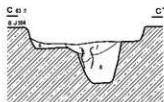
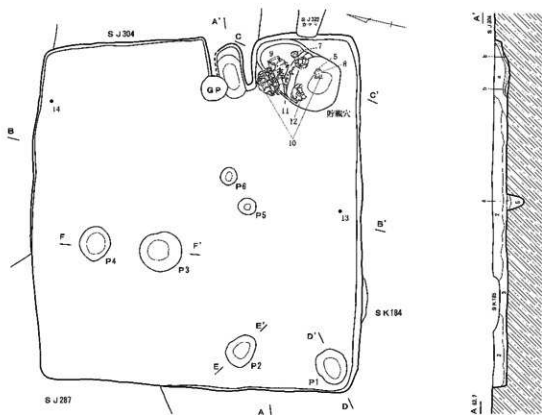
H・I-30グリッドに位置する。第287・322・330号住居跡・第184・185号土坑に切られ、第332・334・335号住居跡を切る。平面形は正方形で、東西5.49m、南北5.27m、深さは0.21~0.24mである。主軸方位はN-77°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。左袖

はグリッドピットに壊されていた。燃焼部の掘り込みは僅かで、段を付けて急激に立ち上がる。上層断面に明瞭な焼土層が観察された。貯蔵穴はカマド右に設けられ、150×80cmの隅丸長方形で、深さは65cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは6本検出され、P1~P6の深さは17cm、16cm、42cm、48cm、26cm、5cmである。

遺物は、覆土および貯蔵穴内から、古墳時代後期の土師器片が多く出土した。覆土中の遺物は小片が

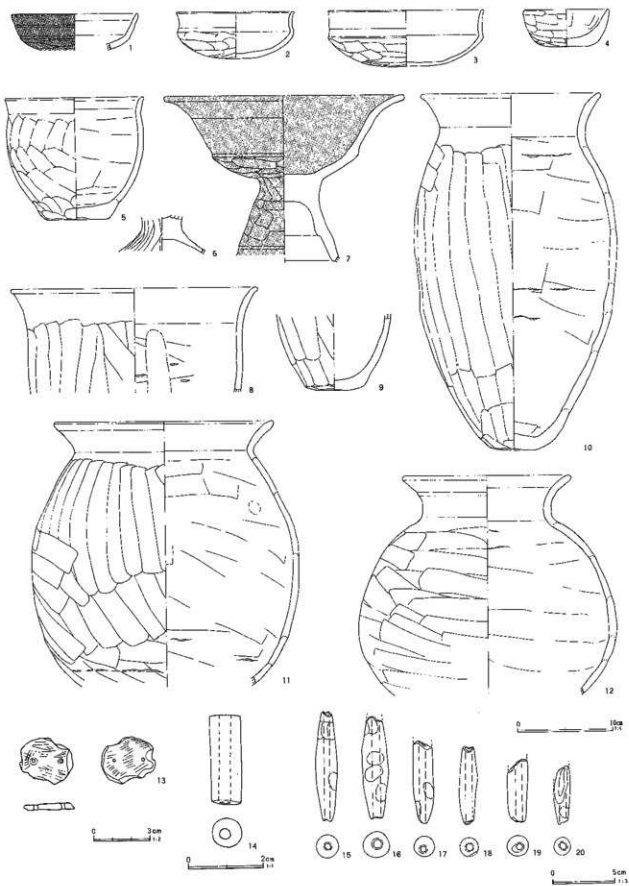


- S J 330  
 1 にぶい黄褐色 (10TR1/3) 陥凹 黄褐色土上・褐色色粒子多
- S J 328  
 2 黄褐色 (10TR2/3) 黄褐色土多 炭化粒了少  
 3 暗褐色 (10TR3/3) 黄褐色土多 炭化粒子・焼土粒了少  
 4 暗褐色 (10TR3/2) 黄褐色土多 炭化粒了少  
 5 暗褐色 (10TR3/3) 黄褐色土多 炭化粒子少  
 6 褐色 (10TR4/4) 炭化粒了少  
 7 暗褐色 (10TR3/4) 黄褐色土多 炭化粒子少  
 8 暗褐色 (10TR3/2) 炭化粒子・焼土粒了少  
 9 暗褐色 (10TR3/3) 黄褐色土多 炭化粒了少  
 10 暗褐色 (10TR3/4) 黄褐色土多  
 11 暗褐色 (10TR2/3) 黄褐色土多 炭化粒子やや多 焼土粒了少  
 12 にぶい黄褐色 (10TR4/3) 黄褐色土多  
 13 にぶい黄褐色 (10TR4/3) 黄褐色土多 炭化粒子多 焼土粒了少  
 14 暗褐色 (10TR3/4) 炭化粒子多 焼土粒了少

- サマP  
 a 暗褐色 (10TR3/4) 黄褐色土多 炭化粒子少 炭化粒子少  
 b 褐色 (10TR1/4) 焼土粒了少



第450图 第328・330号住居跡



第451图 第328号住居跡出土遺物



多く、殆ど接合しなかった。図示した土師器のうち、  
 坏以外の甕・瓶・高坏は概ね貯蔵穴内から出土したも  
 のである。

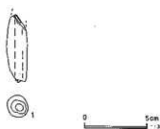
図示可能な遺物は、土師器坏4・小型甕1・高坏  
 2・瓶1・甕3・壺1、滑石製有孔円板1・碧玉製管玉  
 1、土鍾6点であった。

### 第330号住居跡 (第450・452図)

H・I-30グリッド周辺に位置すると考えられる。  
 第328号住居跡の土層断面に床面のみが検出され、  
 平面形は検出できなかった。第328号住居跡より新

しいが、他の遺構との重複関係は不明瞭である。規  
 模等は全く不明である。

遺物は、土鍾が1点出土したのみである。



第452図 第330号住居跡出土遺物

### 第328号住居跡出土遺物観察表 (第451図)

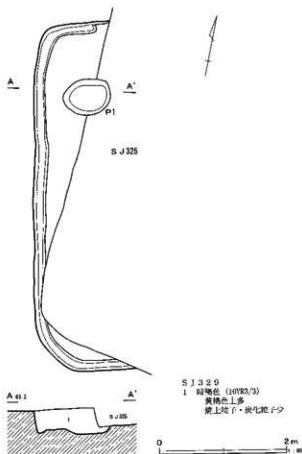
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(13.2)	3.8		A H G J	普通	にぶい黄褐色	15	B区	外面黒色処理
2	土師坏	(12.3)	4.9		A B D E	普通	明黄褐色	30	B区	
3	土師坏	16.2	5.9		B E G	良好	明赤褐色	65	B区	
4	土師坏	8.7	3.9	5.8	A B E G	良好	明黄褐色	90	B区	
5	土師小型甕	14.4	12.8	6.4	A B E G I	良好	明赤褐色	80	貯蔵穴	外面やや磨耗
6	土師高坏		4.0		A B E	良好	橙	65	B区	
7	土師高坏	25.0	17.5		B E J	良好	浅黄橙	70	+5.9cm	内外面赤彩
8	土師瓶	(25.4)	11.0		A B G	良好	橙	35	貯蔵穴	外面煤付着
9	土師甕		8.0	(6.2)	A B J I	普通	明赤褐色	35	+3.3cm	内外面煤付着
10	土師甕	18.6	37.3	5.2	A B E J I	普通	にぶい黄橙	90	貯蔵穴	
11	土師甕	(22.8)	27.7		A B E J L	良好	黄橙	45	+9.6cm	
12	土師壺	17.3	23.0		A B J	良好	橙	55	貯蔵穴	
13	石製板造品	直径2.80cm	厚さ0.30cm	孔径0.20cm					床	滑石製 有孔円板
14	管玉	残存長2.40cm	直径0.80cm	孔径0.30cm					床	碧玉製

### 第328号住居跡出土土鍾観察表 (第451図)

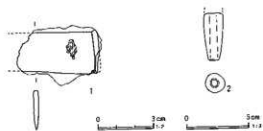
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
15	8.55	1.80	0.50	22.52	C a I	A	橙	100	
16	(8.00)	2.10	0.55	29.10	C a II	A	にぶい黄橙	95	B区
17	(6.95)	1.60	0.45	17.26	B a II	B	灰黄褐色	80	A区
18	6.05	1.50	0.50	9.04	B a IV	A	にぶい橙	95	A区
19	(4.90)	1.65	0.45	12.78	B a III	A	にぶい褐色	70	B区
20	(4.55)	(1.40)	0.60	5.21	B a IV	A	浅黄橙	55	B区

### 第330号住居跡出土土鍾観察表 (第452図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	(5.30)	1.70	0.60	11.87	—	A	褐色	—	



第453図 第329号住居跡



第454図 第329号住居跡出土遺物

第329号住居跡出土遺物観察表 (第454図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	鎌(鋸形)	現存長4.40cm	背幅0.25cm	刃幅2.10cm					覆土	基部片 両面木質物残存

第329号住居跡出土土錘観察表 (第454図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
2	(3.75)	1.60	0.60	7.96	Ba III	A	にぶい黄粉	55	

第329号住居跡 (第453-454図)

H-30グリッドに位置する。住居跡の大半を第325号住居跡に切られ、第406号住居跡を切る。検出された規模は、南北5.47m、東西1.04mで、深さは0.21~0.31mである。主軸方位は西壁でN-14°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は検出された壁でほぼ全周し、幅18~20cm、深さ4~7cmである。ピットは1本検出され、深さは7cmである。

遺物は、古墳時代後期の上師器片が僅かに出土した。坏の小片には、比企型坏の口縁部片も含まれていたが、図示できなかった。

図示可能な遺物は、鉄製品として鎌1、土錘1点であった。

第331号住居跡 (第455-456図)

H-28・29、I-29グリッドに位置する。第284・287・296・297・347号住居跡に切られ、第429号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。平面形は東西に長い長方形で、長軸5.68m、短軸4.52m、深さは0.04~0.06mと浅い。主軸方位はN-58°-Eを指す。

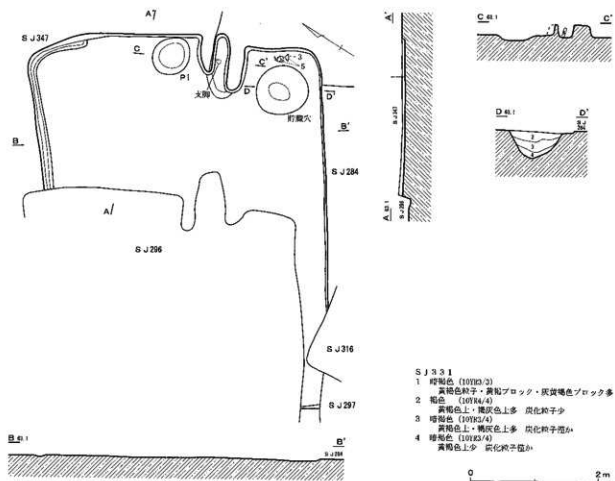
床面は既に消失していた可能性が高く、覆土は貼床の埋土と思われる。壁の状態は不明瞭である。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部の幅は狭く、掘り込みは僅かである。川原石利用の支脚が立位で出土した。貯蔵穴はカマド右に設け

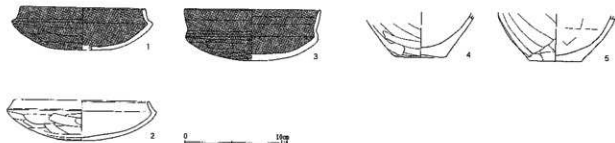
られ、径80cm円形で、深さは40cmである。壁溝は北壁で検出され、幅12~20cm、深さ2~3cmである。ピットはカマド左に1本検出され、深さは8cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器杯・甕類の破片がやや多く出土した。特に甕類は胴部片が多く、口縁部片が殆ど出土しなかった。

図示可能な遺物は、土師器杯3・甕2点であった。



第455図 第331号住居跡



第456図 第331号住居跡出土遺物

- S J 3 3 1
- 1 輝褐色 (10YR3/2)  
黄褐色砂子・黄褐色ブロック・灰黄褐色ブロック多
  - 2 褐色 (10YR4/4)  
黄褐色上・黄褐色上多 炭化砂子少
  - 3 暗褐色 (10YR2/4)  
黄褐色上・黄褐色上多 炭化砂子適量
  - 4 暗褐色 (10YR2/4)  
黄褐色上少 炭化砂子僅量

0 2m

第331号住居跡出土遺物観察表 (第456図)

番号	器種	L径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(13.2)	4.5		A B E G	良好	橙	30	覆土	内外面黒色処理
2	土師環	14.2	4.2		A B E G	良好	橙	65	覆土	
3	土師環	14.4	5.4		A B E G	良好	浅黄橙	85	+5.7cm	内外面黒色処理
4	土師甕		4.8	5.5	A B E G L	良好	明赤褐	75	P1	内面煤付着
5	土師甕		5.0	5.4	A B E G	良好	にぶい橙	70	+5.7cm	

第332号住居跡 (第457・458図)

I-29グリッドに位置する。第316・328号住居跡と重複し、本住居跡が古い。検出された規模は、北西壁から南東壁が3.91m、北東壁から南西方向は2.74m、深さが0.13~0.15mである。主軸方位はN-49°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北東壁中央に設置される。煙道部が南に振っていた。カマド周辺は遺構確認時の平面形が不明瞭で、焼土が検出された状態でカマドと判断した。土師器甕(16)が潰れた状態で出土し、その下から支脚に転用したと考えられる環部を欠いた土師器高環(12)が正位で出土した。覆土の観察は出来なかった。貯蔵穴は東コーナーに設けられ、80×104cm

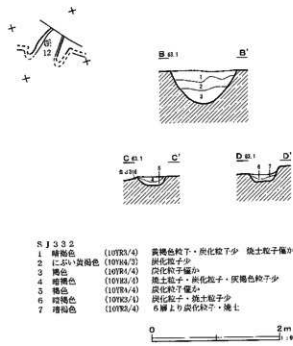
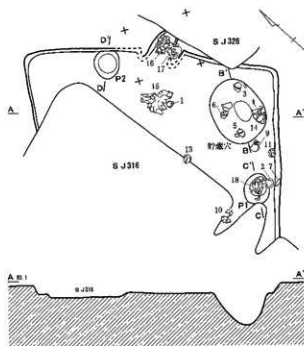
の楕円形で、深さは50cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは13cm、12cmである。

遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器が多量に出土した。小破片が多かったが、完形に近い個体も多く出土した。

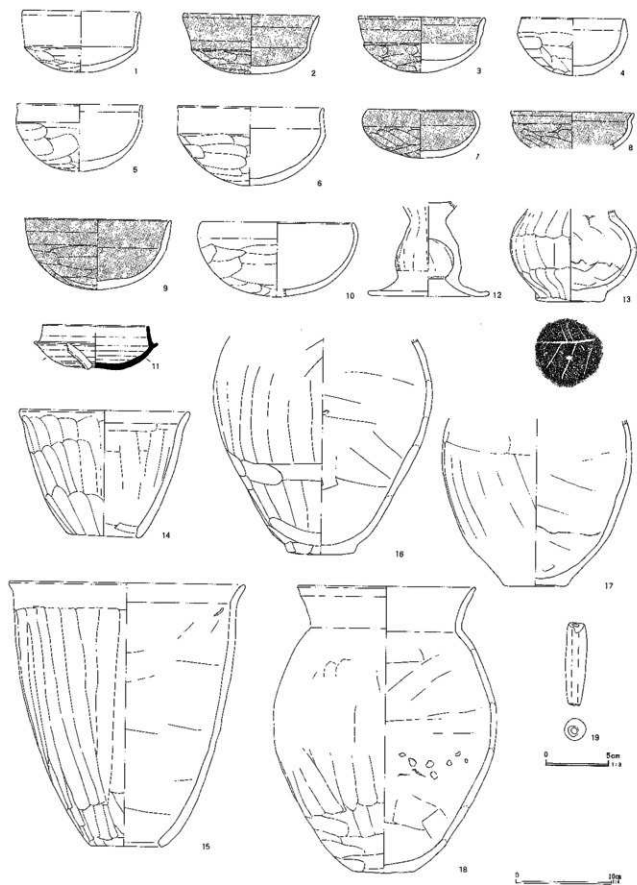
図示可能な遺物は、土師器環10・高環1・小型壺1・甕2・甕3、須惠器環1、土鍾1点であった。

土師器環類は、本遺跡出土の遺物の中でも最古相を示す土器群である。和泉系からの系譜を引くと思われる椀状の環が共伴する

11の須惠器環は、口縁部が著しく歪み、口径が11cm~12cmの楕円形となっている。底部はやや深身で、口縁部は短く立ち上がる。底部には焼成時に付着し



第457図 第332号住居跡



第458图 第332号住居跡出土遺物

たと思われる、別個体の環口縁部片が融着していた。強い灰色であった。焼成は良好である。  
胎上には細かな砂粒を多く含み、色調は黒色身の

第332号住居跡出土遺物観察表 (第458図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	12.3	6.4		ABE	良好	にぶい橙	90	床	
2	土師環	14.2	6.2		ABCEJ	良好	明赤褐	100	-3.4cm	内外面赤彩
3	土師環	13.2	5.9		ABEG	良好	橙	95	貯蔵穴	内外面赤彩
4	土師環	10.8	6.0		ABCEJL	良好	にぶい橙	95	貯蔵穴	
5	土師環	13.1	7.0		ABEG	良好	明褐	75	貯蔵穴	
6	土師環	15.2	8.2		ABDJ	普通	にぶい赤褐	80	貯蔵穴	内外面煤付着
7	土師環	11.0	5.1		ABDEG	良好	にぶい橙	95	+15.8cm	床
8	土師環	(12.8)	3.9		ABE	良好	明褐	35	覆上	内外面赤彩
9	土師環	15.3	7.3		ABCEG	良好	明赤褐	90	-2.5cm	内外面赤彩
10	土師環	16.0	7.8		ABEG	普通	橙	40	床	外面やや磨滅
11	須恵環	11.0	4.7		ABCH	良好	灰	80	床	未産
12	土師高環		9.9	12.5	ABCEG	良好	にぶい褐	95	カマド	内面煤付着
13	土師小型壺		9.7	7.2	ABEGJ	良好	赤褐	85	床	底部木炭痕 接合痕明瞭
14	土師瓶	17.8	13.3	7.6	ABCEL	良好	にぶい黄橙	100	貯蔵穴	床
15	土師壺	24.8	27.6	7.5	ABCEL	良好	明褐	90	床	外面煤付着
16	土師壺		22.8	6.8	ABCEL	普通	にぶい黄褐	60	カマド	
17	土師壺		17.5	6.8	ABEL	良好	赤褐	65	カマド	外面磨耗している
18	土師壺	(18.6)	30.0	6.5	ABDEJ	良好	橙	40	+3.3cm	外面やや磨滅

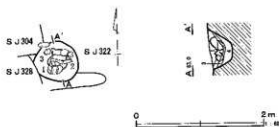
第332号住居跡出土土器観察表 (第458図)

番号	長さ	径	口径	高さ(φ)	分類	胎土	色調	残存	備考
19	6.50	1.70	0.50	18.27	Ba II	A	橙	95	

第333号住居跡 (第459・460図)

I-30グリッドに位置する。第322・334号住居跡と重複し、本住居跡が古い。貯蔵穴が検出されたのみで、遺物の出土状態から住居跡と判断した。貯蔵穴は71×64cmで、深さは38cmである

遺物は、古墳時代後期の土師器甕2・甕底部1点が出土した。

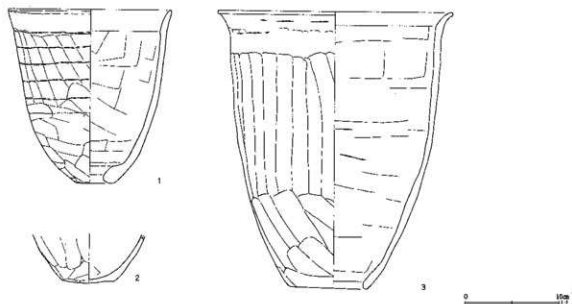


- S J 3 3 3
- 1 にぶい黄褐色 (10YR/3) 炭化粒子少量
  - 2 にぶい黄褐色 (10YR/3) 炭化粒子僅少
  - 3 黄褐色 (10YR/2) 炭化粒子・炭土粒子極多
  - 4 にぶい黄褐色 (10YR/4) 炭化粒子少 炭土粒極多

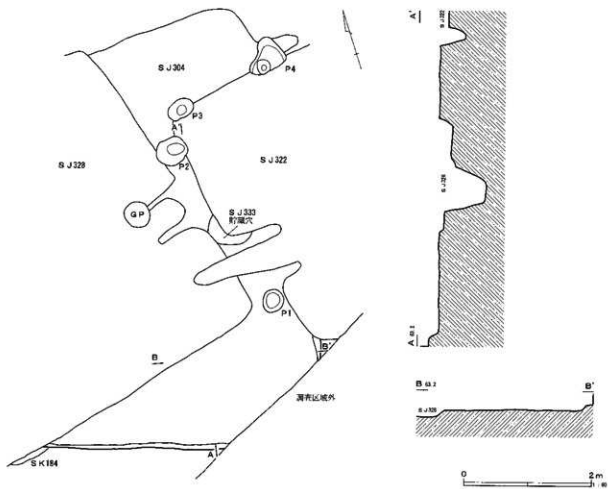
第459図 第333号住居跡

第333号住居跡出土遺物観察表 (第460図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師小型甕	17.2	18.3	4.2	ABEJ	良好	赤橙	100	貯蔵穴	外面煤付着
2	土師瓶	24.8	29.3	8.0	ABEJ	良好	浅黄橙	95	貯蔵穴	外面煤付着
3	土師壺		5.2	5.6	BEJL	良好	明赤褐	50	貯蔵穴	



第460图 第333号住居跡出土遺物



第461图 第334号住居跡

### 第334号住居跡 (第461図)

I-30グリッドに位置する。第304・322・328号住居跡-第183号土坑に切られ、第333号住居跡を切る。南東コーナーは調査区域外にある。住居跡と住居跡の間に床面を確認した状態で、南壁の一部とごく僅かな東壁を検出した。検出された規模は、南壁2.94m、東壁0.31m、深さは0~0.08mと極めて浅い。主軸方位は南壁でN-75°-Eを指す。

床面はやや起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。覆土の観察は出来なかった。

カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。ピットは4本検出された。位置や他の住居跡との関係から本住居跡のものとは判断した。P1~P4の深さは15cm、15cm、14cm、14cmである。

遺物は、土師器の小片が10数点のみで、図示可能遺物はなかった。

住居跡と重複し、その何れより古い。用地の関係で2回に分けて調査された。南壁は検出できなかった。平面形はやや歪んだ正方形で、東西は3.92m、南北も4.0m前後と考えられる。深さは0.02~0.07mと浅い。主軸方位はN-90°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁の状態は不明瞭である。覆土は1層で、第327号住居跡構築時に埋め戻されたものと考えられる。

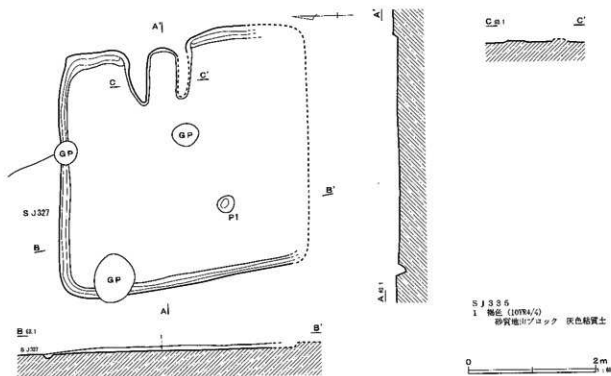
カマドは東壁に設置される。燃焼部の掘り込みはなく、急激に立ち上がる。覆土の観察は出来なかった。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は全周するようで、幅12~24cm、深さ5~12cmである。ピットは1本検出され、深さは19cmである。



第462図 第335号住居跡出土遺物

### 第335号住居跡 (第462・463図)

H-29・30グリッドに位置する。第327・328・360号



第463図 第335号住居跡



遺物は、古墳時代後期の土師器・須恵器片が少量出土したが、殆ど小片で摩滅が著しく、接合しなかった。

図示可能な遺物は、須恵器環1、土師器高環1点であった。

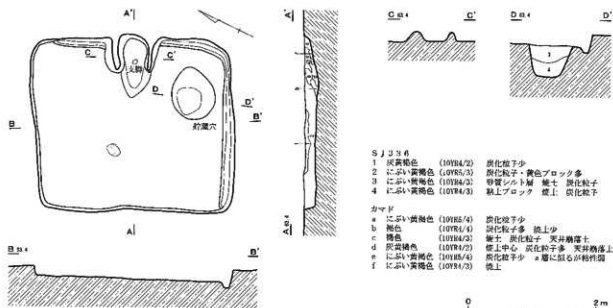
第335号住居跡出土遺物観察表 (第462図)

番号	器種	口径 (10.6)	器高	底径	胎子	焼成	色澤	残存	出土位置	備考
1	須恵器	3.8			ABH	良好	灰	20	覆上	木野産 底部回転ヘラケズリ
2	土師高環	5.2	(9.0)		ABE	良好	橙	35	覆七	

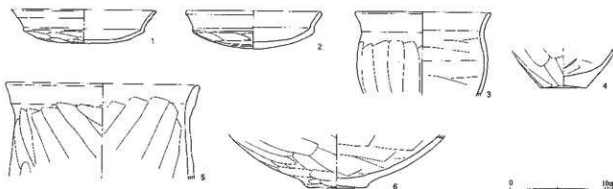
第336号住居跡 (第464・465図)

G-29グリッドに位置する。第253・353・359・409・416号住居跡と重複し、その何れよりも新しい。平

面形は南北にやや長い長方形で、長軸3.20m、短軸2.78m、深さは0.14~0.21mである。主軸方位はN-65°-Eを指す。



第464図 第336号住居跡



第465図 第336号住居跡出土遺物

床面はやや起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは東壁中央に設置される。燃焼部の掘り込みは浅く、急激に立ち上がる。川原石の上端を欠いた支脚が立位で出土した。貯蔵穴はカマド右に設けられ、85×68cmの楕円形で、深さは50cmである。壁溝は東壁と南壁で検出され、幅10～20cm、深さ6～

11cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が多く出土した。何れも小片で、摩滅が著しく、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、上師器環2・甕3・壺1点であった。

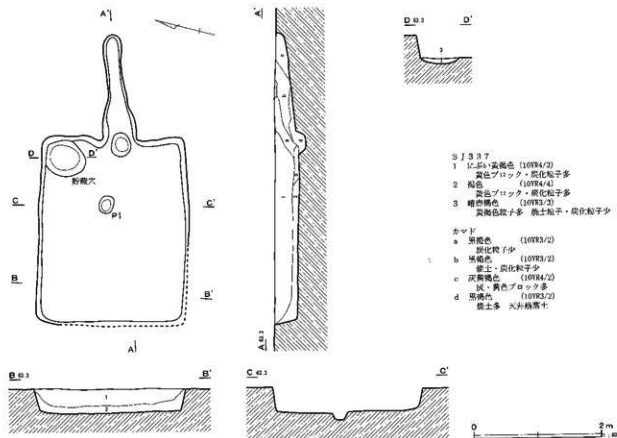
第336号住居跡出土遺物観察表 (第465図)

番号	器種	口径	器高	口径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	上師環	(15.2)	3.6		A B E G	良好	橙	30	B区	
2	土師環	(14.2)	4.0		A B E G	普通	明黄褐	35	B区	
3	土師甕	(14.2)	8.8		A B E K L	普通	にぶい橙	30	B区・貯蔵穴	内面煤付着
4	土師甕		4.1	4.8	A B J L	良好	赤褐	45	B区	
5	土師甕	(20.2)	10.0		A B E J	良好	橙	25	B区	外面煤付着
6	土師甕		5.7	6.5	A B G L	良好	にぶい黄褐	30	A・B区	

第337号住居跡 (第466・467図)

G・H-30グリッドに位置する。第338・344・351・358号住居跡と重複し、その何れよりも新しい。第

338号住居跡と同時に調査したため、南西コーナー付近の壁は検出できなかった。平面形は東西に長い長方形で、長軸3.00m、短軸2.40m、深さは0.37～



第466図 第337号住居跡

0.44mである。主軸方位はN-79°-Eを指す。

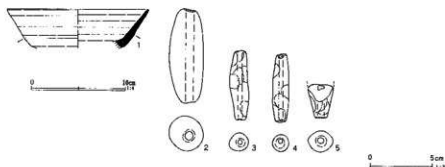
床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁ほぼ中央に設置される。燃焼部はピット状に掘り込まれ、煙道部は平坦である。土層断面に明瞭な焼土層が観察された。貯蔵穴はカマド左の北東コーナーに接して設けられ、66×56cmの楕円形で、深さは8cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは中央付近で1本検出され、深さは11cmであ

る。

遺物は、土師器・須恵器の小片が出土したが、図示可能な遺物は、須恵器坏1、土唾4点のみであった。

1の須恵器坏は、口縁の1/4の破片である。推定の口径が15cmと大きい。底部は残存していなかったが、体部下端部に回転ヘラケズリが認められた。末野産と思われる。



第467図 第337号住居跡出土遺物

第337号住居跡出土遺物観察表 (第467図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵器坏	(15.0)	4.2		A B H	良好	灰黄	25	B区	末野産 体部下端回転ヘラケズリ

第337号住居跡出土土唾観察表 (第467図)

番号	長さ	径	孔径	噴き(μ)	分類	胎土	色調	残存	備考
2	7.40	2.80	0.70	58.10	B a III	A	明赤褐	100	B区
3	5.50	1.55	0.35	10.77	B b IV	C	灰黄褐	100	A区
4	5.35	1.30	0.30	9.65	B b V	C	黒褐	100	B区
5	(2.65)	2.00	0.50	6.42	—	C	浅黄橙	30	B区

第338号住居跡 (第468-469図)

G・H-29・30グリッドに位置する。第337・344号住居跡に切れ、第359・360号住居跡を切る。第406号住居跡との関係は不明である。平面形は正方形で、南北3.56m、東西3.55m、深さは0.37~0.38mである。主軸方位はN-91°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。覆土は概ね1層で、埋め戻された可能性が高い。

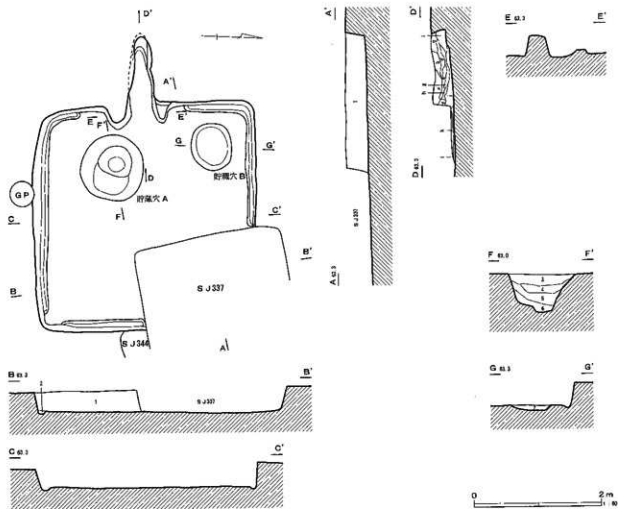
カマドは西壁中央よりやや南に設置される。燃焼

部の掘り込みはなく、そのまま煙道部となる。煙道部先端近くに小さな段を持つ。貯蔵穴は2基検出された。貯蔵穴Aはカマド左袖前面に設けられ、径100cmの円形で、深さは60cmである。貯蔵穴Bは、カマド右に設けられ、74×64cmの楕円形で、深さは76cmである。壁溝はほぼ全周するようで、幅14~26cm、深さ3~6cmである。

遺物は、覆土から時期差のある土師器・須恵器の小片が出土した。図示可能な遺物は、土師器坏2、須恵器坏1、土唾6点であった。

このうち1・2は貯蔵穴から出土した。3の須恵器環は、覆土からの出土であり、重複する第344号

住居跡の遺物が混入してしまったものと思われる。



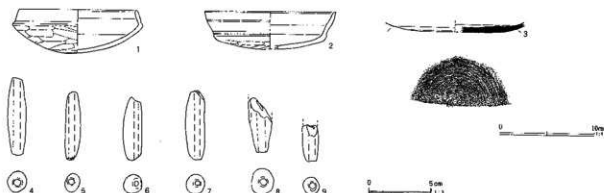
- S J 337 区
- 1 におい黄褐色 (10YR4/3) 黄色ブロック・炭化粒子多
  - 2 緑褐色 (10YR3/4) 炭化粒子少
  - 3 褐色 (10YR4/6) 黄色ブロック・粘土ブロック多 炭化粒子少
  - 4 褐色 (10YR4/4) 黄色ブロック・粘土ブロック少 炭化粒子少
  - 5 におい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子少 2層よりも粘り気
  - 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性高 粘土主体帯 赤色粒子少
  - 7 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色土多 炭化粒子・焼土粒子少
- カマド
- a 緑褐色 (10YR3/3) 焼土ブロック

- b 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子少
- c 褐色 (10YR4/6) 焼土ブロック少
- d におい黄褐色 (10YR4/3) 焼土ブロック
- e 黄褐色 (10YR3/2) 焼土多 天井痕跡多
- f 褐色 (10YR4/4) 赤色塊状土
- g におい黄褐色 (10YR4/3) 黄色ブロック 焼土粒 天井痕跡上
- h におい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒 天井痕跡上
- i 褐色 (10YR4/4) 赤土粒 粘性比較的高
- j 褐色 (10YR4/6) 焼土粒
- k 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子多
- l 暗褐色 (10YR3/2) 炭化粒子 焼土粒子

第468図 第338号住居跡

第338号住居跡出土遺物観察表 (第469図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	12.3	4.6		ABEG	普通	灰黄褐	95	貯蔵穴	内外面煤による黒斑
2	土師環	13.8	4.0		ABEG	普通	におい橙	40	貯蔵穴	
3	須恵環	1.2	10.4		ABG	普通	灰黄	40	A区	末野添 底部全面回転ヘラケズリ



第469図 第338号住居跡出土遺物

第338号住居跡出土土器観察表 (第469図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	6.10	1.60	0.50	11.38	B a IV	A	灰黄褐	100	B区
5	5.30	1.40	0.50	7.97	B a V	A	にぶい黄褐	90	A区
6	4.90	1.50	0.35	10.27	B a V	A	黒褐	100	A区
7	5.40	1.50	0.40	13.43	B a V	A	黒褐	90	A区
8	(4.30)	2.10	0.50	11.59	—	A	黒褐	—	A区
9	(2.90)	1.40	0.45	4.46	—	A	層	—	B区

第339号住居跡 (第470・471図)

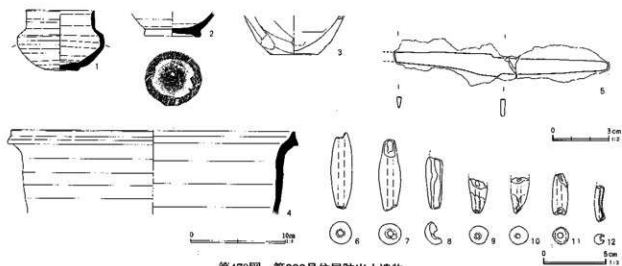
G-29・30グリッドに位置する。第340・344・351・358・409・413号住居跡と重複し、その何れよりも新しい。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.10m、短軸3.02m、深さは0.20～0.27mである。主軸方位はN-106°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち

あがる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部の掘り込みはなく、急激に立ち上がる。土層断面に明瞭な焼土層が観察された。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは4本検出され、P1～P4の深さは15cm、24cm、23cm、27cmである。

遺物は、覆土から、土師器・須恵器の破片が出土



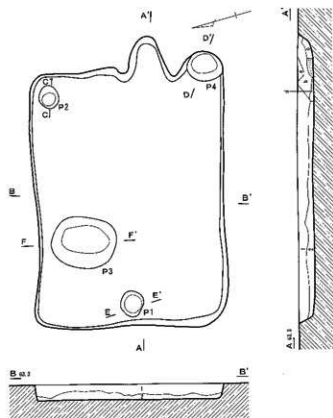
第470図 第339号住居跡出土遺物

した。何れも小片で、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、須恵器小型壺1・高台付碗1・鉢1、土師器甕1、刀子1、土錘7点であった。

1の須恵器小型壺は、他の遺物とは時期差があり、重複する他の住居跡の遺物であった可能性がある。

丸底風の底部に、短く立ち上がる口縁部を有する。底部はへら切り離し、胴部中位から下部には回転ヘラケズリされていた。胎土は緻密で、大粒の粒子は含まない。



S J 339

- 1 褐色 (10194/4) 胎土少 炭化粒子多
- 2 にぶい黄褐色 (10194/3) 炭化粒子
- 3 褐色 (10194/6) 炭化粒子
- 4 暗褐色 (10193/3) 焼土ブロック 炭化粒子
- 5 にぶい黄褐色 (10194/4)
- 6 褐色 (10194/6) 炭化粒子 赤色土粒 黄色ブロック
- 7 褐色 (10194/6) 炭化粒子 赤色土粒 黄色ブロック
- 8 褐色 (10194/4) 黄色ブロック多 炭化粒子

カマド

- a にぶい黄褐色 (10194/3) 炭化粒子少 焼土
- b 暗褐色 (10193/3) 焼土・炭化粒子・粘土多
- c 褐色 (10194/4) 炭化粒子少
- d にぶい黄褐色 (10194/4) 炭化粒子

第471図 第339号住居跡

第339号住居跡出土遺物観察表 (第470図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵器小型壺	7.1	6.3		B F	良好	灰	95	D区	湖西産?
2	須恵器高台碗		2.6	5.8	A B D	不良	にぶい黄褐色	55	覆土	未野産か? 底部回転糸切後高台貼付
3	土師器鉢		4.1	5.0	A B D E	普通	にぶい黄褐色	40	D区	
4	須恵器鉢	(30.0)	8.8		A B D	普通	灰白	10	B区	未野産
5	刀子	現存長11.35cm		背幅0.20cm	刃幅0.85cm		重さ33.28g		覆土	

第339号住居跡出土土錘観察表 (第470図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	5.95	1.80	0.45	16.73	B a IV	A	橙	95	C区
7	5.55	1.70	0.50	13.15	B a V	A	にぶい黄褐色	95	A区
8	(4.10)	(1.80)	(0.55)	5.17	—	A	浅黄褐色	35	A区
9	(2.75)	1.95	0.30	3.71	—	A	黒褐色	30	A区
10	(2.30)	1.45	0.30	4.42	—	A	灰黄褐色	30	A区
11	3.20	1.30	0.40	4.23	D a VI	A	にぶい黄褐色	100	D区
12	(2.70)	(0.80)	(0.30)	1.39	D a VI	A	橙	45	B区?

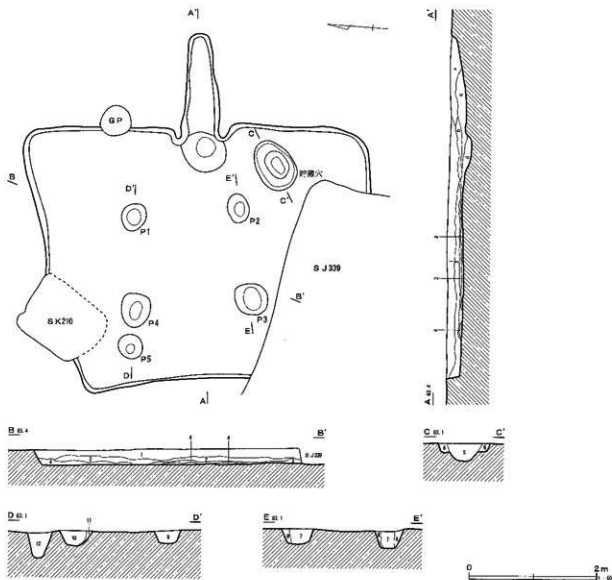
第340号住居跡 (第472-473図)

F・G-29・30グリッドに位置する。第339号住居跡・第210号土坑に切られ、第408・413号住居跡を切る。平面形は南北に長い長方形だが、東壁が西壁に比べて長くなっていた。長軸5.42m、短軸4.02m、

深さは0.18~0.27mである。主軸方位はN-84°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央に設置される。燃焼部は10cm程



S J 3 4 0

- |   |        |           |        |         |       |
|---|--------|-----------|--------|---------|-------|
| 1 | 褐色     | (10YR4/4) | 粘性土    | しまり地    | 炭化粒子  |
| 2 | 褐色     | (10YR4/6) | 炭化粒子   |         |       |
| 3 | 黒褐色    | (10YR3/2) | 炭化粒子   | 多量      |       |
| 4 | 褐色     | (10YR5/6) | 炭化粒子   | 塊上ブロック  |       |
| 5 | 褐色     | (10YR4/6) | 黄色ブロック | 多量      | 炭化粒子少 |
| 6 | にがい黄褐色 | (10YR4/3) | 炭化粒子   | 多量      |       |
| 7 | にがい黄褐色 | (10YR5/4) | 柱礎     |         |       |
| 8 | にがい黄褐色 | (10YR5/3) | 炭化粒子   | ・黄色ブロック | 多量    |
| 9 | 黄褐色    | (10YR5/6) | 炭化粒子   | 単体土塊    |       |

- |    |     |           |        |
|----|-----|-----------|--------|
| 10 | 褐色  | (10YR4/4) | 黄色ブロック |
| 11 | 黄褐色 | (10YR5/6) | 黄色ブロック |
| 12 | 黄褐色 | (10YR5/6) | 粘性土    |

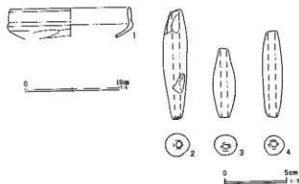
カマド

- |   |        |           |        |     |      |
|---|--------|-----------|--------|-----|------|
| a | にがい黄褐色 | (10YR4/3) | 塊上ブロック | 塊上土 | 炭化粒子 |
| b | 褐色     | (10YR4/6) | 炭化粒子   | 多量  | 土塊   |
| c | 褐色     | (10YR4/4) | 塊上     | 多量  | 天井跡  |
| d | にがい黄褐色 | (10YR4/2) | 黄色ブロック | 赤色土 |      |

第472図 第340号住居跡

掘り込み、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴はカマド右に設けられ、84×60cmの楕円形で、段を持っている。深さは27cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは5本検出され、P1～P5の深さは20cm、32cm、25cm、23cm、42cmである。P1～P4は支柱穴と考えられる。

遺物は古墳時代後期の土師器片が少量出土したが、図示可能な遺物は、土師器環1、土鏝3点であった。



第473図 第340号住居跡出土遺物

第340号住居跡出土遺物観察表 (第473図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(12.6)	3.2		A B E	普通	灰黄褐色	10	覆土	

第340号住居跡出土土鏝観察表 (第473図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
2	8.60	1.90	0.40	23.17	B a II	A	橙	100	
3	5.50	1.80	0.50	12.51	B a IV	A	橙	100	
4	6.80	1.60	0.50	14.63	B a III	A	にぶい黄橙	100	

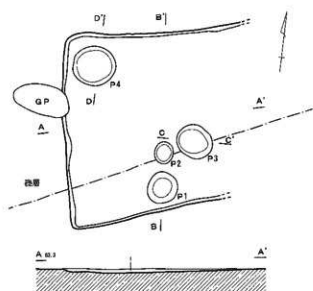
第341号住居跡 (第474図)

E-30グリッドに位置する。北側は地山の礫層上に構築されていた。東側は検出されなかった。平面形は東西に長い長方形と考えられる。検出された規模は、長軸が2.80m、短軸は2.75mである。深さは

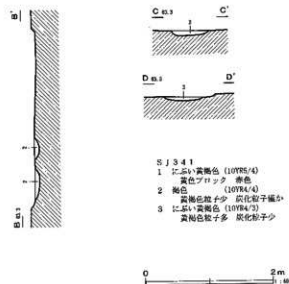
0.01～0.05mと極めて浅い。主軸方位は西壁でN-80°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁の状態は不明瞭である。

カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。ピットは



第474図 第341号住居跡



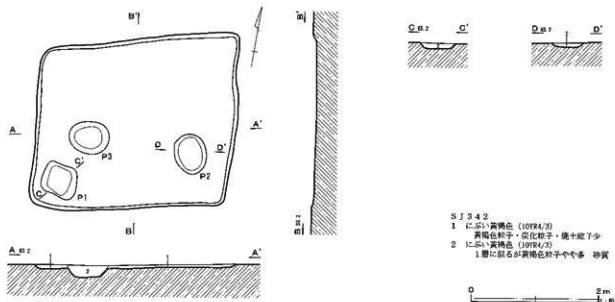


4本検出され、P1～P4の深さは7cm、8cm、8cm、7cmである。

遺物は、土師器の小片が数点出土したが、摩滅が著しく、図示可能な遺物は出土しなかった。

### 第342号住居跡（第475図）

E-29・30グリッドに位置する。遺跡北側の荒川寄りに、礫層を切って構築されていた。平面形は東西にやや長い長方形で、長軸3.22m、短軸2.68m、深さは0.02～0.12mである。主軸方位はN-78°-Eを指す。



第475図 第342号住居跡

### 第343号住居跡（第476・477図）

F-30グリッドに位置する。第345・408号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。北壁と東壁はグリッドピットに壊されていた。平面形は正方形で、東西4.83m、南北4.73m、深さは0.05～0.14mである。主軸方位はN-83°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央より北寄りに設置される。燃焼部は土坑状に10cm程掘り込み、煙道部先端近くに段

床面は既に消失していたと考えられ、掘り方を検出したと思われる。壁の状態は不明瞭である。覆土の観察はできず、第1層は掘り方の充填土と考えられる。

カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。ピットは3本検出され、P1～P3の深さは9cm、6cm、13cmである。

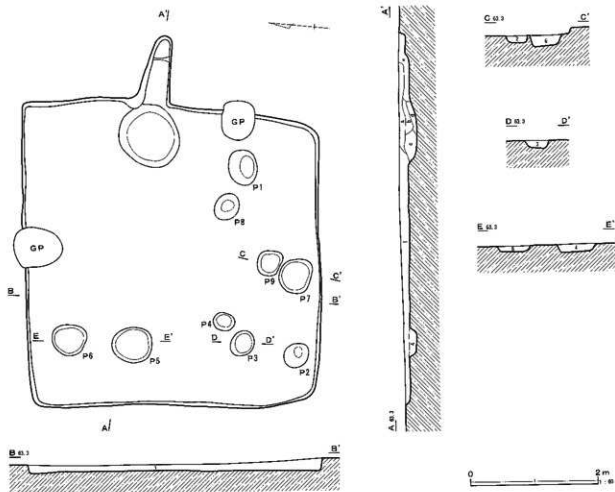
遺物は、土師器の小片が数点出土した。器種の判別が困難なほど摩滅しており、図示可能な遺物は出土しなかった。

を持つ。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは9本検出され、P1～P9の深さは27cm、36cm、13cm、19cm、13cm、8cm、16cm、23cm、12cmである。

遺物は、土師器・須恵器の破片が多く出土したが、小片が多く、殆ど図示できなかった。

図示可能な遺物は、須恵器環1、土師器環1・甕1・小型甕1、土錘1点であった。

1の須恵器環は、口径が10.4cmと小型の環である。底部は手持ちヘラケズリ調整である。胎土に片岩を含んでいることから、末野産と考えられる。



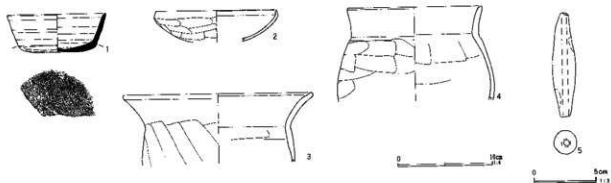
SJ343

- |   |                   |         |       |
|---|-------------------|---------|-------|
| 1 | にじい・黄褐色 (10YR6/3) | 白色塵埃子多  | 炭化粒子少 |
| 2 | にじい・黄褐色 (10YR6/4) | 藍色ブロック  | 炭化粒子少 |
| 3 | 暗色 (10YR4/1)      | 黄色ブロック  | 炭化粒子少 |
| 4 | 灰黄褐色 (10YR4/2)    | 炭化粒子少   |       |
| 5 | にじい・黄褐色 (10YR6/1) | 黄色ブロック多 |       |
| 6 | 暗褐色 (10YR3/4)     | 赤色塵埃子少  |       |

カマド

- |   |                   |              |
|---|-------------------|--------------|
| a | 暗色 (10YR4/4)      | 炭上層・炭化粒子少    |
| b | にじい・黄褐色 (10YR6/3) | 粘土ブロック・炭化粒子少 |
| c | にじい・黄褐色 (10YR6/4) | 炭化粒子 黄色ブロック  |
| d | 灰黄褐色 (10YR4/2)    | 粘土質層 炭化粒子    |
| e | にじい・黄褐色 (10YR6/3) | 炭上 炭化粒子少     |

第476図 第343号住居跡



第477図 第343号住居跡出土遺物

第343号住居跡出土遺物観察表 (第477図)

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵環	(10.4)	5.0		A B C H	良好	暗灰黄	35	C区	末野産 底部手持ちヘラケズリ
2	土師環	(12.8)	3.3		A B E	不良	にぶい黄橙	35	B区	
3	土師甕	(20.0)	7.2		A B E	良好	明褐	40	B区	
4	土師小型甕	(14.2)	9.9		B E J	普通	にぶい橙	20	A・B区	内面煤付着

第343号住居跡出土土鍾観察表 (第477図)

番号	長さ	径	口径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	8.10	1.80	0.40	21.33	Ba II	A	灰白	100	A区

第344号住居跡 (478-479図)

G-30グリッドに位置する。第337-339号住居跡に切られ、第314-351-358号住居跡を切る。平面形は正方形で、南北3.28m、東西3.24m、深さは0.21-0.23mである。主軸方位はN-25°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

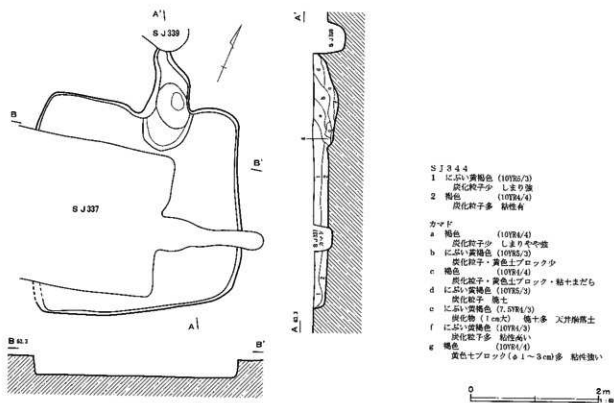
カマドは北壁中央よりやや東に設置される。燃焼部は20cm程掘り込み、緩やかに立ち上がって煙道部

へ続く。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

遺物は、特にカマドおよびその周辺から、土師器・須恵器の破片がやや多く出土した。特に土師器甕の破片が多かったが、胴部の小片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環2・須恵器環1、土製紡錘車1、土鍾5点であった。

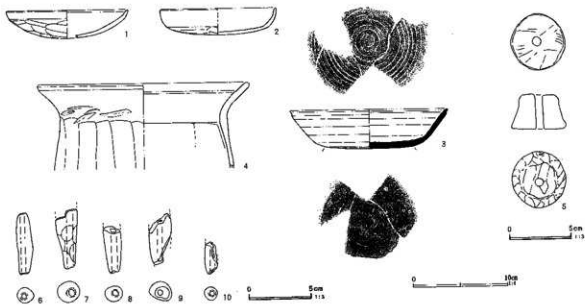
1-4はカマドから出土した。3の須恵器環は、



第478図 第344号住居跡

胎土の特徴から末野産と考えられる。やや丸みをもった底部に大きく外傾する口縁部を有する。口縁端

部は、内外面とも沈線状に窪んでいた。また、内面底部は工具もしくは爪による痕跡が明瞭である。



第479図 第344号住居跡出土遺物

第344号住居跡出土遺物観察表 (第479図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	12.8	2.9		ABE	良好	橙	55	カマド	
2	土師環	12.2	2.8		ABEG	良好	にぶい橙	60	カマド	
3	須恵環	(16.6)	4.1		ABH	良好	灰白	40	カマド	末野産 底部全面回転ヘラケズリ 工具痕明瞭
4	土師甕	(22.2)	9.0		ABDEG	良好	橙	30	カマド	内面やや磨滅
5	土製紡車	長径4.30cm	短径2.60cm		ABEJ	良好	—	100	覆土	厚さ2.70cm 孔径0.70cm 重さ48.71g

第344号住居跡出土土鍾観察表 (第479図)

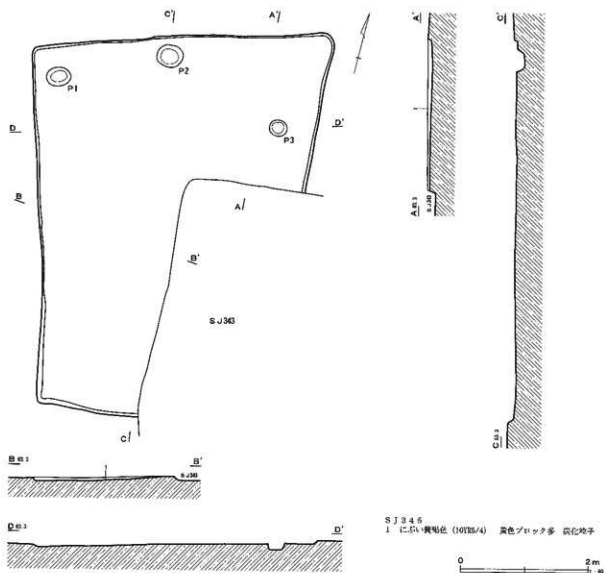
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	4.80	1.80	0.35	6.40	B a V	A	褐灰	100	
7	(4.60)	1.75	0.55	9.12	C a III	A	浅黄橙	—	
8	(3.70)	1.40	0.45	5.50	B a IV	A	にぶい赤褐	55	
9	(4.00)	1.80	0.40	8.51	—	A	明赤褐	40	カマド
10	(2.50)	1.05	0.40	2.20	—	A	にぶい橙	35	

第345号住居跡 (第480図)

F-29-30グリッドに位置する。第343号住居跡に切れ、第407-408号住居跡を切る。平面形は南北に長い長方形で、長軸5.96m、短軸4.28m、深さは0.04~0.16mである。主軸方位は西壁でN-15°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。ピットは3本検出され、P1~P3の深さは10cm、12cm、10cmである。

遺物は、土師器甕の口縁部片が1点出土したが、小片で図示できなかった。



第480図 第345号住居跡

### 第346号住居跡 (第481・482図)

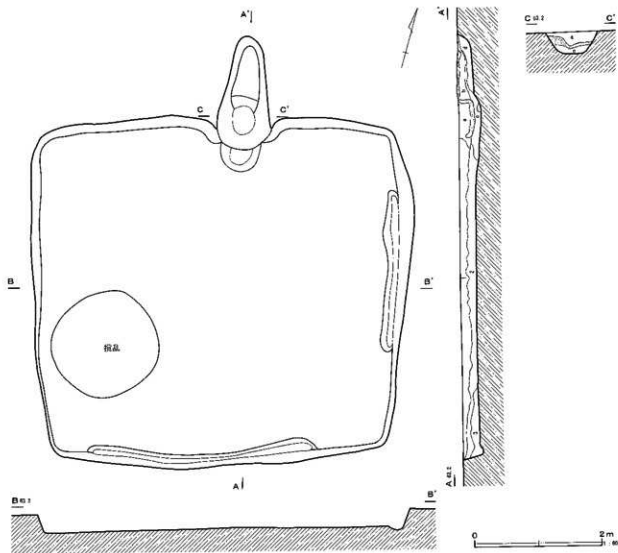
G・H-28・29グリッドに位置する。第353・355・360号住居跡と重複し、その何れよりも新しい。西壁近くを視乱に壊されていた。平面形は東西に僅かに長い長方形で、長軸5.95m、短軸5.56m、深さは0.27~0.38mである。主軸方位はN-14°-Wを指す。床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁中央よりやや東に設置される。燃焼部の掘り込みは10cm弱で段を持って煙道部へ続く。

煙道部の天井が一部残存していた。土層断面に明瞭な焼土層が観察された。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は東壁と南壁で検出され、幅18~50cm、深さ3~6cmである。

遺物は、古墳時代後期から奈良時代の土師器・須恵器が混在していた。何れも小破片で、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環4・甕1、須恵器環2・蓋1・甕片1、刀子1、土錘17点であった。



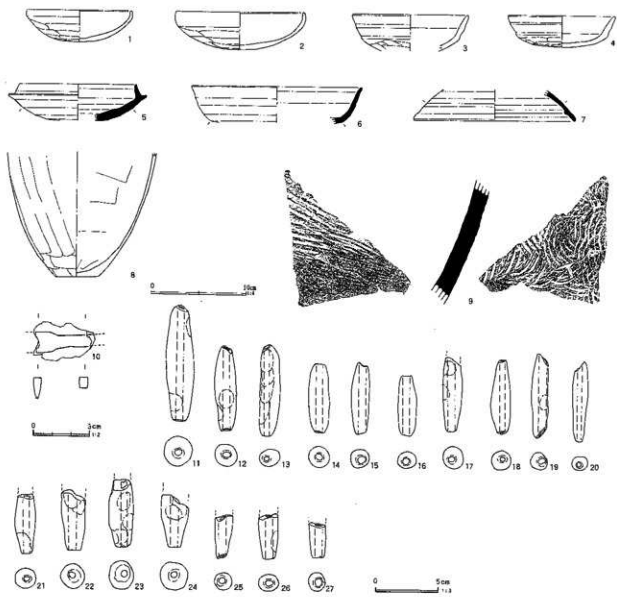
S J 3 4 6  
 1 暗褐色 (10YR2/4) 砂質地山ブロック・焼土粒子・炭化粒子多  
 2 にぶい黄褐色 (10YR1/3) 砂質地山主体・焼土・炭化粒子多  
 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘質地山ブロック・焼土粒・炭化粒子多

カマド  
 a にぶい黄褐色 (10YR4/2) 砂質地山主体均一土層  
 b 暗褐色 (10YR2/2) 炭化粒子・焼土・黄白色地山ブロック多  
 c にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質地山多 天井構造以前段入土 粘性質びる  
 d 褐色 (10YR1/6) 黄白色地山流入土

第481図 第346号住居跡

第346号住居跡出土遺物観察表 (第482図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	10.9	3.4		ABDJ	良好	にぶい黄橙	70	覆土	外面底面煤付着
2	土師環	13.4	4.0		ABDG	普通	にぶい橙	75	覆土	
3	土師環	(12.0)	3.8		ABE	良好	橙	30	A区	
4	土師環	11.2	3.3		ABDE	良好	にぶい橙	70	覆土	内外面煤付着
5	須恵環	(12.2)	3.8		ABI	普通	灰白	45	覆土	産地不明 底部回転ヘラケズリ
6	須恵環	(17.8)	3.8	(13.8)	ABCH	良好	灰	15	A区	木野産 底部回転ヘラケズリ
7	須恵蓋	(16.8)	3.3		AB	普通	灰	10	A区	木野産 天井部回転ヘラケズリ
8	土師甕		13.0		ABE	普通	にぶい橙	40	カマド	外面煤付着
9	須恵甕				ABH	不良	灰		A区	木野産 外面平行叩き 内面同心円当具痕
10	刀子	現存長3.00cm 背幅0.45cm			刃幅1.15cm	重さ9.16g			覆土	



第482図 第346号住居跡出土遺物

第346号住居跡出土土錐觀察表 (第482図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
11	9.10	2.30	0.60	38.93	Ba I	A	橙	100	B区
12	6.60	1.80	0.60	17.96	Ba III	A	にぶい橙	90	B区
13	7.20	1.60	0.40	14.62	Aa III	A	褐灰	100	
14	5.40	1.65	0.55	13.43	Ba V	A	にぶい黄橙	100	B区
15	5.60	1.50	0.60	9.83	Ba IV	A	褐灰	100	
16	4.70	1.45	0.55	8.35	Ba V	A	灰黄褐	100	B区
17	(5.80)	1.75	0.50	12.85	Ba III	A	灰白	80	
18	5.80	1.50	0.40	11.11	Ba IV	A	明赤褐	100	B区
19	6.60	1.35	0.60	9.18	Ba III	A	にぶい橙	100	B区
20	(6.30)	1.20	0.30	7.04	Aa III	A	にぶい黄橙	90	
21	(4.70)	1.60	0.45	11.16	Ba IV	A	にぶい黄橙	80	
22	(4.70)	1.90	0.55	16.28	Bb III	A	褐灰	70	A区
23	(5.30)	2.20	0.50	22.47	—	A	褐灰	—	A区
24	(4.10)	2.20	0.50	15.82	—	A	褐灰	—	A区

第346号住居跡出土土鍾観察表 (第482図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
25	(3.40)	1.40	0.50	5.44	—	A	灰黄褐	—	
26	(3.60)	1.60	0.60	6.76	—	A	灰黄褐	—	
27	(2.80)	1.50	0.60	4.71	—	A	灰黄	—	A区

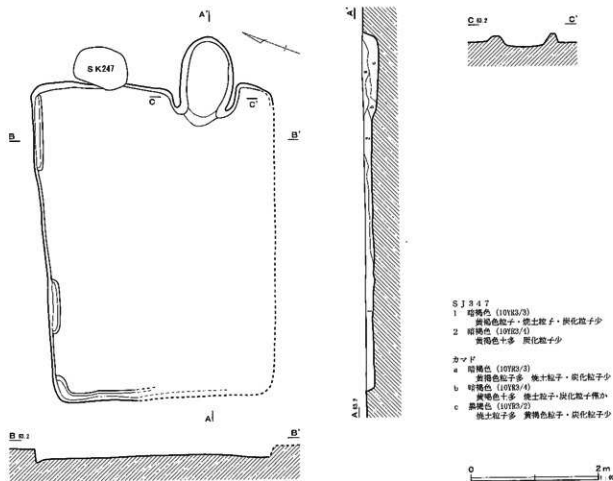
第347号住居跡 (第483-484図)

H・I-28・29グリッドに位置する。第247号土坑に切られ、第287・296・331・355・429号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。南壁から西壁にかけては検出できなかった。平面形は東西に長い長方形と考えられ、長軸は4.97m、短軸は周辺の遺構の残存状態から3.7m前後と推定される。深さは0.10~0.17mである。主軸方位はN-67°-Eを指す。床面はやや起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁の南東コーナー寄りに設置される。燃焼部は広めに10cm程掘り込み、急激に立ち上がる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北壁と西壁で検出され、幅16~20cm、深さ2~3cmである。

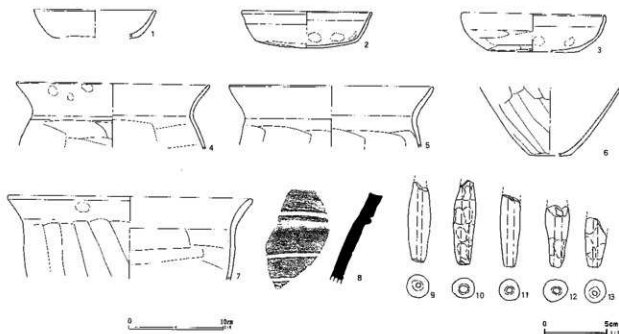
遺物は、覆土およびカマドから、土師器・須恵器の破片が多く出土した。土師器は、坏・甕の破片が多かった。須恵器は坏・甕の小片が多く、図示できたものは少なかった。

図示可能な遺物は、土師器坏3・甕3・甗1、須恵器甕1、土鍾5点であった。



第483図 第347号住居跡





第484図 第347号住居跡出土遺物

第347号住居跡出土遺物観察表 (第484図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	上脚環	(12.8)	3.0		B E G	良好	橙	40	カマド	
2	土師環	13.6	3.9		A B E G	良好	橙	65	カマド	
3	上脚環	(15.0)	4.0		A B E G	良好	明赤褐	40	A区	
4	土師甕	(20.4)	6.8		A B E G	良好	橙	20	カマド	
5	土師甕	(21.6)	6.4		A B F G	良好	橙	20	カマド	
6	土師甕		7.2	(4.5)	A B E G	良好	明赤褐	35	B区	
7	土師甕	(25.6)	8.6		A B E G J	良好	にぶい黄橙	15	B区	内外面煤付着
8	須恵壺				A B	普通	灰		A区	未野産 叩き後洗練

第347号住居跡出土土錫觀察表 (第484図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
9	(6.30)	1.80	0.35	16.95	B b III	A	褐灰	90	A区
10	6.65	1.80	0.65	12.94	C a III	C	にぶい黄橙	95	A区
11	(5.60)	1.65	0.50	13.65	B a III	A	にぶい黄橙	75	B区
12	(4.90)	1.95	0.60	11.37	C a III	C	浅黄橙	70	A区
13	(3.90)	1.80	0.40	10.25	C b V	A	赤褐	60	B区

第348号住居跡 (第485・486図)

F-27グリッドに位置する。第410号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。北半は地山の礫層を切って構築されていた。平面形は正方形に近く、東西4.12m、南北4.06m、深さは0.13~0.28mである。主軸方位はN-89°-Eを指す。

床面は起伏があり、北側が低くなる傾向がある。壁は聞き気味に立ちあがる。

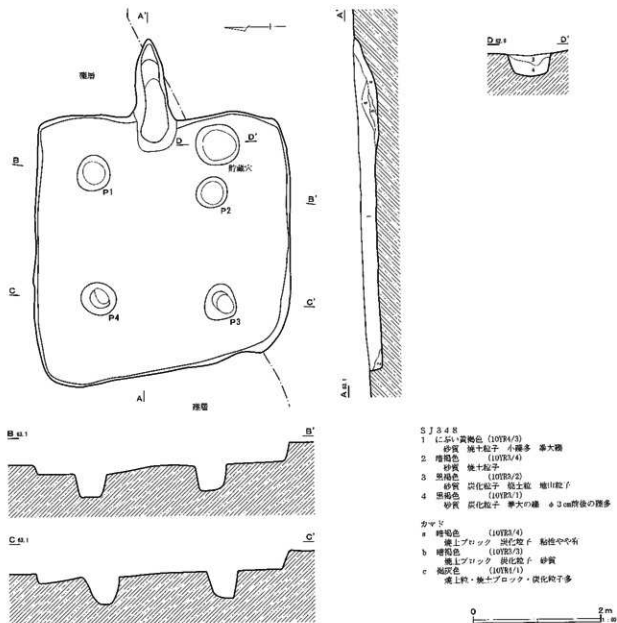
カマドは東壁ほぼ中央に設置される。燃焼部は10cm程掘り込み、緩やかに立ち上がり煙道部へ続く。貯蔵穴はカマド右に設けられ、径68cmの円形で、深さは32cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは4本検出され、P1~P4の深さは38cm、38cm、41cm、42cmである。何れも主柱穴と考えられる。

遺物は、古墳時代後期の土師器・須恵器片が多く出土したが、小片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、須恵器環1・蓋2・小型壺（原  
か）1、土師器環1、滑石製白玉1、砥石1、刀子

1、土鏝10点であった。

1は、坏身であった可能性もあるが、口縁部は僅



第485図 第348号住居跡

第348号住居跡出土遺物観察表 (第486図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵蓋?	(10.0)	2.4		ABCH	良好	灰	20	C区	未野産? 天井部回転ヘラケズリ 烈点文あり
2	須恵蓋	(13.0)	3.5		BFHL	良好	黄灰	15	C区	未野産 天井部回転ヘラケズリ
3	須恵環	11.8	4.1	6.4	ABCH	普通	灰白	75	覆土	未野産 底部ヘラケズリ
4	須恵環		4.1		ABH	良好	黄灰	25	覆土	未野産
5	土師環	(12.2)	3.8		ABDE	良好	橙	45	貯蔵穴	
6	白玉	直径1.40cm	厚さ0.70cm	孔径0.25cm			重さ2.09g	90	覆土	滑石製 一部欠損
7	砥石	長さ28.50cm	幅13.20cm				重さ4250.00g		覆土	砂岩
8	刀子	現存長7.55cm	幅1.25cm	厚さ0.50cm			重さ15.97g		覆土	有茎平根三角形形式 切先・頸部を欠く

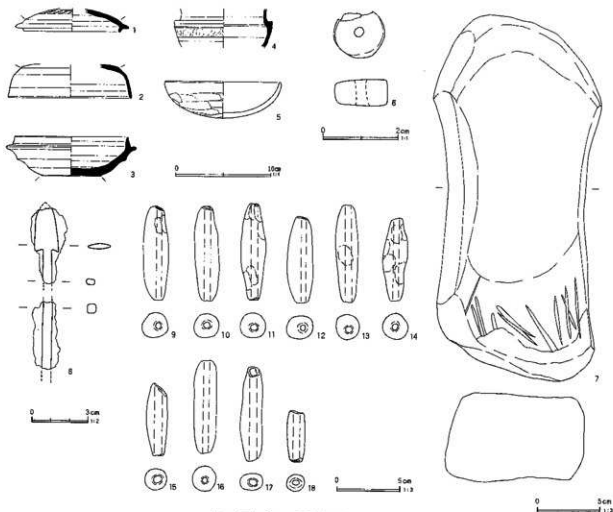
かに突出するのみで、極めて短い。

2の須恵器蓋は、小破片であったが、3の坏身と口径が合い、セットとなっていたものと思われる。

3は、やや平底気味の底部となる。体部の轆轤目

は顕著である。蓋受部分は水平に近く、口縁部は短く立ち上がる。

4は底部と口縁部を欠き、全体の形状は不明だが、瓌であった可能性がある。



第486図 第348号住居跡出土遺物

第348号住居跡出土土錘観察表 (第486図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
9	7.40	2.00	0.50	24.36	B a III	A	にぶい黄褐	100	B区
10	7.45	2.05	0.50	24.64	B a III	A	黒褐	100	B区
11	7.60	2.00	0.55	25.42	C a II	A	褐灰	100	B区
12	6.75	2.10	0.45	25.45	B a III	A	灰黄褐	100	B区
13	7.65	2.00	0.50	27.14	B a II	A	褐灰	100	B区
14	6.50	2.05	0.50	19.72	C a III	A	橙	100	
15	5.70	1.70	0.70	12.42	B a IV	A	にぶい黄橙	100	
16	7.30	2.00	0.45	24.78	B a III	A	灰黄褐	95	B区
17	7.30	1.80	0.60	15.75	B a III	A	橙	95	D区
18	4.05	1.45	0.55	7.45	A a VI	A	灰黄褐	100	B区

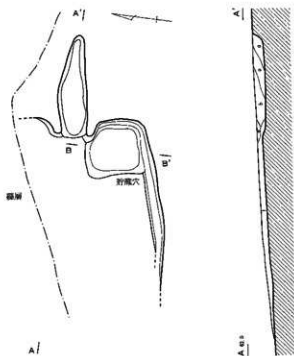
第349号住居跡 (第487・488図)

F-26グリッドに位置する。礎層を切って構築されたと考えられるが、北側と西側は検出されなかった。検出された規模は、南壁2.68m、東壁1.72mで、深さは0-0.10mである。主軸方位はN-84°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、北及び西に向けて低くなっている。壁の状態は不明瞭である。

カマドは東壁に設置される。燃焼部は10cm程掘り込み、そのまま煙道部となる。貯蔵穴はカマド右の南東コーナーに接して設けられ、90×78cmの長方形で、深さは21cmである。壁溝は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器の小片が少量出土した。摩滅が著しく、接合はしなかった。図示可能な遺物は、土師器坏1・甕1点であった。



第487図 第349号住居跡



- S J 3 4 9
- 1 褐色 (10YR4/4) 砂質 黄褐色粘土多
  - 2 褐色 (10YR4/4) 黄褐色粘土多 炭化粒子少
  - 3 増褐色 (10YR2/4) 2層に亘るが炭化粒子やや多
- カマド
- a 暗褐色 (10YR3/1) 粘土粒子少
  - b 褐色 (10YR4/4) 炭土粒子多 炭化粒子偏少
  - c にごい黄褐色 (10YR2/3) 粘土粒子・炭化粒子少
  - d 褐色 (10YR4/4) 砂質 焼土粒子偏少



第488図 第349号住居跡出土遺物

第349号住居跡出土遺物観察表 (第488図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師器坏	10.0	2.7		ABEG	良好	にごい橙	90	B区	
2	土師器甕	(19.0)	8.4		ABEGJ	良好	橙	20	B区	

### 第350号住居跡（第489・490図）

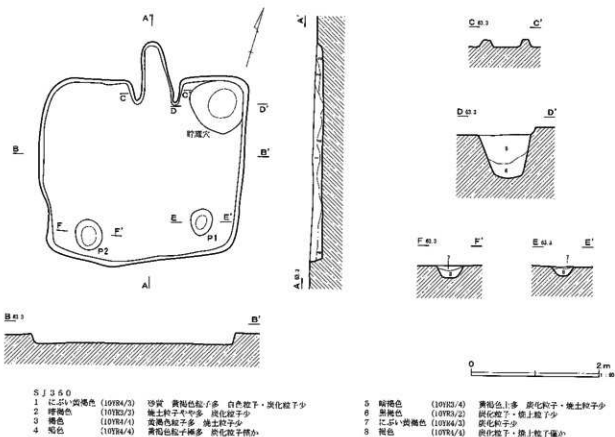
G-27グリッドに位置する。第414号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。平面形は東西に僅かに長い長方形で、長軸3.24m、短軸2.71m、深さは0.07~0.16mである。主軸方位はN-16°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

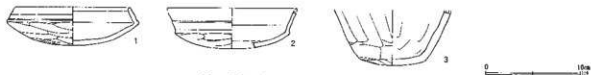
カマドは北壁ほぼ中央に設置される。燃烧部の掘り込みはなく、そのまま煙道部となる。貯蔵穴はカ

マド右の北東コーナーに接して設けられ、84×76cmの楕円形で、深さは55cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは南壁近くで2本検出され、P1・P2の深さは10cm、9cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器の破片が少量出土した。何れも小破片で、図示可能な遺物は、土師器坏2・甕1点であった。



第489図 第350号住居跡



第490図 第350号住居跡出土遺物

### 第350号住居跡出土遺物観察表（第490図）

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.0	4.0		A B E G	良好	にぶい赤褐色	55	貯蔵穴・B区	
2	土師坏	(13.4)	3.9		A B E G	良好	褐色	25	B区	
3	土師甕		5.9	7.0	A B E	良好	褐色	50	B区	

第351号住居跡 (第491-492図)

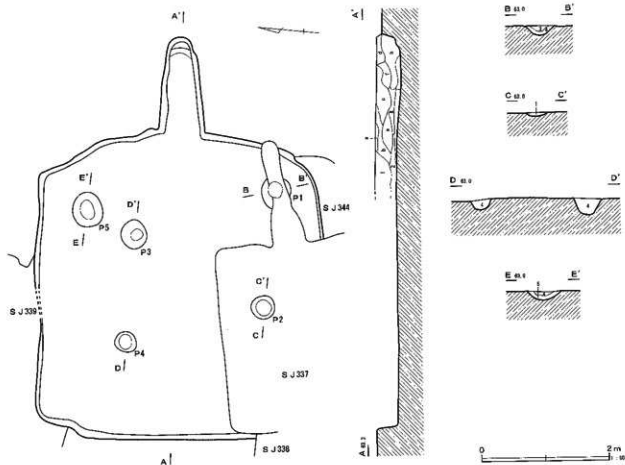
G-30グリッドに位置する。第337-339-344号住居跡に切られ、第314-358号住居跡を切る。第413号住居跡との関係は不明である。平面形は正方形に近く、東西4.84m、南北4.59mで、深さは0.35-0.38mである。主軸方位はN-86°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ちあがる。カマドは北壁中央に設置される。燃焼部の掘り込

みはなく、そのまま煙道部となる。煙道部先端に小さな段を持つ。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは5本検出され、P1~P5の深さは17cm、5cm、23cm、14cm、14cmである。

遺物は、覆土から、土師器・須恵器の破片が出土した。土師器は坏・甕の破片がやや多かった。

図示可能な遺物は、土師器坏2・甕1、須恵器甕1、滑石製白玉1、刀子1、土鏝2点であった。



S J 3 5 1

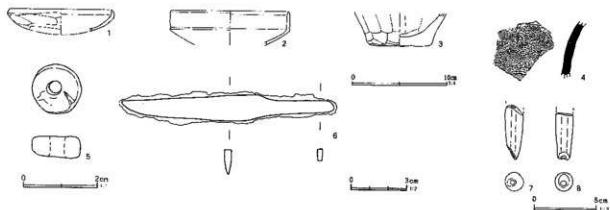
- |   |                  |                         |
|---|------------------|-------------------------|
| 1 | にがい黄褐色 (10YR4/3) | 黄色ブロック含む(φ=1~2cm) 炭化粒子多 |
| 2 | にがい黄褐色 (10YR4/3) | 炭化粒子多                   |
| 3 | 暗褐色              |                         |
| 4 | にがい黄褐色 (10YR4/3) | 黄色ブロック 焼土粒子偏多           |
| 5 | 灰黄褐色 (10YR5/2)   | 粘土主層                    |

カマド

- |   |              |
|---|--------------|
| a | 褐色 (10YR4/6) |
|---|--------------|

- |   |                  |                  |
|---|------------------|------------------|
| b | 黄褐色 (10YR5/4)    | 炭化粒子少 焼土粒子偏多     |
| c | にがい黄褐色 (10YR4/4) | 炭化粒子・黄色ブロック少     |
| d | にがい黄褐色 (10YR4/3) | 炭化粒子少            |
| e | 褐色 (10YR4/4)     | 炭化粒子多 粘土少        |
| f | にがい黄褐色 (10YR5/4) | 焼土粒子多            |
| g | 褐色 (7.5YR4/3)    | 焼土粒・炭化粒子多 灰井汚濁土  |
| h | にがい黄褐色 (10YR5/3) | 黄色ブロック多 焼土粒子 粘性強 |
| i | 灰黄褐色 (10YR5/2)   | 粘土多 地山ブロック 粘性強   |

第491図 第351号住居跡



第492図 第351号住居跡出土遺物

第351号住居跡出土遺物観察表 (第492図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(10.8)	2.3		A B E G	良好	にぶい橙	20	カマド	
2	土師環	(6.5)	3.7		A B E	良好	にぶい橙	15	覆土	
3	土師甕			6.4	A B D E L	良好	橙	30	A区	
4	須恵甕			4.5	A B C H	良好	灰	30	A区	本野産 波状文
5	白玉	直径1.30cm	厚さ0.55cm	孔径0.30cm				95	B区	滑石製 欠損有り
6	刀子	現存長11.32cm	背幅0.40cm	刃幅1.30cm					覆土	

第351号住居跡出土土錘観察表 (第492図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
8	(3.70)	1.50	0.45	6.48	B a III	A	浅黄橙	55	
7	(4.25)	1.45	0.35	6.96	B a	A	浅黄橙	60	

第352号住居跡 (第493・494図)

G-27グリッドに位置する。第414号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。平面形は正方形で、東西2.74m、南北2.69m、深さは0.10~0.15mである。主軸方位はN-57°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは東壁の南東コーナー寄りに設置される。

燃焼部は10cm程掘り込み、段を持って煙道部へ続く。

貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは2本検出され、P1~P2の深さは34cm、25cmである。

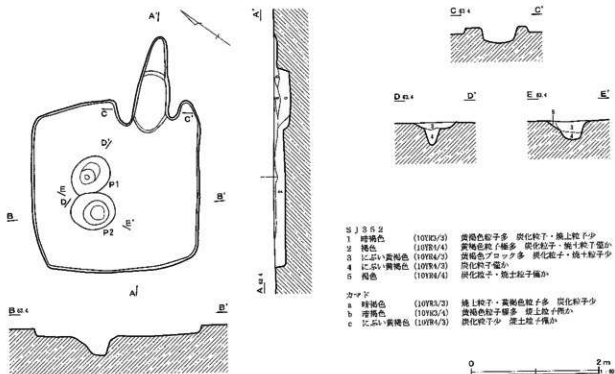
遺物は、土師器環・甕の小片が少量出土したが、図示可能な遺物は土師器環1点であった。



第493図 第352号住居跡出土遺物

第352号住居跡出土遺物観察表 (第493図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	9.8	3.2		A D E G	良好	橙	85	覆土	



第494図 第352号住居跡

第353号住居跡 (第495・496・497図)

G-28、H-28・29グリッドに位置する。第336・346号住居跡に切れ、第354・355・360・409・416号住居跡を切る。南西コーナー周辺は重複する住居跡と同時に調査したり、掘乱に壊されていたため検出できなかった。平面形は正方形で、東西8.99m、南北8.96m、深さは0.08~0.17mである。主軸方位はN-59°-Eを指す。

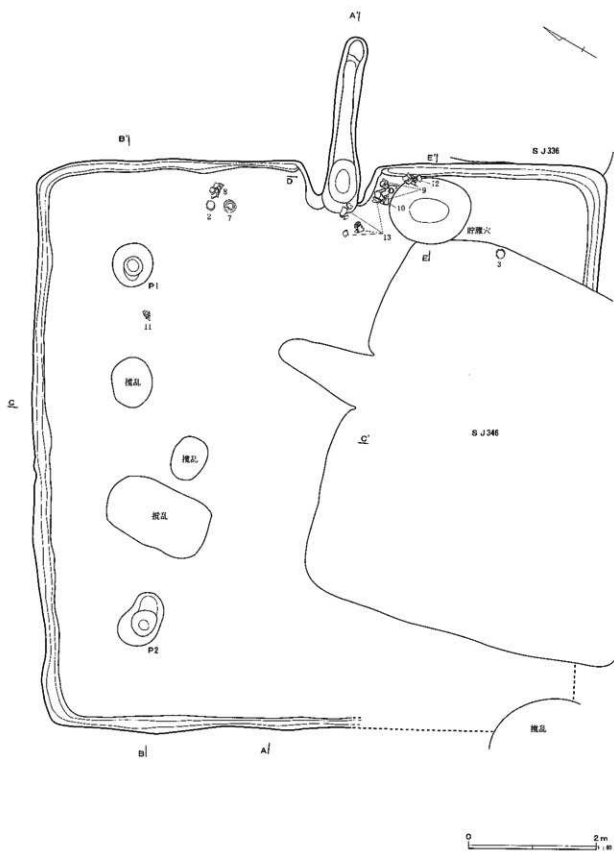
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは東壁ほぼ中央に設置される。燃焼部の掘り込みは僅かで、緩やかに煙道部となる。煙道部先端に段を持つ。土層断面に明瞭な焼土層が観察された。貯蔵穴はカマド右に設けられ、128×102cmの楕円形で、深さは48cmである。壁溝は検出された壁で全周し、幅10~30cm、深さ5~12cmである。ピット

第353号住居跡出土遺物観察表 (第497図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(12.4)	3.7		ABDE	良好	橙	45	覆土	内外面黒色処理
2	土師環	13.6	4.8		ABEG	良好	褐灰	100	床	内外面黒色処理
3	土師環	14.7	4.5		ABDE	良好	黄灰	100	-9cm	内外面黒色処理
4	土師環	(14.8)	3.7		BDEG	良好	橙	25	覆土	
5	土師環	(14.4)	3.3		ABE	良好	橙	25	貯蔵穴	
6	土師環	(10.0)	5.4		ABG	良好	黄灰	25	覆土	
7	土師甕	14.2	10.7		ABEJ	良好	浅黄橙	75	床	
8	土師甕	(18.1)	14.5		ABEJL	普通	浅黄橙	45	+3cm	
9	土師鉢	24.8	12.2	8.0	BDEJ	良好	橙	85	+10cm	
10	土師鉢	(30.4)	14.3		ABDE	良好	橙	50	+8cm	
11	土師甕		8.0	4.4	ABEJ	良好	浅黄橙	45	+4.8cm	外面煤付着
12	土師甕		17.7	5.2	ABEL	良好	にぶい黄	55	床	底部木炭痕
13	土師甕	(20.0)	33.4		ABEJ	良好	明褐灰	30	+8.6cm	





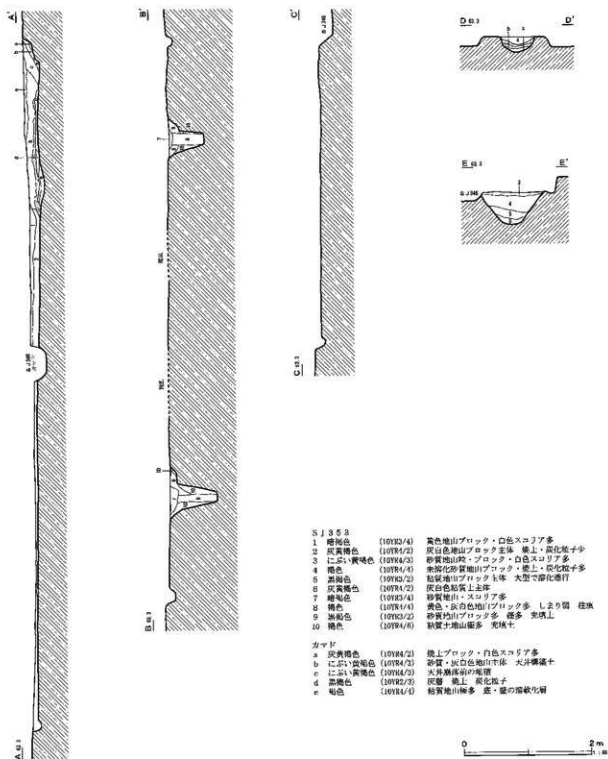
第495図 第353号住居跡 (1)

は2本検出され、P1・P2の深さは57cm、70cmである。共に土層断面に柱痕が確認された。

遺物は、カマドおよびその周辺の覆土から、古墳時代後期の土師器が多量に出土した。特に土師器

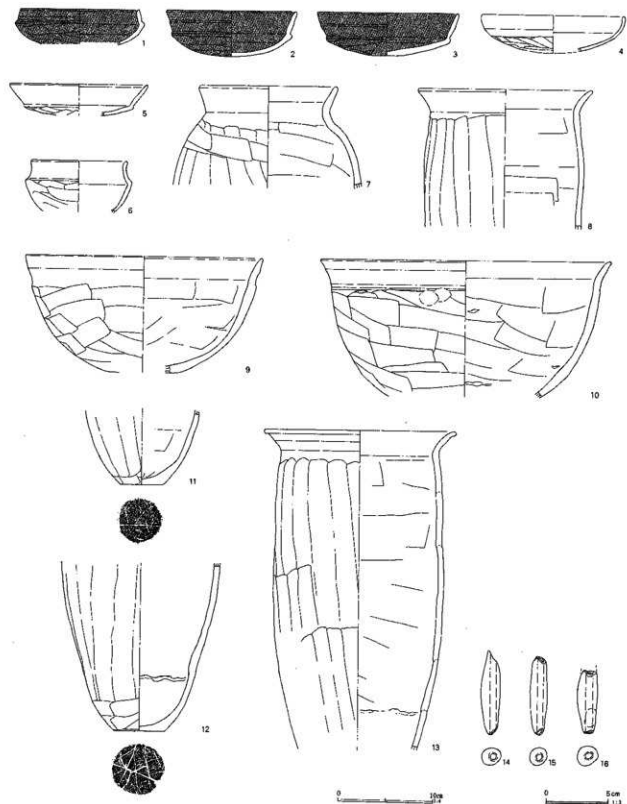
環・甕は接合率が良く、図示できた遺物は多かった。

図示可能な遺物は、土師器環6・甕5・鉢2、土師3点であった。このうち4の土師器環は、重複する第346号住居跡の遺物を、本住居の遺物として取り



第496図 第353号住居跡(2)

上げてしまった可能性がある。



第497図 第353号住居跡出土遺物

第353号住居跡出土土器観察表 (第497図)

番号	長さ	径	口径	高さ(㎝)	分類	胎土	色 調	残存	備 考
14	6.60	1.55	0.50	9.40	B a IV	A	にぶい黄橙	100	
15	6.15	1.45	0.50	8.34	A a IV	C	浅黄橙	100	
16	(4.95)	1.65	0.60	8.45	C a IV	A	浅黄橙	90	

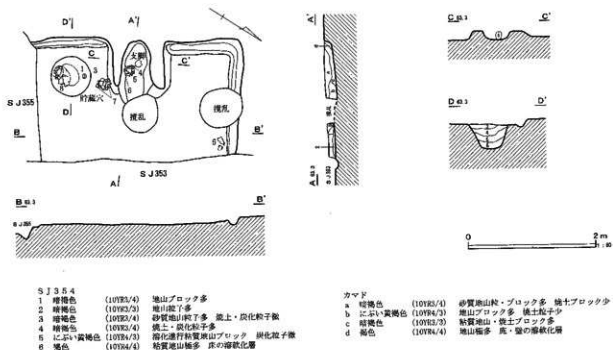
第354号住居跡 (第498・499図)

G・H-28グリッドに位置する。東側と南側を第353・355号住居跡に切られる。検出された規模は、西壁3.33m、北壁1.80mで、深さは0.08~0.11mである。主軸方位はN-120°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは西壁に設置される。燃焼部手前は視乱で壊されていた。燃焼部は10cm程掘り込み、急激に立ち上がる。貯蔵穴はカマド左に設けられ、径62cmの円形で、深さは39cmである。壁溝は検出された壁全てで見られ、幅16~24cm、深さ3~4cmである。

遺物は、カマドおよび貯蔵穴周辺から古墳時代後期の土師器が多量に出土した。小片も多かったが、



第498図 第354号住居跡

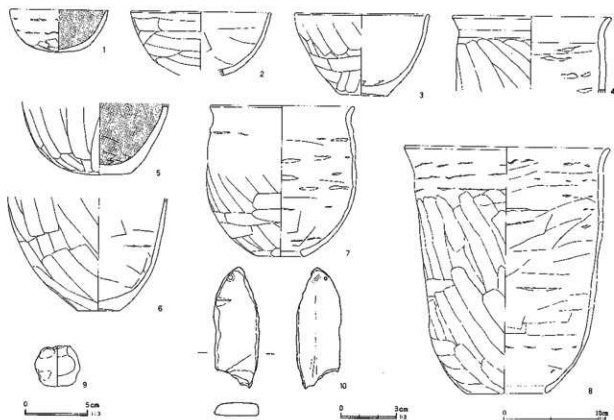
第354号住居跡出土遺物観察表 (第499図)

番号	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存	出土位置	備 考
1	土師 坏	10.3	4.5		A B E G	良好	にぶい橙	100	貯蔵穴	外面接合痕明瞭 内面赤彩
2	土師 碗	14.6	6.7		A B D I	普通	にぶい黄	80	貯蔵穴	
3	土師 碗	14.2	8.7	5.1	B D E J		明赤褐	95	床	
4	土師 甕 (16.5)		8.0		A B F	普通	オリーブ黒	65	カマド	外面煤付着
5	土師 甕		7.6	6.6	A B D E	良好	にぶい橙	80	床・カマド	内面赤彩
6	土師 甕		11.9	4.4	A B J	普通	灰褐	80	カマド	内外面煤付着 歪みあり
7	土師 小型甕 (15.0)	15.9	4.8	A B C J			にぶい橙	40	+3cm	内外面煤付着
8	土師 甕	21.6	26.1	8.5	A B J	良好	淡赤橙	85	貯蔵穴	内外面輪痕明瞭 外面煤付着
9	手捏土器	1.8	3.2	2.2	A B E J	普通	にぶい黄橙	100	覆土	指頭痕明瞭 重さ24.65g
10	石製 槌石	縦6.40cm	横2.40cm	厚さ0.60cm	口径0.20cm		重さ17.71g		P1	滑石製 有孔円板

接合率は良かった。

手捏ね土器1、滑石製模造品1点であった。

図示可能な遺物は、土師器杯1・碗2・甕3・瓶2・

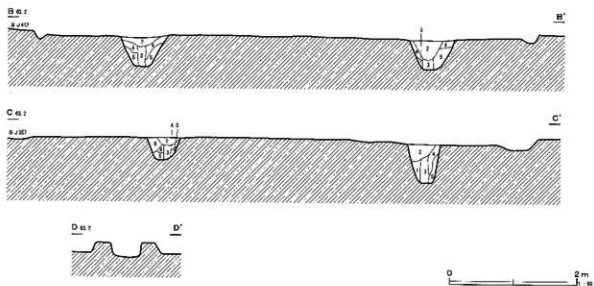


第499図 第354号住居跡出土遺物

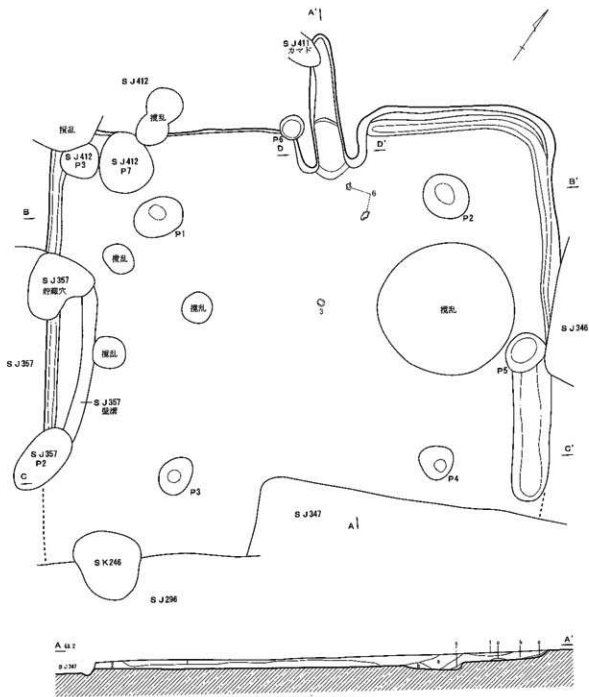
第355号住居跡 (第500・501・502図)

353・357・411・412号住居跡・第246号七坑に切られ、  
第354・429号住居跡を切る。部分的に多くの擾乱に

H-28・29グリッドに位置する。第296・346・347・



第500図 第355号住居跡 (1)



- S J 355
- |   |                  |                      |
|---|------------------|----------------------|
| 1 | 暗褐色 (10TR3/4)    | 炭化穀子 地山紋(黄褐色シルト)     |
| 2 | 黒褐色 (10TR3/2)    | 炭化穀子多 地山紋子 焼土粒多      |
| 3 | 暗褐色 (10TR3/4)    | 柱穴 しまりやや明 粘質地山少      |
| 4 | 暗褐色 (10TR2/4)    | 粘質地山ブロック多 穴状土        |
| 5 | 褐色 (10TR4/4)     | 粘質地山平灰               |
| 6 | 灰色・黄褐色 (10TR1/3) | 砂質灰山紋・ブロック多 しまり強 灰模土 |
- カマド
- |   |                  |                |
|---|------------------|----------------|
| a | 暗褐色 (10TR3/3)    | 炭化穀子 地山紋子 焼土粒多 |
| b | 褐色 (10TR1/4)     | 焼土・炭化穀子多       |
| c | 灰色・黄褐色 (10TR4/3) | 焼土粒多 焼土ブロック 砂質 |



第501図 第355号住居跡 (2)

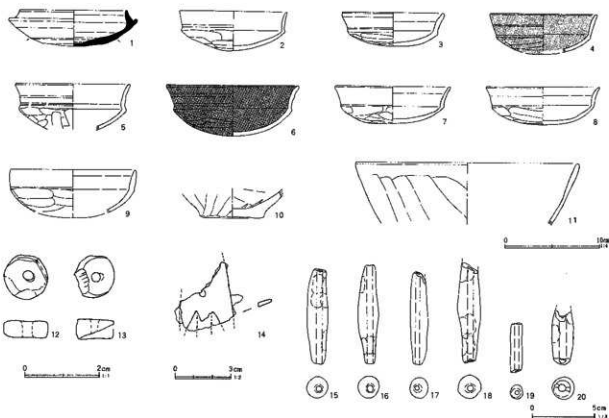
壊されていた。南壁は検出できなかった。検出された規模は、東西8.21mで、南北は6.74m、深さは0.13~0.21mである。主軸方位はN-33°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは北壁中央よりやや東に設置される。燃焼部の掘り込みは浅く、段を持って煙道部へ続く。貯

蔵穴は検出されなかった。壁溝は各壁で検出され、幅20~30cm、深さ4~9cmである。但し、東壁のP5から南に伸びる溝は壁溝とするには幅が広すぎる。ピットは6本検出され、P1~P6の深さは48cm、47cm、33cm、62cm、6cm、11cmである。P1~P4は土層断面に柱痕が観察された。

遺物は、古墳時代後期の土師器・須恵器片が多く



第502図 第355号住居跡出土遺物

第355号住居跡出土遺物観察表 (第502図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坯	(11.3)	3.9		ABH	普通	褐灰	50	カマド	木野産 底部回転ヘラケズリ
2	土師坯	(11.4)	4.2		BEG	良好	橙	30	覆土	
3	土師坯	10.6	3.6		BDEJ	良好	にぶい黄橙	100	±4.2cm	
4	土師坯	(11.2)	4.1		ABEG	良好	明赤褐	35	覆土	内外面赤彩
5	土師坯	(12.2)	4.8		ABDE	普通	橙	30	覆土	内外面煤付着
6	土師坯	13.9	5.3		ABEG	普通	にぶい橙	85	±13.5cm	内外面黒色処理 内外面煤付着
7	土師坯	12.0	3.9		ABE	普通	にぶい黄褐	60	覆土	
8	土師坯	12.1	4.0		BE	良好	橙	75	カマド	
9	土師坯	(13.2)	4.5		ABE	良好	にぶい黄橙	40	覆土	内面煤付着
10	土師甕		3.1	6.8	BEG	良好	にぶい黄橙	40	覆土	
11	土師鉢	(23.6)	6.5		ABGJ	良好	にぶい橙	20	覆土	
12	白玉	直径1.15cm	厚さ0.50cm	孔径0.30cm			重さ0.97g	90	覆土	滑石製
13	白玉	直径1.10cm	厚さ(0.55)cm	孔径0.25cm			重さ0.67g		覆土	滑石製
14	不明鉄製品	現存長4.05cm	幅2.90cm	厚さ0.20cm			重さ6.76g		覆土	欠損有り

出土した。特に土師器環・甕の破片が多かったが、甕は胴部の破片が多く、図示できたものはなかった。

1・鉢(瓶か) 1、滑石製白玉2、不明鉄製品1、土鍾6点であった。

図示可能な遺物は、須恵器環1、土師器環・甕

第355号住居跡出土土鍾観察表 (第502図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
15	7.50	1.70	0.45	17.30	B a II	A	褐灰	100	
16	7.80	1.75	0.55	16.45	C a II	A	灰黄褐	95	
17	7.30	1.65	0.40	16.52	B a III	A	暗褐	95	
18	(7.90)	1.85	0.45	21.48	C a I	C	灰黄褐	85	
19	3.90	1.10	0.35	3.78	D b V	A	橙	100	
20	(4.20)	1.75	0.60	10.30	B a V	C	橙	80	

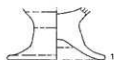
第356号住居跡 (第503・504図)

H・I-28グリッドに位置する。第296・302・357号住居跡・第245号土坑と重複し、その何れよりも古い。西壁と一部の床面を検出したのみである。検出された規模は南北4.42m、東西4.02mで、深さは0.12~0.18mである。主軸方位は西壁でN-18°-Wを指す。

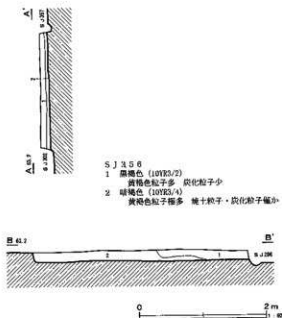
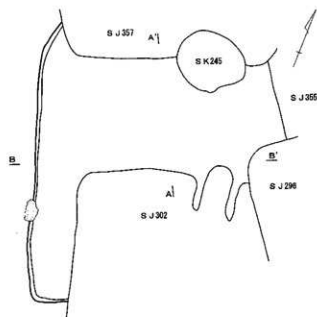
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。カマド、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土した。

図示可能な遺物は、土師器高環1点のみであった。



第503図 第356号住居跡出土遺物



第504図 第356号住居跡



第356号住居跡出土遺物観察表 (第503図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調			残存	出土位置	備考
							色	調	層			
1	土師高坏		5.5	10.0	A B E G	良好	橙		80	覆土		

第357号住居跡 (第505・506図)

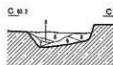
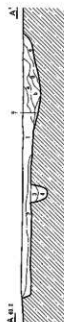
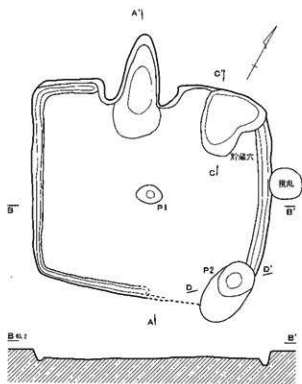
H-28グリッドに位置する。第355・356・412号住居跡・第245号土坑と重複し、その何れよりも新しい。南壁の一部は第245号土坑と同時に調査したため検出できなかった。平面形は東西に僅かに長い長方形で、東西3.84m、南北3.30m、深さは0.08~0.13mである。主軸方位はN-28°-Wを指す。

床面はやや起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁中央より西寄りに設置される。燃焼

部は10cm程掘り込み、緩やかに立ち上がり、煙道部となる。貯蔵穴は北東コーナーに接して設けられ、110×80cmのハート形で、深さは22cmである。壁溝は各壁で検出され、幅12~24cm、深さ4~9cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは26cm、32cmである。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が出土した。土師器は坏・甕の破片が多く、須恵器は坏・蓋の破片が多かった。須恵器蓋にはかえりを有するものがあつた。



S J 3 5 7

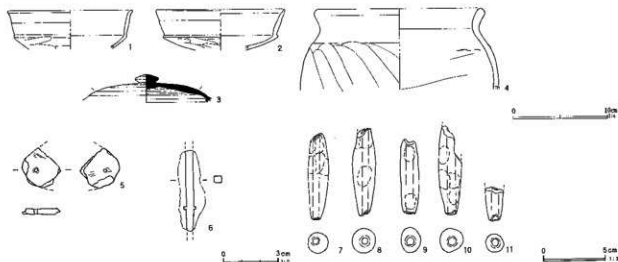
- 1 暗褐色 (10193/2) 黄褐色粒子多 炭化粒子少 焼土粒子僅か
- 2 黄褐色 (10193/2) 炭化粒子多 黄褐色粒子・焼土粒子少
- 3 黄褐色 (10193/2) 炭化物極多 黄褐色粒子多 焼土粒子少
- 4 にぶい黄褐色 (10194/3) 焼土粒子・炭化粒子極多
- 5 暗褐色 (10193/3) 黄褐色粒子多 炭化粒子・焼土粒子少
- 6 暗褐色 (10193/3) 黄褐色粒子・焼土粒子多 炭化粒子極多
- 7 褐色 (10194/4) 焼土粒子・炭化粒子僅か
- 8 にぶい黄褐色 (10193/4) 焼土粒子・炭化粒子極多
- 9 にぶい黄褐色 (10194/3) 炭化粒子少

- 10 暗褐色 (10193/2) 黄褐色粒子多 炭化粒子少 焼土粒子僅か
  - 11 黄褐色 (10193/2) 炭褐色粒子多 炭化粒子僅か
  - 12 褐色 (10194/4) 暗褐色粒子少
- カマド
- a 暗褐色 (10193/4) 黄褐色粒子多 炭化粒子・焼土粒子僅か
  - b 黄褐色 (10193/2) 焼土粒子・壁土ブロック多 黄褐色粒子少
  - c 暗褐色 (10193/3) 炭粒子多 焼土粒子少
  - d 暗褐色 (10193/2) 焼土粒子多 炭化粒子・黄褐色粒子少
  - e 暗褐色 (10193/2) 黄褐色粒子多 炭化粒子少 焼土粒子僅か

第505図 第357号住居跡

図示可能な遺物は、土師器環2・壺1、須恵器蓋1、石製模造品1、鉄鏝1、土鏝5点であった。  
3の須恵器蓋は、木野産と思われる、口縁端部を

欠損していたが、かえりの有る蓋である。かえりはやや鋭利で、小型のつまみが付く。



第506図 第357号住居跡出土遺物

第357号住居跡出土遺物観察表 (第506図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(13.0)	4.1		B E G	良好	粗	10	A区	
2	土師環	(13.6)	4.3		A B E G	良好	にぶい褐色	20	覆土	
3	須恵蓋		3.0		A B F H	普通	灰白	40	A・B区	木野産 天井部回転ベラケズリ
4	土師壺	(17.2)	8.5		A B E G	良好	明赤褐色	20	覆土	外面煤付着
5	石製模造品	縦2.00cm	横2.10cm	厚さ0.30cm					P1	滑石製 右孔門板
6	鉄鏝	現存長4.30cm	幅0.40cm	厚さ0.30cm					覆土	鏡部から某部にかけての部材

第357号住居跡出土土鏝観察表 (第506図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎上	色調	残存	備考
7	6.80	1.60	0.50	13.72	B a III	B	にぶい黄褐色	100	
8	6.90	1.90	0.50	19.12	C a III	A	にぶい黄褐色	95	A区
9	5.85	2.00	0.60	14.66	B a IV	A	明赤褐色	95	B区
10	(6.95)	1.95	0.65	15.94	B a III	A	にぶい褐色	70	B区
11	(2.65)	1.50	0.60	4.42		A	粗	20	B区

第358号住居跡 (第507・508図)

G-30グリッドに位置する。第344・351号住居跡に切られ、第314号住居跡を切る。大半は第351号住居跡の床面に検出された。平面形は正方形で、東西3.85m、南北3.78m、深さは0.04~0.16mである。主軸方位はN-14°-Wを指す。

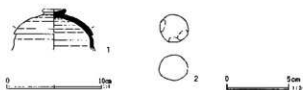
床面は中央付近が高くなる傾向が見られ、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁中央よりやや西に設置される。燃焼部は15cm程掘り込み、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は断続的に検出され、幅10~14cm、深さ2~7cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは14cm、15cmである。

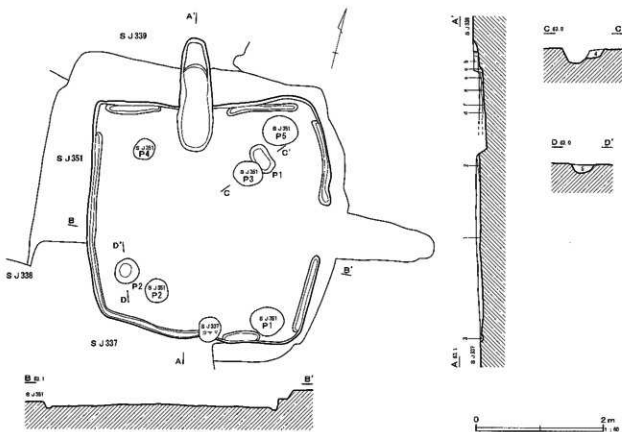
遺物は、古墳時代後期の上師器・須恵器片を少量出土したが、図示可能な遺物は、須恵器蓋1、不明土製品1点のみであった。

1の須恵器蓋は、口縁端部を欠損するが、口径は9cm前後となると思われる、非常に小型の蓋である。口縁部と天井部の境界の稜は明瞭である。天井部には自然釉がかかっているため観察が困難であるが、回転ヘラケズリされる。胎土は緻密だが、黒色粒子(吹き出し状)と、石英の小石を含む。焼成は極めて良好で、内面は青灰色、外面は黒色味の強い灰色であった。

2の土製品は、形状は土玉状である。径2.2cm前後の球形で、孔は穿たれていなかった。



第507図 第358号住居跡出土遺物



- S J 3 5 8  
 1 にぶい黄褐色 (10YR5/4)  
 2 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子多  
 3 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子少  
 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子(φ=0.5cm)多  
 5 灰黄褐色 (10YR6/2) 黄色ブロッカ多

- カマド  
 a 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子  
 b 黄褐色 (10YR3/4) 大片炭屑多  
 c 灰黄褐色 (10YR4/2) しまり物 炭化粒子・焼土塊多  
 d 灰黄褐色 (10YR4/2) 層に比べしまり物 炭化粒子・焼土塊多  
 e にぶい黄褐色 (10YR4/3) φ=0.5cm程度位の小さく粒子  
 f にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子少 土層よりやや粘着多  
 g にぶい黄褐色 (10YR5/4) 炭化粒子少 粘性高

第508図 第358号住居跡

第358号住居跡出土遺物観察表 (第507図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色	画	残存	出土位置	備考
1	須恵器蓋		4.4		AB	良好	灰		45	B区	末野産 天井部回転ヘラケズリ 自然釉付着
2	不明土製品	長径2.30cm	短径2.20cm		B J L	普通	橙		100	B区	厚さ1.95cm 重さ9.84g

### 第359号住居跡 (第509・510図)

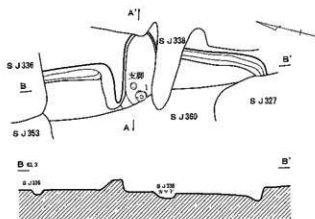
G・H-29グリッドに位置する。第327・336・338・360号住居跡と重複し、その何れよりも古い。第353号住居跡との関係は不明である。カマドと東壁の一部を検出したのみである。検出された規模は、南北3.58m、東西0.81mに過ぎない。深さは0.16~0.25mである。主軸方位はN-76°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

覆土の観察は出来なかった。

カマドは東壁に設置される。燃焼部の掘り込みは僅かで、川原石利用の支脚が立位で出土した。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝はカマドの両側で検出され、幅16~24cm、深さ3~10cmである。

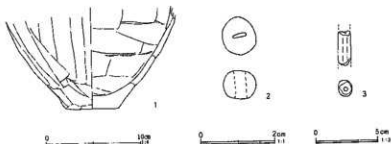
遺物は、占墳時代後期の土師器片を少量出土した。図示可能な遺物は、土師器甕1、土玉1点、土錘1点であった。



S J 359 カマド  
a 褐色 砂質地山ブロック主体 産土 炭化粒子  
b にぶい黄褐色 (砂質土) 砂質地の主体 底の滑軟化層



第509図 第359号住居跡



第510図 第359号住居跡出土遺物

### 第359号住居跡出土遺物観察表 (第510図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師器		10.7	5.7	A B E J	良好	明褐色	95	カマド	内外面厚付き
2	土製小玉	直径1.00cm	厚さ0.75cm	孔径0.40cm			重さ0.62g	100	覆土	

### 第359号住居跡出土土錘観察表 (第510図)

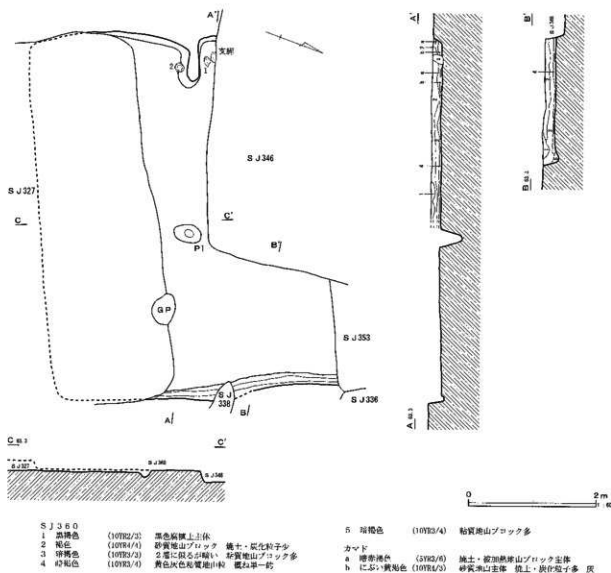
番号	長さ	径	孔径	重さ(κ)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	(2.60)	1.20	0.30	3.66		A	にぶい褐		カマド

### 第360号住居跡 (第511・512図)

H-29グリッドに位置する。第338・346・353号住居跡に切られ、第327・335・359号住居跡を切る。第327号住居跡と同時に調査したため南壁は検出できず、東壁と西壁を検出したのみである。検出された規模は、東西5.74m、南北2.64mで、深さは0.16~0.22mである。主軸方位はN-113°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは西壁に設置され、南半のみ検出された。燃焼部の掘り込みはなく、急激に立ち上がる。川原石利用の支脚が立位で出土した。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は東壁で検出され、幅14~22cm、深さ4~6cmである。ピットは中央部で1本検出され、深さは31cmである。



第511図 第360号住居跡



第512図 第360号住居跡出土遺物

遺物は、古墳時代後期の土師器が多く出土したが、土師器坏2点のみである。  
 図示可能な遺物は、カマドおよび左袖脇で出土した

第360号住居跡出土遺物観察表 (第512図)

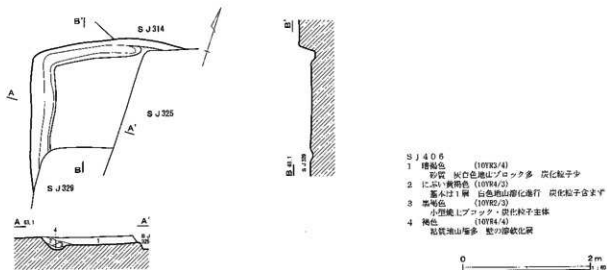
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	13.3	4.2		ABEG	良好	明赤褐色	65	+6.8cm	
2	土師坏	11.6	4.3		ABE	良好	黄褐色	100	+9.1cm	外面埋付着

第406号住居跡 (第513図)

H-30グリッドに位置する。第314・325・329号住居跡と重複し、その何れよりも古い。北西コーナー周辺を検出したのみである。検出された規模は、北壁2.45m、西壁2.14mで、深さは0.12~0.14mである。主軸方位は西壁でN-18°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は垂直に立ちあがる。カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は幅26~40cm、深さ3~7cmで検出された。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。



- S J 406
- 1 褐色 (10YR2/4)  
砂質、灰白色黄土ブロック多、炭化粒子少
  - 2 灰色黄褐色 (10YR4/3)  
基本は1層、白色粘土層(堆積) 炭化粒子含まず
  - 3 茶褐色 (10YR2/3)  
小埋土ブロック・炭化粒子主体
  - 4 褐色 (10YR4/4)  
瓦質粘土層多、壁の埋積土質

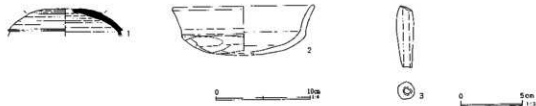
第513図 第406号住居跡

第407号住居跡 (第514・515図)

F-G-29グリッドに位置する。第345・408号住居跡・第210号土坑に切られ、第409・413号住居跡を切る。東壁は検出されなかった。検出された規模は、

南北3.24m、東西3.12mで、深さは0.04~0.10mである。主軸方位は北壁でN-78°-Eを指す。

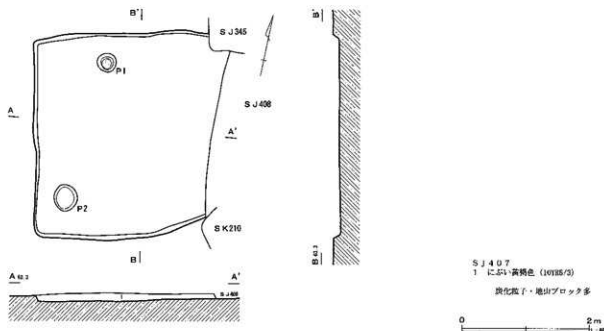
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。ピ



第514図 第407号住居跡出土遺物

ットは2本検出され、P1・P2の深さは10cm、12cmである。P1底面近くからは扁平な石が検出された。

遺物は、古墳時代後期の土師器・須恵器の破片が少量出土したが、図示可能な遺物は、須恵器蓋1、土師器坏1、土鍾1点であった。



第515図 第407号住居跡

第407号住居跡出土遺物観察表 (第514図)

番号	器種	L径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵蓋		2.5		A B C H	良好	灰	30	覆上	木野岸 天井部回転ヘラケズリ
2	土師坏	14.8	5.2		B E L	普通	橙	35	B区	

第407号住居跡出土土鍾観察表 (第514図)

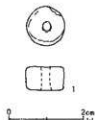
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	4.90	1.35	0.50	6.49	B a V	C	灰白	100	

第408号住居跡 (第516・517図)

F-30グリッドに位置する。第305・340・343・345号住居跡・第210号土坑に切れ、第407号住居跡を切る。西壁から東壁にかけて検出され、北壁と南壁は検出されなかった。東壁は西に傾き西壁と並行していないが、覆土や床面の状態で同じ住居跡と判断した。検出された規模は、東西8.04m、南北2.50mで、深さは0.01~0.17mである。主軸方位は東壁でN-30°-Wを指す。

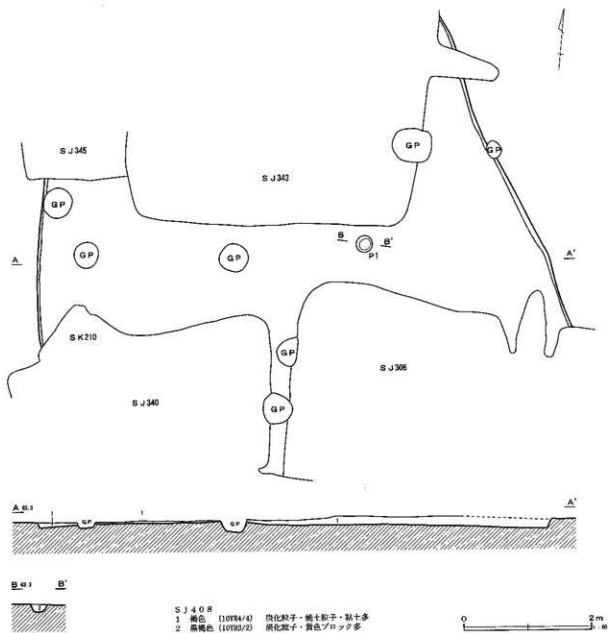
床面は緩やかな起伏があり、一部貼床が残存して

いた。壁は開き気味に立ちあがる。カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。ピットは1本検出され、深さは11cmである。



第516図 第408号住居跡出土遺物

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が僅 点であった。  
かに出土したが、図示可能な遺物は、滑石製白玉1



第517図 第408号住居跡

第408号住居跡出土遺物観察表 (第516図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	白玉	直径1.00cm	厚さ0.60cm	孔径0.25cm	重さ1.21g	100	覆土	滑石製		

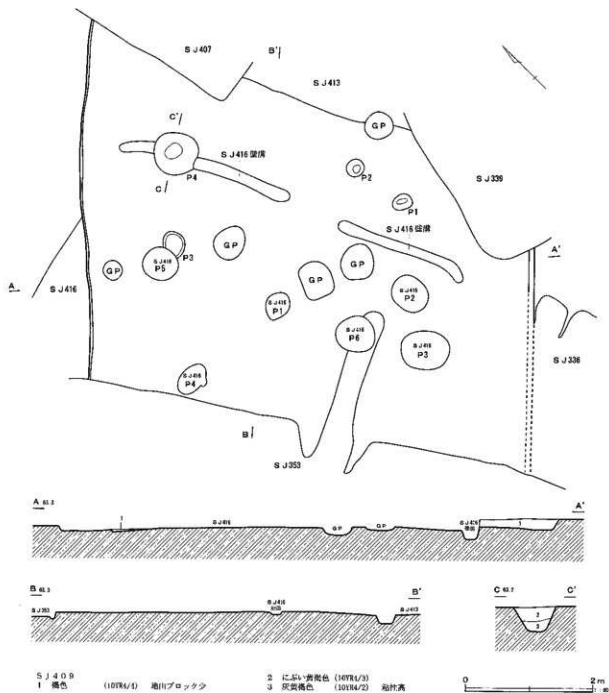


第409号住居跡 (第518・519図)

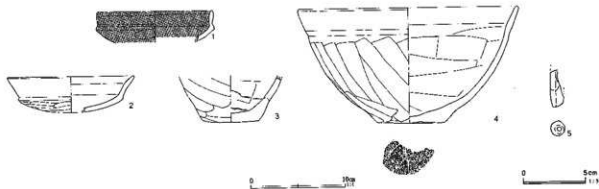
F・G-29グリッドに位置する。第336・339・353・407・413・416号住居跡と重複し、その何れよりも古い。北東壁と南西壁は検出されなかった。検出された規模は、北西壁から南東壁が7.16m、北東から南西方向が5.68mで、深さは0.08~0.16mである。主軸方位は西壁でN-45°-Eを指す。

床面は中央付近がやや高くなり、壁は開き気味に立ちあがる。カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。ピットは4本検出され、P1~P4の深さは13cm、16cm、11cm、37cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が多く出土したが、図示可能な遺物は、土師器環2・甕1・鉢1、土錘1点であった。



第518図 第409号住居跡



第519図 第409号住居跡出土遺物

第409号住居跡出土遺物観察表 (第519図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(12.2)	3.3		A B E	黒褐	普通	20	覆土	内外面黒色処理
2	土師環	(13.4)	3.8		A B D	普通	にぶい黄緑	30	C区	
3	土師鉢		4.9	(6.0)	A B C E	良好	明赤褐	30	C区	内面煤付着
4	土師鉢	(23.2)	12.2		A B E L	良好	にぶい黄緑	55	覆土	内外面煤付着

第409号住居跡出土土器観察表 (第519図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	(2.90)	1.20	0.30	3.41	—	A	明赤褐	—	

#### 第410号住居跡 (第520図)

F-27グリッドに位置する。第348号住居跡と重複し、本住居跡が古い。荒川に向う斜面に礎層を切つて構築されていた。平面形は南北に長い長方形で、長軸4.19m、短軸3.30m、深さは0.09~0.30mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。

床面は起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。カマド、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は、古墳時代の土師器片が僅かに出土したが、図示可能遺物は出土しなかった。

#### 第411号住居跡 (第521・522図)

G・H-28グリッドに位置する。第355・412号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。南東コーナーをグリッドビットに、南壁や西壁、床面を乱瓦に壊される。平面形は南北に長い長方形で、長軸4.11m、短軸2.95m、深さは0.10~0.13mである。主軸方位はN-91°-Eを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部は10cm程掘り込み、急激に立ち上がる。川原石利用の支脚が立位で出土した。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は全周し、幅12~26cm、深さ6~10cmである。

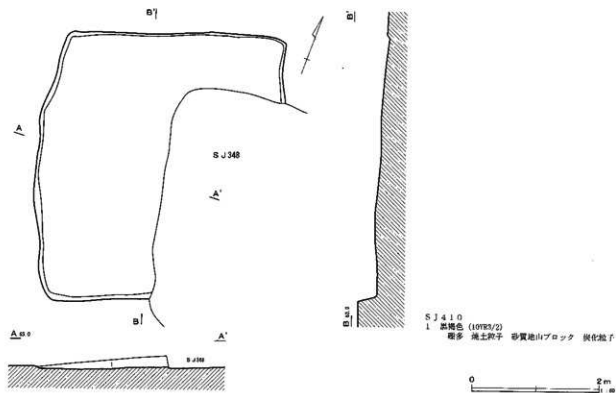
遺物は、覆土およびカマドから平安時代の土師器・須恵器が出土した。何れも小片が多く、殆ど接合しなかった。また、図示できなかったが、覆土から灰釉碗の破片が1点出土した。

図示可能な遺物は、須恵器環2・甕1、土師器甕1、棒状鉄製品2、碗形滓1、土鍾3点であった。須恵器環は、2点とも底部は糸切後未調整である。口径12cm代、底径は5cm代となる。

4は甌であった可能性もある。

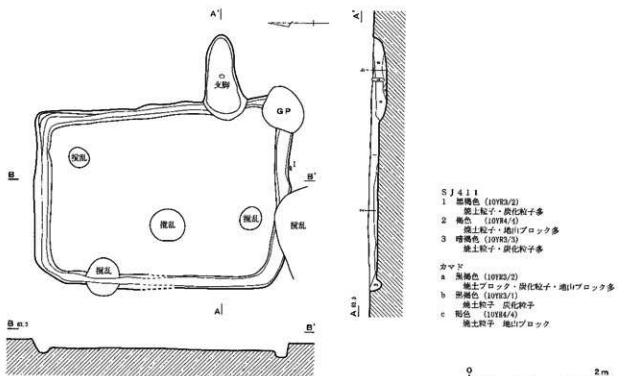
5は、器種不明の鉄製品である。細長い棒状の鉄製品である。両端部を欠損するが、途中でくの字に折れ曲がっている。両端で太さが異なり、一端が太

く、次第に細くなっていく。細い方の端部は鉤状にゆるく曲がる。紡錘車の軸棒か。

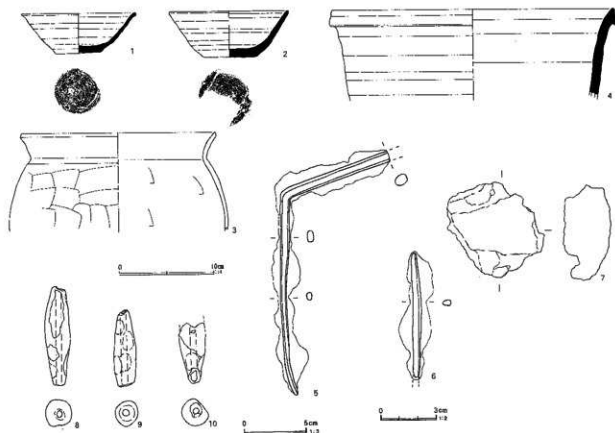


S J 4 1 0  
1 赤褐色 (10YR5/2)  
層多 焼土粒子 砂質地山ブロック 炭化粒子

第520図 第410号住居跡



第521図 第411号住居跡



第522図 第411号住居跡出土遺物

第411号住居跡出土遺物観察表 (第522図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	12.0	4.3	5.1	ABH	良好	黄灰	85	十7.5cm	木野産 底部回転糸切
2	須恵坏	12.6	4.9	5.7	ABEH	不良	黄灰	70	カマド	木野産 底部回転糸切
3	十師罎	(20.6)	10.4		ABEJ	良好	橙	25	覆土	
4	須恵罎	(30.0)	9.6		ABEHL	不良	褐灰	25	カマド	木野産
5	棒状鉄製品	現存長12.75cm	幅0.55cm	厚さ0.60cm	重さ40.92g				覆土	
6	棒状鉄製品	現存長6.55cm	幅0.45cm	厚さ0.30cm	重さ12.07g				覆土	
7	鉄滓	縦7.50cm.横7.80cm			重さ260.93g				覆土	

第411号住居跡出土土錐観察表 (第522図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
8	7.90	2.05	0.50	27.57	Ba II	A	A	90	
9	6.10	2.00	0.50	17.89	Ba IV	A	にぶい橙	100	
10	(4.70)	2.10	0.50	14.17	—	A	灰黄褐	—	

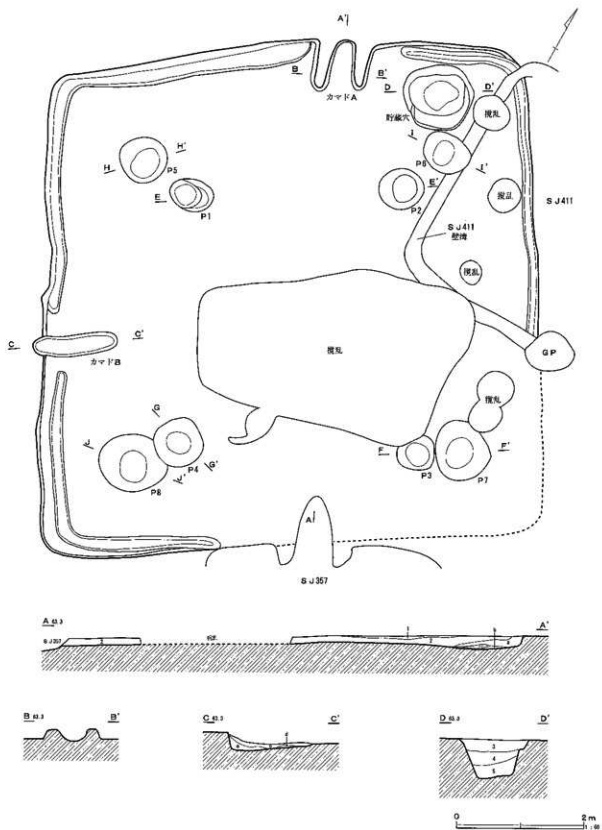
第412号住居跡 (第523・524・525図)

G・H—27・28グリッドに位置する。第357・411号住居跡に切れ、第355号住居跡を切る。床面中央付近や東壁近くを攪乱に壊される。南東コーナー周辺の壁は第355号住居跡と同時に調査したため検出

できなかった。平面形は正方形で、東西・南北共に7.82mで、深さは0.15—0.20mである。主軸方位はN—31°—Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは2基検出された。カマドAは北壁中央より東寄りに設置される。燃焼部の掘り込みはなく、

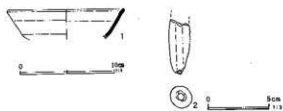


第523図 第412号住居跡 (1)

急激に立ち上がる。土層断面に明瞭な焼土層が観察された。カマドBは西壁中央より南に設けられ、細長い燃焼部が検出された。両袖はなかった。カマドAは住居の最終段階のものであるが、カマドBがAより先行するのか、同時であったのかは判断できなかった。貯蔵穴はカマドAの右に設けられ、110×104cmの楕円形で、深さは59cmである。壁溝は検出された壁では全周し、幅16~40cm、深さ6~13cmである。ピットは8本検出され、何れも支柱穴と考えられる。建替えが行われたと考えられ、内側のP1~P4が新しく、外側のP5~P8が古い。P1~P8の深さは57cm、62cm、23cm、29cm、42cm、76cm、65cm、37cmである。

遺物は、土師器・須恵器の破片が多く出土したが、図示可能な遺物は須恵器環1、土錘1点であった。

図示した須恵器は平安時代に属するものと思われるが、本住居跡は、奈良時代始め頃と考えられる第357号住居跡に壊されており、1の環は、本住居跡に伴う遺物とは考えにくい。



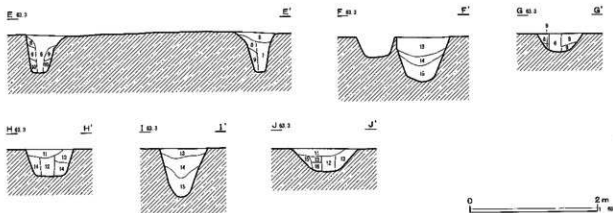
第524図 第412号住居跡出土遺物

第412号住居跡出土遺物観察表 (第524図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵環	(12.4)	3.2		A BH	普通	灰白	35	覆土	木野産

第412号住居跡出土土錘観察表 (第524図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
2	(4.30)	1.70	0.50	10.56	—	A	灰白	—	



S J 4 1 2

- 1 褐色 (10184/4) 焼土粒・炭化粒子少 埴山粒多
- 2 褐色 (10184/4) 炭化粒子・焼土粒多 埴山粒 焼成ブロック多
- 3 灰褐色 (10184/2) 灰白色灰質モブロック・埴山ブロック多
- 4 にぶい灰褐色 (10184/3) 砂質 埴山土多 炭化粒下 焼土粒下
- 5 褐色 (10184/4) 砂質 埴山ブロック多 炭化粒下多
- 6 にぶい灰褐色 (10184/2) 埴山粒 焼土粒 炭化粒子 焼成モヤ有り
- 7 にぶい灰褐色 (10184/3) 埴山粒 埴土粒 砂質
- 8 褐色 (10184/4) 砂質 埴山ブロック 炭化粒子
- 9 褐色 (10184/3) 砂質 埴山ブロック多
- 10 褐色 (10184/4) 砂質 炭化粒子
- 11 にぶい灰褐色 (10184/3) 埴山粒多 炭化粒子・埴土粒・砂粒少
- 12 にぶい灰褐色 (10184/4) 埴山粒下・炭化粒子少

- 13 褐色 (10184/4) 埴山土多 炭化粒子・埴土粒少
- 14 にぶい灰褐色 (10184/3) 埴山粒多 灰褐色粒子少 炭化粒子多
- 15 にぶい灰褐色 (10184/4) 埴山粒多 褐色粒下・炭化粒子多
- 16 褐色 (10184/4) 灰褐色多 炭化粒子少

カマドA

- a 砂褐色 (10184/3) 埴山ブロック
- b 褐色 (10184/4) 埴山粒 炭化粒 埴土粒

カマドB

- c 砂褐色 (10184/3) キヤ砂質 埴土・炭化粒子・埴山ブロック多
- d 灰褐色 (2.5184/6) 埴土・炭化粒下多
- e 褐色 (10184/4) 砂質 埴山ブロック 埴土 炭化粒子

第525図 第412号住居跡 (2)

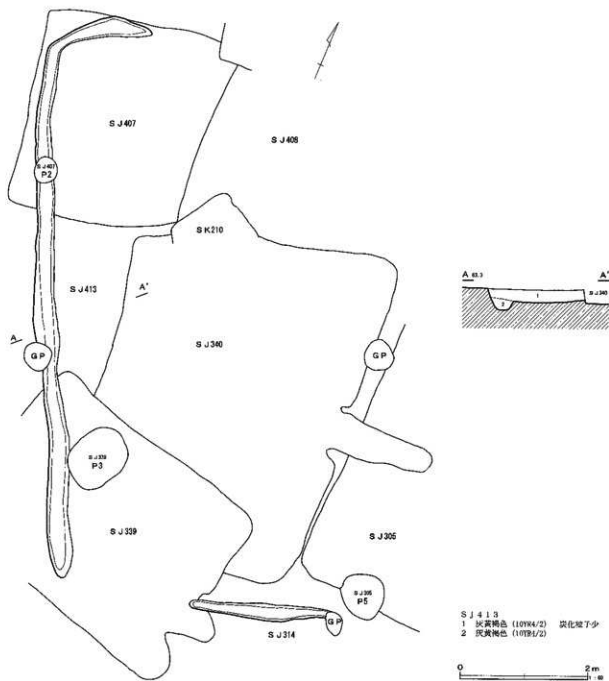
第413号住居跡 (第526図)

F-29、G-29-30グリッドに位置する。第305・339・340・407号住居跡に切れ、第314・409号住居跡を切る。第351号住居跡との関係は不明である。西壁溝と南壁溝の一部を検出したのみで、床面の大半は消失していたと考えられる。検出された規模は、西壁が8.38m、南壁が4.32mで、深さは0.16~0.20m

である。主軸方位はN-24°-Wを指す。

床面の状態は不明瞭である。壁は開き気味に立ちあがる。カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は幅24~40cm、深さ10~14cmで検出された。

遺物は、古墳時代の土師器が少量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。



第414号住居跡 (第527・528・529図)

F-27、G-26・27・28、H-27グリッドに位置する。第350-352号住居跡・第257号土坑と重複し、本住居跡が最も古い。平面形は正方形で、東西9.02m、南北8.66m、深さは0~0.02mと極めて浅い。主軸方位はN-24°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁の状態は不明瞭である。覆土は表土掘削時に消失しており、床面が露出した状態であった。

カマドは検出されなかったが、壁溝が切れることや、周辺で焼土が僅かながら検出されたことから北

壁に設置されていたと考えられる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝はほぼ全周し、幅12~24cm、深さ1~7cmである。ピットは15本検出され、P1~P15の深さは38cm、23cm、19cm、10cm、11cm、15cm、11cm、20cm、11cm、11cm、20cm、38cm、11cm、6cm、5cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が出土したが、図示可能な遺物は、須恵器坏1・土師器高坏1・瓶1点であった。

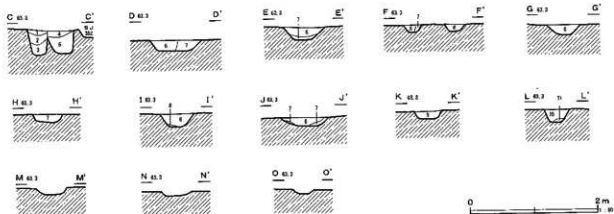
1の須恵器坏は、重複する第257号土坑の遺物であった可能性がある。



第527図 第414号住居跡出土遺物

第414号住居跡出土遺物観察表 (第527図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵器坏	11.8	4.5	4.9	A B D G	普通	灰白	60	覆土	米野産 底層回転糸切
2	土師器高坏	16.6	11.6		A B E G	良好	橙	55	P1	接合痕明瞭 外面磨滅
3	土師瓶	6.7		7.0	A B E	良好	にぶい黄橙	20	A区	



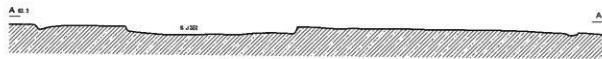
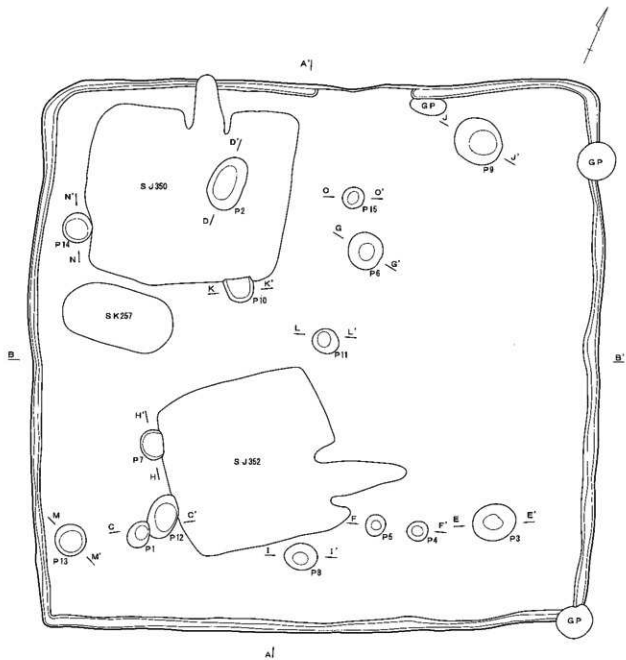
- S J 4 1 4
- 1 褐色 (10YR4/4)
  - 2 褐色 (10YR4/4)
  - 3 暗褐色 (10YR3/3)
  - 4 にぶい黄褐色 (10YR5/2)
  - 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3)

- 6 にぶい黄褐色 (10YR5/1)
- 7 褐色 (10YR4/4)
- 8 淡黄褐色 (10YR6/2)
- 9 にぶい黄褐色 (10YR5/4)
- 10 暗褐色 (10YR3/2)
- 11 にぶい黄褐色 (10YR4/3)

- 炭化粘土少 粘土
- 堆積ブロック
- 炭化粘土少
- 炭化粘土少
- 炭化粘土多 焼土
- 堆積ブロック多 炭化粘土少

第528図 第414号住居跡 (1)





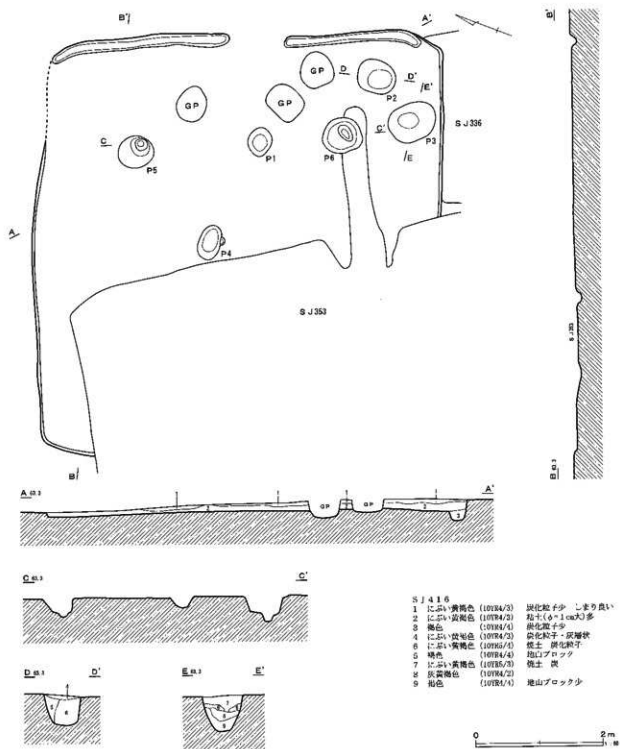
第529图 第414号住居跡 (2)

第416号住居跡 (第530図)

G-29グリッドに位置する。第336・353号住居跡に切れ、第409号住居跡を切る。第409号住居跡と同時に調査したため、北東コーナー近くの壁は検出

できなかった。平面形は正方形で、東西6.56m、南北6.54m、深さは0.04~0.10mと浅い。主軸方位は北壁でN-72°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち



第530図 第416号住居跡

あがる。

カマドは検出されなかったが、壁溝が切れることや周辺で焼土粒子、炭化粒子が検出されたことから東壁の中央に設置されたと考えられる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は東壁で検出され、幅14~20cm、深さ3~7cmである。ピットは6本検出され、P1~P6の深さは18cm、45cm、56cm、25cm、28cm、40cmである。P5とP6は底面に小穴が検出され、柱穴と考えられる。覆土の観察は出来なかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が容量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第429号住居跡（第531・532図）

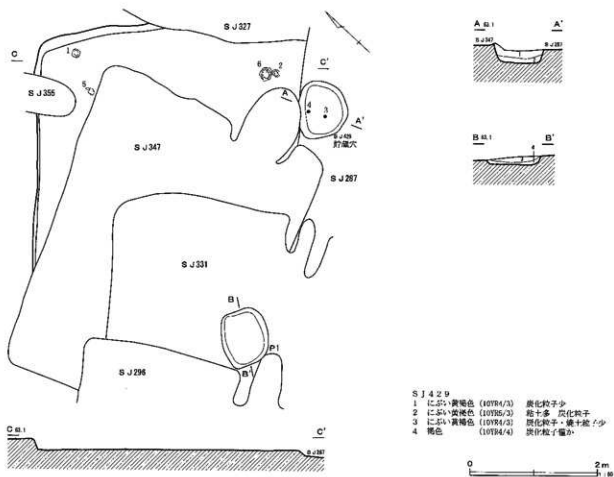
H-28・29グリッドに位置する。第287・296・327・331・347・355号住居跡・第247号土坑と重複し、その

何れよりも古い。北コーナー周辺と床面の一部が検出されたのみである。検出された規模は、北西壁が3.57m、北西から南東にかけて4.22mで、深さは0.04~0.16mである。主軸方位は西壁でN-49°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土の観察は出来なかった。

カマドは検出されなかった。貯蔵穴は第287号住居跡床面に検出された。90×80cmの楕円形で、深さは19cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは第331号住居跡床面に1本検出され、深さは12cmである。貯蔵穴、ピット共に位置的に本住居跡のものと判断した。

遺物は、古墳時代後期の土師器がやや多く出土した。土師器坏・甕の破片が多く、特に坏類の残存率

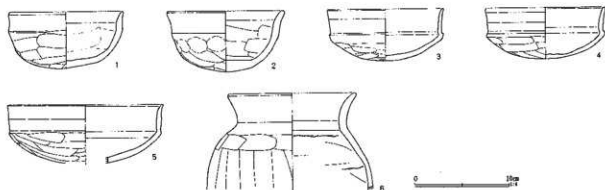


第531図 第429号住居跡

は良かった。

図示可能な遺物は、土師器杯3・碗2・甕1点であった。

1～3は完形、4も完形に近い個体であった。



第532図 第429号住居跡出土遺物

第429号住居跡出土遺物観察表 (第532図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師碗	12.0	6.0		ABEJL	良好	橙	100	-3.8cm	内外面煤付着 指頭痕
2	土師碗	12.2	6.4		ABE	良好	にぶい橙	100	床	
3	土師杯	12.2	5.4		ABEJ	良好	橙	100	貯蔵穴	
4	土師杯	12.5	5.4		ABFG	良好	にぶい黄橙	90	貯蔵穴	
5	土師杯	(16.4)	6.1		BDEJ	良好	橙	40	床	
6	土師小型甕	13.3	10.3		ABCDE	良好	にぶい橙	70	-10cm	

## 2. 土坑

### 第178号土坑 (第533図)

E・F-33グリッドに位置する。平面形は径1.04mのやや歪んだ円形で、深さは0.39mである。遺物は、土師器甕・須恵器甕の小片が僅かに出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

### 第179号土坑 (第533・538図)

E・F-33グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.27m、短径1.16m、深さ0.34mである。底面南端に深さ22cmの小穴が検出された。主軸方位はN-89°-Wを指す。遺物は、刀子の基部と思われる鉄製品が1点出土した。

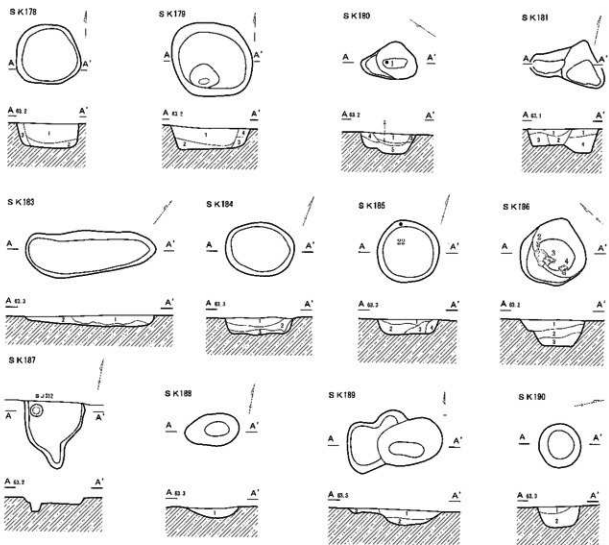
1・2は厚手の碗状となる。3～5は須恵器杯蓋模倣杯である。口縁部は直立もしくは僅かに外反する。模倣杯の中でも古相に属する一部と考えられる。

### 第180号土坑 (第533・537図)

F-32グリッドに位置する。第290号住居跡に切られる。平面形は不整形で、長さ0.82m、幅0.52m、深さ0.32mである。南側が一段低くなっている。主軸方位はN-46°-Wを指す。遺物は、古墳時代後期の土師器杯片が僅かに出土した。図示可能な遺物は、土師器の碗1点のみであった。

### 第181号土坑 (第533図)

F・G-32グリッドに位置する。第290号住居跡に切られる。土層断面から2基の土坑の切り合いと判明した。西側の土坑は東側のものより新しく、長さ0.68m、幅0.37m、深さ0.26mで、主軸方位はN-



SK178・179  
 1 褐色 (10YR4/4) 砂粒子多 しまりたし  
 2 褐色 (10YR4/2) しまり強  
 3 にぶい黄褐色 (10YR5/2)  
 4 にぶい黄褐色 (10YR4/2)

SK180  
 1 にぶい黄褐色 (10YR4/2)  
 2 暗褐色 (10YR2/4) 炭化粒子多  
 3 暗褐色 (10YR2/3) 焼土粒子僅か  
 4 暗褐色 (10YR2/4) 炭化粒子僅か  
 5 暗褐色 (10YR2/2) 炭化粒子僅か

SK181  
 1 にぶい黄褐色 (10YR4/2)  
 2 暗褐色 (10YR2/4) 炭化粒子・焼土粒子僅か  
 3 暗褐色 (10YR2/3)  
 4 暗褐色 (10YR2/2)

SK183  
 1 暗褐色 (10YR2/2) 餅チブツク 炭化粒子多  
 2 褐色 (10YR4/4) 黄褐色シムツブツク多 炭化粒子少

SK184  
 1 暗褐色 (10YR2/2) 炭化粒子多 焼土粒子少  
 2 暗褐色 (10YR2/3) 炭化粒子多 焼土粒子少  
 3 暗褐色 (10YR2/3) 炭化粒子少

SK185  
 1 暗褐色 (10YR2/4) 炭化粒子 白色炭化子  
 2 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子  
 3 褐色 (10YR4/4) 黄褐色土  
 4 暗褐色 (10YR2/4) 炭化粒子僅か

SK186  
 1 褐色 (10YR4/4) 白色炭化子  
 2 にぶい黄褐色 (10YR5/2)  
 3 にぶい黄褐色 (10YR4/2)

SK188  
 1 にぶい黄褐色 (10YR4/2)

SK189  
 1 褐色 (10YR4/4)  
 2 にぶい黄褐色 (10YR4/2)  
 3 暗褐色 (10YR2/4)

SK190  
 1 にぶい黄褐色 (10YR4/2) 黄褐色土  
 2 にぶい黄褐色 (10YR5/2) しまり強



第533図 第178～181・183～190号土坑

76°-Eである。西側の土坑は長さ0.78m、幅0.55m、深さ0.38mで、主軸方位は北辺でN-52°-Wを指す。遺物は、土師器甕の胴部片が数点出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第183号土坑 (第533図)

I-29グリッドに位置する。第334号住居跡・第209号土坑を切る。平面形は長楕円形で、長径2.06m、短径0.71m、深さ0.18mである。主軸方位はN-53°-Eを指す。遺物は、土師器片が少量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第184号土坑 (第533図)

I-29グリッドに位置する。第328号住居跡を切る。平面形は楕円形で、長径1.08m、短径0.84m、深さ0.27mである。主軸方位はN-69°-Eを指す。遺物は、土師器甕の小破片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第185号土坑 (第533-538図)

I-29グリッドに位置する。第328号住居跡を切る。平面形は径0.98mの円形で、深さは0.25mである。遺物は、石製紡錘車1点が出土した。

#### 第186号土坑 (第533-537-538図)

F-31グリッドに位置する。第312号住居跡を切る。平面形は歪んだ隅丸方形で、東西0.96m、南北0.94m、深さ0.41mである。西側はテラス状になっていた。主軸方位はN-1°-Eを指す。遺物は、古墳時代後期の土師器片がやや多く出土した。図示可能な遺物は、土師器杯1・甕2、土錘1点であった。

#### 第187号土坑 (第533図)

F-31グリッドに位置する。第312号住居跡に切られ、西半のみ検出された。検出された規模は、東

西1.04m、南北0.94m、深さ0.09mである。深さ0.13mの小穴が検出された。主軸方位はN-52°-Eを指す。遺物は、土師器杯の破片が数点出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第188号土坑 (第533図)

E-33グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.86m、短径0.50m、深さ0.16mである。主軸方位はN-79°-Eを指す。遺物は、出土しなかった。

#### 第189号土坑 (第533図)

E-33グリッドに位置する。土層断面から2基の土坑の切り合いと判明した。東側の土坑は西側のもより新しく、長径1.03m、短径0.68mの楕円形で、深さは0.25mである。主軸方位はN-75°-Eを指す。東側の土坑は長さ1.04m、幅0.70mの不整形で、深さは0.07mである。主軸方位はN-69°-Eを指す。遺物は、土師器甕の小片が数点出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第190号土坑 (第533図)

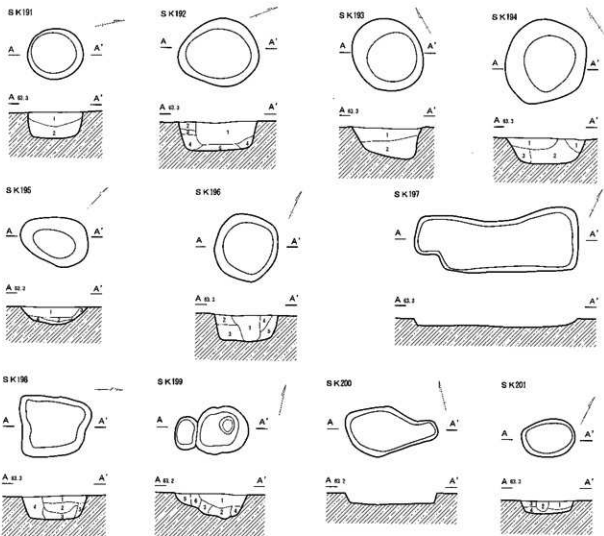
E-33グリッドに位置する。平面形は径0.68mの円形で、深さ0.31mである。遺物は、土師器甕の破片が3点出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第191号土坑 (第534図)

E-33グリッドに位置する。平面形は径0.84mの円形で、深さ0.41mである。遺物は出土しなかった。

#### 第192号土坑 (第534図)

E-33グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.28m、短径1.06m、深さ0.43mである。主軸方位はN-20°-Eを指す。遺物は、出土しなかった。



SK191  
1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 小骨残少  
2 黄褐色 (10YR5/6) 炭化粒子多

SK192  
1 褐色 (10YR4/4) 雑多  
2 にぶい黄褐色 (10YR5/2) しまりなし  
3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) しまりなし  
4 黄褐色 (10YR5/6) しまりなし  
5 にぶい黄褐色 (10YR5/6) しまりなし

SK193  
1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 白色粒下  
2 にぶい黄褐色 (10YR5/3)

SK194  
1 褐色 (10YR4/4) にぶい黄褐色ブロック  
2 褐色 (10YR4/4) ブロック状  
3 黄褐色 (10YR5/6) ブロック状

SK195  
1 褐色 (10YR4/6) 白色微粒下多  
2 褐色 (10YR4/4)  
3 にぶい黄褐色 (10YR5/4)  
4 砂層

SK196  
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3)  
2 にぶい黄褐色 (10YR5/3)  
3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 炭化粒子盛  
4 褐色 (10YR4/4)  
5 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 小骨

SK198  
1 にぶい黄褐色 (10YR5/2)  
2 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 炭化粒子盛  
3 にぶい黄褐色 (10YR5/4)  
4 褐色 (10YR5/6)  
5 にぶい黄褐色 (10YR5/4)

SK199  
1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 炭化粒子  
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3)  
3 にぶい黄褐色 (10YR5/3)  
4 黄褐色 (10YR5/6)  
5 暗褐色 (10YR3/2) 炭化粒子 褐色粒子  
6 黄褐色 (10YR5/6) 炭化粒子盛

SK201  
1 暗褐色 (10YR3/2) 炭化粒子  
2 暗褐色 (10YR3/4)  
3 にぶい黄褐色 (10YR5/3)  
4 黄褐色 (10YR5/6)

0 2 m

第534図 第191～201号土坑

#### 第193号土坑 (第534図)

E-33グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.20m、短径1.04m、深さ0.47mである。主軸方位はN-13°-Wを指す。遺物は平安時代の須恵器環片が数点出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第194号土坑 (第534図)

E-32-33グリッドに位置する。平面形は径1.30mの歪んだ円形で、深さは0.38mである。遺物は出土しなかった。

#### 第195号土坑 (第534図)

E-32グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.10m、短径0.73m、深さ0.26mである。主軸方位はN-71°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

#### 第196号土坑 (第334図)

E-32グリッドに位置する。平面形は径1.02mの円形で、深さは0.42mである。遺物は、土師器甕の小片が1点出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第197号土坑 (第534・538図)

E-32グリッドに位置する。平面形は長方形で、南西の角が欠けている。長さ2.52m、幅0.80mで、深さ0.13mである。主軸方位はN-65°-Eを指す。遺物は、土錘1点が出土したのみである。

#### 第198号土坑 (第534・538図)

F-33グリッドに位置する。平面形は歪んだ正方形で、南北1.02m、東西0.94m、深さ0.36mである。主軸方位はN-3°-Eを指す。遺物は、上錘が1点出土したのみである。

#### 第199号土坑 (第534・538図)

F-32-33グリッドに位置する。平面形は不整形で、長さ1.18m、幅0.75m、深さ0.36mである。西側はテラス状になっていた。底面東端近くに深さ7cmの小穴が検出された。主軸方位はN-75°-Eを指す。遺物は、棒状鉄製品1点が出土した。

#### 第200号土坑 (第534図)

F-31グリッドに位置する。平面形は不整形で、長さ1.47m、幅0.78m、深さ0.18mである。主軸方位はN-76°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

#### 第201号土坑 (第534図)

F-31グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.84m、短径0.58m、深さ0.20mである。主軸方位はN-50°-Eを指す。遺物は、出土しなかった。

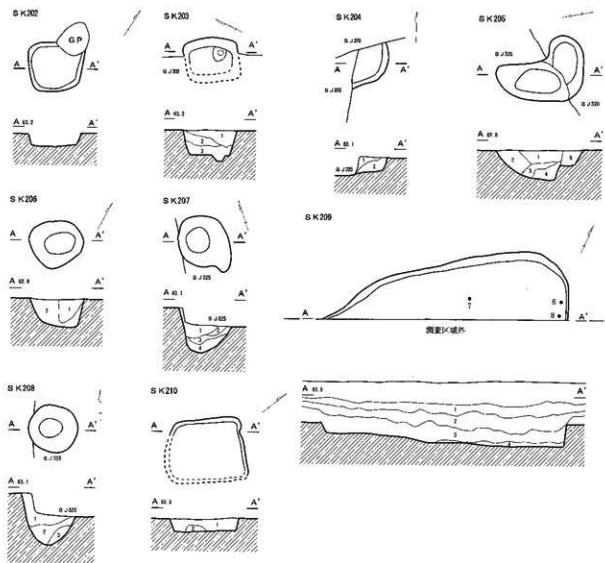
#### 第202号土坑 (第535図)

F-31グリッドに位置する。北東角はグリッドピットに壊されていた。平面形は隅丸方形で、東西0.84m、南北0.78m、深さ0.20mである。主軸方位は北辺でN-54°-Eを指す。遺物は、出土しなかった。

#### 第203号土坑 (第535図)

H-31グリッドに位置する。第320号住居跡を切るが、同時に調査したため西半は検出できなかった。平面形は長方形と思われる。南北が0.84m、東西は0.26m検出された。深さは0.39mである。底面に深さ10cmのピットが検出された。主軸方位は東辺でN-29°-Wを指す。遺物は、土師器片数点が出たが、図示可能な遺物は出土しなかった。





- S K 202  
 1 に近い黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子少  
 2 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子、炭十粒了少  
 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 炭化粒子少
- S K 204  
 1 に近い黄褐色 (10YR4/3)  
 2 暗褐色 (10YR4/4)
- S K 205  
 1 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子、小堀や中多 焼土粒子粒小  
 2 暗褐色 (10YR4/4) 炭化粒子や中多 小堀僅か  
 3 暗褐色 (10YR4/4) 砂層部 炭化粒子少  
 4 暗褐色 (10YR4/4) 炭化粒子、炭上粒、黄褐色粒了少  
 5 に近い黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子少 焼土粒子粒小
- S K 206  
 1 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子少  
 2 暗褐色 (10YR4/3) 黄褐色ブロック、炭化粒了多 焼土粒子少
- S K 207  
 1 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子少 炭上粒子多  
 2 暗褐色 (5YR3/3) 炭上層 炭化粒子多  
 3 黒色 (10YR1.7/1) 炭化粒層  
 4 に近い黄褐色 (10YR4/3) 炭十粒了少 粘柱強

- S K 208  
 1 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子、炭十粒了少  
 2 に近い黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色十多 炭化粒了少  
 3 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子、焼土粒子粒小
- S K 209  
 1 暗褐色 (10YR3/2) 炭化粒子、炭十粒了少  
 2 に近い黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色十多 炭化粒了少  
 3 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子、焼土粒子粒小
- S K 210  
 1 暗褐色 (10YR3/4) 炭化粒子 黄褐色ブロック (δ 1~3cm)  
 2 黄褐色 (10YR4/6) ブロック状

第535図 第202~210号土坑

#### 第204号土坑 (第535図)

H-31グリッドに位置する。第320号住居跡に切られる。第325号住居跡との関係は不明だが、同時に調査したため西側は検出できなかった。検出されたのは、南北0.60m、東西0.52mで、深さは0.23mである。主軸方位は南辺で $N-72^{\circ}-E$ を指す。遺物は、土師器甕の胴部片が少量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第205号土坑 (第535図)

H-30グリッドに位置する。第320・325号住居跡に切られる。土層断面から2基の土坑の切り合いと判明した。南側の土坑は北側のものより新しく、長径1.07m、短径0.59mの歪んだ楕円形で、深さは0.48mである。主軸方位は $N-13^{\circ}-E$ を指す。北側の土坑は長径1.01m、短径0.57mの楕円形で、深さは0.24mである。主軸方位は $N-80^{\circ}-W$ を指す。遺物は、土師器高環・甕の破片が少量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第206号土坑 (第535図)

H-30グリッドに位置する。第325号住居跡に切られる。平面形は隅丸方形で、南北0.81m、東西0.73m、深さ0.42mである。主軸方位は $N-36^{\circ}-E$ を指す。遺物は土師器環の破片が少量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第207号土坑 (第535・537図)

H-30グリッドに位置する。第325号住居跡に切られる。平面形は径0.80mの歪んだ円形で、深さは0.78mである。遺物は、土師器甕底部の破片が1点出土した。

#### 第208号土坑 (第535図)

H-30グリッドに位置する。第325号住居跡に切られる。平面形は径0.78mの円形で、深さは0.88m

である。遺物は、土師器甕の小片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第209号土坑 (第535・537図)

I-29グリッドに位置する。第183号土坑に切られ、第328号住居跡を切る。南側は調査区域外にある。検出されたのは東西3.90m、南北1.07mで、深さは0.35mである。主軸方位は不明である。遺物は、古墳時代後期の土師器が出土した。図示可能な遺物は、土師器環1・壺1・甕1点であった。

#### 第210号土坑 (第535図)

F・G-30グリッドに位置する。第340号住居跡を切るが、同時に調査したため南半は検出できなかった。平面形は正方形と考えられ、西辺0.98m、北辺0.92mが検出された。深さは0.20mである。主軸方位は西辺で $N-32^{\circ}-E$ を指す。遺物は、土師器甕の小片が10点出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### 第245号土坑 (第536・538図)

H-28グリッドに位置する。第356号住居跡を切り、第357号住居跡に切られる。平面形は歪んだ楕円形で、長径1.08m、短径0.94m、深さ0.25mである。南端で深さ2cmの小穴が検出した。主軸方位は $N-59^{\circ}-W$ を指す。遺物は、土鍾が1点出土したのみである。

#### 第246号土坑 (第536・537図)

H-28グリッドに位置する。第296・355号住居跡を切る。平面形は歪んだ楕円形で、長径1.17m、短径1.01m、深さ0.66mである。主軸方位は $N-58^{\circ}-W$ を指す。遺物の出土状況から住居跡の貯蔵穴の可能性もあるが、帰属する住居跡が判明しなかった。遺物は、古墳時代後期の土師器環4・高環3・甕1点が出土した。

### 第247号土坑 (第536図)

H-29グリッドに位置する。第347号住居跡・第429号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ0.87m、幅0.61m、深さ0.15mである。主軸方位はN-7°-Wを指す。遺物は、土師器甕の小片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

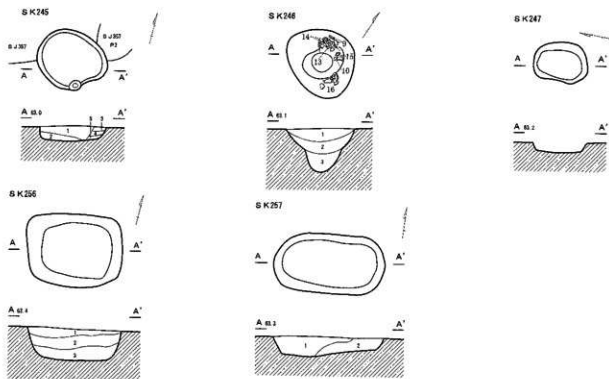
### 第256号土坑 (第536図)

H-27グリッドに位置する。平面形は長方形で、長さ1.50m、幅1.14m、深さ0.49mである。主軸方

位はN-77°-Eを指す。遺物は、土師器甕の小片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

### 第257号土坑 (第536・537・538図)

G-27グリッドに位置する。第414号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ1.76m、幅0.94m、深さ0.31mである。主軸方位はN-85°-Eを指す。遺物は、平安時代の土師器・須恵器が出土した。図示可能な遺物は、須恵器長頸瓶1・高台付椀3、土師器甕1、鉄製品として鎌3点が出土した。



#### SK 245

- 1 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色粘土・白色粘土多 炭化粒子少
- 2 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色土多 炭化粒子少
- 3 黒褐色 (10YR3/2) 1層に広がる。黄褐色粘土少
- 4 黒褐色 (10YR3/3) 黄褐色粘土極多 炭化粒子・焼土粒子僅か
- 5 黒褐色 (10YR3/4) 炭化粒子僅か

#### SK 256

- 1 黒褐色 (10YR3/4) 黄褐色粘土極多 炭化粒子・白色粘土少
- 2 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色粘土多 炭化粒子少
- 3 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色粘土多 炭化粒子僅か

#### SK 246

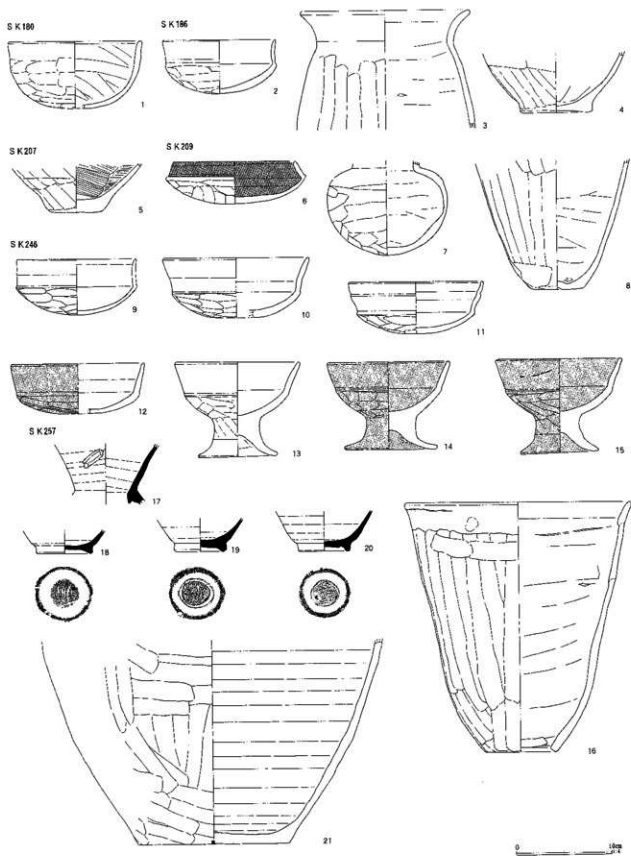
- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質 地山ブロック
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山ブロック多 炭化粒子僅か
- 3 黄褐色 (10YR3/3) 地山ブロック 炭化粒子

#### SK 247

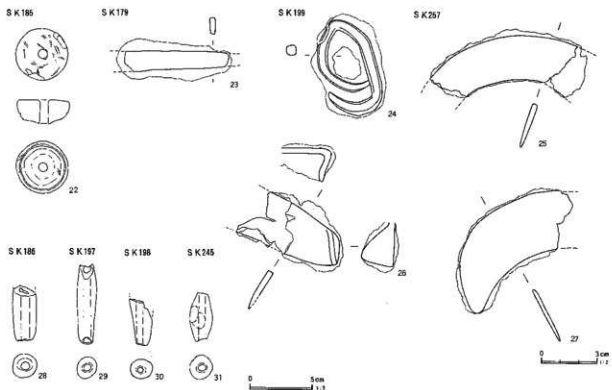
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子少 焼土粒多 地山ブロック
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 炭化粒多・焼土粒子多 骨粒僅か



第536図 第245～247・256～257号土坑



第537図 土坑出土遺物 (1)



第538図 土坑出土遺物(2)

土坑出土遺物観察表 (第537-538図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師碗	14.0	7.0		A B J I	良好	明赤褐	70	S K 180	+9.8cm
2	土師环	11.8	5.6		A B E J	良好	淡黄橙	90	S K 186	+8cm
3	土師甕	(17.6)	12.5		A B D E J L	普通	褐灰	20	S K 186	+36.3cm
4	土師甕		6.3	7.6	A B E J	良好	橙	50	S K 186	+2.8cm
5	土師甕		5.1	5.6	A B E J	良好	橙	90	S K 207	
6	土師环	12.8	4.4		A B D E	良好	明赤褐	95	S K 209	+37.4cm 内外面黒色処理
7	土師甕		9.9		A B E	良好	橙	70	S K 209	+31.4cm
8	土師甕		13.6	5.5	A B E	良好	橙	60	S K 209	+36cm
9	土師环	12.5	5.8		J	良好	明赤褐	90	S K 246	+13.3cm 外面煤付着
10	土師环	(15.3)	6.3		A B E J	良好	明赤褐	35	S K 246	+38.3cm 内外面煤付着
11	土師环	(14.0)	5.5		A B D F J	普通	にぶい黄橙	30	S K 246	底部煤付着
12	土師环	(13.9)	5.2		A B E	良好	明赤褐	65	S K 246	外面赤彩・煤付着
13	土師高环	12.9	10.0	8.0	B E J	良好	橙	95	S K 246	+13.3cm 内外面煤付着
14	土師高环	12.6	9.2	9.5	A B E J	良好	橙	95	S K 246	+13.3cm 内外面赤彩
15	土師高环	12.6	10.0	8.0	B D F J	良好	橙	95	S K 246	+38.3 内外面赤彩
16	土師甕	(23.6)	21.1	17.2	A B E J	普通	灰白	40	S K 246	+34.3cm 外面煤付着
17	須恵長頸甕		6.4		B H J	良好	灰	70	S K 257	末野産 焼き直み著しい
18	須恵高台碗		2.5	5.6	A B H J	不良	灰	50	S K 257	末野産 回転糸切後高台貼付
19	須恵高台碗		3.5	4.8	A B J	不良	灰	60	S K 257	末野産か?
20	須恵高台碗		4.2	5.2	A B C	不良	灰白	45	S K 257	末野産 回転糸切後高台貼付 内面重ね焼痕
21	ロクロ甕		21.5	(16.0)	A B C	不良	灰黄	30	S K 257	
22	石製結繩車	長径4.15cm	短径2.90cm	孔径0.75cm			重さ48.34g		S K 185	+19.6cm 滑石製
23	刀子	現存長5.55cm	背幅0.30cm	刃幅0.85cm			重さ20.16g		S K 179	蓋部片か?
24	棒状鉄製品	現存長5.25cm	幅0.52cm				重さ26.05g		S K 199	
25	曲刃鎌	現存長8.25cm	幅2.35cm	厚さ0.30cm			重さ25.32g		S K 257	曲刃鎌の身部片
26	曲刃鎌	現存長5.55cm	幅2.60cm	厚さ0.30cm			重さ24.69g		S K 257	曲刃鎌の基部片
27	曲刃鎌	現存長7.45cm	幅3.10cm	厚さ0.20cm			重さ25.05g		S K 257	曲刃鎌の身部先端

土坑出土土鍾觀察表 (第538回)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎上	色調	残存	備考
28	(4.35)	1.90	0.60	13.45	B a III	A	橙	55	S K 186
29	6.25	1.80	0.60	14.38	B a IV	A	にぶい黄褐色	95	S K 197
30	(3.70)	1.70	0.40	7.57	—	A	灰褐	—	S K 198
31	3.90	1.90	0.60	10.43	C a VI	A	褐灰	100	S K 245

## Ⅶ グリッド出土・表探遺物

### 1. 縄文時代の遺物

如意遺跡E区・F区・G区から出土した縄文時代の遺物を一括する。

今回の調査では、縄文時代の遺構こそ発見できていないが、後期前葉から中葉にかけての遺物が古墳時代の竪穴住居跡や遺構確認面から出土している。その全体量はコンテナ一箱ほどで、量的には土器の方が勝っているものの、荒川中流域の地理的環境を反映してか、石器、とくに打製石斧の量が比較的多い特徴がある。

#### 土器（第539・540図）

土器は、竪穴住居跡への混在が多いため、接合もかなわず、すべて破片の資料である。位置的にも、調査区内の各所から発見されており、出土地に特徴のまとまりを見出すことはできなかった。時期は、称名寺Ⅱ式期から加曾利BⅠ式期がもっぱらで、風化著しく、細部を識別できないものも多い。

このうち、1～5は称名寺Ⅱ式期、あるいは直後の所産で、複数の沈線帯を口縁部に巡らし、以下に列点を充填した区画文を展開する。

6以下は、堀之内Ⅱ式から加曾利BⅠ式にかけての土器であるが、このうち31までが精製系の器種である。器形の基本は単純開口の薄手のもので、6～15は文様帯に区画文を配すると考えられる。しかし、風化著しく、区画内の展開は6・7が鋸歯区画、11・13が平行区画である他は識別できない。また、後者には突起が付されているが、これが何単位かも推定できない。

これに対し、16～26は平行沈線文を優先させた胴上位の文様構成を有するもので、16・21・22などには階段状の区切り文が加えられる。ほとんど縄文を地文としていと考えられるが、沈線間の狭い部分のものに関しては断定はできない。

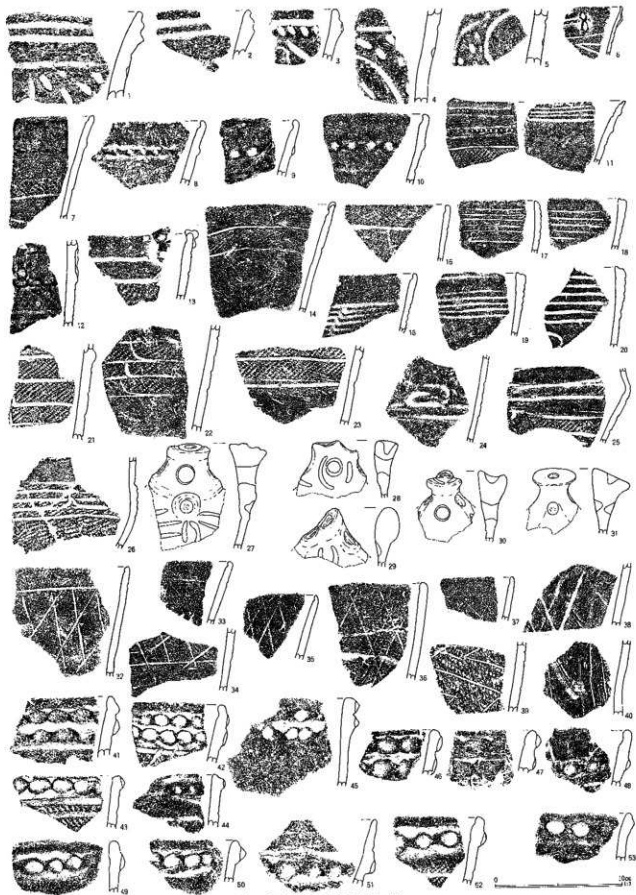
また、27～31は三単位突起深鉢の突起部に相当するもので、前記土器の一部がこの器種の胴部になると考えられる。形態は、左右非対称(28・29など)と、27のような左右対称形があるが、後者はそれだけでなく、横位区画文を区切る対弧線が下位に施されるなど、区画化が進んだ25の胴部片とともに、他より後出的な要素を備えている。

一方、32～56は粗製系の土器で、32～40は線列のみで文様を構成する。32～38は主体の格子目文で、32～34は上下の区画線を備えている。そして、39はL R縄文を地文とした縦位の鋸歯文列、40は縦位線列のみが胴部を裝飾する。

41～56は加曾利B系組線文系の深鉢形土器で、それぞれタガ状隆帯の貼付本数に二段と一段の差があるが、いずれも小片のため、胴部の文様構成は不明である。縄文や施文沈線の特徴から、54～56をこれらの胴部としたが、3点のような鋸歯-弧線系列の構成の他に、格子目文や平行沈線列も存在するものと考えられる。

さらに、57～61では深鉢を除く特殊器形を掲載した。だが、57は小型の鉢形土器と考えられるものの、弧線文の連結点に円形竹管文を押し出す特異な文様構成のため、確定はできない。また、58・59は口縁部が内屈する鉢形土器となるだろうが、こちらも具体的な全形は想像がつかない。そして、60・61は注口土器の一部と考えられる。

これらに伴う底部は、底裏面に網代痕が残る6点を示したが、このうち66の1点が鉢形土器である他は深鉢形土器の底部と考えられる。押しされた編み物は、62～66が緯2本越え1本潜り、経1本越え2本潜り、1本送りの編み方が観察できる。また、67は外周で緯2本越え2本潜り、経2本越え2本潜り、2本送りの編み方が観察できるが、中央部のそれは



第539図 縄文時代の遺物 (1)



編み方が特殊で、周期が判断できず、確定するに至らなかった。

#### 石器 (第541回)

前述の如く、荒川中流域の河岸段丘上という本遺跡の立地環境からか、石器、とくに打製石斧が多く出土した。だが、器種組成の内容には乏しく、他に石鏃、磨製石斧、叩石を発見したにすぎない。

68~70は石鏃で、凹基の68・70は製品化後破損したと考えられるが、腹部の厚い69は未製品の可能性も否定できない。今回の調査ではチャート剥片28.6gの他に、黒曜石剥片や母岩が303.5g出土しており、はっきりした石鏃の未製品も含まれている。調査区内の何処かで石鏃類の製作が行われたことも十分に考えられる。

これに対し、71~83の打製石斧は、すべてが分銅形の形態を呈し、多くに着柄部の繊維のすり切れを防ぐ側縁の潰しを加えられている。大きさは大中小のそれぞれがあり、さらに形態を細かく見ると、大

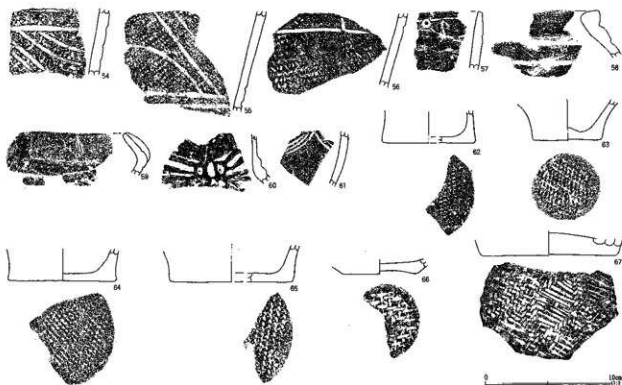
きく三形態に分けられる。

すなわち、71・82・83などのような、両端が対称形で刃部が丸味を帯びるもの、73・74のような、対称形ながら長軸が短く刃部もやや直刃気味のもの、そして、76・77のような着柄部が一方に偏り、頭部と刃部の役割が歴然とするとともに、刃部が直刃に近くなるものの三様である。

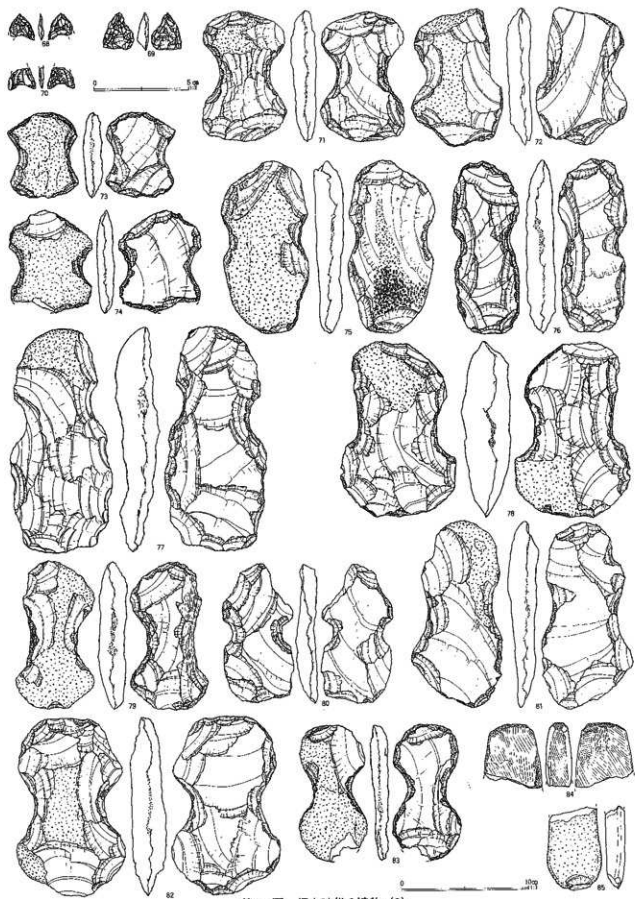
もちろん、これらの中間や、81のように刃部が偏刃となるもの、72のように機能を満たすのに最小限の加工しか施さないものなどの例外もある。

これら打製石斧の石材は、荒川流域に主体的なホルンフェルスがもっぱらで、全体の約7割を占め、砂岩が約2割でこれに続く。

一方、この他の石器は84の磨製石斧、85の叩石の2点が出土したにすぎない。このうち、緑色凝灰岩製の定角式磨製石斧は、頭部の原石節理面に敲打痕を、側縁に製作時の剥離痕を一部残している。おそらく破損後に柄部のみが遺棄され、ソケット内の基部のみが現代に伝えられたものだろう。



第541回 縄文時代の遺物 (2)



第541図 縄文時代の遺物 (3)

## 2. 古墳時代以降の遺物

如意遺跡グリッド出土・表探遺物のうち、古墳時代以降の遺物を一括して報告する。

遺物は、遺構確認・精査中に遺構以外の地点から出土した遺物のうち、出土グリッドの明らかな遺物についてはグリッド出土遺物として、また、表上中あるいは近代以降の攪乱から出土した遺物を表探として取り上げた。

グリッド出土遺物(第545～544図)は、古墳時代後期から近世の遺物が出土したが、図示できた遺物は、土師器環5・甕2、須恵器高台付椀1・壺1、ミニチュア1、近世の焙烙1、土製紡錘車1・石製紡錘車1、鉄製品として鑿1、土錘84点であった。

出土地点は、最も遺構の密集するI～L-19～22グリッド付近に集中する。遺構外の遺物として取り上げたが、本来はこの付近の遺構に帰属していた遺物であった可能性がある。

2はミニチュア土器である。手捏成型で、椀状となる。口縁部は指によるつまみ上げにより、口縁部は波状となっていた。

3は須恵器高台付椀である。全体的に厚みがある。体部下部に膨らみを持ち、口縁部は僅かに外反する。底部は糸切後、高台を貼り付ける。

4は須恵器壺である。口縁部の破片であるため全体の器形は明らかにできなかった。全体の仕上げは丁寧で、外面口縁端部は強いナデにより沈線状となる。外面頸部は、口縁端部直下からカキ目が施されていた。

8～11は同じL-19グリッドから出土した。何れも残存率は比較的良好で、特に8の坏は完形に近い個体であった。遺構外出土遺物であったが、これらの遺物が出土したL-19グリッドは、最も遺構の密集する地点でもあり、付近の住居跡に帰属していた可能性が高い。また、残存率の良い遺物が遺構外から出土するという点は、竪穴部分の外側にも遺構が広がっていた可能性も考えられ、注意を要する。

表探遺物(第545・546図)は、表土あるいは攪乱中から出土したものを一括した。図示可能な遺物は、土師器環1・甕3・瓶1・壺2、須恵器環3・高台付椀2、釘1・鎌1・包丁1、土錘22点であった。

1～3は須恵器環である。1は南比企産、2・3は末野産と考えられる。口径は12cm代後半で、底径は6.0cm～6.4cmであった。底部は、糸切後未調整であった。

4・5は須恵器高台付椀である。4は口径が15.6cm、底径7.8cmとやや大型の椀である。薄手で、平底の底部にやや丸みを持って立ち上がり、口縁部はゆるく外反する。高台は、細くやや高目の高台を貼り付ける。末野産と考えられる。5は、口縁部を欠損していた。末野産と考えられる。

8の土師器甕は、胴部下位以下を欠損していた。口縁部は短く「く」の字に屈曲する。胴部は上部を横方向のヘラケズリ、中位以下は斜めまたは縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデされていた。

9は、胴部下位を欠損していた。口縁部は短く「く」の字に屈曲する。最大径は胴部中位にある。胴部外面は口縁直下から縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデされていた。

10は、全体の器形が明らかな個体である。「く」の字に屈曲する口縁部は、外反しながら立ち上がる。最大径は胴部中位にあり、底部は厚みがある、やや上げ底風となる。胴部は頸部直下から縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデされていた。

13～16は鉄製品である。13は角釘で、頭部は折り曲げられ、釘断面は長方形となっていた。14は鎌で先端部分を欠損していた。15は鉄鎌で、雁股鎌である。5片に割れていたが、接合し、完形品となった。16は包丁である。刃部の一部を欠損していた。刃部は「く」の字または「コ」の字に折り曲げられている。形態の特徴から、うどん包丁と思われる。

F-24



G-30G



H-28G



I-21G



I-29G



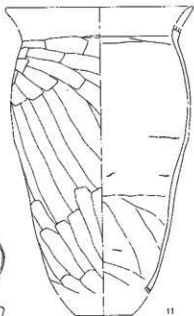
J-21G



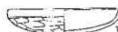
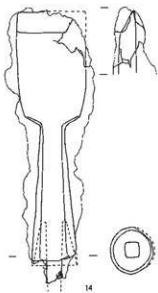
K-21G



L-19G



G-21G



F-28G



L-19G

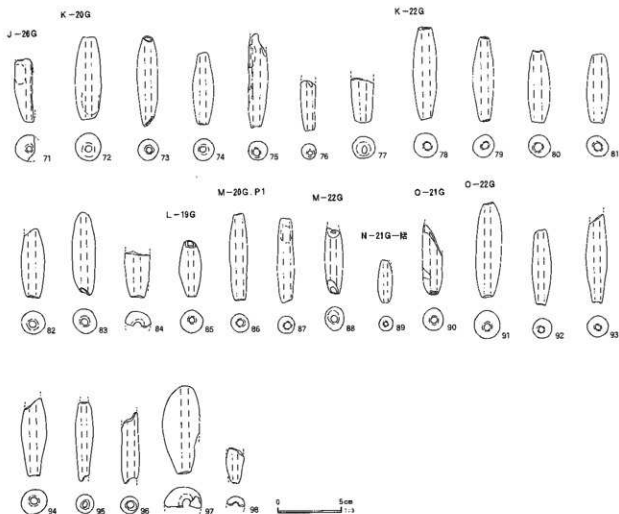


0 10cm

0 5cm

第542図 グリッド出土物 (1)





第544図 グリッド出土遺物 (3)

グリッド出土遺物観察表 (第542図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師罎	(23.2)	11.7		E G J	普通	橙	40	F-24	F区
2	ミニチュア	3.7	4.5		B E F L	普通	橙	80	G-30	F区 指痕痕明瞭
3	須恵高台碗	13.4	5.7	4.8	A B F I J	良好	灰	80	H-29	F区 木野産? 底部回転糸切縁高台貼付
4	須恵壺	(10.0)	6.0		J L	良好	灰	15	I-21	F区 群馬産
5	土師環	13.2	6.1		A B E F J L	良好	にぶい黄橙	70	I-29	E区
6	土師環	(11.0)	3.6		A B D J	普通	黒褐	20	J-21	E区 内外面黒色処理
7	ほうろく	36.0	5.6	33.2	A B G	普通	灰黄褐	65	K-21	E区
8	土師環	11.2	3.3		B C D J K	良好	橙	90	L-19	E区
9	土師環	11.8	3.6		H D E J	普通	明赤褐	50	L-19	E区 外面黒痕あり
10	土師環	(11.8)	2.6		B D J	普通	橙	40	L-19	E区
11	土師壺		28.2		A B D J	不良	にぶい橙	40	L-19	E区
12	土製箱蓋車	長径5.40cm	短径2.20cm		A C E	良好	橙	70	F-29	F区 厚さ2.40cm 孔径0.70cm 重さ50.94g
13	鉄線車	長径0.44cm	短径0.28cm				孔径0.60cm	重さ52.68g	L-19	E区 滑石製
14	壺	現存長14.35cm	幅3.65cm	厚さ2.50cm			重さ208.36g		G-21	F区

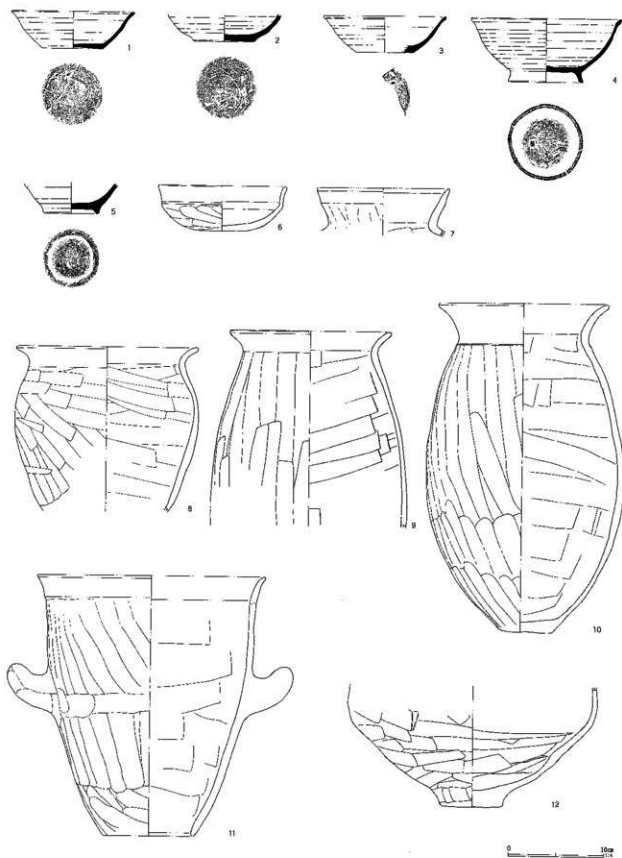
グリッド出土土鐘観察表 (第543回)

番号	長さ	径	孔径	高さ(㎎)	分類	胎土	色調	残存	備考
15	6.30	1.80	0.50	16.22	B a IV	C	灰黄褐	100	F-23G
16	7.15	2.10	0.40	21.41	C a III	A	褐灰	60	F-23G
17	8.20	2.40	0.50	37.14	C a II	A	にぶい黄橙	100	F-23G
18	(3.80)	1.40	0.50	6.02	B a V	A	にぶい黄橙	75	F-23G
19	(3.00)	1.50	0.40	4.89	B a	A	にぶい橙	—	F-23G
20	6.15	1.90	0.55	14.54	C a IV	C	にぶい黄橙	95	F-29G
21	5.70	1.70	0.35	13.44	C a IV	A	褐	95	F-30G
22	9.90	2.50	0.50	43.69	C a I	A	灰黄褐	95	F-30G
23	5.60	1.75	0.40	13.78	C a IV	A	赤褐	95	F-31G.P12
24	5.80	1.80	0.40	14.89	C a IV	A	明赤褐	100	F-31G.P12
25	(4.20)	1.40	0.50	5.94	B a III	A	橙	55	F-33G.P10
26	(6.40)	1.50	0.40	11.91	B a III	A	にぶい褐	90	G-22G
27	(4.00)	1.70	0.50	10.87	B a V	A	橙	80	G-22G
28	6.00	2.10	0.60	20.68	C a IV	A	にぶい黄褐	100	G-22G
29	(5.90)	1.90	0.50	15.30	C a II	A	橙	70	G-22G
30	(5.70)	1.60	0.30	12.66	B a III	A	灰黄褐	80	G-22G
31	6.20	1.90	0.60	20.62	B a IV	A	にぶい黄橙	100	G-29G
32	5.70	1.60	0.65	10.53	B a IV	A	橙	95	G-29G
33	(4.00)	1.70	0.50	6.13	—	A	浅黄橙	—	G-30G
34	(6.20)	1.80	0.45	14.79	—	A	橙	—	G-31G.P8
35	3.80	1.30	0.40	5.54	B a VI	A	橙	100	G-31G.P8
36	(1.80)	0.80	0.25	0.80	—	A	にぶい黄橙	—	G-31G.P5
37	6.90	2.00	0.45	19.85	B a III	A	にぶい黄橙	100	H-29G
38	7.80	1.75	0.70	15.95	A a II	A	にぶい黄橙	100	H-29G
39	7.70	1.55	0.50	12.31	A a II	A	にぶい黄褐	100	H-29G
40	5.50	1.95	0.50	15.07	C a IV	C	灰黄褐	100	H-29G
41	5.30	1.70	0.50	12.38	C a V	C	にぶい黄橙	100	H-29G
42	(4.15)	1.50	0.55	7.31	B a III	C	褐灰	50	H-29G
43	7.20	1.85	0.60	15.65	A a III	A	黒褐	100	H-29G.P4
44	6.60	1.70	0.55	12.73	B a III	A	にぶい黄橙	100	H-30G
45	(3.20)	1.60	0.50	6.71	B a IV	A	橙	40	H-30G
46	5.15	1.80	0.45	13.32	B a V	A	褐灰	100	I-21G
47	5.55	1.90	0.70	16.89	B a IV	A	褐灰	100	I-21G
48	5.70	2.00	0.65	19.22	C a IV	B	にぶい黄褐	100	I-21G
49	6.05	2.15	0.75	20.21	C a IV	C	明赤褐	100	I-21G
50	6.05	2.20	0.70	23.90	C b IV	B	黒	85	I-21G
51	(4.40)	2.10	0.70	16.15	C a	B	黒	35	I-21G
52	(3.90)	2.15	0.50	13.36	C a	A	にぶい褐	55	I-22G攪乱
53	(4.65)	1.80	0.50	11.08	—	A	橙	—	I-26G
54	7.10	2.20	0.60	22.92	C a III	A	にぶい黄橙	100	I-27G
55	(6.60)	2.00	0.60	19.72	C a II	A	にぶい黄橙	75	I-27G.P6
56	7.80	1.45	0.55	11.09	A a II	A	にぶい褐	95	I-28G
57	6.80	1.75	0.55	10.48	C b III	A	にぶい橙	60	I-29G
58	9.10	2.20	0.70	31.89	C a I	A	橙	100	I-29G 赤粉?
59	(3.95)	1.90	0.60	13.16	C a	A	にぶい褐	60	J-21G
60	(2.20)	1.70	0.50	5.20	C a	B	黒褐	15	J-21G
61	10.40	2.80	0.85	74.68	C a I	—	にぶい褐	95	J-22G
62	(5.45)	2.30	0.45	24.75	B a III	A	赤褐	75	J-25G
63	4.50	1.30	0.50	5.97	B a V	A	にぶい黄橙	95	J-25G
64	7.60	1.90	0.40	22.84	C a II	A	灰黄褐	90	J-26G
65	7.00	1.90	0.45	19.47	B a III	A	にぶい橙	100	J-26G
66	6.95	1.60	0.40	13.73	B b III	C	黒褐	90	J-26G
67	7.30	2.15	0.45	33.74	B b III	B	暗褐	100	J-26G.P1

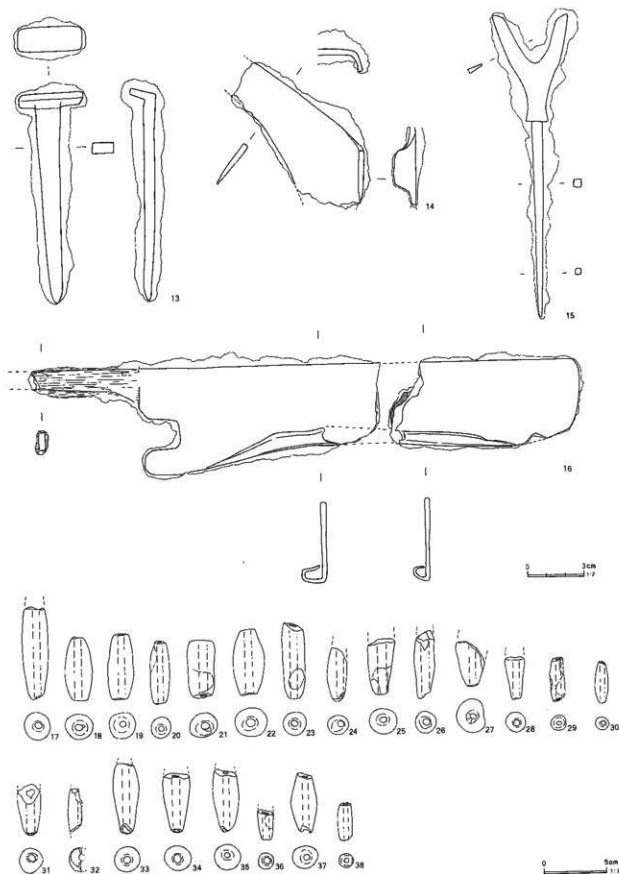
グリッド出土土錐観察表 (第543-544図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
68	(5.25)	1.95	0.50	16.71	C a IV	A	にぶい黄橙	85	J-26G
69	(5.25)	1.60	0.50	8.79	B a IV	A	明赤褐	85	J-26G
70	(3.50)	1.60	0.55	7.05	—	A	橙	—	J-26G
71	(4.95)	2.10	0.40	12.00	C b III	C	橙	65	J-26G
72	6.40	2.20	0.55	31.21	B b IV	A	灰褐	100	K-20G
73	7.00	1.70	0.50	16.73	B a III	A	灰黄褐	95	K-20G
74	5.60	1.70	0.55	14.12	C a IV	A	灰黄褐	100	K-20G
75	7.40	1.90	0.60	14.68	B a III	A	にぶい黄橙	80	K-20G
76	(3.90)	1.20	0.40	5.47	B a III	A	灰褐	55	K-20G
77	(3.50)	1.80	0.60	11.50	B b III	A	褐灰	50	K-20G
78	7.25	1.95	0.60	26.05	C a III	C	にぶい黄橙	95	K-22G
79	6.60	1.80	0.55	16.25	C a III	C	にぶい橙	100	K-22G
80	5.60	1.80	0.65	16.78	C b IV	C	黒	100	K-22G
81	5.40	1.75	0.65	14.55	C a V	A	にぶい橙	100	K-22G
82	5.40	1.85	0.60	16.04	C b V	C	にぶい褐	95	K-22G
83	6.50	2.00	0.60	23.05	C a III	A	明赤褐	90	K-22G
84	(3.60)	2.05	0.60	8.12	C b	A	にぶい黄橙	25	K-22G
85	4.40	1.80	0.45	10.88	C a VI	A	灰黄褐	100	L-19G
86	6.80	1.50	0.50	13.23	B a III	A	にぶい橙	100	M-20G.P1
87	6.60	1.35	0.55	10.30	B a III	A	にぶい橙	100	M-20G.P1
88	(5.20)	1.45	0.50	11.49	B a V	A	にぶい黄橙	80	M-22G
89	3.35	1.20	0.30	4.24	C a VI	A	橙	95	N-21G-一括
90	(5.50)	1.50	0.50	12.07	B a I	A	にぶい黄橙	60	O-21G
91	7.40	2.20	0.60	35.48	C a III	A	明赤褐	100	O-22G
92	5.95	1.60	0.50	12.62	C a IV	A	にぶい黄橙	100	O-22G
93	(6.95)	1.70	0.45	17.15	C a III	A	にぶい黄橙	90	O-22G
94	(6.10)	2.10	0.60	17.75	C a IV	A	赤褐	90	O-22G
95	(6.20)	1.45	0.50	10.94	C a IV	C	にぶい褐	90	O-22G
96	(5.60)	1.45	0.60	9.15	B a IV	A	にぶい黄橙	80	O-22G
97	(6.85)	2.95	0.70	23.88	C b	A	橙	45	O-22G
98	(2.80)	(1.45)	(0.40)	2.17	C a	A	にぶい黄橙	15	O-22G





第545図 表採出土遺物 (1)



第546图 表探出土遗物 (2)

表採出土遺物観察表 (第545-546図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	12.8	3.9	6.4	A F I	良好	灰白	40	F区	南比企産 底部回転糸切
2	須恵坏		3.0	6.2	A B F H	良好	灰	70	F区	木野産 底部回転糸切
3	須恵坏	(12.8)	3.8	(6.0)	A B E F H	良好	灰	25	F区	木野産 底部回転糸切
4	須恵高台筒	(15.6)	6.7	7.8	A E F H	良好	灰	30	F区	木野産 底部回転糸切
5	須恵高台筒		3.3	5.4	A B E G J	不良	橙	70	F区	木野産 底部回転糸切後高台部ナデ
6	土師坏	13.2	4.8		B F G J	良好	橙	80	表採	
7	土師甕	13.8	5.0		A B D J	普通	橙	50	表採	
8	土師甕	(18.8)	17.3		A B E G	良好	橙	25	F区	
9	土師甕	(16.6)	20.5		B E J L	普通	橙	40	表採	
10	土師甕	17.5	34.5	5.6	A B D E J	良好	にぶい黄橙	50	表採	
11	土師甕	23.8	27.3	9.7	A B E F J	良好	橙	50	表採	
12	土師甕		12.7	6.0	E J L	普通	明赤褐	70	表採	
13	釘	現存長11.10cm 幅3.40cm 重さ61.78g							F区	
14	鎌	現存長9.10cm 幅4.15cm 厚さ0.90cm 重さ51.27g							F区	
15	鉄鎌	現存長15.95cm 重さ54.49g							F区	
16	包丁	現存長28.95cm 幅4.23cm 厚さ0.40cm 重さ260.80g							F区	

表採出土土錫観察表 (第546図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎上	色調	残存	備考
17	(7.20)	2.20	0.50	32.34	B a II	A	橙	90	
18	5.00	2.20	0.60	20.54	B b V	A	にぶい褐	100	
19	5.10	2.10	0.50	22.54	B b V	A	にぶい褐	100	
20	5.00	1.60	0.40	11.82	B b V	A	にぶい黄橙	100	
21	4.50	2.20	0.60	17.01	B b V	A	にぶい褐	100	
22	5.10	2.50	0.70	27.14	B b V	A	にぶい黄橙	100	
23	(5.90)	1.80	0.50	20.59	B a III	A	黒褐	70	
24	(4.10)	1.70	0.50	7.87	B a V	A	にぶい橙	80	
25	(4.40)	2.20	0.60	15.70	B a II	A	浅黄橙	50	
26	(5.30)	1.70	0.50	11.27	B a II	A	橙	80	
27	(3.50)	2.60	0.50	14.51	—	A	灰褐	—	
28	(3.30)	1.50	0.50	5.45	B a IV	A	浅黄橙	50	
29	3.40	1.20	0.40	3.94	B a VI	A	灰白	100	
30	3.30	1.10	0.30	3.26	B a VI	A	にぶい橙	95	
31	(4.00)	2.00	0.60	10.14	B a III	C	橙	50	
32	(3.30)	1.90	—	5.68	—	C	浅黄橙	25	
33	(5.50)	2.05	0.60	20.44	C a III	A	褐	80	表採
34	(4.65)	2.15	0.60	14.93	C a III	A	にぶい黄橙	65	
35	(4.95)	2.05	0.45	18.99	C a IV	A	明赤褐	80	C地点一拵
36	(2.40)	1.20	0.50	2.98	—	A	—	—	C地点一拵
37	4.70	2.00	0.50	14.02	C a V	A	橙	100	H-27-28G 攪乱
38	2.95	1.20	0.40	4.03	D b VI	A	浅黄橙	100	H-27-28G 攪乱

## Ⅶ まとめ

### 1. 時期区分

はじめに

如意遺跡は、平成9年度から調査が開始され、今回の調査報告が最終報告となる。これまでの調査で、古墳時代後期～平安時代の竪穴住居跡549軒、掘立柱建物跡23棟が検出された。さらに、如意遺跡の南に隣接する如意南遺跡からは、竪穴住居跡42軒、東に隣接する川端遺跡は当事業団で12軒、川本町教育委員会でも調査しており、如意遺跡および隣接する遺跡を含めると、竪穴住居跡だけでも600軒を超える。また、平成14年度に新たに如意南遺跡が当事業団によって調査されており、今後如意遺跡および周辺遺跡では、さらに住居軒数は増加していくものと考えられる。

今回は、如意遺跡の最終報告でもあり、古墳時代後期～平安時代の約400年間にわたる集落の様相・変遷を理解する上で、時期区分・土器編年は不可欠である。

ここでは、とくに、如意遺跡および、如意遺跡と密接に関連していたと考えられる如意南遺跡、川端遺跡について検討することにする。

対象となるのは、如意遺跡全てと、如意南遺跡のうち、既に報告書が刊行された部分、川端遺跡のうち、当事業団で調査した12軒分である。

時期区分に際しては、主に竪穴住居跡出土物を中心にした。また、貯蔵穴、カマド、床面から纏まって出土し、他の遺物とのセット関係が良好な資料を重視した。しかし、住居の遺物によっては、2つの時期の中間的な組み合わせを有するものもあった。この場合は、どちらかの時期に組み込んだため、図中には、単体では前の時期あるいは次の時期に入れたほうが良いような遺物もあり、整然とした編年図にはなっていない。

時期区分は、I期～VI期まで区分できた。以下

各時期の遺物の様相を述べる。

#### 第I期 (第547図)

集落の開始期と考えられる。

第137-375-511号住居跡が代表される。

土師器坪には、和泉式の系譜を引く椀状の坏がある(1～8)。

全体的に厚手で、重量感がある。口縁部は内湾しながら立ち上がる。底部外面はヘラケズリされるが、中央部はケズリ残され、窪んだ上げ底状となるものがある。磨耗が著しく、観察が困難なものが多かったが、基本的に赤彩される。口縁部の厚さは一定でなく、内外面ともヨコナデは弱く、断続的であった。

I期には、模倣坏の初現的なものが伴う(9～13)。成形は、円柱状の粘土塊から底部をつくり、底部中位から別の粘土を接合し、口縁部を成形している。口縁部は、底部との境界を、内面から圧迫することにより、概ね垂直に立ち上げている。ヨコナデは断続的で、口縁部の厚さは一定でない。底部は、ヘラケズリされず、平底のもの(9)と、ヘラケズリによって丸底となるもの(10～13)がある。口縁部と底部の境界の稜は明瞭ではない。口縁端部は面を作り出し、沈線状になるものと、丸くなるものがある。これに対し、丸底の底部に垂直に立ち上がる口縁部を有し、底部との境界がやや明瞭になるものがある(15～19)。口縁部の厚さが一定となり、ヨコナデも連続的となる。蓋模倣坏とするには模倣が稚拙ではあるが、形態的には1～13に比べれば似ている。椀は、丸底で内湾しながら立ち上がり、口縁部は短く屈曲し外反するものがある(21～22)。内外面とも赤彩されていた。

高坏(25～30)は、和泉式の高坏が主体で、坏部口縁部は大きく外反し底部との境界に稜を有する。

甌は、大型の甌(31)と、小型の甌(32~35)がある。大型のものは口縁部が短くやや強く外反し、小型のものは、小さな底部で、口縁部は短く直線的に立ち上がる形状が多い。

壺は、全体の器形が明らかになったものはない。球形胴で、頸部の屈曲が強く(37)、口縁部中位に稜を有するものもある(36)。

甕は胴部中位に最大径を有し、底部は上げ底風になるものと、平底になるものがある。

また、球形に近い胴部で、最大径が胴部中位または下位になるものがある。

なお、須恵器坯身模倣坏が1点、第375号住居跡から出土した(20)。形態的には次期に含まれても良いものとも思われるが、他の坏類がⅠ期に属すと考えられるため、Ⅰ期の中でもよりⅡ期に近い段階のものとしておきたい。

## 第Ⅱ期(第548図)

第133・332・303・423号住居跡、川端遺跡第10号住居跡が代表される。

土師器は、和泉式からの系譜を引く碗状の坏はこの段階にも残る(1~5)。

蓋模倣坏(6~29)は、口縁部が直立または僅かに外反する。深身・丸底で、高い口縁部を有する。口縁端面は調整するもの(14・24)と、調整せずに丸くなるものがあるが、後者のほうが多い。口径には大・小ある。

碗は、Ⅰ期から続くものと、平底で、内湾しながら立ち上がるものがある(42~44)。

高坏は、和泉式からの系譜を引くものと、坏部が模倣坏の形態をとるものがある。

甕は胴部中位に最大径を有し、口縁部が「く」の字状に屈曲するもの(46~52)と、胴部下位に最大径を有するもの(45)がある。

甌は大型のものには把手付きのものがある(55)。把手は、胴部中位に付けられ、胴部から斜め上方に伸び、先端が鉤の手状に上方に屈曲する。本遺跡の

把手付甌の中では、最もしっかりした把手が付く。

小型の甌には、鉢形の甌(59・60)のほかに変形のもの(58)がある。

須恵器は、蓋(61~63)・坏(64~66)・有蓋高坏蓋(67)・高坏(68)・線(69)がある。このうち、63の蓋と65の坏は、川端遺跡第10号住居跡から出土し、蓋と坏のセットで機能していたものと思われる。産地は明らかにできなかったが、概ね田辺昭三編年陶器TK47型式と並行する段階の須恵器と考えられる。

## 第Ⅲ期(第549図)

第175・224・242・315・557号住居跡等に代表される。

土師器は、須恵器蓋模倣坏・身模倣坏・高坏・台付無頸壺・碗・鉢・甕・甌・壺がある。

蓋模倣坏(1~27)は、直立気味のものから、やや外反・外傾し、稜より口径のほうが大きくなる坏類が多くなる。口縁部はやや低くなり全体的に扁平化してくる。口径によって大・小ある。

身模倣坏は僅かだが出土している(36・37)。全体の器形が明らか資料はなかった。

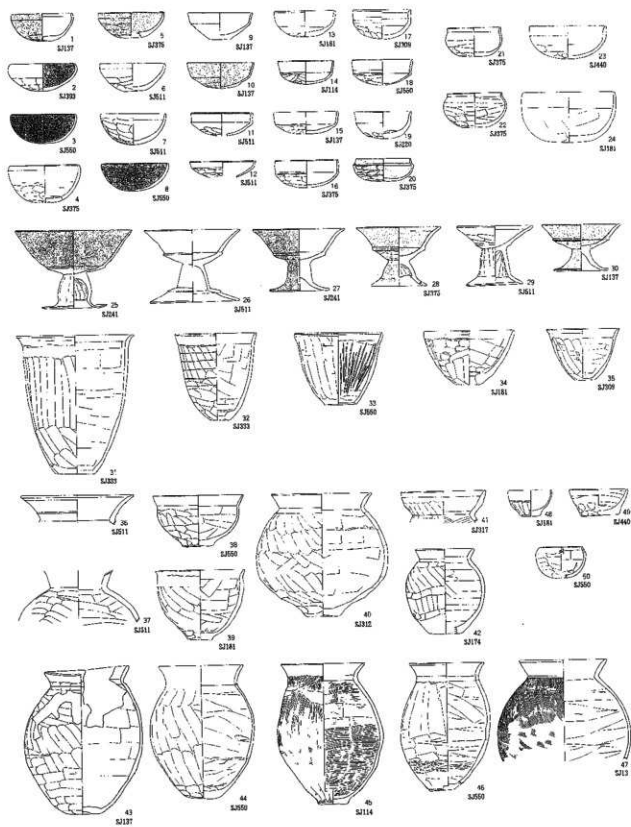
高坏は、和泉式の高坏が僅かに残るが、坏部が模倣坏の形態となるものが主体である(38~44)。

台付無頸壺(45・46)は、如意遺跡の調査で数点確認されている得意な形態のものである。円柱状の粘土塊に短く広がる裾部を付け、脚部としている。口縁部は大きく内湾しながら立ち上がり、無頸壺に形態が似るため、台付無頸壺とした。

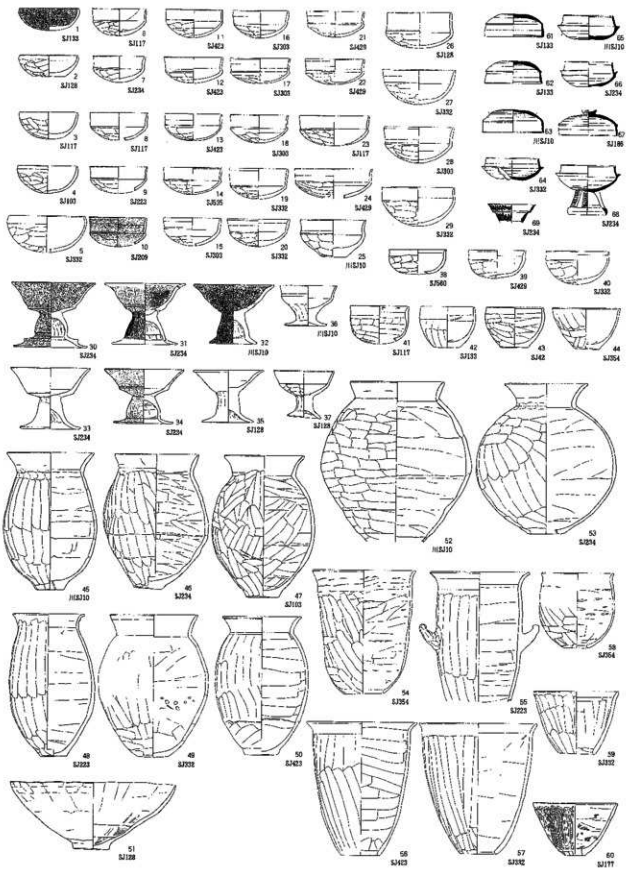
鉢は大きめの底部に内湾しながら立ち上がり、口縁部が大きく外反するもの(50)と、小型の甌と形態の似た三角形の鉢(49)がある。

甕(53~58)は、Ⅱ期の甕類よりやや長胴化するものがある。胴部の最大径は胴部中位~下位にあり、底部は平底と上げ底風のものがあるが、やや丸みを持ってくる。

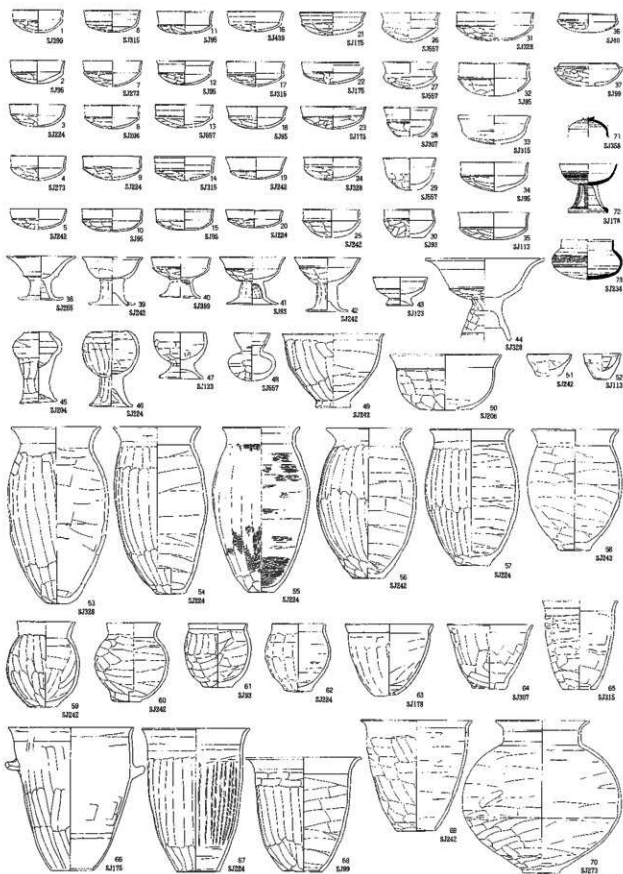
小型甕は平底で、球形の胴部に緩く「く」の字状に屈曲する口縁部を有するもの(59・60)と、短く



第547図 第1期の土器



第548図 第II期の土器



第549図 第三期の土器



立ち上がるもの(61・62)がある。

甌は、大型品には、内面に縦方向のヘラミガキが施されるものがある(67)。把手付甌(66)は、把手が胴部上半部に付されていた。Ⅱ期のものに比べ、把手の作りが粗雑で、左右の位置が対称的ではない。小型のものは鉢形で、三角形を呈する(63~65)。

壺は平底の底部に球形の胴部を有し、頸部が「コ」の字状になるものがある(70)。

須恵器は、小型の蓋(71)・無蓋の高坏(72)・短頸壺(73)がある。

71は、口縁部を欠損していたため、全体の器形が明らかでないが、口径は10cm以下になるものと思われる。

無蓋の高坏(72)は、田辺昭三編年の陶邑MT15型式並行段階のものと考えられる。

#### 第Ⅳ期(第550図)

第80・228・382・427・499・553号住居跡等が代表される。

土師器は、特に坏に大きな変化が生じ、須恵器模倣坏にバラエティーが生じてくる。

蓋模倣坏(1~12)は、口縁部がさらに低くなり、扁平化が進む。また、口径が大きくなり13cm~16cm前後のものが多くなる。

身模倣坏(13~24)は、この段階に急激に出土量が多くなる。口径は13~16cm、口縁部は短く内側に屈曲し、端面に調整を施すものが多い、口縁部と底部の境界の稜は明瞭なものが多い。内外面に黒色処理を施すものもある。

また、本遺跡では、Ⅳ期において、新たに有段口縁坏(25~31)が加わる。扁平な器形で、浅身の底部で、口縁部には2~3段の段を有する。内外面に黒色処理を施すものがある。また、31では内面底部にヘラミガキ状の暗文が施されていた。

有段口縁坏と、身模倣坏の中には、口径が19~21cm前後となるものも有った(39・40)。特に40の身模倣坏は、桜山8号窯(水村ほか1982)の坏身との関

係を想起させるものである。

また、口縁部が大きく外反する所謂小針型坏も本時期に新たに加わってくる(32~38)。

小針型坏は、行田市小針遺跡を示標とする。精選された胎上の白色味の強い土器であるが、本遺跡の坏は、砂粒を多く含み、橙色系の色調の土器で、本来的な意味での小針型坏とは異なるものである。

鉢は平底でやや内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反するものが主体である(53~56)。大きさに大小ある。

甌(57~61)は、長胴気味となるが、胴部中位に最大径がある。小型甌(62・63)は平底で、胴部は丸みを持ち、口縁部の屈曲は弱い。

甌(64~67)は、大型のものは把手付のものがある(65)。胴部中位よりやや上部に短い把手が付けられる。

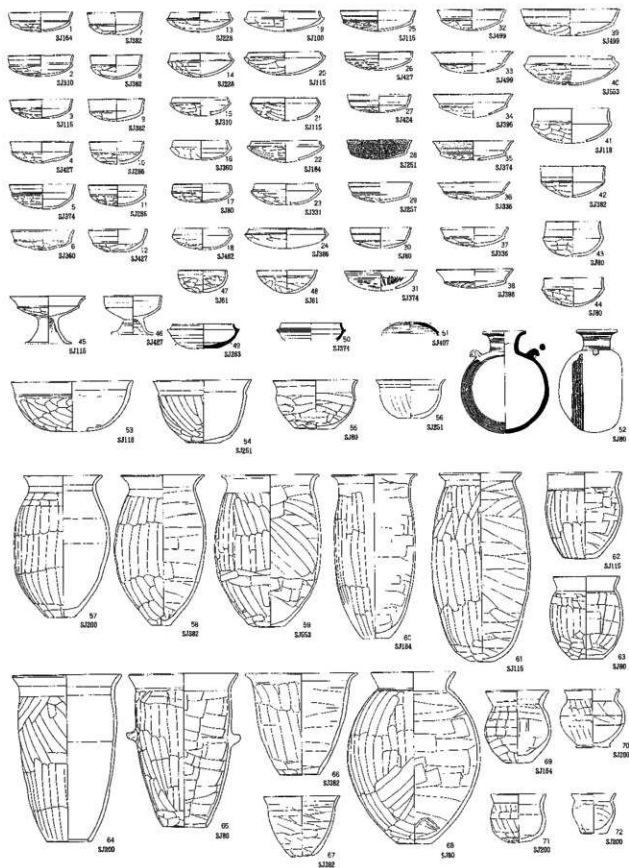
須恵器は、坏(49・50)・蓋(51)・提瓶(52)がある。

49はほぼ完形で、口径13cm。やや深身の底部で、口縁部は短く立ち上がる。胎土に大粒の砂粒・石英を含んでおり、末野産の可能性が高い。

坏の口径が13cmと、末野3号窯(福田1998)の製品よりやや大ぶりで、深身の形態で丸底である点など、3号窯の製品よりも古い傾向を示す。末野3号窯は、後述するⅢ期に属していると考えられるため、直前のⅣ期に属する可能性もあるが、49と伴出する土師器がⅣ期に属すると考えられることから、本時期に含めておく。

また、49の坏から末野3号窯へ連続的に形態が変化するにはやや無理があり、間にもう一段階想定される。

52の提瓶は、鉤の手状の把手が付き、頸部と胴部にカキ目が施される。胴部の閉塞は扁平な面と突出面の両面から閉塞され、突出面の中央部は粘土丹板でふさがれていた。提瓶は、田辺昭三編年TK10型式を中心とした段階に並行すると思われる。



第550図 第IV期の土器

#### 第V期 (第551図)

第218・262・372・436・488・525号住居跡・川端第6号住居跡等が代表される。

蓋模倣環(1~6)はⅣ期より口径が縮小し、12~13cm前後となる。

土師器環の構成は、有段口縁部と身模倣環が優位になる。

身模倣環は、口縁部の屈曲が強く、口縁部と底部の境界の稜が明瞭なもの(8~13・16)、屈曲が弱く、口縁部と底部の境界の稜がやや丸くなっているもの(7・14・15・17~23)、殆ど屈曲せず直立したもの(24)がある。

また、身模倣環には大型環(48・口径19cm)が残る。

有段口縁環(25~40)には、扁平なもの他に、口縁が長く深身の底部を有するもの(33~37)、小さな底部に大きく外反する口縁部を有するもの(38~40)がある。

小針型環(41~46)はやや形骸化する。

また、この段階に、丸底で口縁部が「S」字状に屈曲する所謂比企型環(47・48)が加わる。

鉢(57~63)は、口径が30cmを超える大型の鉢(58・59)、25cm前後の中型品(60・61)、20cm以下の小型品(62・63)がある。これらは、Ⅳ期から続く形態のものだが、口縁部の外反は緩やかになっている。

甌(69~73)は、大型の甌の良好な資料はなかった。小型品のみで構成である。幅広の底部全体が筒抜け状になったもの(69)、小さな底部に円孔があげられ、外傾しながら立ち上がるもの(70~72)、多孔式のもの(73)がある。

甕(75~80)は長胴化が進み、口縁部に最大径が求められるものが認められるが、胴部中位もしくは下位に最大径を有する甕も存在する。

須恵器は、出上点数は極めて少なく、全体の器形が明らかになった資料は無い。

出土須恵器には蓋(55)・環(56)がある。

#### 第Ⅵ期 (第552図)

第96・277・283・348・449・453号住居跡等が代表される。

土師器環の口径は概ね12cm前後とさらに縮小する傾向にある。

蓋模倣環(1~4)は少なくなり、身模倣環・有段口縁環が主体となる。

身模倣環(10~26)は、口縁部と底部の境界の稜が丸をもつものや、沈線状となるものが多くなる。口縁部は、短く内側に屈曲するもの(10~14)のほかに、やや直立気味の口縁部を有するものも多くなる(15~26)。

有段口縁環(27~44)は、口縁部の段が形骸化し沈線状となるものが多くなる。

小針型環(5~9)は、本遺跡ではこの段階まで確認できるが、次期以降は出上していない。

比企型環(45・46)は、僅かではあるが認められた。口縁部の破片が多く、全体の器形が明らかにできたものは無い。

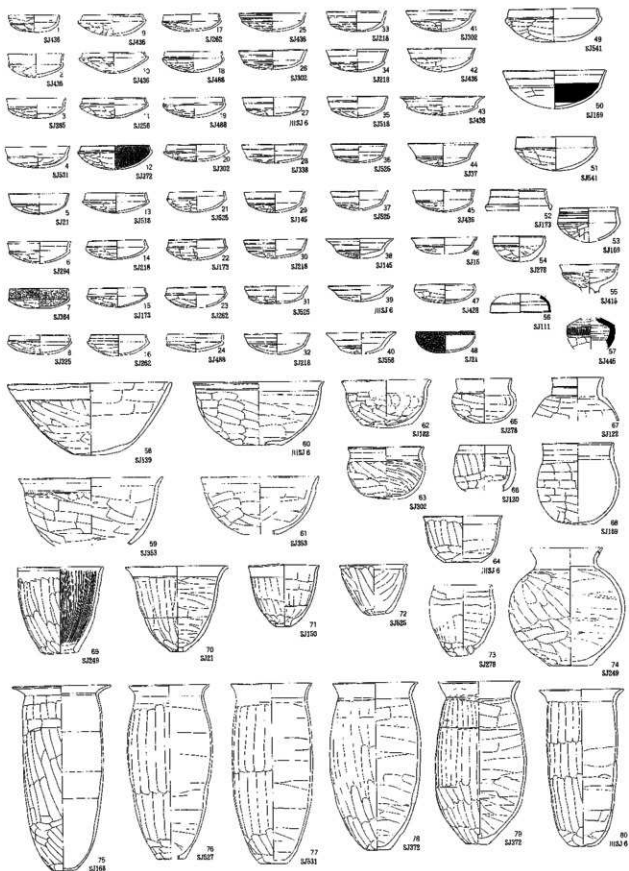
鉢は平底で、やや内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反するもの(57)、小型の甌と形態が同じもの(55・56)がある。

甌は、大型の甌は確認できなかった。小型甌は、甕形で、平底の底部の中央に円孔が空けられるもの(58)、鉢形のもの(59)、大きな底部から概ね垂直に立ち上がり、口縁部が僅かに外反する寸胴型のもの(60)がある。

甕(62~65)は基本的に長胴形態となるが、胴部に膨らみを持つものと、口縁部に最大径を持つものが共存する。本期の土師器甕は、全体の器形が復元できた資料は少なく、大半は胴部上半部の資料が多かった。

小型の甕(66・67)は丸底で、球形の胴部に短く屈曲する口縁部を有する。

須恵器は、蓋(51)・環(52~54)がある。51の蓋と52の環は末野産と考えられる。2点とも第34号住居跡から出土した。51の蓋は口縁部の破片資料で

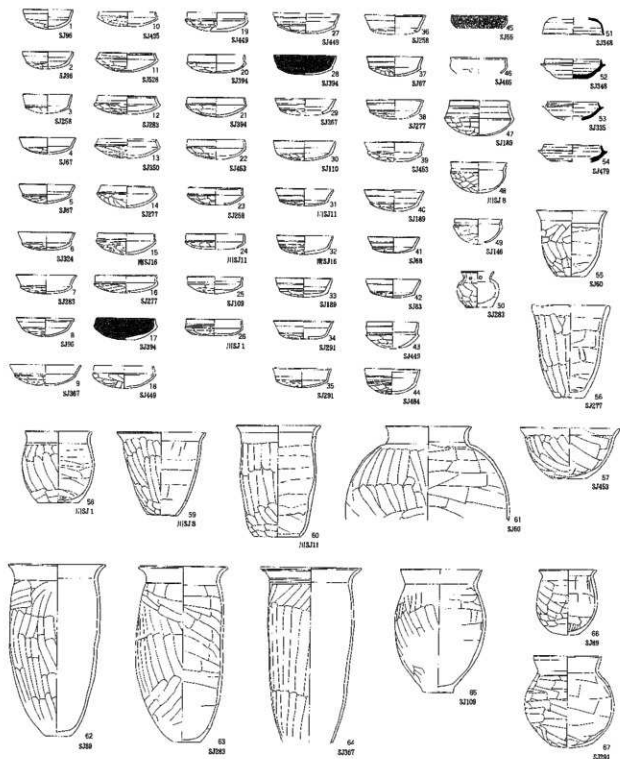


第551図 第V期の土器

あった。この2点は、胎土の特徴が同じであることから、セットで使用されていたものと考えられる。

52の坏は、やや平底気味の底部に短く直立する口縁部を有する。51・52は、その特徴から、末野3号窯に並行する時期のものと考えられる。

須恵器は、図示できなかった破片資料も含め、末野産と考えられるものが多く、本遺跡では、Ⅵ期になって末野産の須恵器が本格的にもたらされた可能性が高い。



第552図 第Ⅵ期の土器

第Ⅶ期 (第553図)

第91・188・323・447・如意南第37号住居跡に代表される。

土師器環の口径はさらに小さくなり、11cm前後のものが多くなる。

蓋模倣環は、本遺跡では、この段階には極めて少なくなる。また、身模倣環は、確認できなかった。

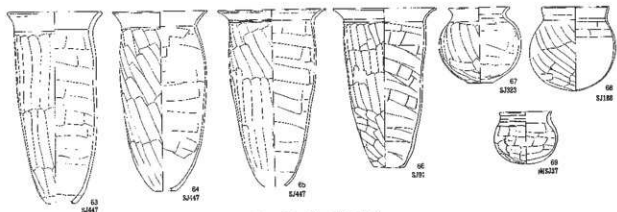
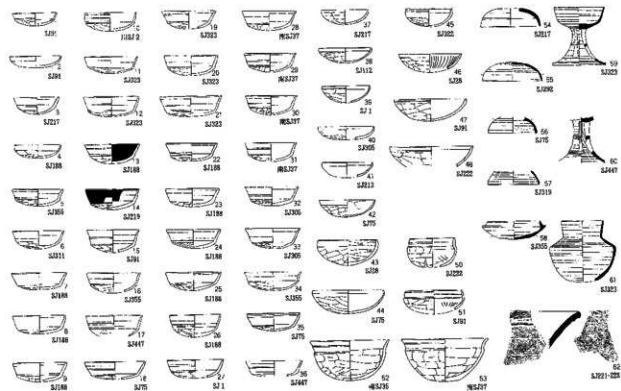
土師器環で主体となるのは、有段口縁環となる。

また、本時期に新たに出現するものとして北武蔵型環があるが点数は少ない。

有段口縁環 (10~36) は、やや器高が高くなるものの、口径11cm前後となる。口縁部の段は殆どなくなり、沈線状となるものが多い。口縁端部内面は強いつまみあげとナデにより沈線状となり、端部が外側に外反するものがある。

北武蔵型環 (37~44) は、丸底で、口縁部が内側に内屈または内湾する環である。口径は、10~11cmのもの、14~15cm前後のものがある。

口縁部は内側に鋭く屈曲するものと、屈曲せずに上方へ立ち上がるものが認められる。出土資料は風



第553図 第Ⅶ期の土器

化が著しく、器面の調整の観察が困難な個体が多かったが、口縁部外面直下からヘラケズリされるものが多い。

また、丸底で、口縁部が短く立ち上がる暗文坏も出現する(46)。内面に放射状暗文が施されていた。

47・48は、暗文坏と同形態と思われるが、暗文は認められなかった。

鉢は出土点数が少なかったが、小型の鉢が存在する(52・53)。2点とも、口縁部が有段口縁となっている。

甕(63~66)は、長胴甕で、口縁部は大きく外反し、最大径が口縁部となる。胴部は、縦または斜め方向のヘラケズリ調整で、口縁部はヨコナデされる。

小型甕(67~69)は丸底と平底の2種ある、このうち、69は口縁部が有段口縁となっていた。

須恵器は、坏蓋(54~57)・坏身(58)・高坏(59・60)・壺(61)・甕(62)がある。

蓋は、口径11~12cm前後のもの(54・55)と、11cm前後のもの(56・57)がある。両者は同時に存在していたとは考えられず、前者はよりⅤ期のものに近く、後者は次のⅥ期の特徴に近い。Ⅴ期は新旧2段階あった可能性があるが、土師器を明確に区分できなかったため、Ⅴ期の中を含め、Ⅵ期は、時間幅を持たせて考えたい。

57の蓋は、口縁部の破片資料であったが、胎土が精選され、肉眼の観察では、混入粒子が殆ど観察できなかった。極めて硬質で、破片の割れ口は灰色のプラスチックの切断面に似る。本遺跡では、1点のみ出土した。

高坏は、59は、口縁部の一部と脚部部の大半を欠損していた。長脚二段で二方に透を有する。

長脚といっても、このタイプの高坏のなかでも、最も新しい段階のものと思われ、口径は10.6cm、器高12.2cmと小型である。坏底部はやや丸く、口縁部はやや外傾しながら立ち上がる。口縁部と底部の境界の稜は突出せず、沈線状になる等、形態化が進む。内面口縁部直下も、工具もしくは指(爪)ナデに

より沈線状となっていた。

60は、坏部および脚部部を欠損していたため、全体の形状は不明であるが、脚部は59よりも高くなるものと思われる。

須恵器壺(61)は、丸底で、やや外傾しながらも直線的に立ち上がる口縁部を有する。全体的にロクロ目は顕著で、胴部下部以下は回転ヘラケズリされる。胴部と肩部の接合部は特に強くナデられ、境界部分は沈線状となっていた。

#### 第Ⅵ期(第554図)

土師器坏は、北武蔵型坏(1~21)の割合が圧倒的に多くなる。口縁部の屈曲は弱くなる傾向にあるが、直立するものと、内傾するものがある。また、器高が低くなり、扁平化するものもある。底部のヘラケズリは、口縁直下から削られるものと、口縁直下に無調整部分を有するものが見られる。

有段口縁部・模倣坏(22~28)も僅かだが残存している。

暗文坏(31・32)は、丸底で、椀状の形態となる。内面に放射状暗文が施される。

破片ではあるが、螺旋暗文の坏(33)も見られる。住居の他の遺物と、遺構の重複関係からこの時期に含めたが、底部が平底風であることから、時間的には次の段階の可能性もある。

また、暗文坏と同形態をとる無文の坏(29・30)もある。

Ⅲ(34・35)は、盤状で、口径が22cmとなる大型のものがある(35)。暗文は認められなかった。

甕(46~52)は、長胴甕の形態をとるが、全体の器形が明らかになったものはなかった。口縁部は、「く」の字状に外反し、細身の長胴形態のもの、胴部上位に膨らみを持つものがある。胴部はヘラケズリは、斜めまたは横ケズリであるが、胴部上位を横方向にヘラケズリするものが多い。

鉢(53)は、丸底で、内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反するものがある。





## 第Ⅸ期（第555図）

第33・45・297・371号住居跡等が代表される。

土師器は、坏・暗文坏・皿・甕・小型甕がある。

土師器坏は、模倣坏は殆ど見られなくなり、北武蔵系坏（1～23）が主体的となる。丸底で、口縁部は内湾またはやや直立気味のものが多くなり、口縁部と底部へラケズリの間に無調整部分をもつものが多い。3は、口縁部直下からへラケズリされるため、占相を示す。時期的にはⅧ期に属すかもしれない。

暗文坏（26・27）は、深身の碗形態のものと、やや浅身で皿状のものがある。内面には放射状暗文が施されていた。また、暗文坏と同形態の無文坏もある（24・25）。

土師器皿（28～36）は、北武蔵系の皿（28～33）と、浅く平底気味の盤状の皿（34～36）がある。34は、やや深身で、内外面とも赤彩が施されていた。

土師器甕（67～73）は、「く」の字状口縁で、やや短胴化している。口縁部に最大径があり、胴部上半部に膨らみをもつ。口縁部はヨコナデ、胴部上半部を横または斜め方向にへラケズリするものが多い。

小型甕（74～76）は平底で、球形の胴部を有する。口縁部は「く」の字状に外反する。胴部のへラケズリは、横方向または斜方向にへラケズリされる。

76は底部を欠損しており、台付甕の可能性もある。

須恵器は、坏・壺・蓋・長頸瓶・甕がある。須恵器はこの時期になって、特に坏・壺の出土数が増加する。

須恵器坏（37～48）は、大半が末野産で、42は南比企産である。

坏の口径には、11cm代のもの（37～39）、14cm前後～15cmのもの（40・42～45）、16cm以上のもの（41・46～48）がある。

底部の調整は、43は手持ちへラケズリされるが、他は全て底部全面回転へラケズリされる。

また、須恵器坏は、37・42・43を除く末野産の坏には、大きく2種に区分できる。

ひとつは38～41の坏である。平底だがやや丸味の

ある底部に、概ね直線的に外傾しながら立ち上がる口縁部を有する。この坏の最大の特徴は、口縁端部の内外面が、強いナデ（爪か）によって沈線状となり、また内面底部においても、爪または工具による細かな渦巻状の沈線が認められることである。これは、一定のロクロの回転に対し、爪または工具を、底部中央部からゆっくり外側に移動し、細かな渦巻き状となったものと考えられる。

また、もう一方は、44～48で、平底気味の底部に、口縁部が直線的あるいは外反しながら立ち上がるものである。口縁部端部は、内側からの圧迫により、内面が窪んでいるものもある。

この2者は、Ⅸ期の中での時期差を現す可能性も有るが、覆土からの出土ではあったが、第142号住居跡等で両者が出土する住居もあり、概ね同時期のものと判断した。

なお、37は丸底で、小型の坏である。時期的には一段階古く見え、Ⅷ期に属するものかもしれない。

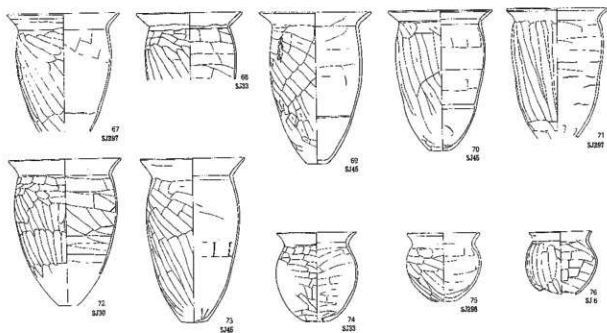
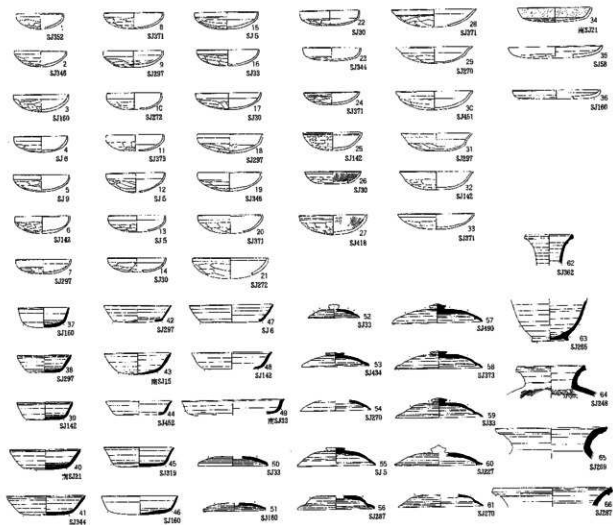
蓋（50～61）は、坏同様末野産を中心に構成される。図示した須恵器蓋のうち、50・51は湖西産と考えられるが、それ以外は全て末野産である。蓋の口径は、概ね坏の口径に対応することから、坏とセットで使用されていたものと考えられる。

50・51を除き、蓋には内面にかえりが付く。つまみは、残存しているものが少なかったが、低い擬宝珠形または扁平で径の大きい内窪み形のものがつく。

長頸瓶（62・63）は、全体の形状が明らかなのはなかった。62は口縁部から頸部が、63は胴部から底部が残存していた。

63は湖西産と考えられる。胴部下以下をへラケズリし、底部は回転へラケズリの後高台が付くが、丸底で、高台部よりは突出しないが、所謂「出っ尻」高台の系統と考えられる。

甕は全体の器形が明らかなのはなかった。図示したものは、口縁部の破片である（64～66）。他に胴部の破片も出土したが、外面はタタキの後ナデ、内面は同心円文の当て具痕が連続的に認められた。



第555図 第Ⅷ期の土器

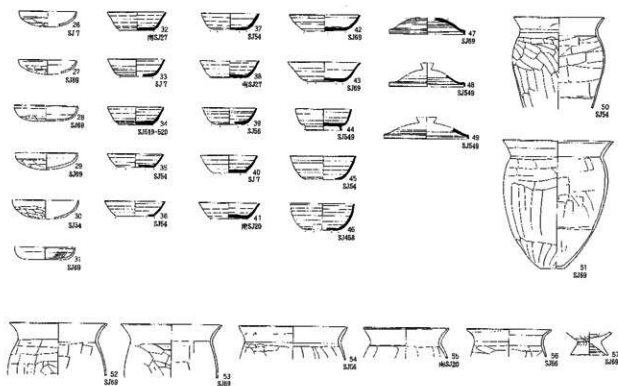
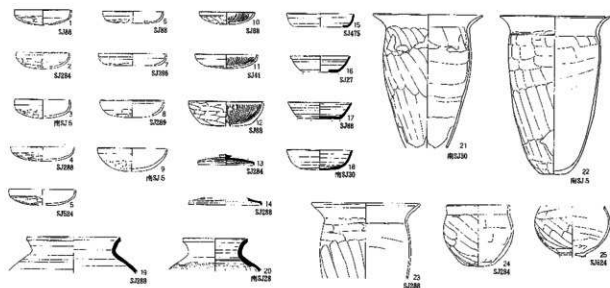
第X期 (第556図上段)

X期は、如意・如意南遺跡では、住居件数が著しく減少する時期である。したがって、出土遺物の総数も他の時期に比べ少なく、良好な資料も少ない。

土師器は、坏・暗文坏・甕・台付甕がある。

土師器坏(1~9)は、丸底だが扁平で、口縁部が内湾気味に立ち上がるものと、平底気味で、口縁部が短く立ち上がるものがある。

暗文坏は、丸底の皿状のもの(10)と、平底風で口縁部が短く立ち上がるもの(11)、平底の椀状の



第556図 第X・XI期の土器

もの(12)がある。

甕(21-23)は全体の器形が明らかになったものは少ない。長胴の甕はなくなり、短胴の甕となる。口縁部は「く」の字状で、胴部上半部は斜め方向または横方向のヘラケズリが施されていた。

小型甕は、良好な資料は24のみである。平底風の底部に、半球形の胴部を有し、口縁部は短く上方に立ち上がる。

台付甕は、図示できたのは25のみであった。口縁部と胴部を欠損しており、全体の器形は明らかにできなかった。

須恵器は、坏・蓋・甕がある。末野産の須恵器に加え、南比企産の須恵器が目立つようになる。

須恵器坏(15-18)は、口縁部から底部まで残存していた資料は少ない。口径は13-14cm、底径8-11cm前後、器高4cm前後となる。底部の調整は、全面ヘラケズリまたは、糸切後周辺ヘラケズリ調整である。15は群馬産の可能性があるが、16-17は南比企産、18は末野産である。

蓋(13-14)のみ図示できた。2点ともかえりはない。13は末野産、14は南比企産と考えられる。蓋のつまみは、13のみ確認できたが、扁平な擬宝珠形であった。

須恵器坏・蓋は概ね南比企窯跡群のHⅡ～Ⅲ期に並行するものと考えられる。

甕(19-20)は、2点とも口縁部から肩部の破片である。全体の形状は明らかにできなかった。2点とも末野産と考えられる。

## 第XⅠ期(第556図下段)

XⅠ期は、集落の最終期のXⅥ期を除けば、検出住居が15件と最も少なくなる時期である。

遺物の出土総数も少なく、器種構成は、必ずしも全ての器種がそろっているとはいえない。

土師器は、坏・暗文坏・甕・台付甕がある。

土師器坏(26-30)は、須恵器坏に比べ、出土数は少ない。丸底と、平底風のものがある。

暗文坏(31)は、1点のみ図示できた。平底で、丸味をもって立ち上がるが、口縁部は概ね垂直に短く上方へ立ち上がる。口縁内面端部は、強いナデにより沈線状になっていた。内面底部には、放射状暗文が施されていた。

甕(50-56)は胴部以下を欠損しているものが多く、器形が復元できるのは、51のみであった。

口縁部は何れも「く」の字状で、胴部外面の調整は、基本的に上半部は横方向のヘラケズリ、下半部は縦方向のヘラケズリが施されている。内面は、口縁部はヨコナデ、胴部は横方向のヘラナデである。

55-56は、口径が小さく、台付甕であったと思われる。

57は、台付甕の脚部である。脚部は厚手で、裾部は殆ど広がらず、概ね直線的に「八」の字状に開く。

須恵器は、坏・高台坏・碗・蓋がある。

須恵器坏(32-43)は、口径14cmを超える大振り of 坏も有るが、概ね口径12-13cmとXⅠ期のものより口径が縮小する傾向にある。器高は4cm以下のものが多く、底径は7-8cmであった。

坏底部の調整は、糸切後、周辺部をヘラケズリするものが多い。

須恵器坏の産地は、末野産(32-34-35-37-38-40-41-43)と、南比企産(33-36-41-42)があった。

高台坏は、1点のみ図示できた(44)。末野産と考えられる。

碗(45-46)は2点とも無台の碗で、南比企産であった。

蓋(47-49)は、3点とも口径が大きく16cm前後-18cmと、43-44の大型の坏または、碗の蓋と考えられる。しかし図示した無台碗は、口径が14cmと小型のため、大型の碗も存在していた可能性がある。蓋は何れも天井部を欠損しており、つまみの形状は不明である。

須恵器のうち、南比企産の製品は、鳩山窯跡群HⅢ～Ⅳ期に並行してくるものと思われる。

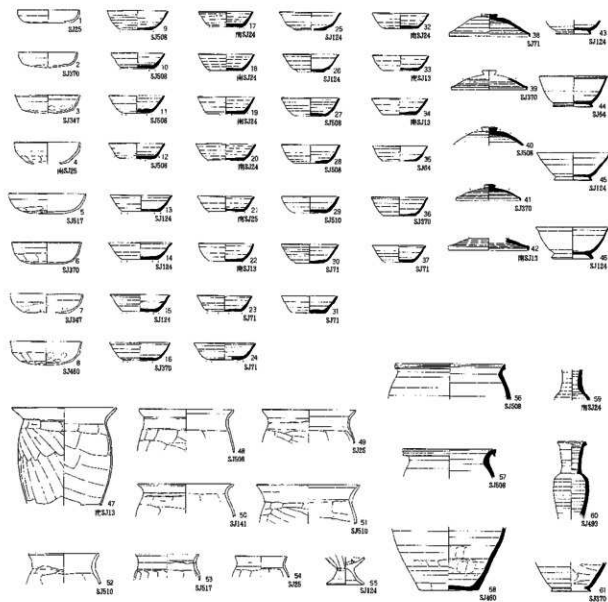
第XⅡ期 (第557図)

上師器は坏・甕・台付甕がある。

土師器坏は、概ね平底で、皿状の浅い底部に、口縁部がやや内湾気味に短く立ち上がるもの(1~3)、深身で、平底風の底部に、やや内湾気味に立ち上がり、口縁部で上方に立ち上がるもの(4~8)がある。後者は、体部に幅広いヘラケズリが施されており、口縁部との境界をはっきりしている。内面に指頭圧痕が認められるものもあった。

土師器甕(47~51)は、胴部以下を欠損しているものが多く、全体の器形が明らかなものは無い。

口縁部は「く」の字状で、口縁の屈曲部分の直下から削るもの(47-50-51)と、口縁部下位が直立気味で、上位が大きく外反する、XⅢ期に一般化すると思われる、いわゆる「コ」の字状口縁甕の前身的なものもある(48-49)。胴部のヘラケズリは、口縁部直下から横方向のヘラケズリ、胴部下部は縦方向のヘラケズリが施されている。口縁部直下のヘラケズリは強く、口縁部をヘラの上端部が伏しているものもある(47-50-51)。また、48-49は、口縁下部の直立した部分もヘラケズリされ、その後、強いヨコナデによって消され、ヘラの当たった痕跡が残っている



第557図 第XⅡ期の土器

た。

台付甕 (52~55) は、全体の器形が明らかになつたものは無い。52~54は、胴部以下を欠損していたが、口径が小さく、台付甕であつたと思われる。口縁部は「く」の字状だが、53は「コ」の字に近い形態となる。55は脚部から胴部下部の破片である。

須恵器は、坏・蓋・高台付碗・鉢・甕・長頸瓶がある。

須恵器坏は、末野産と南比企産で構成されるが、末野産が多い。10~15・17~24・28・31~37が末野産である。口径は12cm前後~14cmで、12~13cmのものが多い。器高は3~4cm、底径は7~8cm前後のものが多い。底部の調整は、全面回転ヘラケズリ調整されるもの(9)、周辺部をヘラケズリするもの(11・13~18・20・21~24) 回転糸切後、周辺部および体部の下端部をヘラケズリするもの(10・12・17・19)、回転糸切後無調整のもの(25~37)も同時に存在する。

蓋(38~42)は、41が南比企産、他は全て末野産である。口径から碗の蓋と考えられる。

高台付碗(43~46)は、全て末野産であつた。口径14~15cm、高台径は8cm代、器高は7cm代である。底部からあまり腰を作らず、やや大きく外傾しながら立ち上がる。器形的にはⅩⅢ期以降の高台付碗に似るが、底径が大きく、器高も高い。

鉢(56~57)は口縁部の破片である。2点とも末野産と考えられる。撫磨で、口縁部は短く「く」の字状に屈曲する。

甕(58)は、器形のある程度判るものは1点のみであった。末野産で、胴部下端部はヘラケズリされていた。外面はタタキのあとナデ、内面には当て具痕が認められた。

59~61は、長頸瓶である。59・60は、所謂「壺G」である。

ただし60は、ⅩⅣ期の住居跡から出土しており、本来この時期に含めるべきではないと考えたが、「壺G」を出土する遺跡では、概ね如意遺跡ⅩⅡ期と並行する段階に出土し、器形の復元できる遺物が

無いため、参考資料として本期の中に入れておく。

59・60とも肩径が8cm以下となる。59は全体の形状は不明である。ロクロ目は顕著で、60の口縁部は片口状となっていた。

61は、南比企産と考えられる。

#### 第ⅩⅢ期(第558図)

土師器は、坏・暗文坏・甕・台付甕がある。

土師器坏は、殆ど見られない。丸底で、内湾気味に立ち上がるもの(1)、平底で、直線的に立ち上がるもの(2・3)がある。1は、形態的に古く見えるが、19の須恵器坏とともに出土した。口縁部ヨコナデと、底部のヘラケズリ調整との間の無調整部分に、指痕による圧痕が認められた。

暗文坏(4)は、形態的には2・3と同じである。内面に放射状暗文が施されていた。

甕は「コ」の字状口縁甕となるが、第515号住居跡では、「く」の字状口縁の甕が共存している(32~36)。

台付甕(39・40)は、全体の器形が明らかなものは無い。口縁部は「コ」の字状となる。

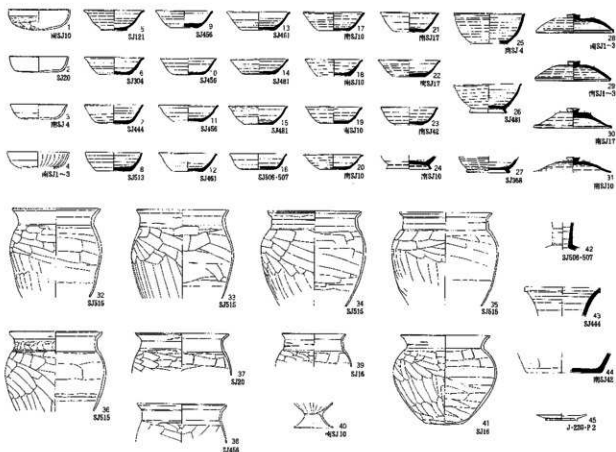
須恵器は、坏・無台碗・高台付碗・蓋・長頸瓶・甕がある。

須恵器坏(5~23)は、底部回転糸切後無調整の製品となる。南比企産の製品も僅かにあるが(21)、末野産の製品を中心に構成される。口径は12~13cmで、12cm代のものが主体となる。底径は6.5~7cm前後で、口径に対する底径の比率が1/2か、それを上回るものが多い。器形はやや深身で、口縁部は端部が僅かに外反するものが多い。

無台碗(25)は南比企産である。時期的に古い可能性もあるが、13・17~20と供に出土したため、この時期に組み込んだ。

高台付碗(26・27)は、2点とも末野産である。ⅩⅡ期に比べ、やや小型である。

蓋(28~31)は、口径から碗蓋と考えられる。28~30は末野産、31は南比企産である。



第558図 第XIII期の土器

長頸瓶は1点のみ図示できた(42)。頸部の破片で、全体の器形は不明である。胎土に白色針状物質を含んでおり、南比企産と考えられる。

甕(43-44)は、全体の器形が明らかなものは無い。2点とも木野産である。

45は、灰釉陶器の皿である。底部の破片である。猿投産で、黒笹14号窯式(K-14)に並行する製品と考えられる。

#### 第XIV期(第559図)

土師器は、坏・暗文杯・蓋・甕・台付甕がある。

土師器坏は、平底の底部に、浅身で緩やかに内湾しながら立ち上がるもの(1・2)と、平底・深身の器形で、口縁部が直線的に外傾しながら立ち上がるもの(3~5)がある。5は口縁部が僅かに外反していた。

暗文坏(6)は、平底の底部に、直線的に立ち上

がる口縁部を有する。体部は下端部をヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、口縁部直下の無調整部分は、指頭圧痕が認められた。内面は、放射状暗文が施されていた。

土師器蓋は、本遺跡では、7の蓋1点のみである。5・15・71とともに出土した。基本的な成型は、土師器坏と同じで、坏の天地を逆転させ、つまみを貼り付けた形となっている。口縁部はやや内側に屈曲させる。天井部はつまみを貼り付けたのち、強いナデによって仕上げている。また、天井部内面には煤が付着していた。口径から、坏・碗類の蓋の可能性がある。

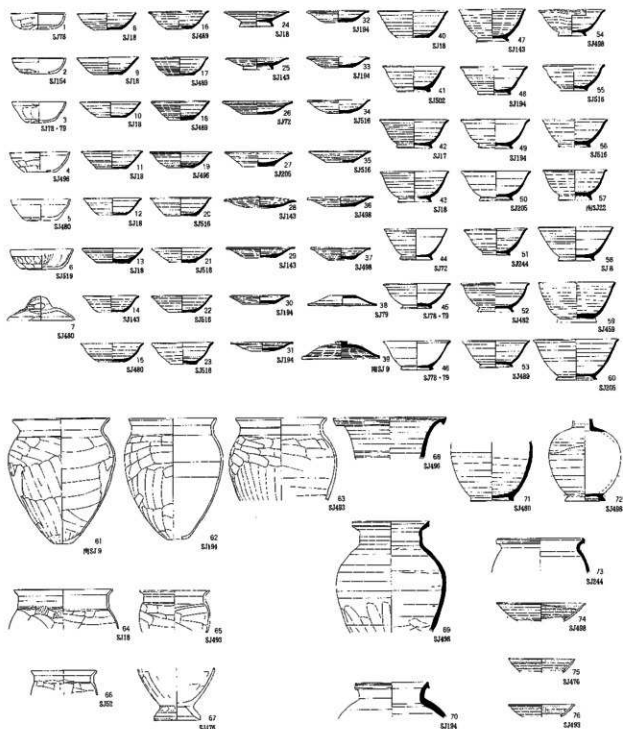
甕を作る際の煤を採取する蓋にも形状が似るが、蓋の具体的な用途については明らかに出来なかった。甕(61~64)は、「コ」の字状口縁甕と、「コ」の字が崩れたような甕も存在する。

台付甕(65~67)は、基本的には「コ」の字状口

縁の形態である。全体の器形が明らかになった個体はなかった。67は、脚部が残存していた。脚部は胴部に対して厚手で、胴部との接合部直下では指頭痕が顕著であった。

須恵器は、環・皿・蓋・椀・高台付椀・甕・長頸瓶・鉢がある。

須恵器環(8-23)は、木野産で構成される。環の口径は、12cm-13cm、器高3.5cm前後が主体となる。底径は6cm前後で、口径に対する底径比は、1/2か、それを下回るものが主体となる。器形は、口縁部が直線的に立ち上がるものもあるが、口縁部が外反するものが多い。底部は、全て回転糸切り後



第559図 第XIV期の土器



無調整の製品となる。

皿(24~37)は、高台皿(24・25)と無台皿(26~37)がある。全て末野産であった。全体的に深身で、浅い坏状である。無台皿には口径に大小あり、14~15cm前後のもの(26~29)、13cm前後のもの(30~37)がある。

蓋(38・39)は出土数が極めて少ない。38はつまみが無く、皿を伏せた形状であるが、口縁部に折り返しを有するため、蓋とした。2点とも口径が大きいく。椀蓋と考えられる。

椀(40~60)は、全て末野産であった。40は無台椀で、他は全て高台付椀であった。高台付椀には口径に大小あり、口径14~15cmのもの(41~57)、16~18cmのもの(58~60)がある。高台は、内湾し、踏ん張る形態のものが多い。口縁部は、直線的に立ち上がるものもあるが、外反するものが多い。また、口縁部が片口状のもの(54)もあった。

須恵器甕(68~70)は全体の形状が明らかなものは無かった。69は、胎土の特徴から末野産と考えられるが、口縁部が「コ」の字状となっていた。胴部のロクロ目は顕著だが、胴上半部はロクロの回転を利用したヘラナデが施されていた。底部を欠損していたが、胴部下半部まで残存していた。胴部下部は縦方向の強いヘラナデが施されていた。

71・72は、長頸瓶である。71は胴部上半部を、72は口縁部を欠損していた。2点とも高台部は幅広く、やや内側に踏ん張る形となる。全体的に仕上げは丁寧で、光沢感がある。胎土には細かな砂粒を含む。

72は肩部に自然釉がかかる。特に72は猿投産とも思われたが、胎土の特徴から、2点とも東金子産の可能性がある。

73は鉢である。末野産と考えられる。胴部下半部を欠損していた。

74~76は灰釉椀である。3点とも底部を欠損していた。74は東濃産、75・76は猿投産と考えられる。K-90号窯式並行と考えられる。

## 第XV期(560図上段)

土師器は、坏・暗文坏・甕がある。

土師器坏(1~4)は、平底で、深身のみとなる。口縁部は概ね直線的に立ち上がるが、僅かに外反するものもある(1)。全体的に厚手である。体部は幅広いヘラケズリが施されていた。

暗文坏(5)は、土師器坏と形態は同じである。内面に放射状暗文が施されていた。

土師器甕は、口縁部の形態が、「コ」の字状口縁から、「コ」の字が崩れたもの(40~42・44)と、短く「く」の字状に屈曲するもの(43・46~48)へと変化する。短く「く」の字に屈曲する甕は、全体的に厚手で、「コ」の字状口縁の甕よりも重量感がある。

須恵器は、坏・皿・高台付椀・瓶がある。坏・皿はその数を減じ、高台付椀が主体的となる。

坏(6~10)は、口径は12cm前後、底径は、5.5cm前後~6cm前後とXIV期の坏よりも小型化する。口径と底径の縮小に対して、器高は4cm前後であるため、やや深身に見える。底部は、回転糸切後無調整のみである。須恵器坏は、全て末野産で構成される。

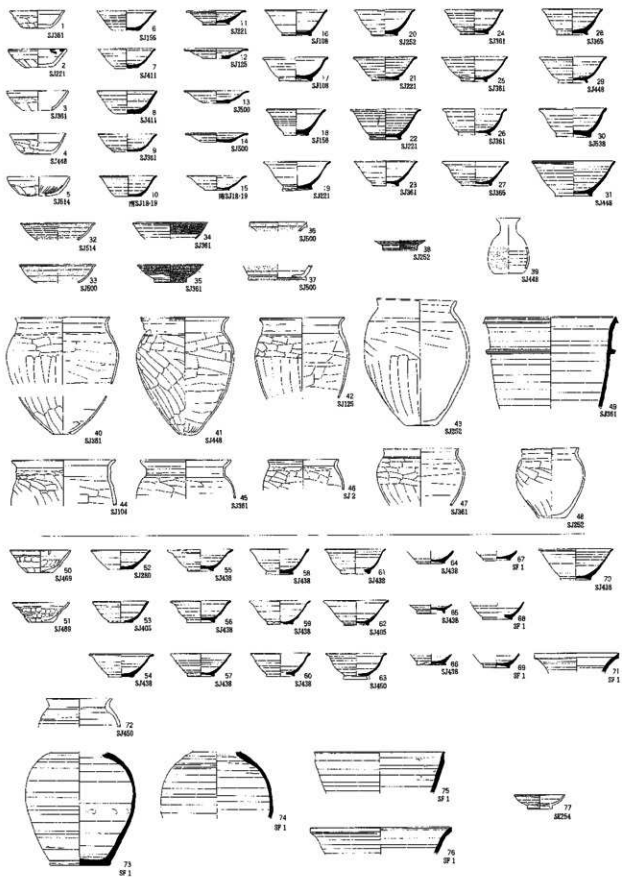
皿は、高台皿(11)と、無台皿(12~15)がある。無台皿は、口径が13~14cmのみとなる。口縁部が大きく外反する。産地は全て末野産の製品であった。

高台付椀(16~31)は、口径13~14cmのものが主対となるが、大型の椀(31)も残存する。小型のものは、高台径が6cm前後のものが多くなる。口縁部は外反するものが多い。椀の産地は、全て末野産の製品であった。

49は底部を欠損していたが、甕と思われる。

XV期は、破片ではあるが、比較的多くの灰釉陶器が出土した(32~39)。32~35・38(皿か)は椀、36・37は長頸瓶、39は小瓶である。

全体の器形が復元できたものは35のみである。産地は、32・36・37・39が猿投産、33が二川産、34・35・38が東濃産である。概ねK-90号窯式並行と考えられる。



第560図 第X V・X VI期の土器

## 第ⅤⅥ期 (560図下段)

確認できる集落の最後の時期と思われる。

土師器は坏が僅かだが存在する(50-51)。2点とも第469号住居跡から出土した。平底の底部に、直線的に外傾しながら立ち上がる口縁部を有する。口縁部はヨコナデ、体部は内外面とも指頭瓦痕が顕著で、指頭で押さえた部分は大きく窪んでいた。

須恵器は、坏・高台付碗・甕・鉢がある。

須恵器坏(52-54)は、ⅤⅥ期と法量に大きな変化はないが、深身で、器形が高台付碗の碗部と同じ形態となる。高台が付けば、そのまま高台付碗となる。高台の剥落した63等と殆ど形態は同じである。

高台付碗は、ⅤⅥ期と比べると、口径が12-13cmとさらに小型化し、坏の法量に近くなる。須恵器坏との区別は、高台の有無程度である。高台の貼り付けは弱く、接合痕が明瞭なものが多い。また端部は丸味を持ち、形態化する。高台内面は、貼り付けた粘土をへうまたは指で強く斜めに擦り付けたようなナデが見られ、高台の断面が三角形となるものが多い(55-56-60-61-64-66)。

58のように、坏の底部に新たに底部と同じ大きさの円盤状の粘土を貼り付け、高台とするものもある。また、貼り付けが極めて粗雑で、高台の体をなさないもの(59)も存在する。

坏・碗類のうち、53-55-56-58-62は、胎土に大粒の砂粒・片岩を含まず、細かな砂粒・白色微粒子を多量に含み、他の木野産の須恵器とは明らかに異なる胎土である。これらは、如意遺跡第1号窯跡の製品(67-69)と酷似しており、如意産の須恵器と考えられる。

第1号窯跡出土の須恵器は、他に甕(71-73-74-76)・鉢(76)があるが、住居跡からは出土しなかった。坏・碗以外の如意産の製品が、集落内で消費されていたかどうかは明らかにできなかったが、本期に属する遺物として挙げておく。

72は、ロクロ甕である。胴部以下を欠損していた。口縁部は短く「く」の字状に屈曲する。図示できな

かったが、破片資料に肩～胴部の破片が存在するが、胴部は縦方向のヘラケズリが施される。

77は灰釉陶器の皿である。土壇からの出土である。口径は10.6cmと小型品である。浜北産で、東山72号窯(H-72)並行と思われる。

77は、本期に属する他の土器とは明らかに時期差があり、時期的には後続する段階のものと考えられ、新たにⅤⅥ期と設定すべきではあるが、調査地点内にはこの時期の住居はなく、ⅤⅥ期に幅を持たせて考えておきたい。

## 各期の年代観

これまで、如意遺跡を中心に、如意南・川端遺跡における土器の様相について概観してきた。次に、各期の年代について触れたい。

まず、如意遺跡周辺では、古墳時代後期から平安時代までの集落が確認でき、Ⅰ期～ⅤⅥ期までで区分できた。本遺跡出土土器及び共存遺物に実年代を物語る資料はない。そこで、他地域産で年代の明らかな須恵器・灰釉陶器、在地の須恵器の編年、または、本遺跡と並行関係にあると考えられる周辺遺跡の出土遺物の様相から、本遺跡の各時期の年代について触れたい。

まず、Ⅰ期～Ⅴ期についてであるが、Ⅱ期・Ⅲ期において、須恵器の良好な資料が得られた。Ⅱ期では、田辺昭三編年陶器TK47型式と並行する段階のものと考えられる坏蓋・坏身・高坏蓋・有蓋高坏が出土した。これに連続するⅢ期では、MT15並行段階のものと思われる無蓋の高坏が出土した。これらのことから、Ⅱ期は概ね5世紀末葉～6世紀初め頃、Ⅲ期は6世紀前半ごろと考えることができる。

Ⅱ期以前のⅠ期は、和泉式の影響が色濃く残り、模倣坏の初現的なものも同時に存在する。Ⅱ期においては、典型的な模倣坏が多く見られず、時期の断絶も考えられたが、和泉式の模倣坏・高坏が未だ残存し、両者は断絶なく連続した時期のものと考えられる。したがって、Ⅰ期はⅡ期の直前の段階にお

くことができ、5世紀後葉の年代を与えておく。

Ⅳ期は、第80号住居跡出土の提瓶(第550図52)が、田辺昭三編年T K10型式を中心とした段階に並行してくるものと思われることから、6世紀中葉に、続くⅤ期は、6世紀後葉の年代を与えておく。

Ⅵ期以降は、東海地方産の須恵器・在地産の須恵器の年代観が参考となる。

Ⅶ期には、木野遺跡第3号窯跡(福田1998)に並行すると考えられる須恵器環・蓋がある。木野3号窯は、その法量・特徴から、陶色T K209型式に並行してくるものと考えられ、概ね7世紀初頭の年代が与えられている。また、本遺跡では、第552図53のようなやや口径が小型の坏も存在し、後続の段階も含んでいるものと考えられる。したがって、本遺跡Ⅶ期は7世紀前葉の年代を与えておく。

次のⅧ期は、土師器環に大きな変化が生じ、北武蔵型坏が本遺跡の土器組成の中に加わってくる段階である。また、土師器環、須恵器坏蓋の口径には大小あって、前項ではある程度の時間幅を想定した。

また、須恵器には、東海地方産の須恵器が出土している。第553図56は湖西産、57は不明、59-60は猿投産の可能性がある。56の坏蓋は、湖西窯の編年の再構築を行った鈴木敏則によれば(鈴木2000)、概ねⅢ期～Ⅳ期(7世紀中頃)にかけての特徴を有している。

また、59-60の高坏は、猿投産では、東山H44・H15号窯に並行してくる段階のものと考えられる。H44・H15は、尾野善裕によれば(尾野2000)、7世紀中葉(第2四半期～第3四半期)とされることから、本遺跡Ⅷ期も7世紀中葉の年代を与えておく。

Ⅷ期は、北武蔵型坏の割合が圧倒的に多くなる時期である。土師器坏類は、八幡太神南遺跡A地点1号住居跡(富田・赤熊1985)に並行してくるものと考えられる。八幡太神南A1号住居跡からは、畿内産土師器皿が伴出している。口縁端部を内側に巻き込むタイプで、飛鳥Ⅳ期に並行するという(富田2002)。飛鳥Ⅳ期は7世紀第4四半期頃とされてお

り、本遺跡Ⅷ期も概ねその年代と考えられる。

Ⅸ期は、行田市小敷田遺跡96・97・105号土城出土土器(吉田・宮瀬1991)、岡部町熊野遺跡A区S X02の出土土器(富田2002)と並行関係にあると考えられる。

行田市小敷田遺跡からは、大宝令施行(701年)以前の記載様式をもつ出芽木筒や、藤原宮木簡に特有の記載様式を持つものが出土している。このことから小敷田遺跡出土土器は、藤原宮期を含むものと考えられ、概ね7世紀末～8世紀初頭の年代が与えられる。

また、熊野遺跡A区S X02は、伴出する畿内産土師器から、8世紀第1四半期(716年前後)の年代が与えられている。(註1)

これらのことから、Ⅸ期は、7世紀末葉から8世紀第1四半期頃の年代を与えたい。

X期・XI期は、出土遺物が極めて少ないが、南比企産の須恵器が出土しており、南比企窯跡群における渡辺一氏の年代観(渡辺1990)が参考になる。X・XI期の須恵器は、概ね鳩山窯跡群HⅡ期～HⅣ期のもと思われる。鳩山窯跡群では、8世紀中頃にHⅢ期を設けているが、本遺跡X期はHⅡ～Ⅲ期前半、XI期はHⅢ期後半～Ⅳ期に並行するものと思われる。渡辺氏の年代観に従えば、HⅡ～Ⅳ期は、8世紀第2四半期～第4四半期にかけてとされることから、本遺跡X・XI期も概ねこの年代のものと思われる。

XⅡ期は、第557図59の「壹G」(註2)の存在から、長岡京並行段階と考えられる。埼玉県内の周辺遺跡では、白山遺跡57号住(中村1989)・耕耕地48号住(酒井1984)に並行してくるものと考えられる。また、XⅡ期の南比企産須恵器は、HⅤ期のもと考えられ、したがってXⅡ期は8世紀第4四半期～9世紀初頭頃の年代を与えることができる。

XⅢ期は、須恵器は糸切後未調整のもので構成され、底径6～7cm前後のもので構成される。南比企産の須恵器は少ないが、HⅥ期に並行してくるもの

と思われる。また、K-14号窯式並行の灰釉椀が本期に含まれると考えられることから、XⅢ期は9世紀前半の年代を与えておきたい。

XⅣ期は、須恵器は末野産で構成される。須恵器坏は口径12~13cm、底径6cm前後となる。南比企産の須恵器坏類はなかったが、概ねHⅤ期に並行してくものと思われる。

また、K-90号窯式に並行すると思われる灰釉陶器が出土している。灰釉陶器は、次のXⅤ期にも出土しており、このうち古い段階のものが、本期に属するものと考えられる。

これらのことにより、XⅣ期は、概ね9世紀後半の年代を与えられる。

XⅤ期は、寄居町桜沢窯跡(第561図1~23)(疑問1994)、本遺跡対岸の花園町台耕地遺跡78号住居跡(第561図24~30)(酒井1984)などと並行するものと思われる。また、K-90号窯式に並行する灰釉陶器により、XⅣ期に連続する段階のものと思われ、XⅤ期は、9世紀末葉~10世紀初頭頃の年代を与えておく。

XⅥ期は、如意1号窯跡出土遺物及びその製品と思われる野穴住居跡出土遺物がある。これらの遺物は、桜沢窯跡(第561図)の製品と比較すると、器形的には、坏は深身で体部が膨らみ、口縁部が外反する点、高台付椀は、小型で坏部の形態が無台坏と同じ形態になる点など、共通するものがある。しかし、口径・底径ともに如意遺跡の須恵器のほうがやや小ぶりとなり、高台の貼り付けは極めて稚拙で形骸化する。

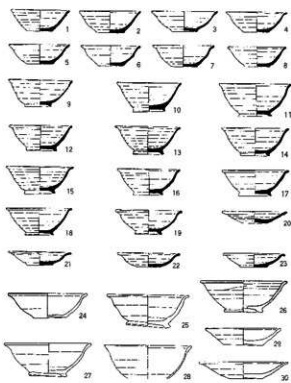
本遺跡XⅥ期の須恵器は、桜沢窯跡の須恵器・台耕地78号住居出土遺物と共通する点を持ちながらも、やや形骸化する点で、これらの後にくものと考えられる。時期的にはXⅤ期の直後の段階となろう。従って、XⅥ期は10世紀第1四半期を中心とした10世紀前半とする。

また、土壌からの出土であったが、東山H72号窯並行と思われる灰釉陶器皿が出土した。時期的には

10世紀後半に属すると考えられ、本来はXⅦ期の次にXⅧ期を設定すべきであるが、同時に存在したと考えられる住居跡・その他の遺構がなかったため本期に含めた。土壌以外の遺構は確認できなかったが、10世紀後半まで集落は存続していた可能性がある。

註1 富田和夫氏は、熊野遺跡の報告書の中で、A区SX02出土の畿内産土師器坏(熊野Ⅱ期新相)、長屋王邸SD4750出土土器に並行するとした。SD4750は、伴出する木簡から聖亀2年(716)年頃には埋没したことが明らかとなっている。

註2 第557図60の「壺G」は、XⅣ期の住居から出土したため、出土状況からすれば、XⅣ期の遺物ということになる。しかし「壺G」そのものは、存続年代が限定されており、年代を特定する鍵となる土器である。また、本遺跡の中では、器形の復元できる最も残存率の良い資料であったため、XⅡ期の遺物の参考資料として掲載した。XⅡ期の遺物に伴うのは第557図59である。



第561図 桜沢窯跡・台耕地遺跡遺跡出土土器

## 2. 集落の変遷

如意遺跡では今回の調査で549軒の住居跡と23棟の掘立柱建物跡が検出された。また、同時に調査された川端遺跡では住居跡が12軒検出されている。これらの住居跡は調査区全体に東西に大きく広がり、北側の荒川沿いは稀薄だが、僅か10m程南に移ると飛躍的に増加し、重複も激しくなる。調査区中央のC・D・E区と東半のF・G区に大きく集中する区域があり、西半のB区には3箇所のやや小さめのまとまりが見られる。特にC・D・E区からF・G区の集中域の重複は激しく、ほとんど隙間の無いような状態である。F・G区の集中域は南側の調査区外にも広がっていると考えられる。南端のA区とD区の境には浅い小谷が入っており、住居跡は検出されなかった。如意遺跡と川端遺跡は遺構の状況から同一集落と考えられ、如意遺跡の南に隣接する如意南遺跡も住居跡の分布から同様と考えられている。

検出された集落は古墳時代後期の5世紀後半から始まり、平安時代の10世紀代に見られなくなる。こ

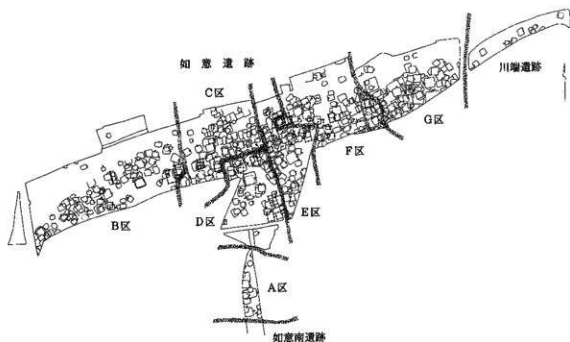
れらを出土土器同様16期に分け、その変遷を追ってみる。集落の変遷図(第563～570図)は如意遺跡と川端遺跡を対象とした。時期の判定には出土土器を基本としたが、出土土器がなく時期不明なものや一時期に確定できないものを除いた。判定できたのは如意遺跡で住居跡501軒、掘立柱建物跡20棟、川端遺跡が住居跡11軒である。これらは集落全体の9割以上を占めるため、概ねその変遷を把握するには可能な数と考える。

また、図示できなかったが如意南遺跡では42軒の住居跡と1棟の掘立柱建物跡が検出され、住居跡38軒が時期判定可能であった。

なお、同時期内においても住居跡の重複が見られることから、同時期とした住居跡・掘立柱建物跡が全て同時併存したとは限らない。

### 第1期(第563図)

集落の出現期である。如意遺跡で住居跡33軒が検



第562図 集落の区分

出された。川端遺跡、如意南遺跡では該当する住居跡は検出されていない。

集落域は調査区全域に広がるが、C・D区にややまとまったグループがあり、その東西に2～4軒の小グループが点在する。各グループの間には住居跡が検出された空間が認められる。特にE区からF区にかけては荒川沿いを除いて住居跡が見られず広い空間になっている。

#### 第Ⅱ期（第563図）

如意遺跡の31軒と川端遺跡の1軒が相当し、住居跡数は前期とほとんど変化がない。集落域はB区の西半を除くほぼ全域に広がり、川端遺跡の1軒は如意遺跡寄りに検出された。前期同様E区からF区にかけて住居跡のない広い空間が見られ、その東西に住居跡がまとまって検出されている。

東側のグループは更に二つの小グループに分けられる。このうちF区とG区の境界にあるものは13軒とややまとまっており、グループ北端に大型の住居跡が検出されている。他方はG区と川端遺跡に跨り、3軒と小規模である。両グループ共に調査区外に続く可能性がある。

西側のB区からD区に検出されたグループは、概ね3グループに分けられ、各々2～7軒で構成されている。グループの南東端に大型住居跡がやや離れて検出されている。

#### 第Ⅲ期（第564図）

住居跡が急激に増加し、集落が拡大し始める時期である。如意遺跡の49軒が相当する。集落域は調査区全域に広がるが、B区西端近くとE・F区にかけて住居跡のない広い空間が見られ、その東西に住居跡が展開する。

東端のG区を中心とするグループは13軒のまとまりであるが、東側に偏る傾向が窺える。C・D区を中心とするグループは30軒以上が広く分布し、各々がある程度の距離を意識して構築されているよ

うである。B区西端には1軒が検出されているが調査区外へ展開する可能性も考えられる。また、南端のA区にも住居跡が1軒検出されている。

#### 第Ⅳ期（第564図）

住居跡が更に増加し、集落域も拡大する。如意遺跡57軒と如意南遺跡の1軒が相当する。如意南遺跡では住居跡の初現である。住居跡は調査区全体に広がり、前3期に見られたE・F区の空間にも数軒の住居跡が進出して来る。F・G区とC・D・E区にややまとまったグループが見られるが、全体としては調査区全域に分散している状況である。B区最北の荒川寄りに小型の住居跡が検出されている。

如意南遺跡の1軒は、如意遺跡から離れた調査区南端近くで検出されている。

#### 第Ⅴ期（第565図）

住居跡は僅かだが増加し、集落として最大規模に達する。如意遺跡60軒、川端遺跡3軒、如意南遺跡1軒が相当する。集落域は引き続き全体に広がっており、いくつかの小グループに分けられる。これら小グループのうち、C区とE区を中心とするグループは10軒以上とややまとまりを持ち、F区東端のものは8軒程度である。他のグループは2～4軒で調査区の東端、西端及び南端近くに分布している。

G区内に一辺が9m近くの大型の住居跡が検出されている。

如意南遺跡の住居跡は調査区南端近くで検出されている。

#### 第Ⅵ期（第565図）

如意遺跡46軒、川端遺跡5軒、如意南遺跡1軒が相当する。全体の住居跡は今までの増加傾向から減少へと転じるが、川端遺跡では住居跡数が最も多くなる時期である。集落域は依然として調査区全域に広がるが、前期までに見られた小グループでのまとまりも観察できなくなる。大半の住居跡がある程度



第563図 第I・II期の集落





第564図 第III・IV期の集落



第565図 第V・VI期の集落

の間隔を置いて構築されているようである。また、第Ⅰ期から第Ⅲ期に見られたE区からF区にかけて住居跡のなかった空間にも均一的に住居跡が構築されている。強いて住居跡のない空間を挙げると、D区南半からA区にかけてであろう。

如意南遺跡の住居跡は調査区のほぼ中央に検出されている。

#### 第Ⅴ期（第566図）

全体の住居跡数は減少するが、如意南遺跡では増加する。如意遺跡に掘立柱建物跡が出現する時期である。如意遺跡の住居跡35軒、掘立柱建物跡2棟、川端遺跡1軒、如意南遺跡5軒が相当する。集落域は全域に広がるが、B区中央付近のグループ、C・E区に跨るグループ、G区を中心とするグループの3グループに大別される。各々は8～13軒の住居跡で構成され、グループ間には広い空間が見られる。また、C・E区のグループの南側にも空間が見られる。

C・E区のグループの東端に掘立柱建物跡が検出されている。G区を中心とするグループは一辺が10mを超す最大規模のものを始めとする大型の住居跡が主体となっている。

これら3グループに属さない住居跡は、調査区の東・西・南端に、何れも1軒または2軒で検出されている。南端の住居跡1軒は如意南遺跡の5軒とグループを形成し、東・西端のものは調査区外に続く可能性も考えられる。

如意南遺跡の住居跡は如意遺跡寄りに検出されており、如意遺跡南端のA区で検出された住居跡とグループを形成していると思われる。

#### 第Ⅵ期（第566図）

僅かだが全体の住居跡数は減少が続く。前期に現れた掘立柱建物跡は検出されていない。如意遺跡34軒、川端遺跡1軒、如意南遺跡2軒が相当する。集落域は全域に広がるが、C区とE・F区の2箇所に

やや大きなグループを形成する。C区のグループは住居跡間が狭く集中傾向が見られるが、E・F区のグループは住居跡間がある程度の間隔を保っているようである。この2グループ以外は2～4軒程度の小グループが間隔を置いて点在する。

如意南遺跡の2軒も調査区北半で検出され、小さなグループを形成するようである。

なお、川端遺跡は本期を最後に住居跡は検出されなくなる。

#### 第Ⅶ期（第567図）

住居跡は一転して増加に転じ、二度目のピークを迎える。如意遺跡住居跡46軒、掘立柱建物跡3棟、如意南遺跡3軒が相当する。集落域は調査区全体に広がり、C・D・E区にかけて大きなグループが見られ、その周囲にやや規模の小さいグループが展開している。

C・D・E区のグループは掘立柱建物跡を中央に、その東西に住居跡が分布しているが、住居跡は西側に偏る傾向が見られる。他はB区に2グループ、E区南端とF・G区にかけて各1グループの4グループが認められ、5～11軒で構成されている。E区南端のものは調査区外に広がると考えられる。

如意南遺跡で検出された3軒は分散して検出されている。

#### 第Ⅷ期（第567図）

住居跡数が急激に減少する時期である。如意南遺跡はほとんど変化はないが、如意遺跡では前期の1/3以下に激減する。一方、掘立柱建物跡は増加し、最多数となる。如意遺跡の住居跡13軒、掘立柱建物跡5棟、如意南遺跡4軒が相当する。集落域は全体に広がるが、散在する。F区以西とG区とに大きく別れ、その間には住居跡のない広い空間が見られる。

F区以西では、大半の遺構が距離を置いて分散して検出され、前期のような住居跡と掘立柱建物跡の関係を見出すことはできない。G区では調査区南端





第567図 IX・X期の集落



第568図 第X I・X II期の集落

に検出され、調査区外に広がることも考えられるが、大きくまとまる可能性は低いと思われる。

如意南遺跡でも住居跡の分布は如意遺跡と同じような傾向を示している。また確定できないが、如意南遺跡で検出された掘立柱建物跡は本期の可能性が高い。

#### 第X I 期 (第568図)

住居跡数は更に減少し、最終期を除くと最も集落が衰退する時期である。如意遺跡住居跡11軒、掘立柱建物跡2棟、如意南遺跡2軒が相当する。調査区にまばらに分布し、特にF区からG区にかけては極端に少なく、各1軒が検出されているにすぎない。

如意南遺跡の住居跡は、如意遺跡から離れた調査区の南端近くに検出されている。

#### 第X II 期 (第568図)

住居跡数は極僅かだが増加に転じる。如意遺跡住居跡13軒、掘立柱建物跡1棟、如意南遺跡4軒が相当する。集落は調査区に沿って東西に細長く広がり、住居跡が北を流れる荒川に対して、一定の距離を保って形成されているようにも感じられる。これら住居跡の遺構確認面のレベルは63.0～63.8mとなっている。

住居跡はE区中央に5軒程度のまとまりが見られるが、他は分散している。

如意南遺跡の住居跡は分散して検出されており、如意遺跡の住居跡との間は空間となっている。なお、遺構確認面のレベルは、如意遺跡のものよりやや高い傾向が見られる。

#### 第X III 期 (第569図)

住居跡数は続いて増加し、如意南遺跡では最多数となる。如意遺跡住居跡18軒、如意南遺跡7軒が相当する。掘立柱建物跡は検出されていない。住居跡は全域に分散気味に検出されているが、E区とF区に小グループが認められる。B区の3軒も小グループ

と考えられるが、E区、F区のものより住居跡間が離れている。G区は住居跡が僅か1軒検出されたのみで、A区には検出されていない。

如意南遺跡の住居跡は、大半が調査区中央から南に検出されているが、2～3軒のまとまりが見られる。

#### 第X IV 期 (第569図)

住居跡数が更に増加し、二度目のピークを迎える時期である。如意遺跡29軒、如意南遺跡7軒が相当し、如意南遺跡では前期同様最多数を維持している。集落域はF区以西に偏り、G区には住居跡が見られない。E・F区の境界付近を中心とするグループとB区西半のグループに大別される。

E・F区のグループは中央部の10数軒とその周辺に配される住居跡に分けられる。B区のグループは8軒とやや小さく、周辺に住居跡は見られない。両グループの間は広い空間が認められる。

如意南遺跡の住居跡の内1軒は如意遺跡A区の住居跡に近く、他は1～3軒毎にやや分散して検出されている。

#### 第X V 期 (第570図)

住居跡数は減少するが、掘立柱建物跡は最多数となる。如意遺跡住居跡21軒、掘立柱建物跡5棟、如意南遺跡1軒が相当する。集落域はほぼ全域に広がる。前期に住居跡の見られなかったG区に住居跡が検出される。一方、B区はグループがなくなりその周辺に数軒の住居跡が検出されたのみである。C区以東ではE・F区境付近に掘立柱建物跡が2棟並び、その周辺にやや間隔を置いて住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。

如意南遺跡の住居跡は如意遺跡から最も離れた調査区南端近くで検出されている。なお、如意南遺跡の住居跡は本期が最後になり、最終期には検出されていない。



第569図 第X III - X IV期の集落





第570図 第X V・X VI期の集落

## 第XVI期（第570図）

住居跡は極端に減少し、如意遺跡における集落の最終期である。如意遺跡住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟が相当する。F区からG区にかけて4軒がほぼ等間隔で検出されているが、全体的にはC区以東に点在する形である。

以上、出土土器を基準とした各期の概要を記してきた。集落は5世紀後半に出現し、10世紀に入りその痕跡を消す。この約450年の間に集落は消長を繰り返す。集落の最大のピークは第V期に見られ、第二のピークが第IX期、第三のピークが第XIV期にある。全体としては出現期から順調に住居跡の数を増やし第V期に至る。そこから増減をしながら最終期を迎える。

集落内での住居の立地には制約があるようにも感じられる。概述したように集落内には住居跡が特に集中する区域が見られた。逆に数時期にわたって住居跡が構築されなかったり、数軒の住居跡のみが築かれた空間が見られる。空間はE区東端からF区、B区、D・E区南端の3箇所で認められる。E区東端からF区内の空間は調査区中央のC・D・E区と、東半のF・G区に見られる住居跡集中区域の間にあり、9期にわたって非住居空間となっている。B区内のものは調査区西端に位置し、7期にわたって空間となっている。D・E区南端のものはA区との境界近くで、B区内のもの同様7期の間空間となっている。このような空間と住居跡集中区域の関係から、住居跡がある程度の規制の中で構築されたと考えられるが、これを明らかにするにはより詳細な検討が必要であろう。

周辺で如意遺跡以前の集落は、江南台地上に古墳時代中期の円阿弥遺跡・白草遺跡が見られ、同時期の遺跡は同じ江南台地上の権現堂遺跡がある。これらは距離的にもやや離れており、如意の集落とどのような関係を持つかは不明確である。

如意遺跡の西側には箱崎古墳群が、東側には塚原古墳群がある。箱崎古墳群は6世紀前半から7世紀の築造とされており、塚原古墳群は明確ではないものの如意の集落と重なる部分があると考えられる。そして如意の集落のうち約6割が古墳時代後期の住居跡である。このことから如意遺跡の集落と古墳群には密接な関係にあったと考えられる。

川端遺跡は今回の調査では古墳時代後期の住居跡のみが検出された。しかし、以前に川本町教育委員会の行った調査では古墳時代後期から平安時代までの住居跡が検出され、9世紀後半に位置付けられる緑釉陶器が出土している。集落の広がりやどの程度であるかは不明だが、如意遺跡と同一集落とした根拠の一つとなろう。

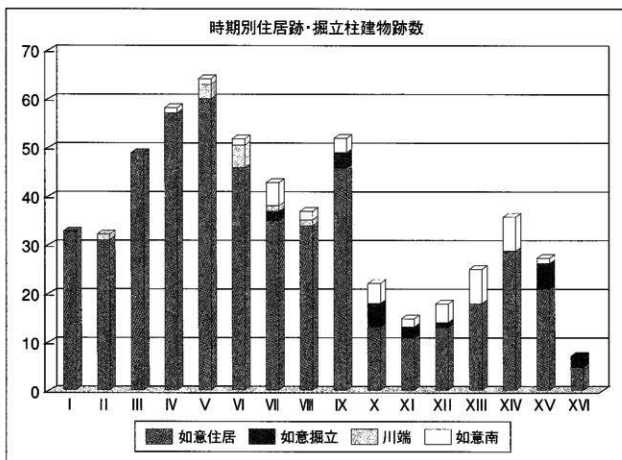
如意南遺跡の調査は線的であり、遺跡の状況を捉えるには資料不足の点は否めない。しかし、調査された遺構からその出現は如意遺跡よりやや遅れ、集落の中心は奈良・平安時代にあると考えられる。如意遺跡においては古墳時代後期に比して奈良・平安時代の住居跡が減少している。これは時代が下がるにつれ、居住域が川沿いから内陸へと移るとも受けられる。今後の調査が増加すれば明らかになると考える。

中世、この付近は畠山重忠の本拠地とされ、如意遺跡の南約500mに畠山館跡が、川端遺跡の範囲内に重忠と所縁のある満福寺や井原神社がある。これらは、如意遺跡に住居跡の痕跡が見られなくなった後も人々がこの地から全くいなくなったわけではないことを示すものであろう。

如意遺跡の集落の変遷について記したが、問題点の羅列に終始し、認識の甘さを露呈する結果となってしまった。今後、住居跡の規模、カマドの位置等を含めた詳細な分析の必要を感じると共に、周辺の調査が進むことにより、集落の状況がより明確になるものと考えている。

時期別住居跡・掘立柱建物跡数

時期	如意住居	如意掘立	川端	如意南	時期別計	年代
I	33	0	0	0	33	5c 後葉
II	31	0	1	0	32	5c 末～6c 初頭
III	49	0	0	0	49	6c 前葉
IV	57	0	0	1	58	6c 中葉
V	60	0	3	1	64	6c 後葉
VI	46	0	5	1	52	6c 末～7c 前葉
VII	35	2	1	5	43	7c 中葉
VIII	34	0	1	2	37	7c 後葉
IX	46	3	0	3	52	7c 末～8c 1/4頃
X	13	5	0	4	22	8c 2/4～中頃 (8c 前半)
XI	11	2	0	2	15	8c 後半
XII	13	1	0	4	18	8c 4/4～9c 前葉
XIII	18	0	0	7	25	9c 前葉～中葉
XIV	29	0	0	7	36	9c 後葉
XV	21	5	0	1	27	9c 末～10c 初頭
XVI	5	2	0	0	7	10c 1/4以降
小計	501	20	11	38	570	
不確定	9	2	0	1	12	時期が1時期に確定できない
不明	39	1	1	3	44	時期不明
合計	549	23	12	42	626	



### 3. 土錘について

土錘は、漁労用具の一種で、網漁に使用されたと考えられる。如意・如意南・川端遺跡からは、古墳時代～奈良・平安時代の竪穴住居跡・土壕・遺構外から多量の土錘が出土した。平成9年度からの発掘調査によって、3258点にも及ぶ土錘が出土した。

以前、刊行した『如意/如意南』（栗岡2000）の中で、土錘に関する報告を行ったが、資料の増加に伴い、ここで改めて報告する。

対象となるのは、如意・如意南・川端遺跡から出土した3258点の土錘のうち、時期の不明確な土壕・遺構外から出土した479点を除く、竪穴住居跡出土土錘2779個が対象となる。

#### (1) 形態

形態については、『如意/如意南』で既に分類したが、ここで改めて報告する。なお、形態分類では、2779点のうち、1056点は、破片資料等で形態・大きさが明らかにできなかった。したがって形態分類が可能な土錘は1723点であった。(第571図)

#### A類

上端～下端までの径が概ね一定であるが、端部でやや細くなり、長さに対する径の割合が小さく、細長いもの。A類に属する土錘は69点であった。

#### B類

Aと比べ、側面中央部がやや膨らむもの。B類に属する土錘は1203点であった。

#### B'類

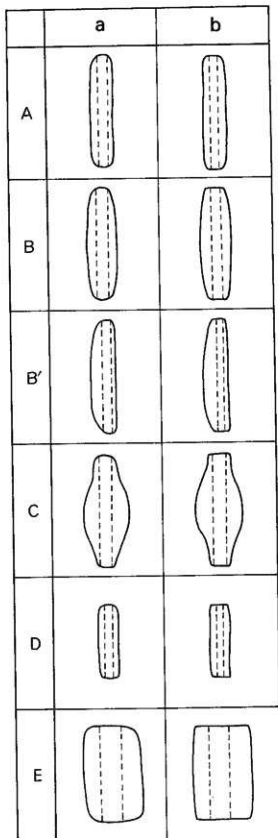
側面の形態が、片面は直線的、もう一方が膨らむ半月状で、A類とB類の両方の形態を併せ持つもの。B'類に属する土錘は、17点であった。

#### C類

中央部が大きく膨らみ、上端と下端が絞ったように細くなるもの。C類に属する土錘は420点であった。

#### D類

上端～下端までの径が一定で、管玉状になるも



第571図 土錘分類図

の。D類に属する土鍾は6点であった。

### E類

上端と下端の径が一定だが、長さに対する径の割合が大きく、太く短いもの。F類に属する土鍾は8点であった。

また、土鍾の両端部を観察すると、端部を面取りしないものと、面取りするものがあった。

土鍾の製作方法の多くは、棒状の軸に粘土を巻き付け、握る、あるいは薄く伸ばしながら成形していたと考えられる。このため、土鍾両端部は特に薄くなり、端部の厚さが1mm以下になるものも多かった。この後、軸棒を引き抜くか、軸棒ごと焼成していたものと思われる。

しかし、土鍾の両端部を詳細に観察すると、ヘラ状の工具によって両端部を面取りし、平らな面を作り出しているものも多く見られた。このため、端部を面取りしないものをa(写真1)、面取りするものをb(写真2)として細分を試みた。各分類の出土点数は以下のとおりであった。

A a類:69点、A b類:0点、B a類:1031点、B b類:172点、B'a類:16点、B'b類:1点、C a類:307点、C b類113点、D a類:2点、D b類4点、E a類:3点、E b類:5点

これらの形態のうち、最も多かったのはB a類で、土鍾総点数の59.8%と、約半数を占める。次いでC a類の17.8%、B b類10%、C b類6.6%、A a類4%となっている

### (2) 大きさ

また、大きさも数種類に分かれるため、長さによって以下に分類した。

I:長さ9cm以上

II:長さ8cm前後

III:長さ7cm前後

IV:長さ6cm前後

V:長さ5cm前後

VI:長さ4cm以下

大きさの分類は、完形品を基本にし、欠損品につ

いては、復元可能なものは復元値で分類した。両端が欠損しているものや、小破片で復元不可能なものは、その他として分類から除外した。

これらの組み合わせによって、A a I類・B b III類といったように呼称する。なお、個々の土鍾の詳細については、本文中の土鍾観察表を、本報告書以

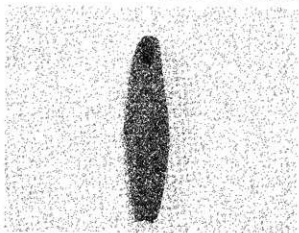


写真1 (a類)

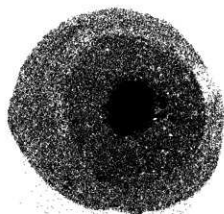


写真2 (b類)

表1 分類別土鍾一覧

	I	II	III	IV	V	VI	合計
A a	1	5	19	17	18	9	69
B a	12	94	312	355	199	59	1031
B b	2	9	31	71	48	11	172
B'a	0	1	8	5	2	0	16
B'b	0	0	0	1	0	0	1
C a	9	37	86	102	58	15	307
C b	2	10	31	45	21	4	113
D a	0	0	0	0	0	2	2
D b	0	0	0	0	0	4	4
E a	0	0	0	0	1	2	3
E b	0	0	0	0	0	5	5
計	26	156	487	596	347	111	1723

外の土鍾については如意遺跡関連の報告書(栗岡2000、山本2001、山本・岩瀬2002)の上錘観察表を参照されたい。

各分類の大きさ毎に点数を示したものが、表1である。

最も長いものは、C a I類の10.5cm、最も短いものはE b V類の2.7cmであった。最大のものと最小のものとの差が大きい、土鍾の多くはⅢ類(7cm)~V類(5cm)の小型品に集中している。

各分類毎では、A a類ではⅢ類、B a類ではⅣ類、B b類ではⅣ類、C a類ではⅣ類、C b類ではⅣ類、D b類ではⅤ類が中心となっている。

### (3) 胎土

土鍾を詳細に観察すると、胎土に幾つか違いがあることが分かった。胎土については、平成14年度報告分のうち、形態分類が可能な上錘961点について観察した。その結果、土鍾の胎土には、大きく以下の3タイプに分類可能であった。

#### 胎土A(写真3)

大粒の砂粒・石英・片岩を多く含むもの。

#### 胎土B(写真4)

大粒の砂粒は殆ど含まず、細かな砂粒・白色の微粒子を多量に含むもの。黒色粒子を少量含む。

#### 胎土C(写真5)

基本的には胎土Bと同じだが、酸化鉄状の赤色粒子を含んでいる。

胎土Aのものは、色調が橙からやや黄褐色に焼き上がる。胎土Bのものは、黒色気味で、胎土Cのものは橙~黄褐色の色調のものが多い。胎土B・Cは焼成温度の違いで、酸化鉄状の粒子が変化した可能性があり、基本的には同じ可能性がある。

そこで、胎土Aと胎土B・Cの2つに区分してみると、Aa類は胎土Aが多く、Ba類は胎土Aが多い。Bb類は胎土B・Cが、Ca類は、胎土Aと胎土B・Cが同数、Cb類は胎土B・Cが多かった。各分類とも胎土については両者とも存在するが、土鍾の形態によって胎土にやや偏りがあるようである。(表2)



写真3 (胎土A)



写真4 (胎土B)

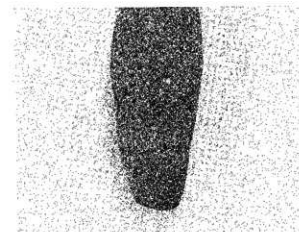


写真5 (胎土C)

また、出土土器を基にした時期毎に、各竪穴住居跡出土土鍾を胎土別に集計したものが表2である。

出土土鍾には他時期の混入も多いと思われ、非常に粗い表となったが、Aa類は、胎土AがⅣ期～Ⅴ期に、胎土B・CはⅤ期以降に集中する傾向がある。B類ではBa類は胎土AがⅣ期～Ⅴ期に、胎土B・CはⅤ期～Ⅵ期に、Bb類は胎土AがⅤ期に、胎土B・CがⅤ期～Ⅵ期に、Ca類は胎土AがⅤ期～Ⅵ期に、胎土B・CはⅥ期に集中が認められるが、Ⅴ期～Ⅵ期にも集中する。Cb類は、胎土AはⅤ期以外は殆ど無いが、胎土B・CはⅤ期以降に集中する。

こうしてみると、粗い分布ではあるが、概ねⅤ期を境に、胎土AはⅤ期以前の古墳時代後期に、胎土B・CはⅤ期以降の奈良・平安時代に集中する傾向がある。

#### (4) 出土遺構・時期

今回調査地点の土鍾は、主に竪穴住居跡から出土した。殆どの遺構は、覆土からの出土で、土師器・須恵器等の他の遺物とともに出土した。

土鍾は、全ての住居から出土するのではなく、確認できた全603軒の竪穴住居跡のうち、土鍾の全く出土しなかった住居跡は222軒存在する。土鍾の出土しない竪穴住居跡の多くは古墳時代に属するもので、特にⅠ期～Ⅵ期の住居が多い。

土鍾の出土する住居跡は、1～10点のものが301軒と最も多かった。次いで11～30点の61軒、31点以上の住居跡は、15軒であった。

出土点数の多い住居跡を以下に列記する。

第69号住居跡：105点（Ⅰ期） Ba類

第319号住居跡：63点（Ⅵ期） Ba・Ca類

第323号住居跡：61点（Ⅶ期） Aa・Ba・Ca類

第244号住居跡：46点（ⅤⅣ期） Ca・Cb類

第112号住居跡：38点（Ⅶ期） Ba類

第481号住居跡：33点（ⅤⅢ期） Ba・Bb・Cb類

第489号住居跡：33点（ⅤⅣ期） Ba・Ca類

第78号住居跡：32点（ⅤⅣ期） Ba類

第448号住居跡：32点（ⅤⅤ期） Ba・Bb類

第496号住居跡：32点（ⅤⅣ期） Ba・Bb・Cb類

第502号住居跡：32点（ⅤⅣ期） Ba・Ca類

如意南第24号住居跡：31点（ⅤⅡ期） Ba・Bb類

ここで注目されるのは、土鍾の多く出土した住居跡は、Ⅶ期以降の住居跡に集中していることである。特に、ⅤⅣ期の住居跡は、36軒確認できたが、そのうちの5軒から30点以上の土鍾が出土している。

ⅤⅣ期の土鍾は367点出土しているが(表3参照)、このうち175点が5軒の住居跡から出土している。

また、ⅤⅠ期の第69号住居跡からは、105点の土鍾が出土したが、ⅤⅠ期の土鍾の約88%が1軒の住居跡から出土したことになる。

これらのことから、Ⅶ期以降は、各住居に満遍なく出土するのではなく、数軒の住居跡に土鍾が集中するようになるということであろう。

特に、ⅤⅣ期においては、先に集落の変遷の項で区分したD区のグループの3軒に集中する傾向がある。

出土土鍾の帰属時期の問題については、他の出土土器と同等に扱うとすれば、遺構の帰属する時期をもとに判断できる。出土土器をもとに区分した竪穴住居跡の時期は、同様に出土した土鍾の時期を物語るものと考えられる。

しかし、激しい重複によって、覆土中の土器には、時期差のある遺物の混入も多く、土鍾に関しても、同じことが言える。

土器であれば、1点の土器について、ある程度の時期について、あるいは土器の特徴から時期差・混入遺物を抽出することが可能である。しかし、土鍾については、基本的には同じような形態のものであるから、個々の土鍾のみで時期の判別あるいは時期区分することは不可能に近い。従って、土器によって区分した竪穴住居跡の帰属時期をもとに、各時期の土鍾の時期区分を試みたが、混入も多いと思われ、かなり粗い表となっている。しかし、3000点近い土

鍾の出土量から、大まかな傾向は導き出すことは可能である。表3は竪穴住居跡出土土鍾の、時期別の分類表である。

年代ごとに出土する土鍾の傾向を観察すると、概ね全時期を通じてB a類が出土する。ただし、混入も多いと思われ、出土数が多く安定して出土するのはV期～X V期（6世紀後半～10世紀初頭）までである。

A a類は、点数が少ないため、不明な点も多いが、Ⅷ期（7世紀中葉）以降に見られる。

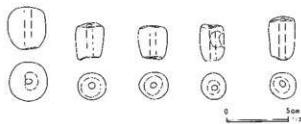
端部に面取りを施したB b類は、概ねⅨ期以降（7世紀末～8世紀第1四半期）が中心となる。

C a・C b類はⅧ期（7世紀中葉）以降に、集中する。

D類・E類は点数が数点であるため、明らかにできなかった。しかし、このうちE b類に属する、第440号住居跡出土土鍾（第572図）は、出土土器から、Ⅰ期に属すると考えられる。

土鍾の特徴は、幅（径）に対して長さが軸端に短くなるタイプである。両端は残存しているため、これで完形品である。両端部はヘラまたは指によって調整され、平坦もしくは窪んでいる。形状が球形となるいわゆる「土玉」とは異なり、管状土鍾の一種と考えられる。E b類に属する土鍾は、第440号住居跡出土の5点のみである。

形態的に異質であり、他の管状土鍾と機能的に同等であったかどうかは明らかにできなかったが、管状土鍾の古式のタイプとして一例を挙げておく。



第572図 第440号住居跡出土土鍾

## (5) まとめ

如意・如意南遺跡出土土鍾を見てきたが、本遺跡からは、3258点と、多くの土鍾が出土した。しかも、竪穴住居跡を中心に遺構に伴ってまとまって出土した。如意遺跡・如意南遺跡・川端遺跡は、集落の全てが調査されたわけではなく、調査の対象となっていない地点を考慮に入れれば、今後、土鍾の数はさらに増加するものと考えられる。

埼玉県内において、土鍾が多く出土した遺跡として代表的な遺跡は、上里町中堀遺跡がある。（田中・木本1997）中堀遺跡では、平安時代を中心に763点の土鍾が出土している。

中堀遺跡出土土鍾の分析によれば、本遺跡で出土量の多いA類～C類は、中堀遺跡出土土鍾のC 1～C 3類に相当し、中堀遺跡で分析した埼玉県内の出土傾向とも概ね一致している。

本遺跡出土土鍾の中心となるA類～C類は、大きさがⅢ類～V類（7cm～5cm）の小型品で構成される。

谷口榮氏によれば、古代においては、個人単位での漁労が行われ、小型の土鍾を装着した投網を用いた漁労が一般的であったとされる。（谷口1991）

漁法に関しては、今回具体的な検討を行っていないため、小型の土鍾が全て投網用であったとは断定できない。

土鍾の出土状況は、グリッド・土壌等からの出土は少なく、大半は竪穴住居跡からの出土であることは看過できない。土鍾の出土状況は、他の土器・須臾器その他多くの遺物とともに出土する。これらは、廃棄のあり方が、一般の竪穴住居跡で使用される土器類と同等の扱いを受け、使用されなくなれば、土器とともに廃棄されたものと考えられる。使用時の状況を把握することは困難であるが、土器は基本的に個人単位での使用が原則と思われ、土鍾についても、土器と同じように個人単位での使用が想定される。

本遺跡出土土鍾はこうした個人単位での網漁に適



した大きさと構成され、古墳時代から平安時代まで継続的に漁労が行われていたことが推測できる。

しかし、先に検討した中では、Ⅶ期以前においては、土鍾が出土する住居と、全く出土しない住居があり、また、Ⅶ期以降、特にⅨ期以降は、1個から10個の土鍾が出土する住居が圧倒的に多いものの、数軒の住居に土鍾が集中する傾向があることから、個人単位の小規模な網漁でありながらも、必ずしも全ての住居で土鍾を保有していなかった可能性もある。

特にⅩⅣ期では、E区のグループの3軒に土鍾が集中し、土鍾自体の保有がこの3軒に限定されていた可能性がある。集落全体で漁撈活動を行っていたかどうかは不明で、また、土鍾の出土自体が、そのまま保有していたと短絡的に結びつけるのは危険であるが、土鍾を保有する住居が限定されていた可能性を指摘しておきたい。

埼玉県内で河川に面した集落遺跡では如意遺跡以外で土鍾がこれほど出土する遺跡は少ない。大里町成瀬遺跡(山本 2002)、行田市築道下遺跡(古田 1997、大塚・栗岡1998、鷗持2000、山本 2000)等のように、河川沿いに立地しながら、土鍾の出土が

殆ど無いという遺跡もある。こうしたことは、如意遺跡の集落内部での生業のあり方を物語る一例といえる。

古墳時代後期から始まった集落は、本遺跡Ⅳ期～Ⅴ期(6世紀中葉～後葉)頃に本格的に網漁を中心とした漁撈を、おそらく眼下の荒川で始め、途中衰退する時期があるものの、ⅩⅥ期(10世紀前半)の集落の終焉を迎えるまで、継続的に漁撈活動を行っていたと考えられる。

古代男会郡では、天平18年(746)に川面郷から大賀として鮒(背湖)が貢進された記録が、平城宮木簡に記されている(奈文研 1969)。8世紀中葉は、本遺跡のⅩ期～ⅩⅠ期に相当する。本遺跡では、住居軒数が減り、土鍾出土量も著しく減少する時期であるため、漁撈活動が盛んであったかどうかは不明である。

このため、川面郷を本遺跡周辺に比定することはできないが、男会郡内では、奈良時代大賀(御賀)として鮒が貢進されていたことは確かで、鮒を網漁によって捕獲していたかどうかは不明だが、本遺跡を含めた周辺の荒川沿岸で、漁撈活動が盛んに行われていたことであろう。

表2 時期別胎土分類

番号	A a			B a		B b			B' a		C a			C b			D a D b		E b		合計	
	A	B	C	A	B	A	B	C	A	C	A	B	C	A	B	C	A	A	A	C		
I				1					1											2	3	11
II			1	1																		2
III				6	1	2					2		1									12
IV	2			12	2	6	1		2		3	1	3			1						33
V	2			45	5	14	1	1			7	1	1			2						79
VI	2			26	3	14			1		8					1						55
VII	5	2	3	28	4	14			1		14	3	16			2			1			93
VIII	1			32	3			3	2		4		1									46
IX	10	1	3	111	8	23	14	3	10		25	6	22	7	1	4						248
X				13	3	7	1		3		4			1								32
XI				1		1			2													4
XII		1	4	9	7	19	4	2	2	1	2		4	2	2	5						64
XIII	1			1	15	4	13		11	10	2	4	3		2	2						68
XIV	1	1	2	22	13	69		4	12				12		4	7						147
XV	3			13	1	10	11		4		2		1	1		2	2					50
XVI				1	6		1	3	1		2										3	17
合計	27	5	15	341	54	196	38	21	51	1	76	15	65	10	9	26	2	1	2	6		961

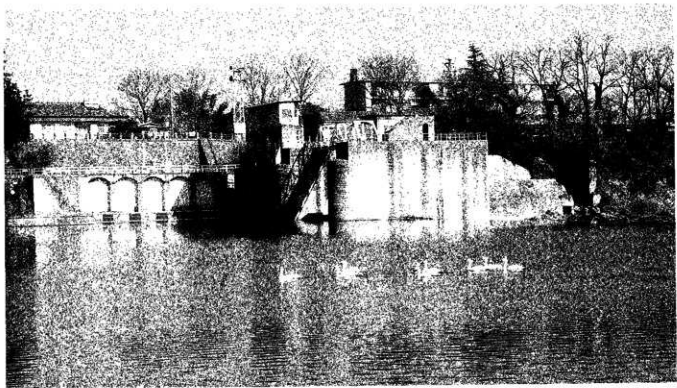


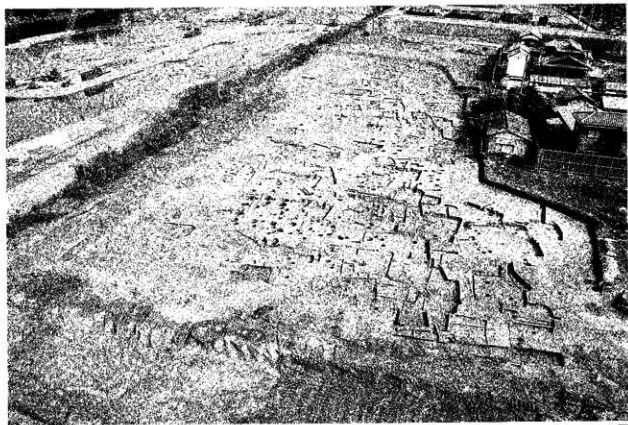
## 引用・参考文献

- 福崎 一 1992 『白草遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第118集
- 大甲都市文化財担当者会 1992 『大甲地域の遺跡Ⅰ』『埼玉考古』第29号 埼玉考古学会
- 大甲都市文化財担当者会 1993 『大甲地域の遺跡Ⅱ』『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- 大谷徹・上野真由美 1995 『板山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第162集
- 尾野善裕 1997 『牛久喜遺跡 尾張・西三河 須賀・尾北・その他』『古代の土器1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会
- 尾野善裕 2000 『須恵室（采）須恵器編年の再構築』『須恵器生産の出現から消滅』東海上器研究会
- 金子直行ほか 1998 『西反歩遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第130集
- 川本町 1989 『川本町史 通史編』
- 川本町遺跡調査会 2000 『百済木』発掘調査概要
- 栗岡 潤 2000 『如意/如意南』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第241集
- 栗岡潤・大杉道則 1998 『築道下遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第199集
- 郷持和夫 2000 『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第245集
- 埼玉県教育委員会 1994 『埼玉県古墳群分布調査報告書』
- 酒井清治 1984 『古耕地Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集
- 堀野 博 1972 『鹿島古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査報告 第1集
- 堀野博・小久保徹 1975 『黒田古墳群』花園村黒田古墳群調査会
- 堀野 博 1981 『見沼古墳群とその遺物』『埼玉考古』19号 埼玉考古学会
- 堀野 博 1997 『埼玉の古墳—その発掘と研究の歴史（その2）—』『埼玉考古』33号 埼玉考古学会
- 鈴木敏明 2000 『古墳時代湖西型編年の再構築に向けて』『須恵器生産の出現から消滅』
- 瀧瀬芳之 1986 『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第58集
- 田中宏明・末木将介 1997 『中塚遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第190集
- 谷口 榮 1991 『日北郡東京湾岸における土師の様相』『竹橋』東京国立近代美術館遺跡調査委員会
- 利根川章彦 1991 『竹ノ花・下大塚・円筒形遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第105集
- 富田和夫 2002 『熊野遺跡（A-C-D区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第279集
- 富田和夫・赤熊浩一 1985 『立野南 八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・1』田川越山・梅沢 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第46集
- 中村倉司 1989 『白山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告 第17集 埼玉県教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1999 『平城宮木簡 一』
- 豆間孝志 1996 『板沢遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第143集
- 福田 翠 1998 『未野遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第196集
- 木村孝行他 1982 『板山遺跡群Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第7集
- 村松 篤 1989 『熊山遺跡』第3・4次 川本町教育委員会
- 村松 篤 1991 『熊山遺跡群発掘調査報告書』川本町発掘調査報告書 第3集
- 村松 篤 1991 『熊山遺跡群発掘調査報告書』川本町発掘調査報告書 第4集
- 村松 篤 1991 『川本春日丘Ⅰ築田池関連遺跡群発掘調査報告書』川本町発掘調査報告書 第5集

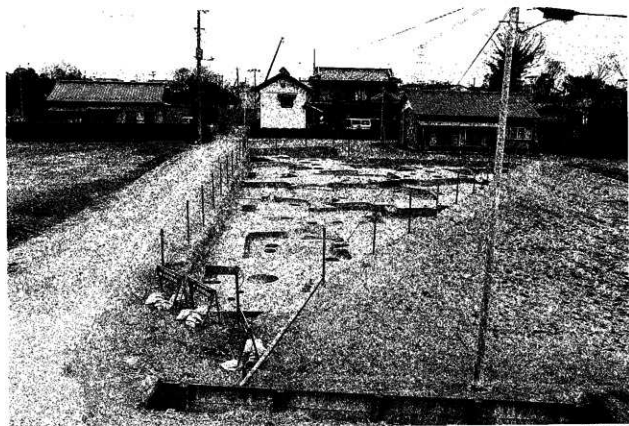
- 村松 篤 1992 『輪崎古墳群第3号墳・河ノ上遺跡発掘調査報告書』川本町発掘調査報告書 第6集
- 村松 篤 1992 『川端遺跡発掘調査報告書』第2次 川本町遺跡調査会発掘調査報告書 第1集
- 村松 篤 1993 『川端遺跡第3次調査報告書』川本町発掘調査報告書 第7集
- 村松 篤 1994 『荷鞍ヶ谷戸遺跡発掘調査報告書』川本町発掘調査報告書 第8集
- 村松 篤 1995 『鹿島平方築遺跡発掘調査報告書』川本町遺跡調査会報告書 第3集
- 村松 篤 1999 『高山遺跡』第5次 川本町遺跡調査会報告書 第4集
- 村松 篤 a 2000 『緑釉陶器を出土する古代集落』『埼玉考古』35号 埼玉考古学会
- 村松 篤 b 2000 『上本田遺跡1』川本町遺跡調査会報告書 第5集
- 山本 禎 2001 『如意遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第264集
- 山本 禎・岩瀬 謙 2002 『如意Ⅲ/川端』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第276集
- 山本 靖 2002 『成願遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第274集
- 山本 靖 2000 『築道下遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第246集
- 青田 稔 1997 『築道下遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第188集
- 古田 稔・宮澤文二 1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第96集
- 渡辺 一 1990 『鳩山塚跡群Ⅱ』鳩山塚跡群遺跡調査会
- 渡辺 一 1990 『南比企築跡群の須恵器の年代』『埼玉考古』第27号

## 写真図版





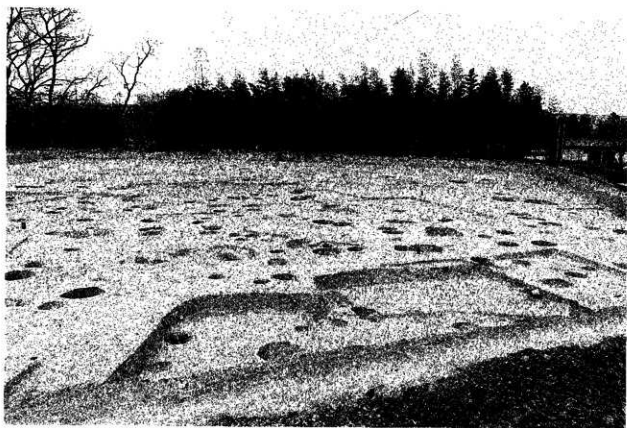
E・F・G区



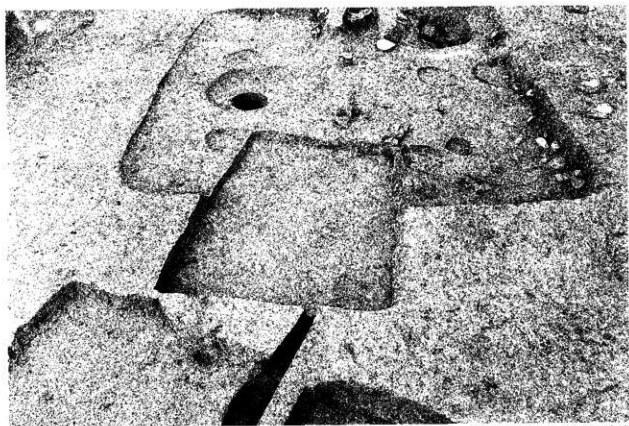
E区南部



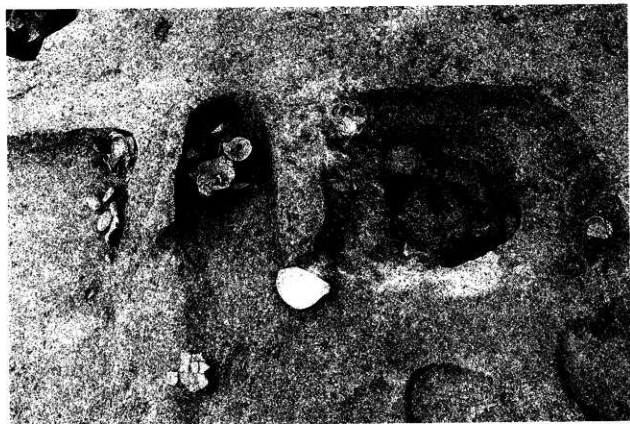
G区航空写真



G区東部

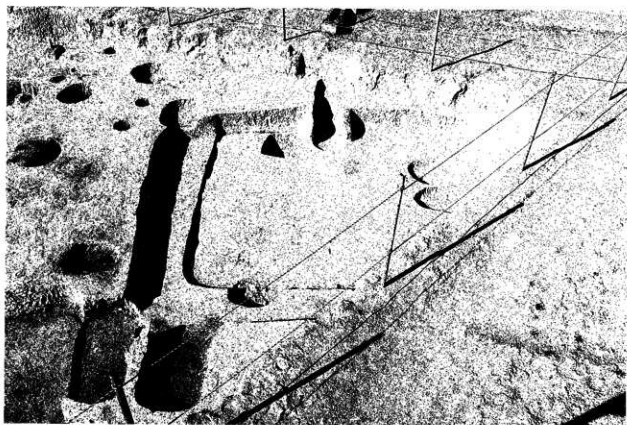


第181号住居跡・第92号土坑

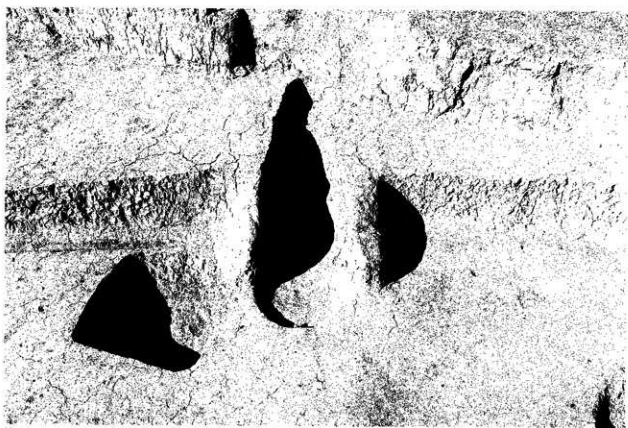


第181号住居跡カマド周辺遺物出土状況

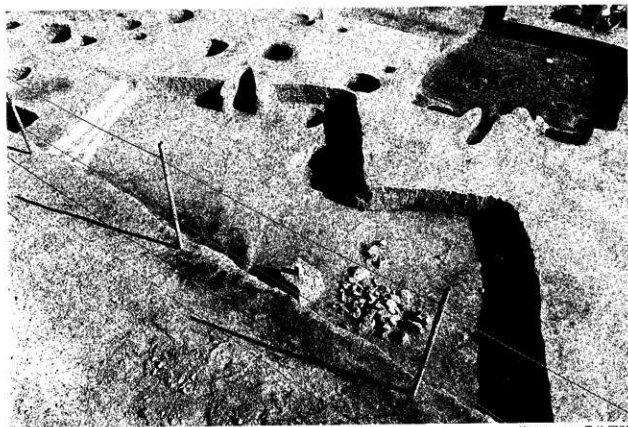




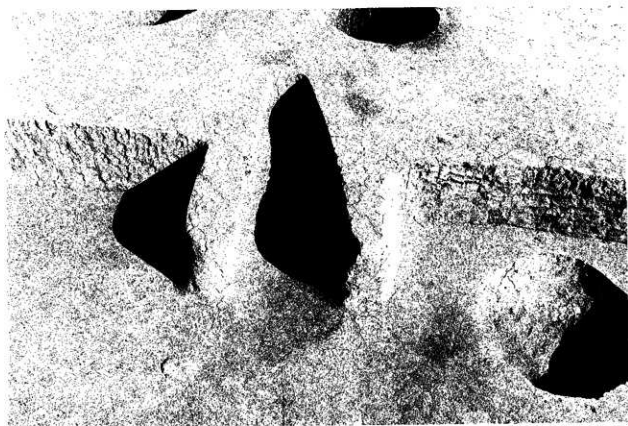
第258・259号住居跡



第258号住居跡カマド



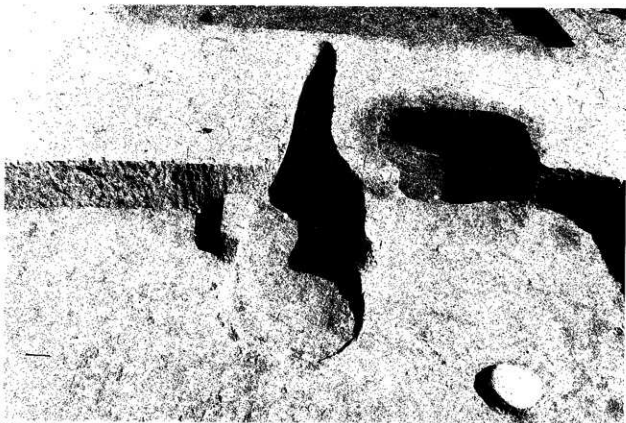
第262・263号住居跡



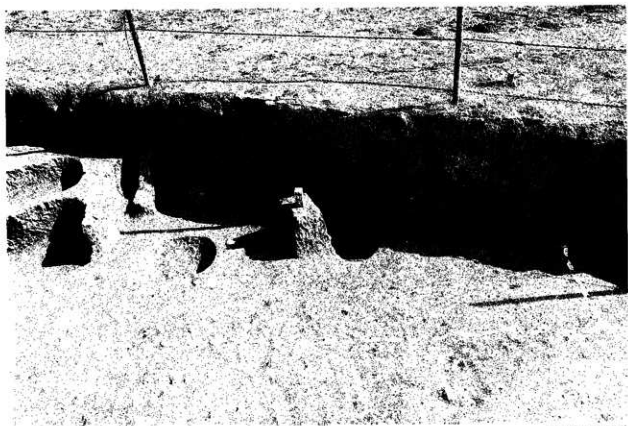
第262号住居跡カマド



第264号住居跡



第264号住居跡カマド



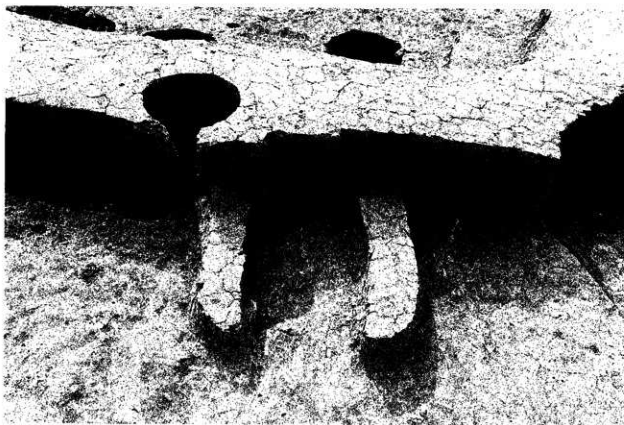
第265号住居跡



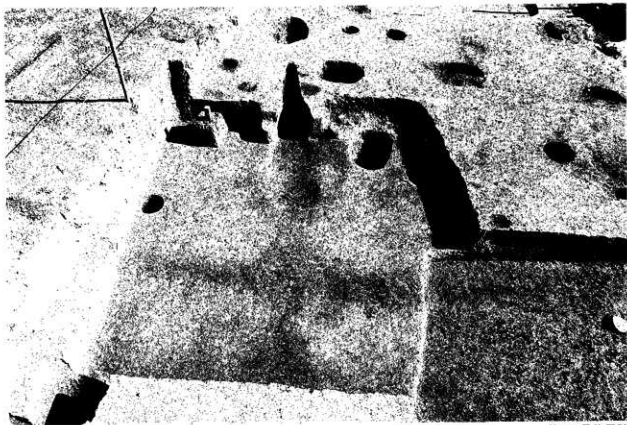
第265号住居跡カマド



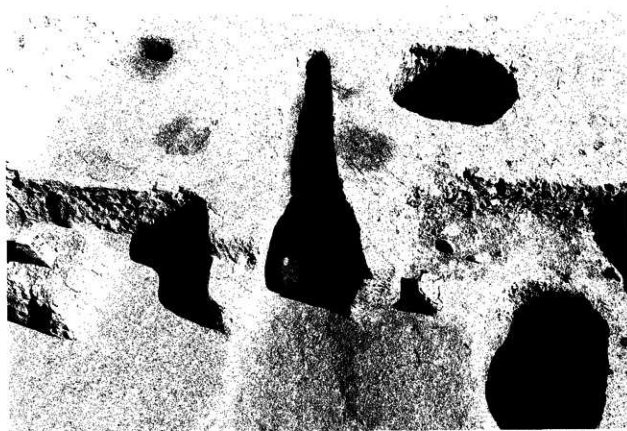
第266号住居跡



第266号住居跡カマド



第267号住居跡



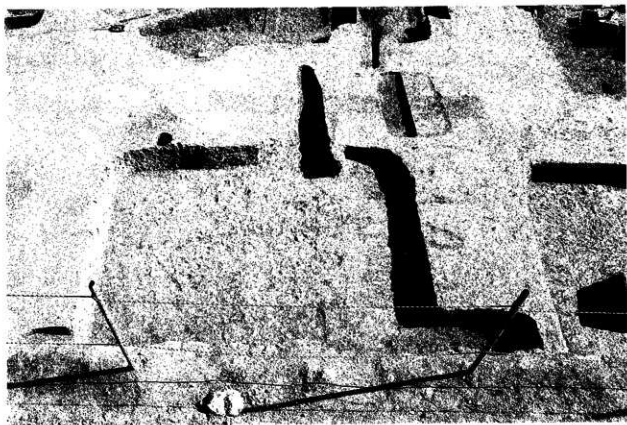
第267号住居跡カマド



第268号住居跡



第268号住居跡カマド



第269号住居跡



第271号住居跡

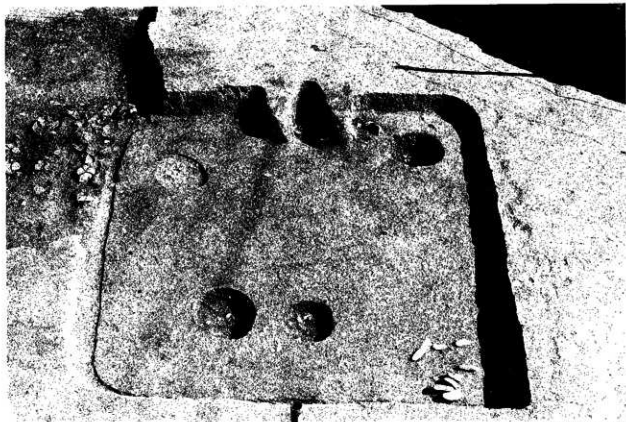




第271号住居跡カマド



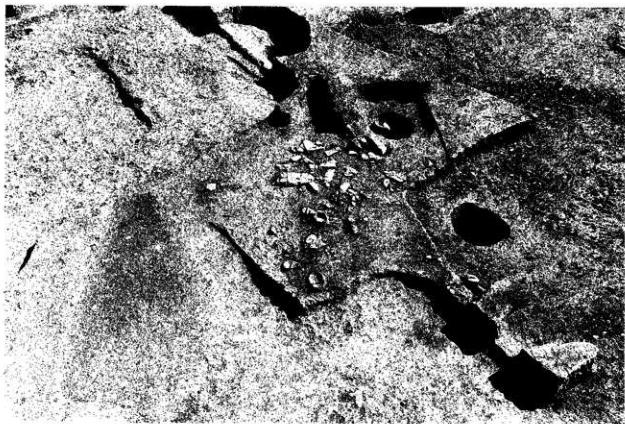
第274号住居跡



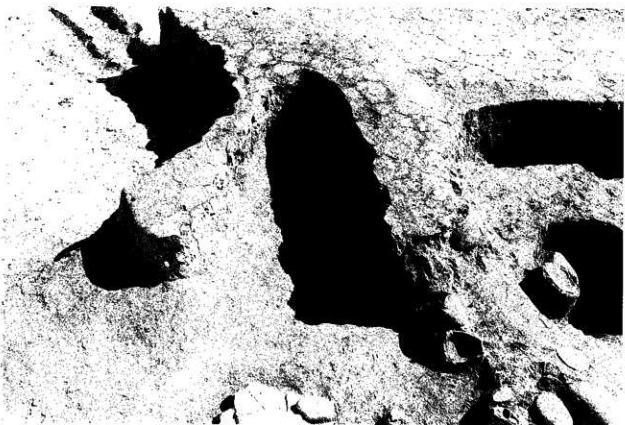
第275号住居跡



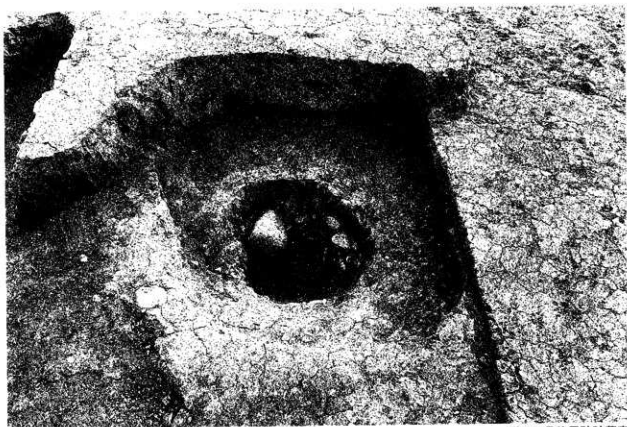
第275号住居跡カマド



第278号住居跡遺物出土状況



第278号住居跡カマド



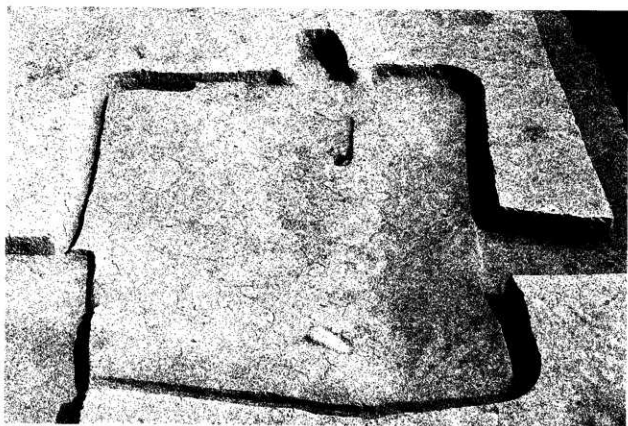
第278号住居跡貯蔵穴



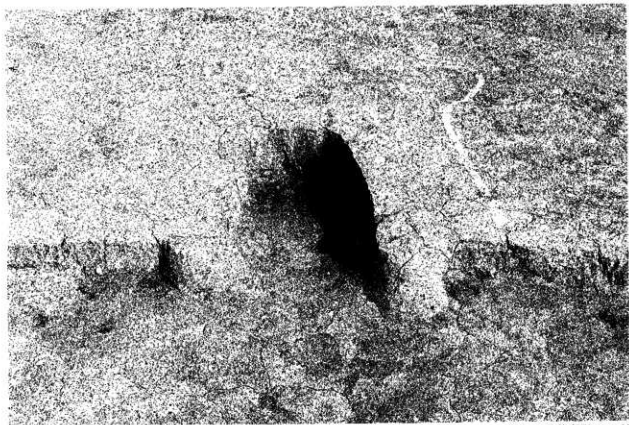
第280号住居跡



第280号住居跡カマド



第281号住居跡



第281号住居跡カマド



第283号住居跡